

モロク：あるいはこの異教の世界

Moloch: or this gentile world

ヘンリー・ミラー^{*1}著 山形浩生訳^{*2}

2006年9月23日

^{*1} ©1927 Michael Blumlein

^{*2} ©1994

目次

第 1 章	5
第 2 章	11
第 3 章	19
第 4 章	47
第 5 章	63
第 6 章	73
第 7 章	91
第 8 章	107
第 9 章	121
第 10 章	139
第 11 章	159
第 12 章	163
第 13 章	173
第 14 章	193
第 15 章	209
第 16 章	221
第 17 章	231

第 18 章	239
モロクについて	243

第1章

ディオンのモロクは、夢遊病者の夢見る足取りで、パワリー街の幽霊たちに混じって歩いていた。「幽霊たち」と書いたのは、分別のあるニュー Yorker なら誰でも知っているように、パワリーは破碎された魂が、空約束を片に修繕を受ける、通り市のようなところだからだ。

ディオンのモロクは慎ましい繊細な魂で、ベッドフォードのガット・スーツと淡い空色のシャツを着ていたが、その襟首と袖口は、みっともないほどよれよれだ。

大アメリカ電信社に勤めてはいたけれど、誇大妄想だの早発性痴呆症だの、二十世紀の華やかな精神障害や神経性の病には苦しんでいなかった。よく反ユダヤ的だと言われはしたが、でもこれは偏見で、病気じゃない。

まあとにかく、かれはゴゴリから出てきたような、いつ鼻をかむかさえ教わらなきゃならないような、そんな人物とは違っていた。かれは、一言で、三代続いたアメリカ人だった。絶対にロシア人ではない。

祖父たちは南北戦争で 両側に別れて 戦った。かれは戦争で戦ったことはない。はっきり言って、かれは兵役逃れだ、あるいは、そうだった。臆病者だったとか、ましてや(たとえば.....ウッドロー・ウィルソンみたいに?) 高い理想を掲げてたなんてわけでもない。いや、むしろ、かれが(自分自身にとって) 謎だったせいなのだ.....すべてが謎だという謎。

終戦の二年後、かれはドイツ人たちが正しかったという結論に達したけれど、もちろんその時には、その正義はすでに失われていたし、かれらの側について戦うわけにもいかなかった。

アメリカの参戦で、ディオンのモロクは何が何でも結婚しなきゃ、という気分になった。確かに、何千ものアメリカ人が、戦争の呼び声の前に同じような衝動に突き動かされていた。でもこれは、もっぱら社会学者に任せておけばよい現象である。

戦争が、十にも及ぶ前線で、もう何年も荒れ狂ってきたという事実にもかかわらず、そしていささか空虚な表現をさせてもらえれば、何百万もの同じ種の生物たちが、嬉々として大砲のエサと消えているという事実にもかかわらず、ディオンのモロクは幼い頃に身に

付けた習慣の犠牲者となり続けた。全世界がホロコーストで震撼しているというご時勢に、この個人の人生にからんで、こんな瑣末な細部を取り上げるなんてとんでもないと思われるかもしれない。しかしながら、この細部一つは、大戦の年代記にくらべてどんなにセコク見えても、ディオンのモロクの将来展望に、とても重要な意味合いを持っていた。

ぶっちゃけた話、われらがヒーローは、朝に目覚ましが鳴っても、どうしても起きられなかったのだ。

求婚相手探求の過程で、かれは世界を民主主義にとって安全な場所にすべく、チャリティ・コンサートを開いていた若い女性ピアニストに惚れた。このお嬢さん、モントリオールの花嫁学校で仕込まれた、リストのラブソディを弾くなどという、えらく非愛国的な欲求を抱いていたのだけれど、世界情勢に疎く、ましてハンガリーのことなど何も知らない彼女は、自分の趣味のおかれた立場などというものもご存じなかった。そういうわけで、自宅でもピアノでリストのエチュードの練習なんぞに打ち込んだりしていた。

オーストリア皇太子に爆弾を投げ付けた暗殺者は、この二人を引き合わせる役割をも担ったわけだ。最終的に結び付けるのは、神のご意志に委ねられたのではあるけれど。

ある朝、モロクが西部戦線のもめごと、それを言えばあらゆる戦線すべて束にしたもめごと、何ら意に介することなく惰眠をむさぼっていると、母親が（どういうわけか）かれの無気力に対して派手に激怒したのだった。ひょっとして前の晩に、何か非凡な残酷行為の話でも聴いて苛立っていたのかもしれない。とにかく、彼女はこう考えていた。「徴兵登録はしないにしても、仕事くらいは見つけられるだろうに」考えれば考えるほど苛立ちはつづいた。とうとう、突然の盲目的な衝動にかられ、彼女は流しへと赴き、手桶に水を汲んできた。一瞬後には、その冷たい中身を息子の上にぶちまけた。

「さっさと起きるんだよ！ このぐうたらな、役立たずの、穀潰しの……この浮浪者！」

この最後の形容は、母性愛の廃棄を必要とした。

この単純にして劇的な場面から、われらがヒーローがとうとう婚姻というヘビにも似た苦行の網に絡み取られていったかを一歩ずつ再現するのは、退屈で拷問に等しかろう。このラブレー的冒険は、それ自体で一書を為すべきテーマである。ここではただ、起床したディオンのモロクはただちに身の回りのガラクタを荷作りし、これを限りに父親のじゅうたんで足をぬぐい、家を後にしたと書くにとどめよう。

また、この慌ただしい結婚の朝に、かれが床屋の代金を借りなくてはならなかったという事実にも、あまりこだわるのも不公平だろう。もっともなかなか華々しい出来事ではあるし、将来の結婚生活における、いわばライトモチーフを為す出来事ではあるのだけれど。お察しの通り、結婚手数料を払ったのは新婦のほうで、波乱に満ちた新婚生活の間、彼女はこの事実を完全に忘れたことはなかった。

かれの硬直した過去をふりかえるにあたって非常に重要に思えるのは、この出来事のため、ディオンのモロクには仕事を探す必要が生じたということだ。

われわれが「幽霊たち」に混じったかれと初めて出会ったとき、かれはすでに人生の三年間を大企業に与えてきていた。

いかなる使命がかれをしてこの憂鬱な通り市　　パワリーへと赴かせたのか？　激しくいきかう交通の中で魂を修繕してもらおうというのだろうか？　それとも空約束のほうに惹かれて来たのだろうか？

かれはちょうど気狂いの家から来たところだった　　かれの地位が時々生み出す、自分で自分に課した任務の一つで、かれとしてもそれほど気がすすまないわけでもなかった。オフィスにもどろろと意図していたかれの注意は、陰気な倉庫へと続く階段の上に掲げられた通告にいきなりひきつけられた。その通告は、巨大な黄色い文字で、こう書かれていた。

ムシどもに死を

この硫黄じみたことばの下にはカンバスがかかっている、その色合いはフライド・エッグなみに心地よく視神経をなでた。画家はどうやら、近隣住民にとって明らかに痛切さをもった状況を再現しようと努めていた。亜麻色の髪と流れるような腰つきで横たわる裸体が、その肉体の比較的やわらかな部分を忙しく掻いている絵だ。ベッドは板張りの床にしっかりと固定されているというより、むしろ中空に浮いている感じだった。彼女の配偶者は、噴霧器をもってあたりを徘徊しているのがうかがえた。かれが示している白痴笑いは、果てしない南京虫の群れが集う、薄汚れたマットレスを見て引き起こされたものだった。(南京虫は、科学者たちには *Cimex lectularius* として知られ、世界的な羽のない陰気な赤茶色をしたひどいにおいの吸血虫である。人家、特にベッドで繁殖。天敵はゴキブリである)。この暗殺者のサフラン色の情人が、いまや古典となったオリンピアのごとくに臥するベッドカバーすら、この世界的な羽のない陰気な赤茶色をしたひどいにおいの吸血虫に覆われていた。

この時点で、いくつものことが起こり得た。ある刺激が与えられれば(たとえばこのパワリーの殺虫ポートレートなど)、主人公がただちにかくかくしかじかの方法で反応する、などということほど真実から遠いものはない。実験室での作業者たちの偉大なる代謝力学は、ラットや精神障害者ではきわめて感動的な成果をあげるが、真の人間の精神や肉体に直面するとまったく効力を失う。.....おそらくは二十五種類もの異なる行動の方向性が、われらが登場人物の脳裏を横切ったはずだ。かれが完全に免疫を有していた唯一の衝動はといえば、この珍しい殺虫剤を一つ購入することだった。かれにとって、地下鉄の大袈裟広告や、いなかで湿疹のように立ち並ぶけばけばしいポスターは、何のメッセージも伝え

ていなかった。かれの趣味は単純で、欲求も容易に満たされた。コピーライターたちは、あと一世紀にわたって頭をしぼったとしても、今日の広告のはかない成功哲学が拠って立つ、あの根本的な好奇心をかれの中に引き起こすことはできないだろう。

切れ切れの思考が、表層思考の灰色のけいれんの中、顕現的バンジョーの切れた弦のように千切れ飛んだ。確かに、かれは完全に知的な思考の渦によって行動したわけではなかった。ほとんど本能的に、かれは胸のポケットに手をさしこみ、革装のノートを発掘し、そこに几帳面な読みやすい字でこう書きつけた。

「『死の家の記録』を再読のこと」

ふりむいて、自分をポリープのように取り囲む汗ばんだ肉の群れをひじでかきわけつつ、かれは神聖性の匂いに否応なく気付かされた。その匂いがどんなものかは、ある人の語ったところによれば、聖人たちの伝記を読めば想像がつくかもしれない……。かれは一瞬立ち止まり、カール・マルクスの言う所の臭いプロレタリアートを検分した。イメージがかれを襲った……。イワノビッチだか誰だかの詩の、二階に住む若い移民のイメージ。その若い移民は、ベッドスプリングの上で寝返りをうち、南京虫やゴキブリの夢を見て、己の無為な飢えた人生の悲惨に憑かれ、手の届かない荒々しい美のすべてを嘆いていた。ディオーン・モロクは後足で立ち上がり、「みんなクソクラエと歌おう！」と叫びたくてたまらなかった。

一方でかれの感覚は、奇妙な不協和音にかき乱されていた。ボス・ツイードの殺し屋や狼どもの子孫たちが、粘液のかたまりのようにパウリーの陰気な峡谷を詰まらせている。ディック・クローカーのシラミや肺病患者や職業軍人や幻覚の陳列所は、この二十世紀二十年代の日の正午にあって、狂乱したリズムの渦だった。クレーンが首をふり、鐘が鳴り、ラッパが響き、ゴングがカンカン、歯車が噛み合って歩を進める。狂った、ゆがんだリズム　黒人ダービーとトロンボーン結婚のようだ。見かけは華やかな地球の放棄のテンポで進む、機械の世界。無機的な欲望のオルガズムが、原子の崩壊というクレッシェンドめざして高まる。無気味な、この世のものならぬパウリーの朗唱は、ディック・クローカーの安酒と梅毒の三博物館との親和性を強化している。ロージー・オグレイディの灰の上の資本に、労働が捧げた文字どおりの哀歌。世界の国際労働者が生み出すうめき声の合金化した連合……。救世軍が無料で提供する死の響き。肉切り包丁を持ったチャック・コナーズが、アル中性譫妄症と闘い進む。ブクステフーデへと、うなりをあげて平行四辺形の空間を通過する彗星の影……

このモロクの心に取り憑いた寄せ集めのさなか、歩道の野次馬どもが目撃したのは、中背の慎ましい繊細な人物で、学者と半人半獣の要素をあわせもったような体つきに、ベドフォード・ホイップコードのスーツの下に淡いダンガリーのシャツを着込んでいた。西半

球の他のみんなと同様に、日本の足をズボンにつっこんでいる。あのエメラルド島からのぶらんこアーティストのような、術学的なサディストではない。イギリス流俗物主義の厚い皮を刺す、ソクラテス的アブでもない。ゴキブリ風呂の中で永遠と戯れるスラブ人でもない。いいや、ただのスーツとズボン吊り姿の男……そして股間の快適のためのBVD。名前は非西洋的な男。三世代目のアメリカ人、夫にして父親、慎ましく繊細、まちがいなく反ユダヤ的傾向をもった人物……そしてそれと同時に、大アメリカ電信社の採用担当係長。

第2章

ハリ・ダスはチャイナタウンのウジウジ腐れた通りを、濡れたカゲロウのようにもがきながら進んだ。昼時だった。べとつく群青色の髪が薄暗い巻き毛となって、くすんだ制服の軍隊式カラーにかかっていた。火星人のような目つきであたりを見回す。あちこちの建物の正面に、壁紙のように糊付けされた広告が、ボンベイのひしめくショーウィンドウでみかけた花火の包み紙を思わせた。しかめっ面で身振りの派手なシャツ袖姿でいっばいのビリヤード場が、油污れとほこりで曇った窓の小さな長方形からうかがえた。甘い、胸の悪くなるような腐敗臭が肉屋や八百屋の開いたドアから発し、そこに積まれた見慣れぬ禁断の食物が、外人の味覚に知的な魅惑を放っている。硬いワックスを塗ったニワトリやブタの死骸が、あるものは丸ごと、あるものは切り裂かれて切断され、骨董屋の商品のようにウィンドウにぶら下がっていた。かれは臆することなくそれを見つめ、ウィンドウの中から外の好奇心に満ちた世界を横柄にながめる、無感動な人物のことはまったく意に介さなかった。その外界とは、すなわち陰気な、怖れを知らぬ人物たちで、その黄色い口には長い竹のパイプが糊付けされ、その金属の火皿からは紫煙の渦がたちのぼり、空気をラクダの糞の臭気で満たしている。

これはハリ・ダスの電報配達人としての二日目だった。ひさし付の防止を脱いで、かれはその中に収められた電報の束を検分した。それらの経路がきちんとしているのに満足して、かれは戸口にすわりこみ、バナナを食べはじめた。

浮浪者の群れがサッと集まってきた。かれはバナナを食べ終え、群れた乞食どもの頭越しに皮を投げ棄てた。ロックフェラー氏が、誕生日に新品の十セント玉をばらまくような慎重さでもって。

「床屋に行け！」と若いのが一人叫んだ。

「そんな制服、脱げ！」

ハリは快活に笑った。インドの飢餓も疫病もあざけるバーガンディー式の笑い。この二十世紀における自称「人類の救い主」として、かれは歡樂こそが最強の武器であると感じていた。だからそれを活用するのをためらったことはなかった。

通りの浮浪児どもは、ニクバエのようにかれに群がった。「おまえら、とっとと消え失

せやがれ」と、かれは戸口の階段にのんびりと横たわって、気楽にひじをつきながら、叫んだ。それでもこのろくでもない連中は、まわりをうろつくことに固執した。かれらの愚弄は悪意に満ちていた。

「ほら、さっさと行けって！」かれは金切り声をあげた。「さもねえと、ケツに蹴りを入れてやるぞ」

外国の隠語を使いこなす己の技量に満足し、かれは内ポケットを探り、「ロイド・ジョージへの公開書簡」と題したパンフレットの熟読にとりかかった。この危険なマニフェストを読みつつ、かれは異様な興奮を示し、しかもそれを隠そうともしなかったが、これはこの文書の読み手がすなわちその書き手でもあるという事実が理解されれば、許されるべき性質のものであろう。きわめて巧みな下りを再読するたびに、かれは笑い声をあげた、とりまく観衆たちのことはまったく意に介さなかった。もし単なる一被創造物に、その創造という奇跡の御業が終わったときの、我らが擬人化された神が天の玉座にすわりなおし、自分の作品を超然とながめて、それをよしとされる時の歓喜をうかがうことが可能であるなら、この悪魔の最高陛下たるロイド・ジョージ宛の攻撃演説を読み返しつつ満足げに笑う、アーリア人配達人の俗っぽい喜びも理解できるかもしれない。

ときどきかれは読むのを中断して、催眠術師の目をもって、通りの向かいのバルコニーに置かれた栗色の龍を見据えた。ハリ・ダスにしてみれば、それがエベレスト山のサファイアの頂であろうと、ベッドロー島にたつ、誇らしく禁欲的な緑青色の自由の女神像であろうとかまわなかったはずだ。かれが読む手を休めたのは、自分自身がおかれた皮肉な状況にいきなり思い至ったからだ。偉大なる文化の誇り高い後継者、アーリア人種の子孫にして代表が、アメリカの、しかもチャイナタウンの戸口にすわりこみ、卑しい奉公人のいでたちで、「シャングーラ」、つまり異国で好奇心の対象となっているのだ。

アメリカにきて最初の二ヶ月の成果を思い返した。セックスへのさらなる傾斜、黒人への強い共感、北方民族の優越性に対する疑念、性病を移されることへの恐怖の増加（膿漏症や痔は言うに及ばず）、現地の口語、俗語や卑語に馴染みが増してきたことへの誇り。もともと意図していたコロンビア大学での勉強のことを考えた。遥か彼方の、トーテムポール並みに役立たずの代物に思えた。アメリカで、博士号なんぞを持って、いったいどうしようというのだ？ そいつを抱えて路電の車掌にでもなるか？ 自分がうち捨てた人生についての漠然とした結論のない考えが、脳裏を離れなかった。自分がいつかインドに戻り、イギリスの虱どもを蹴り出す仕事に着手することはあるのだろうか、とかれは物憂く考えた。

「おいあんた」とかれは快活にさえずった。「いま何時？」

この質問は、せせら笑いとはばか笑いの海に沈められてしまった。

この異教の世界に他にどう直面していいかわからず、ハリは笑顔を浮かべ、公衆の面前でだけだるくのびをした。

声が響く。「よお坊主、おめえ、一体何者だ？ どっから来た？」

「坊主」ということばが、狭い意味では電報配達人を指すことは、かれの知るところではなかった。しかし、自分の出自に関する詰問を、かれは炎のような熱意でもって受けとめた。デモステネスのブロンズ像のように身をこわばらせ、誇らしげに立ち上がった。黒い瞳をきらめかせ、アメリカの公衆に対する処女演説を「復唱」しようと準備を整えた。かつて「優雅さなど首をひねって殺してしまえ」と叫んだ、雄弁で知られるフランスの大アル中のような気分だった。

「若き無作法者どもよ」とかれは呼び掛けた。「諸君がこの昼、この平等と友愛の栄光の地で目にしているのは、この地球の歴史上で最も偉大な文化の代表なのです。いま、わたしの前の若き無骨者が発した質問に答えることを許されたのは、名誉、それもまれに見る名誉」かれの「まれに見る」ということばは文字にするのが不可能だった。「であると考えます。気楽な浮浪者諸君、わたしはインドの息子なのです……ヒマラヤ山脈からセイロンの珊瑚礁にまで広がる、かの広大な帝国の息子。百もの異なる言語を話し、千もの未知の神々を崇める三億もの人々の国……。かの略奪の怪物たる大英帝国の財布の中で、最も貴重な宝石なのです！」

アメリカ式の服装の若い支那人数名が、聴衆に加わった。かれらめがけてハリは真珠のローブを投げかけた。

「東洋の諸君、ようこそ！ 孔子の教えに従う人々、大ゴータマの信徒たちよ、あなたがたにメッセージがあります……全人類へのメッセージ、黒人も白人も、褐色人も黄色人にも」かれの歯が、まばゆい陽射しの下で白く強烈に輝いた。「キタイの人々よ、わたしに宿る約束の救い主を見るがいい……新たなる救世主を！ ああ人々よ、キリストの到来に関する漠然とした多様な、しばしば矛盾する世間一般の考えほどわたしを驚かせるものはない。諸君は月から人が地球に降り立って、諸君の支配者になってくれるとでも思っているのですか？ 二十世紀の諸君、きみたちは次の事実を認識できる程度の知性はお持ちでしょう。いまわたしが果たさんとしている任務にわたしを指名する文が、聖書には広く、深くちりばめられているという事実を。『内にも外にも記された巻き物や書物は、異国のことばを語り、舌をならしつつ、平和を広め等々……』わたしが約束された者であることを確かめようという狙いをもって、聖書を流し読みでもするならば、わが主張の持つ力の前にどんな懐疑派も説得されるでしょう……わたしの任務、すなわち現在の混沌から秩序を生み出すという仕事の膨大さこそが、その単純明快さを示しています。もしこれが矛盾に聞こえるなら、それはわたしがまさに真実をもって語っているからなのです。自分がこ

の世界の渴望をどこまで満たせるものかは知りません」(それ!)「世界は完全にわたしの期待を裏切った……しかし、現代のキリストは、無謬であると主張するつもりはないのです。あなたたちは笑うでしょう」(単なる演説上の小技……かれが何をしゃべっているのか、だれにも理解できなかったのだから)「わたしも人間です。人間過ぎるほどの人間です。この瑣末な人間的弱さは、しかしながら、このか弱い肉体に内包された人間の偉大さ、崇高さによってかき消され、打ち消されてしまうのです……わたしが狂っているか、さもなくば世界が狂っているのだ」

この流麗な序論は、マリガン巡査の接近によって切り上げさせられてしまった。この法の若枝はハリのやせ衰えた腕をつかみ、それを思いっきりしめあげた。

「何の騒ぎだ」かれは荒っぽく尋問した。

「そいつ、気狂いだ!」とだれかが叫んだ。

青と黒の絹の外衣をまとった支那人の群れが、いきなり現れて、マリガン巡査に詰め寄った。連中は、逮捕の見込みに非常に喜んでいる様子だった。

マリガン巡査は警棒を振り回した。「下がれ、この細目の下司どもめ!」

黄色顔の海は、平静で穏やかなままだった。だれも下がらない。

「おまえ、何とか言ってみろ」一段と険悪さを増した握力が、マリガン巡査がからかっているのではないことをハリ・ダスに納得させた。

「ぬぁに考えてやがる。演説すんにも許可がいんのを知らねえのか? いったい全体、ぬぁにわめきたててやがった、え? さっさと電報配達してきやがれ」

マリガン巡査の無礼さは息をのむほどだった。あのちんけなイギリスの役人どもを思わせた。

「もし何か規則を破ったんでしたら申し訳ありません、巡査。ごらんの通り、わたしはまだ来て日が浅いものですから」

マリガン巡査の態度は和らぐ兆候を見せた。熱っぽい弁士も、また三日間を豚箱で過ごすことになるのではないかと態度を軟化させた。かれは、その主張とは裏腹に、アメリカの規則について完全に無知というわけではなかったのだ。

マリガン巡査の寛大さを感じ取って、ハリ・ダスは「言論の自由」に関する一節を最後に敢えて持ちだそうという衝動にかられた。が、即座に阻止された。

「そんなもの、うっちゃっとけ」と吠えるマリガン巡査。

「え、何ですって?」

「よせってってんだ。英語がわかんねえのか?」

「わかってるはずなんですが」ハリは慇懃無礼に答えた。「わたくし、オックスフォードで教育を受けておりますので」この意義がマリガン巡査のフケの厚い頭蓋骨に完全に浸透

するのを待った。それから、アングロサクソンの略奪者どもと古来からの因縁の片をつけようとする藩王の態度で続けた。「確かにですね、巡査、わたしの未だ理解できないアメリカ語があることは考えられます。これはわたしの落度です。お約束しましょう。あと数週間もすれば、必ずやあなたがたの方言も理解できるようになりますとも」

「ほ・う・げ・ん、だと？」マリガン巡査は、そのことばがまるでダイナマイトでもあるかのように扱った。かれの脳の萎縮していない部分が活動をはじめ、補強しあう疑念が、メカニックの集団の器用な手にかかったフォードの車のように、並行して組み立てられた。署には西インド諸島出身の黒ンボ清掃夫がいた。この目の前の犯罪者と同じような慇懃な発音と、洗練された言葉遣い、語彙の豊富な御託をしてやがった。なるほど、よってこいつは西インド諸島の黒ンボか！ それでもマリガン巡査は、自分のいけにえの長いまっすぐな黒髪、鷲のような顔立ち、繊細で感じやすそうな頭蓋骨に困惑させられた。頭をかきながら、ひょっとして自分の民族学上の相違に関する知識は限られたものなのかもしれない、ということに思い至った。しかしながら、かれとしても納得しないですますわけにはいかなかった。

「国はどこだ？」かれは率直にたずねた。

「わたしはヒンズー教徒です」ハリは威厳をもって答えた。

「するってえと、黒ンボじゃねえんだな」

「正確にはちがいます……違いは歴然たるものと存じますが」

「おい貴様、おれに説教しようってのか。お高くとまってんじゃねえぞ、若いの。さもねえと、こいつを背中に食らわしちやるぞ、わかるか」

ハリはそれなりの怖れをもって、法の尊厳を告げるエンブレムを見つめた。アメリカ到着後二週間目に、かれはこのエンブレムの重みを感じていた。その体験を繰り返したいとはまったく思わなかった。簡潔に数語で、かれは自分の審問官に対し、自分は疑問の余地なく何ら重要性のない、怖れを知る社会の一分子に過ぎない者であると考えていることを明らかにした。「ただアメリカの自由で気さくなやり方に慣れていないだけでして」

「その話はなしだ。そっちには深入りするんじゃない」とマリガン巡査。「おまえは今じゃアメリカにいるんだぞ、忘れるな。あんましべらべらしゃべってまわるんじゃねえぞ……」

ハリは、この気前のいい助言に対して感謝のことばを述べ始めた。

ほとんど聞く耳を持たず、マリガン巡査は巨大な毛深い手をあげ、それをハリの顔面につきつけた。

「おめえ、確かに口だけはいっちょ前だな、この黒ンボ畜生め。さあ、よく聞けよ。貴様をまともに扱ってやるってんだからな。まっとうにしてやろうってんだ……おれの管轄

内で遊説してまわるんじゃないねえ。わあったか？ 何の役にもたたねえんだから。何か胸につかえてることがあんなら、おれんとこにきてぶちまけろ、な？ このチャンコロどもで練習したりすんな。こいつら、何のことやら丸つきしわかっちゃいねえんだから。わかったか？」

ハリの表情の上に、面白がるような表情が現れた……。この新たなる友マリガン巡査に、自分の任務を話すべきだろうか。疑いがかれを襲った。結局のところ、マリガン巡査は黒いメシアの到来を寿ぐだろうか？ かれはマリガン巡査が無邪気に振り回す、滑らかな硬い警棒をチラッと見た。警棒と結び付いた連想が、救世説法の考えをうちのめした。全体として見れば、マリガン巡査はひじょうにまっとうな人間だった。その先は、マリガン巡査としては、好きなものを信仰する権利があるわけだ。その上、マリガン巡査が自分の権利を熟知しているのは確実だった。

これで導入部に伴う困難がおさまったため、かれは法の使者との会話を続けたい気分だった。しかし、生れて初めて、かれはどんな方向に推せばいいのか途方に暮れてしまった。イギリスの支配者どもの不正の話でいこうか、それともアイルランドの経済的なジレンマの話か？

マリガン巡査がそれ以上のかれの迷いを鎮めてくれた。

「電報はどこへやった？」とかれはわめいた。

ハりは帽子を目深にかぶった。

「見せな！」

電報は八通、二つは死亡通知だった。ハりはアルメニア人とギリシャ人の遺族を先に訪れるよう指示を受けていた。かれはこの事実をマリガン巡査に告げた。

「ならさっさと行きな」とこの人物は、突然生気づいて言った。「油売んのはまた今度にしときな。気いつけんと、クビになっちまうぞ」

ハりは群集をひじでかきわけて進みだした。ほとんど駆け出す寸前だった。

「待ちな」とマリガン巡査が叫んだ。ハりは、今度は何だ、と思った。

「おい、おまえ、多少は血のめぐりがいい野郎だな。そんな仕事は投げちまえ！ 明日あたり、訪ねて来い。エレベータの仕事を世話してやろう。交換台は扱えるか？」

ハりは派手に感謝を述べて、巡査と握手した。マリガン巡査は、棍棒を左手に持ちかえなければならなかった。ハりは法の陛下のシンボルを、敬意と心許なさをこめて見下ろした。

「いっちなまえ、仕事に戻りやがれ。さもねえと、軽く一揉みしてやろうって気になるぜ」

警棒が両手を交互に行き来する様子が見事だった。ハリ・ダスは期待のあまり身震いした。

「さあどうした、おまえらも失せろ、散れ、行っちまえ……ホレ！」

マリガン巡査はぼんやりと、巡回を続けた。あのヒンズー野郎が、何と立派なしっかりした口のうまい学のある黒ンボだったことか、あのクソイギリス人どもに侵略されるまで、アイルランドがなんと「とてつもねえいい国」だったかを考えていた。そんな考えで頭をいっぱいにして、かれは酒場の裏口に入り込むと、ラムを一杯所望するのだった。

第3章

大アメリカ電信会社は、街のダウントウンにある低層ボロ建築に配達人採用部を置いていた。最上階は制服倉庫。その下の階には仕立て屋があり、配達人たちの廃棄した制服が新調され、洗濯され、プレスされる。主任仕立て屋は副社長の召使頭だった。アメリカ全国を旅してまわり、部下たちに経済性の美德を説き、オフィスに靴墨ブラシを置かせたり、つくろいを指導したりした。また、副社長あてにかたこと英語で膨大な報告を書き、たとえばオマハ事務所はこの年のこの日には、朝八時十五分まで開店しなかったとか、デンヴァー事務所では鎖つきの鉛筆を備えていない記入台があったとか、ニューオーリンズの窓口担当は爪がきたなくて噛みタバコを噛んでいたとか報せるのだった。この種の情報の代価として、かれは結構な給料を頂戴していた。

当然ながら、どこへ行ってもかれはらい病患者並に歓迎されざる存在となっていた。

建物の一階は、通りに面した採用事務所そのものと、その裏手を占める着替え室に区切られていた。この裏手の部屋の壁に沿って、小さな小部屋がたくさん仕切られ、新任の配達人たちが制服を着たり脱いだりできるようになっていた。裏の出口のところには鉄板に覆われたテーブルがあって、そこに巨大な包装紙のロールとひもの玉が置かれていた。配達人がある地区に任命され、制服に着替えると、私服をきれいにまとめて包み、裏口から出かけるよう義務づけられていた。任地の事務所が歩ける範囲からはずれていれば、車代が支給された。が、この車代はあくまで名目上のものにすぎなかった。モロクはいつも、この車代制度の存在を知っていて、それを要求するだけの図々しさを持ち合わせている「常連ども」にしか支給せず、浮いた分を昼食代に充てていた。

採用事務所そのものは、公衆の視線にさらされていた。巨大な板ガラスのウィンドウ二つが、好奇心の強い通行人たちに内部で絶えず執り行なわれているドラマの全貌をのぞき観ることを許していた。休み時間には、守衛を外にやって、浮浪者やごろつきたちが窓に鼻面を押しつけるのをやめさせて追い払うことが必要となった。聡明でハンサムな若者の実物大のボール紙書き割りが、配達人の衣冠束帯すべてを身にまとして、ショー・ウィンドウのそれぞれに華々しく置かれていた。この餌は、二つの役割を持っていた。一つには、浮浪者やまぬけどもに、電信会社に勤めれば輝かしいキャリアが待ち受けていると思

わせること。そしてまた、人口にかいしゃした誤った認識を改めさせる役にも立っていた。配達員は全部が全部、馬鹿や年寄りばかりではないんですよ、と言うかのように。

このついでに、この段ボールの人形（これはアメリカ中の大アメリカ電信会社すべてに飾られていた）のモデルとなった薔薇色の頬をした若者は、ここでいかにもこれ見よがしに利用されているはつらつとした若さを、すでに持ち合わせてはいなかった。仕事熱心のあまりかれは足結核にかかり、よってこの時点では家で悩み暮らしており、身体障害者補償を無為に懇願していた。確かに、こうした不幸な状況はさほど珍しいものではなかったし、ホッパーに流し込まれた何千もの人々のことを考えれば、特に注目すべきものとも思われなかったのだ。

法務省の荷を軽くするため、「安全第一」キャンペーンが開始されていた。大判のポスターがオフィスの掲示板や着替え室の仕切りにはり出され、殺されたり不具にされたり任務を果たせなくなったりした配達人の数に関する最新の全国統計を示していた。リアリズムの色合を添えるため、事故が起こるもっとも一般的な方法を示したスナップショットが、しばしば統計数字の中にはさみこまれていた。この陰惨な任務に関する報告を着替え用小部屋にまで表示すべきかについては、副社長と部長との間で長いこと論争が交わされていた。副社長の持論では、これらの発表にはブーメラン効果があるという。副社長がこんな考えを得たのは、「辞職者と罷免者」に関するモロクの月例報告を読んだからかもしれない。この報告によれば、配達労働力の一割を上回る量が、丸一日も働かないうちに辞任することを示していた。副社長にとって、これはまったく説明のつかない現象だった。ひょっとして後者は、電信会社が本当に、その職を通じて配達人たちにキャリアを提供しているのだ、と自分で信じこんでいたのかもしれない。

モロクはパワーリーでの馬鹿騒ぎのあとで、興奮に上気してデスクに戻った。昼近くに、視察のため席をはずしたのだ。配達人の一人が発狂したというのである。

すでに三時をまわっていた。蒸し暑い日で、激しく発汗していた。かれの不快は、着替え室と制服倉庫から漏れてくる樟脳とライソル消毒剤の、刺すようなきつい匂いでいっそう増していた。加えて、応募者が、慈善施設の待合室でよく見かけるような、無感動な辛抱強さでやたらにベンチに並んでいるのを見て、いらだちは増した。かれは苛々と時計を見やった。

ダブル・デスクの向かい側にすわっているのは、友人にして助手のマット・リアドンだった。リアドンは無能で、反抗的で、むら気だった。モロクが仕事を与えたのは、友情に免じてのことだった。

リアドンが何かに興味しているのは明らかだった。

「つい今しがた、すごい修羅場になってたんだぜ」と息を切らせてかれは言った。

マットは果てしなく小話を続けることができたが、そのどれもさほど気晴らしにはならなかった。

「待った……後にしてくれ。まず片付けなきゃならない仕事如山積みなんだ」

マットは反抗的なうなり声をあげて、むっつりした。モロクのやつ、いつもおれを黙らせようとしやがる。おれが採用部長補佐じゃなくて、そこらの小間使いか何かみたいに。

「それとだな」とモロクは、友人の傷ついた感情など一顧だにせず吠えた。「ローソンに言って、あそこの連中をどうにかさせる。まるで蠟人形館みたいなありさまだろうが」

「ここをエデン美術館にしたのはあんたであって、おれじゃないよ」と考えつつ、マットはむっつりと不承不承立ち上がった。モロクの居丈高なやり口は非常に気に入らなかった。言いたいことは山ほどあったが、どれもまるで価値のないことばかりだった。もう口論には飽きた。その日一日尾を引くばかりだ。そして結局は、モロクの意見が通る。モロクのやつめ、その気になればホントに頭にくるほど頑固になりやがるもんな……

マット・リアドンは応募者を事務職員と分かつ手すりにたどりつき、若者たち一人ずつ帰るよう説き伏せだした。一人、また一人と片付けつつ、葉巻をふかす。「ほら、さっさとして！」と各人の鈍重な訴えの流れに苛立って、かれはうなった。それぞれの申し開きに一分半ほどが割かれ、それに対して「明日の朝八時きっかりだ！」という無愛想な返事が続いた。

「おいマット、何考えてんだ。そんなことはローソンにやらせろって言っただろ？ 何のためにあいつを雇ってあるんだよ」急にマットの戦術に気がついて、モロクが怒鳴った。

マットはモガモガと、ローソンはつまらんことにも一日がかりだとか何とか言い訳をした。そして続けた。「それに、このガキどもに、ちょっとは親身になってやってもいいんじゃないかと思って。別に物乞いにきてるわけじゃないんだから。仕事に応募しにきてるんだぜ」

「ここを仕切ってるのはだれだっけな？」

「そうガミガミ屋になるなって」とマットはなだめた。「だんだん年寄りのガミガミ屋になりつつあるぜ、あんた」と優しく、「あんた、面白いものを見損ねたんだぜ。十分ばかし遅かったなあ」

モロクの苛立ちは増していた。「さっさと吐きやがれ……何だよ？」

「おいおい、頼むよ」とマット。「しばらくおとなしく聞いてくれて。普通にさ。な？」

あんたが出かけた後で、一人来たわけ。おれには一発でわかったね。最初はこっちもあんまり口を聞かないで、いつも通りに応募書類に記入させたんだけどさ。たまに軽い質問かなんかしながらね。最初は向こうも用心してたんだけど、こっちがえらく親切にしてやってるのに気がついて、どう考えていいかわかんなくなったらしいんだな。まあとにかく

く、しばらくは何のかのと適当に駄弁って　いやあ、もうありとあらゆることを話したよ、念頭にあった一つのことを以外は全部……んでもって、いきなし言ってやったわけ。『ちょっとのどを見せてみな』おれがそう言うと、やっこさん飛び上がったけど、そんなの無視して扁桃腺切除がどうしたとかつぶやいてさ。もちろんこっちが見たかったのは、やっこさんのベロだったわけ」

モロクは辛辣な笑いを浮かべた。マットのやつ、いつだって自分がえらく物知りなつもりでいやがる。若いインターンみたいだ。

「あんのじょう、ベロは傷だらけでやんの」

「やれやれ……もう結構」とモロクはうめいた。「後の話は聞きたくもねえや」

「いや、待ってよ　最後まで言わせてよ……なんだっけ？　ああそうそう！　ねえ、聞いている？　だから今も言っていたように、おれはそいつをうまいことだまくらかしてたわけ、背中を叩いたりして、お前はホントにいいやつだとか言ったりして……いやあ、今考えると、あんなことしないほうがよかったかな。とにかく、おれは落ち着いた平静な声で、そいつに話し掛けてたわけ　ほれ、いまこうして話してるみたいな感じ　そこで突然、こうふかしてやった。『おい、最後の発作はいつだった？』いやあ、あんたもいればよかったのに！　もう、いきなり飛び上がってさ、おれの手から応募書類をひったくんの……んで、びりびりに破って。おれ、そいつが出口に向かうのを横目で見てただけど。言っとくけど、おれは一言も言ってないんだぜ……でもそいつ、出てくかわりにこっちに向かってきて、手を振り回して、金切り声をあげて　「嘘だ……嘘っぱちだ」だと。そう言いつつ、唇がひきつりだして、痙攣の発作に入って……次々に痙攣をおこして。それから指が硬直して、まるで空気をかきむしるみたいな。そいでもって、いやあ、からだを二つ折りにしてぶっ倒れて。もう、ホント不気味よ。三十分も床にのびて、泡ふいてんだぜ……なあディオン、たぶんおれがツボをついたんだろうな。もう完璧」

「まさかまだ裏手で転がってたりしないだろうな」とモロク。

「まさか！　ちゃんと始末したよ。でも、正気づかせるのはえらい苦労だった。ここには他に二十人ほどいたけど、みんなもうひっくりかえっちゃって。マクファデンさんなんか、卒倒したくらい。ちなみにあのおばさん、ダメだね。クビにしたほうがいいよ……まあとにかく、警察沙汰になるんじゃないかと思ったよ。もうそこらじゅう大騒動。それも、おれが簡単な質問一つしただけでだぜ！　な、おれが言ったのはただ『最後の発作はいつだった？』それだけ。それだけだぜ！」

モロクは補佐を情け容赦のない皮肉をこめて見つめた。

「もちろんお前は、そんな事態になるとは予想もしてなかったわけだよなあ。え？　おれの考えを言ってやろうか、マット。おれに言わせりゃ、お前だって頭のおかしい馬鹿野

郎だ。この一件で、えらく楽しんでくれたじゃないか」

マットは後悔しているようなふりをした。内心では、自分がとても誇らしかったのだが。自分のお里が知れたような気はした。

「とはいえ」とモロクは間をおいてから言った。「お前がそいつを雇わなかったことだけでも、感謝すべきなのかもしれんな」とかれは小ずるい悪意に満ちた笑みを浮かべた。「トウィリガーも言ってるけど、てんかん持ちの配達人が地下鉄の線路におっこちて、切り刻まれるなんてのはいただけないもんな。ところで」とつけくわえて、「本物のてんかん持ちと、仮病使いの見分け方って知ってる？」

マット・リアドンはかぶりをふった。

「そうだな、何と言うか……片方は、いつも安全な場所でしか倒れないけど、本物はそんな注意深くないってことだな」

「いずれにしても、交通の邪魔ではあるけどね」とマット。

モロクは笑った。マットも。最高のジョークだ。モロクは、それが嘘なのを知っていたけれど。マットは知らなかった。

「ああ、忘れてた あんたに手紙が来てたんよ」といきなりマットが言った。「あのエジプト人から……あのアホのサラワットから」

「サラワット？ サラワット？」

「うん、覚えてるだろ。ほら、読めよ。もうおかしくて死にそうだよ」

モロク宛ての私信を開封したことについては、一言の詫びもなかった。

モロクは手紙を受け取って読んだ。

ワシントン・D・Cにて

類いまれなる敬愛すべきモロク殿

わが心を捕らえた悲しみの手がいかなるものであったかについてお報せすべく、ここに一筆したたずにはいられなかった次第です。わたしの心の痛みという重荷を貴殿に負わせるのは、わたしの極めて遺憾とするところではありますが、貴殿が珍しくも寛大なる心をお持ちであると知って、わたしは極めて安堵させられております。

いまのわたしは、アメリカという広く、暗く、逆巻く海に隠された岩に砕かれ、木っ端微塵にされた難破船のような存在です。わが親愛なるモロク殿 わたしは人々がこの国を高く評価するのを耳にしてまいりました。その架空の美しさがわたしを駆り立て、平穏なる東洋の彼方からわたしを激しく引き寄せたのです。

この国に上陸して間もなく、わたしが自明と思っていたものは単なる詩的な感傷に過ぎなかったことを発見いたしました。そしてすばらしくも巨大な希望の豪邸

は、単なる夢で無根拠であることも。モロク殿、わたしはいたく失望しております。ペルシャの詩人が、次のように申しております。『汝の痛みと苦しみを打ち明け、その潰瘍となった心を癒す香膏を見出させる人間らしい人物がどこかにいるはずだ』そしてモロク殿、わたしが敢えてこの書状をしたため、まずわたしの暖かき愛情と、貴殿にお目にかかりたいという大なる希望を述べさせていただき、次いでわが感情と印象について述べさせていただいている理由なのです。

わが生を営むに足る稼ぎを得ることができなかったためにニューヨークを離れることとなったのは、すでにご承知かと存じます。西洋の大都会のきわめて慌ただし街路にあって、唯物主義的な群集の中で、わたしは自分を見失ってしまいました。そしてわたしは、フランスの「ユゴー」による「ああ無情」の主人公たるジャン・バル・ジャンのごとき心情で荷物をまとめ、もっと容易に糊口をしのがんという圧倒的な希望をもって、さらに前進したのですが、しかしながらわが不運と悲運の、ワシントンのすべても、わたしが手ほどきを受けたニューヨークとまるで変わりなかったのです。

なんと悲しむべきことでしょう！ わたしのような人物が、世界の庭園と称されるこの地で自らを養うこともできないとは！ これは大なる悲慘です。この偉大なる国の現状を鑑みるたびに、「ロングフェロー」の一節がわが記憶に蘇ります。

何かしら、何かしらの行ないが

一夜の安眠を稼ぎだす

さらにわたしは、ハムレットにおけるシェイクスピアのことばとともに、アメリカを思い描くものです。

「デンマークの国においては何か腐っておる」

これ以上、何をかいわんやです、親愛なるモロク殿。わが希望という華開く薔薇は、すでに色あせてしまいました。こちらの状況は最悪です。二十世紀のさなかにあって、資本主義が労働を奴隷化し、民主主義とは何の意味もないただのことばにすぎません。

金を持てる者は、自分が養ってやっているというだけで、持たざる者を著しく虐待し、そして金を持てる者は、その精神的な感情故に墮落しています。それが弱さの最も重要な点です。これぞ社会の誤りなのです。

彼方から、ロシアの力強い手に握られた魔法の灯明が、レンズをこの国に向け、貧しい労働者の足下を照らして導こうとしているのが見えます。

遅かれ早かれすべてのものは消え去り、存在しなくなってしまう。

乞食も王も、死に向けて等しく歩みを進めているのだ。

親愛なるモロク殿、わたしの率直さをお許しいただければ幸いです。今日、この数行をしたためよう駆け立てたのは、わが心の最も奥深くに秘められた悲しみであり、わたしは貴殿の「人間性」と「気高さ」と「優しさ」を大いに感謝するものであります。

火を止められた天火のごとく秘められた悲しみは
心を灰塵に帰すまで焼き尽くす

機会があれば、いつでもお手紙ください。どうすればよいか、ご指導ください。わたしは辛抱できるでしょうか、そしてわたしの辛抱が尽きることはあるのでしょうか？ アメリカ合州国における状況は、引き続きこのまま悪くあり続けるのでしょうか？ 太陽が照りつけて暗雲を晴らし、蒙を啓くことはあるのでしょうか？ わたしにはそうは思えません。

わたしの考えはこうです。アメリカに来たのはわが白紙の生涯における汚点であり、失意のうちにエジプトに帰るとなれば、わたしはむしろ死を選びます。

わが魂は野心に満ちていますが、それはわが肉体という粘土のおりに閉じ込められているのです！ これを解き放ち、自由と無限の解放を味わせることはできるのでしょうか。

わたしはニューヨークに戻りたいのですが、そこでの自分の定めがわかるまでは戻るつもりはありません。失業者になりたくはないのです。貴殿の部下として雇われ、服の面倒を見たいのです。業務時間はどんなに長くてもかまいません。貴殿のご指導のもとで、落ち着いた生活が送ればよいのです。

貴殿の御心はわたしの状況に対して必ずや同情を寄せられ、わたしをなんらかの地位につけるよう奮励されることと存じます。わたしは配達人として貴殿に雇われたく、またそれ以外の社内の仕事も何であれやるつもりです。お願いですからお助けください。

貴殿がわたしをそのような仕事に就けることが可能となり、貴殿のご親切にわたしが応じるようご一報いただければ、わたしはニューヨークに戻ります。

また、しかるべき空きがあればわたしを雇ってくれることが確実な場合には、ご友人がたにわたしのことをお伝えいただけて結構です。ほかの人々のことは、信用していないし、どうでもいいのです。わたしが揺るがざる信頼を置いているのは貴殿だけです。わたしが崇め奉る人物は貴殿だけです。貴殿のご一存で、わたしの問題は解決されるのです。かような長々しい手紙をもって貴殿を悩ませるのは心苦しいのですが、古き過ぎ去りし時代のギリシャの哲学者「ディオゲネス」が、はだしで、手には灯明を持って、ふさわしい人物を見つけるためにアテネの通りをさまよ

い歩いたことをご想起いただきたいと存じます。

わたしもさまよいました。それもかなりのながきにわたって。アメリカで、ふさわしい人物を見つけようとして。そしてあなたの中に、真の人物を見出したのです。

できる限りの手をつくしてわたしを助けることをためらう必要はありません。わたしを部下として雇っていただくか、あるいはどこかまっとうな職につけていただきたいのです。生活費はとても高く、こんなに長く職なしでいることはできないのです。わたしは存在できません。この手紙をご再読ください。折りを見て読み返していただき、ご返事をぜひともください。わたしはここにいたくないのです。ニューヨークに戻って貴殿と頻りに会いたいです。そちらに定住できるようお助けください。

シュクルラはまだ配達人として働いているのでしょうか。恥ずべきことです。ずいぶん長いこと貴殿のお時間をお取りしてしまいました。そろそろ筆をおかねばなりません。最良の願いと心からのお礼をこめて、貴殿の足下にわが最高の敬意を据えるものであります。

貴殿の忠実なる僕サラワット

モロクが最後の数節を黙読しているときに、丸々と太った人物が、滝のような汗を流しつつ、ロードアイランド州産の闘鶏のようによたよたと入ってきて、交換台にすわった、これまた小太りの人物のところにふらふら近づいた。

「よう、デイブ」とかれはわめいた。「今日はここいらじゃ何か面白いことでみもあったか？ 親分さんはどんな具合だい、あのモロク氏は？ 破産しちゃったか？ できれば何ドルか借りようと思ってたんだけど」

ブラフマンの体形をした小柄な人物デイブは、歓迎に作り笑いを浮かべ、モロクの方をこっそりとあごで示した。「また変な手紙をもらったとさ……」

「こっちへこいよ」とマット・リアドンが、いきなりプリゴツィを嗅ぎつけて怒鳴った。「この旦那、崇拜者から手紙をもらったんだぜ……ディオン、頭のところを読んでやれよ……あの『心の痛み わが心を捕らえた悲しみの手』とか何とかいうあたり」

「またきたのか」とモロクは、プリゴツィのほうに目をあげて叫んだ。「たまにはよそで油を売ってきたらどうだ」

「だっておれ、ここが好きなんだもん。雰囲気がいいよね」

「樟脳が好きなんだろ」とリアドンが述べた。

「気違いどもが好きなんだよ！ わかる？」とプリゴツィは、体勢を整えた。「あんたらガイキチの集団だもん……あんたらみんな！ 配達人どもがいかれてると思ってんだ

る、あんたら。やつらを精神分析したりしておもしろがってるんだ。おれに一言言わせてくれよ……この配達人は、このろくでもねえショバで唯一まともな連中だよ。いや、ちょっと訂正しよう　モロクの旦那のお気に入りのいかればんちどもは除くけど。まったくマット、おまえは最悪のヘマをいろいろやらすけど、あそこに自己満こいてすわってるあんたの親分ときたら」　ここでかれは、モロクが聞いているかどうか、冷徹にうかがった　「これまでお目にかかった中で最悪の素人心理学者だ。応募者と十分ほど話して、それでも相手の裏も表もわかったつもりになってやがる。たぶん、これまで数え切れないほどきちがいを雇って……このデИБだって、もう少しマシな仕事をすると思うぜ。あんたら、見てるのがつらいよ」(ここでのあんたらとは、特にモロクのことだった)　「自分じゃ立派な研究所でも仕切ってる気かしらねえけど、実はあんたら、ここをしょんべん臭い保育園に仕立ててんだぜ！」

モロクは書類から目を上げた　プリゴツィが終えるのを待っていたのだ　そして静かに述べた。

「なるほど。きのうは病院とか言ってたな。今日は小便臭い幼稚園か」

「そうとも、それであしたは気違い病院だぜ」とプリゴツィは吠えた。

プリゴツィは、自分がどう思われているかを意に介せずにはしゃべり続けた。同時に鳩のように、あちこち跳ね回った。とても背が低く、毛深く、だらしなく、墮胎でポロ儲けした医者のような、まがいものの荘重さをたたえていた。医学部の三年生であるかれは、副業で闇の診察をしており、いつかまっとうな精神分析医になるつもりだった。現在のところ、かれはフロイトやユング、アドラーの類いの理論にかぶれていた。去年は生体解剖に熱をあげていた　二十三匹かそこらのモルモットを切り刻み、それを骸骨と女房と、わずかな家具とともに、アパートに隠していた。

なぜモロクがかれを我慢しているのか、だれも完全には理解できなかった。確かに、モロクがプリゴツィとの関係で示しているものは、単なる我慢の域を越えていた。プリゴツィに惹かれている、と呼んでもいいかもしれない。何に惹かれているのかは、モロク自身にも説明できなかった。デИБだけは、自分たちが二人とも選ばれたる民族の一員であるということから、たぶん無理矢理かれを崇拜するようにしていたけれど、ほかのみんなはプリゴツィを鼻につく、嫌悪すべき人物だと思っていた。プリゴツィを事務所に招いて、女子職員たちの前で格好つけさせようと思いついたのは、マット・リアドンだった。かれはモロクの親切そうな雰囲気、鼻も引っかけなかった。かれの考えでは、モロクは何か魂胆があるのだった。求めているのが何であれ、目的を果たしてしまえば

モロクはプリゴツィをあっさり見捨てるだろう。プリゴツィは確かにいやなやつだったが、モロクのこの性格もマットにしてみれば、あまり感心しないものであった。か

れの考える友情というのは、そんなものではなかった。モロクは、何というか　　そうだな「計算高い」、そう、計算高いんだ。

事務所で、プリゴツィはその辛辣なひやかしを絶やしたことはなかった。すべて、「親分」(かれは友人モロクをこう呼ぶことに固執していた)に対する暖かい親愛の情の一部であった……。かれの魅力のなさは、否定のしようもなかった。醜悪と呼んでも、誉めたことになるくらいだ。きめの粗い、しみだらけの肌は、ラードで拭いたばかりのようにべとついている。鼻は、かつてマット・リアドンがゴム製注射器に例えたこともあるほどで、吹き出物だらけの巨大に膨脹した器官であった。雄弁になって興奮すると、肥大した毛穴からにじみだした濃い脂肪粒が、鼻の先端に集まってくる。いつも頭のとっぺんを掻き続けていたが、そこは病気にかかっている、その薄い髪がさらに抜け落ちる結果となっており、後には子供たちが寄生虫をもらったときに示すような、大きな赤い輪が残っていた。服がプレスされていたことはなく、清潔だったことすらまれだった。上着の襟には、フケがいつも厚く積もっており、陰気なのだ袋のまわりで雪の外套のようだった。

ふざけまわる真っ最中に、プリゴツィはいきなりしゃべりやめて、待合室の片隅のベンチにすわっている奇妙な生き物をじっと見つめた。だれもその男がいつからそこにすわっているのか知らないようだ。かれをじっと見つめていると、そのままいつまでもそこにすわっていきそうな感じがする……。かれをコートの襟首のところまでひっかけておいて、自然にハムみたいに癒えるのを待っていればよいような。

「あの野郎を呼んでくれ」とプリゴツィは重々しい蠅のような声で言った。「これでまた騒ぎのネタができた」

「ちょいまち」モロクはほとんど手のひらをプリゴツィの顔に叩きつけばかりにそれを制した。「余興のショーをやってもらうにはチト時間が遅かるうが」そして聖なる玄関を護る、地獄の番犬ケルベロスのようにすわっている、ローソンに向き直った。「ローソン、あの野郎は何を待ってんだ？　マットが応募者は全部片付けたはずじゃなかったっけ？」

「なんでもあなたに個人的にお目にかかりたいとかで、モロクさん」

「ほう、それなら話は別だ」モロクはこの一言を、冗談めかした調子で発した。まるでモロッコのサルタンがわざわざ話をしにきたとでも言わんばかりに。

外は圧倒的な暑さだったにもかかわらず、ベンチ上の謎めいた人物はトウィードルディーとの戦いに備えてありったけ着こんだトウィードルダムのような風体だった。薄汚れたフラノのズボンに、カーディガンを着ている。さらにえりが耳まで届くような暑いセーターを着て、その上にボロボロのコートをまとい、それを巨大な安全ピンで止めている。ポケットには、街をあてもなくさまよい歩いた一日の旅程で集めたにちがいない古新

聞がつめこまれている。コートのボタンの穴には、小さなアメリカ国旗がつけてあった。

マット・リアドンはプリゴッツィをこづいて旗の方を指差した。プリゴッツィはせせら笑い、それから腰を落ち着け、この標的をありったけの批評眼をもって検分しだした。眼鏡のレンズは牛乳びんの底のように厚く、マツダ電球二つに押しつけられた魚の口二つのように見えた。

「おはようございます。仕事をもらえませんかね」

この謎めいた存在が、生きていて、人間であるという証拠は、この一言が初めてだった。モロクが手招きすると、そいつは大儀そうに近寄ってきて、感情を押し殺したような、ぶっきらぼうな様子でしゃべりだした。まるで素人演劇コンテストの途中に思いがけずステージに押し出され、準備してきたモノローグがその場にふさわしいのかどうか心許ない、といった感じだ。その語りは、混乱した、とりとめのない愚鈍な流れで、唐突に始まっては八日時計のように鳴り続けるのだった。すでに午後、それもほとんど夕方近かったにもかかわらず、まだ朝のつもりでいるらしい。

「ちょっと待った」とモロクは、立ち上がって歓迎に手を差し出ししながら、気遣うように言った。「お名前をまず教えていただけますかな？」

「ルーサーです。ルーサー・ベックライン。長老派の信者です。女房はカソリックだったんですが。いまじゃ二人ともホーボーケンの第二長老派教会に所属してまして……」

「でも、たしかパターソンから来たとおっしゃってたでしょう」とプリゴッツィは、誤解したふりをして茶々を入れた。

「いいえ」ルーサーは湖のように穏やかだった。「パターソンに住んでたのはずっと昔のことです。二番街にある、三部屋の素敵なアパートに住んでまして、三部屋とも素晴らしい部屋でしてね。ティリーもまだ五歳で、ユダヤ人並に頭がよくて……」

モロクは口をはさんだ。「ユダヤ人並に、ですか？」

「そうですとも。あたしゃ宗教的な偏見は持ってませんからね。後で幼稚園から出して、教区学校に入れたんですが、その頃に窓のブラインド職人の仕事をなくしまして、ホーボーケンに引っ越したんです。女房は用務員の仕事につかなきゃなりませんでした。あたしも皿洗いとかは手伝ったりしましたし、その他にも……」

「酒びんを空けるのも手伝ってやったんだろ」マットがあっさり言っただけ。そのような習慣が非常にまっとうなものであり、きわめて正当なものだと言わんばかりに。

だがプリゴッツィは会話がそのような方向へと漂うのを許さなかった。かれは豊かな沈泥に何が埋もれているか、即座に浚渫したがった。そこで男に近づいて、汗ばんだ親しげな手を肩においた。

「ルーサー、ついさっき、かつてはキリスト教探求協会に参加していたと言ったね」

その口調は不気味で脅すようであり、まるでそれを認めれば法を犯したことになるとも言うかのようなようだった。

しかし、ルーサーはまったく無感覚だった。甘言にも脅しにも等しく。

一方、だれも気がつかないうちに、マット・リアドンはモロクの秘書を一同に加わるよう招いて、やりとりを一言一句記録させていた。

「キリスト教探求協会はどうでもいい」とモロクは、いきなり親切側から手を差し延べ、暖かく守るような肯定の雰囲気を出してプリゴツィの興奮に油を注いだ。

「この人はあなたの部下ですか？」とルーサーは、プリゴツィを示してたずねた。

モロクはぶっきらぼうに答えた。「いいや。この人は請負人だ。わたしの友人でね。ちょっとあいさつに寄っただけだ」

この会話の間中、ルーサーはあわただしくポケットを探り、何やら非常に重要な物体を探していた。次から次へとポケットを空けるにつれて、あれやこれやのがらくたの寄せ集めが床にこぼれ落ちた。古いハムサンドが二つ、ペンチ、ポケット辞書、画鋸、辛抱強く磨きあげられたヨットクラブのボタン三つ、ハーモニカ、ヘアピン、ビー玉……探し求めている物にたどりつかなかったら、どんな予想もつかないゴミを掘り出したものやら、神のみぞ知る。

かれはそっと、ぼろぼろになった天金装の本をモロクの手に置いた。新約聖書だった！

「こいつは病院でもらったんです」ルーサーは穏やかな、生来の超然とした様子で口を開いた。「いつも持ち歩いてて、寝る前に二、三行読むようにしてるんです……善良でいられるように。本当はこんなものいらないんですがね、だって生まれてこのかた、悪いことなんかしたことないんですから。でも、あたしゃいいキリスト教徒でありたいと思ってるんでして……。だれもあたしの信仰を奪ったりはできませんわな、そうでしょ」

モロクはうなずいた。

「それで、退院してからは、何もかもうまくいったんですわ。ただ、ティリーが母親の悪いお手本のせいで道を誤りましてね。判事さんだっておっしゃってましたよ。床を磨いてなきゃならないときに、石炭バケツに一日中すわりこんでるようじゃ、女房として失格だって……」

「つまり、呑んでくれてたってこと？」

「その通りです」相変わらずの穏やかな物腰。かれを怒らせるのは不可能だった。「呑んでくれてた」と言うかわりに「人殺しだった」と言っても同じだっただろう。

「女房は決して善良な女ってわけじゃありませんで」とルーサーは続けた。「三分の二は善良だけど、三分の一は悪かったんです。母方にインディアンの血が混じってまして。だれもあいつのは暮らせませんや……だれも」

「父親は何者だった？」とプリゴツツィは詰問した。再び尋問調で悪意をこめて。ルーサーの遠回しな物言いがお気に召さないようだ。後で述べたところでは、なんとか「反応」を得ようとして苛立っていた。

ルーサーは落ち着いて述べた。「何者って言われましてもねえ。一度、父親はサンタフェ鉄道のエンジニアだとか言ってましたっけ。でも、あまり信用できませんや。だって嘘ばっかりついて……」

「エンジニアでも宣教師でもどうでもいい」とプリゴツツィは悲痛な叫びをあげた。「人種は何だったんだ　それが知りたい」

「父親もポーニー・インディアンでした……一部は。だから、女房は、三分の二インディアンってことになりますかね」

「いや、八分の七くらいだ」とマットがつぶやいた。

ほかのみんなが、ベックライン一家のインディアン染色体の割合についての見解を交わし合う間、ルーサーは厳粛な面持ちを保った。秘書は、みんなにそんな早口でしゃべらないでくれ、と懇願した。ルーサーの言わんとするところを全部聞き取れなかったのだ。

ルーサーは、「連中」が自分を入院させるまでに就いたさまざまな仕事について、再びしゃべり続けていた。「連中」ということばが頻出するようになった。そのことばは、エウリピデスがドラマツルギー装置において「運命」に与えたような重みを持っていた。

「あたしは仕事に就こうとしたんですがね、『連中』が邪魔するんですよ。仕事を探しに行くたびに、何かしら起きるんだ。こないだは足の骨折で、連中に六ヶ月も病院に入れられたんです。花粉症にもかかりましたし。でも、つまりあたしは仕事が要るんです。アル中なんかじゃありませんし。ホント、仕事がしたいんです。通りを下だったとこのご婦人のために、一日洗い物をしたことだってあるんですぜ」(ここがパターンソンのないのをかれは忘れていた)「それで十分でしょうが。使い走りだってしましたよ。まあ、もうブラインドを取り付けたりはできませんけど　背中がもう昔みたいにはいきませんから……」

「脚の具合は？」

「左は大丈夫ですが、こっちのやつが」　かれは右脚を愛しげに叩いて見せた
「ちょっとこわばってます……ベッドで寝過ぎてたせいなんですけどね」

「そりゃ結構だね、ルーサー。でも、わたしが雇ってあげたらどんな仕事をするようになるのか、わかってるんだろうね」

「もちろん。だから、あんまし配達する電報のないところに配属してもらいたいんですが」

マット・リアドンが割り込んだ。「まさか輿に載せて運んでくれとは言いださないだろうな、ルーサー」

「ホント、あたしゃ働きたいんですよ、ただ……」

「ほら」とモロクは、半ドルを男の手に握らせた。「それを、今晚床屋に行きなさい。明日の朝、また会いにきてくれ。それと、時間があったら風呂にも入って、コートは家に置いてくるんだ」かれは背を向けかけた。「ところで 家はあるんだろうね？」これは、相手を人間扱いしていることを示した、最初の発言だった。

ルーサーは悲しそうに答えた。「昔はあったんですがね、判事さんが……」

モロクは割り込んだ。「ローソンくん、この方に何ドルか差し上げてくれないかね。土曜日にわたしが返すから」最後の一文は、ささやいた。

ルーサーは仕事に対する興味を失ったようで、金を受け取りに歩きだした。かれが消えると、モロクはローソンに近寄った。「二度と入れるなよ、わかったな」

「わかりました」とローソン。かれの頭が、雄弁に動いた。かれはうやうやしさと物悲しさを同時に示すことができた。「あいつを見た瞬間、あなたがあいつと一言話がしたいだろうと思ひましてね。わたしだって全員ここに通すわけじゃないんですからね。これはってやつだけですよ」

モロクはニヤリとした。「そうそう これはってやつだけ、ね」

デスクに戻ってみると、ブリゴツィがシーレーノスマがいにあたりをはねまわり、奇妙なことばを吐き散らしてまわっているのにでくわした シナプスだの、甲状腺隣接ナントカだの、退縮性憂鬱症だの多幸症だの……何でもござれ。この男は、ぜんまいを巻かれて、ばねが戻りきるまで外国語じみた業界用語をつぶやいてまわる、オートマトンのように振る舞っていた。かれはヒステリックにマットの上に身をかがめ、頬を熱く紅潮させて、涙まで浮かべながら、よだれを垂らしている。

「おれが言いたいのはだ」と無骨なげんこつで机を叩き 「おれが言いたいのはだ」としつこく繰り返し、「こういうことなんだ。あんたら、あの憐れな爺を干しといてやれよ……便所にでもかけといたらどうだ。当人にはちがいはなんかわかんないんだから。それとも、そうだな 朝になったらナスボーム医師のところを送りこめって。おれから先生には一言言っとくから。まったく、この二週間まともな患者がきやしないんだ。被害妄想と……それにクレチン症ばっか」

モロクが黙殺しているのに苛立って、かれは語尾を天井に届くほど張り上げた。

「明日になったらあの野郎に制服を着せてやるつもりなんだろ、え？ 衣装係にでもしてやったらどうだ」

モロクは書類に没頭しているようだった。

「いやあ、モロクの旦那！ さぞいい気分でしょうなあ……世界に満足しておいでで？ まったく、よきサマリア人役を演じるのがよっぽど好きなんだなあ！」

プリゴツィはお気に入りのテーマにうまいこと着地したところだった。よきサマリア人役を演じる、というやつ。かれの一番好きないたぶり道具だ。モロクはほとんどのからかいには耐えたが、キリストとだぶらされるのには我慢できなかったからだ。かれは自分の慈悲深い性格を、弱さとして考える傾向にあった。プリゴツィはじゅうぶんこれを承知していた。かれが見たかったのは、モロクがやわで脆い、キリスト教徒的な肉と原理の塊にまで墮するところだった。通常の非ユダヤ人では、キリストの精神を蘇らせるのはほとんど絶望的だ、とかれは思っていた。モロクだけは、キリスト教徒的「いいやつ」で、一種の宗教的先祖帰りともしようべきものに思えた。モロクのか弱い精神を覆っている冷淡さの殻も、このプリゴツィ様をあざむくことはできないんだぞ。そうとも。本物のキリスト教徒は見ればわかる。そして、本物のキリスト教徒の肉体は、神父や法皇の肉よりもずっと汁が多いのだ。

モロクはプリゴツィのくれた冠を、しばらくは黙って面白がっていた。これはプリゴツィを苛立たせ、かれは勢いを失った。とうとうモロクはマットに向き直った。

「おいマット、お願いがあるんだがな。このうす汚いグランド街の学者さんを、こっから追い出してくれよ。こいつの女房とモルモットたちのところへ追い返しちまえ」

「そうこなくっちゃ」とプリゴツィは叫び、マクベス夫人のように手をこすりあわせた。「それでこそ、まともな反応ってもんだ。モロクの旦那、あんたは気違いじゃないなまだ」かれは手早く売り上げを上げた時のように、くすくす笑った。

「そうだな。わたしの行動は、軽度の神経症を示している程度でしかないんだろうな。さて、そういうお前はと言えば……お前こそが『正常』なる者の健全な見本ってわけだ。どうだい、マット？」

「いささか意外ですな」とマットは答えた。

「言うだけ言ってる！」とプリゴツィは、虻の群れを追い払うかのように、興奮して手を派手にふりまわしながらわめいた。「いつか、このおれの計画をトウィリガーに提出してやるからな。そしたらキサマら、気をつけないと仕事をなくすぜ」

この正常対異常という永遠の問題は、配達人問題と密接に関わっていた。プリゴツィは配達人たちの状態に関する、ある独自の理論を持っていたが、モロクはそれにまったく同意できなかった。プリゴツィに理論構築用の材料を提供するため、モロクは数ヶ月にわたって、臨時雇いの配達人としてかれに制服の着用を許可した。プリゴツィはその体験をいたく楽しんだ。かれの考案した解決策は、一語に集約できた。「革命」である。

マット・リアドンはプリゴツィのアイデアを刺激的で面白いと考えた。まるで信用はしていなかったけれど、でもモロクのうぬぼれに水をさしたかったので、基本的にはプリゴツィを応援することになっていた。同時に、かれはこの果てしない敵対を利用して、午

後の娯楽を増すようにしていた。通常は、プリゴツィのいろいろな計画を茶化すことから始めた。

「あなたの言うその計画とやらってのは、どれのことだい？ まさかあの、配達人のかわりに伝書鳩を使おうってやつじゃなかるうな、え？」

「馬鹿野郎」とプリゴツィはうめいた。「どこを叩いたらそんな話が出てくるんだよ。その伝書鳩がどうのってのを思いついたやつなら知ってる……あの第三地区の気遣い主任だろ、あの腹の出張った、官宦みたいな。あいつ、なんてったっけ？」かれは記憶を早送りしようと指を鳴らした。

「ボイランのこと？」

「そう、そいつだ。あなたの友達のダンがヨーロッパから持って来た宗教画を買おうとしたやつ」

プリゴツィの興奮が沸き立つにつれて、話も脈絡がなくなっていった。英語に対するわずかばかりの支配力も、緩まって完全に崩壊しそうになる。しかし、大仰さは一向に失わなかった。実のところ、モロクを始めとする人々はこうした爆発を最大限に楽しんでいった。しかしそれが毎日となると、いささか単調になるきらいはある。一時間もするとプリゴツィはおとなしくなって、むしろ気品のある真面目さを示し（もし、かれにそんなことが可能であると思えればの話だが　気品とは！）、そして北極圏における植生の状態や、地球の質量を科学的に測定する方法について、理性的かつ魅力的に語るのだった。しかしそのためにはまず、もっと異様な趣味をそぎ落とさなければならないようだった。どこからか　ひょっとしてゲッターからだろうか　持ちこんでくる気遣いじみた、高揚した狂態。自分の過去について、プリゴツィは異常なほどの沈黙を保っており、同情と気遣いから、モロクは二人の間の親密さにもかかわらず、話をけっしてそちらに持って行くことはしなかった。何度かプリゴツィがほとんどそれをぶちまけかけたこともあったのだが、モロクがまったくの無関心を示したため、苛立ったかれはそれを引っ込めてしまったのだ。

プリゴツィは自分自身の異常な案を追及しだして、やがてボイランや鳩のことは忘れてしまった。「もしあんたらが真剣なら、おれの計画を話してやろう……そして、いつかこれをトウィリガーに提案するってのは本気だからな」かれは咳払いをすると、たん壺を探してキョロキョロした。「あの十三階のクソ野郎」　つまりはトウィリガー副社長

「あいつは配達人の水準を向上させたがってるわけだ、ちがうか？」

モロクはうなずいた。

「うん、だったらこの事実も認識してるはずだ」と行ってプリゴツィが吐き出したアイディアの洪水は、興奮が鎮まれば、かれを電信ユートピアに上陸させてくれるはずだった。

モロクは、この手の万能薬に耳を傾ける機会を拒絶したことはなかった。どんなにイカしたアイデアでも、有意義で実行可能な情報のかけらは必ず含まれている。あらゆる電信会社が決してまともに解決できていない問題が、信頼できる、賢い、安定した配達人集団を確保することなのは周知の事実だった。機械的、電氣的装置の完成には多くのエネルギーと発明と、言うまでもなく予算が注ぎ込まれていたが、配達人問題は、解決はおろか、手もつけられていないのが実情だった。それどころか、過去のいつにも増して深刻さを増していた。

このデスクに着任して以来三年間、モロクはこの問題にかかわる不都合要因のほとんどをよく知る機会を与えられてきた。そして会社のためにこの問題を解決してはいなかったものの、顕著な改良をもたらすことには成功していた。状況をさらに改善するための計画は山ほどあったが、かれの最大の障害は十三階の、プリゴツツィ言うところのクソ野郎だった。トウィリガーは、若いころ自分も配達人で、多少なりとも価値ある解決策は、すべて自分の考案したものか、さもなければいわゆる経済性の専門家たちが提案して、自分が承認したものでなければならぬと信じていた。サンフランシスコへの送信時間を短縮するのに一財産注ぎ込んでおいて、配達人不足のためにそのメッセージが受取局の事務所に何時間も転がっていることに、まったく論理の破綻を感じない人物だった。たとえば、もしカリフォルニアから電報を受け取ったら、このメッセージが大陸を横断するのに四十五分以下しかかからなかったと告げる派手なステッカーがついてくる。しかし、その同じメッセージは、どこぞの能足りんが途中で四十五分も野球の試合を見物してた挙げ句に配達されたものかもしれない。まして、この出来高制では、新聞広告に出ている週給二十ドルだの二十五ドルだのを稼ぎだすのは不可能だと悟って激怒した若者が、毎日のようにドブに投げ込む電報については、言わぬが華である。

モロクがこの仕事についてみると、千人の労働力を保つために年間一万人の配達人を採用するのが普通であることが判明した。二ヵ月前、かれはこの途方もない労働力の流動性を50パーセントにまで抑さえるのに成功した。そして、さらに減らせそうな兆もあった。

そこへトウィリガーが、賃金カットを至上命令としてやってきた。「労働力の回転は、それなりに高いほうが健全なのだ！」というのがトウィリガーの持論だった。そのすぐ翌月、かれらは二千人以上の新規採用を余儀なくされた。この驚異的な労働力供給をもってしても、需給ギャップを埋めるには不十分だった。ダムが決壊さながら。ベテランはほとんど一人も残っていなかった。これこそ最悪の部分だった！ トウィリガーの戦術のおかげで、機動力のある基幹部隊を組織するだけの核人員すら残されていなかった。底が完全にぬけてしまっていたのだ。キノコのように広告が出現した。都市部の新聞のみならず、郊外新聞、週刊誌、教会新聞、外国の新聞、学校新聞、大学の雑誌にまで。ユニテリ

アン派でなければ、煉獄にすら広告をうたてよう。

この気違いじみた新聞活動とともに、校庭や遊び場、広場、ビリヤード場、映画館など、若者に出会い、呼び止められて、売り込みができるあらゆる場所にリクルート部隊が派遣された。

しかし、こうした試みのどれも、この嘆かわしい惨状を鎮める役にはたたなかった。三年にわたる苦勞、モロクの導入した効果的な福祉と教育作業、徐々に育てていった、組織のまとまりに関する信頼　このすべてが一夜にして蒸発した。大アメリカ電信会社は冗談の種になった。まともな若者に働いてもらえるだけの金も払えない、と。

当然ながら、かれは改良のためのどんな計画にも興味を示した。しかし、あまり期待もしていなかった。「あのお空の回転椅子のクソ野郎に、新しい脳味噌をくれてやれるやつはいないのか？」プリゴツィに耳を傾けながら、かれの頭を横切った考えはそういうものだった。それだけが、現時点で可能な唯一の解決方法に思えた。このプリゴツィとは、こんな精神分析理論のもつれに絡め取られた人間に何が期待できるだろう？ どうせなにやらフロイト・マルクスじみた解決方法だろう。至上命令じみた肯定、丈夫なりピドー、それに下剤が一箱要るような。

プリゴツィが騒々しく派手に打ち出すこの「革命」は、分析してみるとロシア皇帝アレクサンドルがその苦しむ農奴たちに下だした憲法なみの凡庸なものだった。その計画は、一連の生煮えの思いつきから成っていて、それが可能だとしても、効果を発揮するまでに十五年はかかる代物だった。かれの改革キャンペーンは、その目的として一般大衆の教育を挙げていた。その目標は、制服にまつわる烙印をぬぐいさろうという夢のような希望だった。プリゴツィがこれらの「文明化されたタブー」の起源について詳しく説明を聞いて、マツトすら微笑まずにはいられなかった。

「そのクズなら前にも聞いたよ」とマツトは言いかけた。

「言わせてやれ」とモロクがうながした。「この大先生に、しゃべり終えるまであと十分間差し上げるとしよう」デイクですらこれには笑った。

プリゴツィはがっかりしたようだった。「みんながそう思ってるんなら、続けたってしょうがない。紙に書いて、あんたに提出しよう……」

「おれには提出するな」とモロクは辛辣に言い放った。「トウイリガーに持ってけ。側近に加えてもらえるかもしれないぜ」

「出す前に、殺虫剤をかけたほうがいいんじゃないの？」とマツトがからかった。そして悪意をこめてつけ加える。「ところで、コートの襟の、その白いのはなんだい？」

プリゴツィに爆発する機会を与えず、モロクが宣言した。「いまおれが言ったのは本気だぞ。おれに言わせりゃろくでもない計画だが、それでも話は同じだ。いいからトウイ

リガーに見せてみる！ おれがよこしたと言えればいい……」

「この野郎どもが！ おれが腹に蹴りを入れられりゃいいと思ってるんだろう」

モロクは相手に、これがまったくの思い過ごしに過ぎないと丁寧に保証してやった。トウィリガーはこれまでだれも階下に蹴落としたりしたことはない。「それどころか、あいつならその計画を素晴らしいと思うかもしれないぜ。さっさと見せてこいって。どのみちおれは、各人が自分にとっての救い主になっていいと思ってるからな」

「ほざいてる、畜生どもめ」プリゴッツィはノリを取り戻していた。

その時、電話が鳴った。マットが無愛想に答えたが、即座に口調を変えた。受話器を押さえて、それをモロクに渡しながら、こうささやいた。「大将だぜ ホートンの御大。ストが起きつつあるって」

モロクは敬意を払いつつ耳を傾けていたが、次第に苛立ちをつのらせていった。沈黙を、不満そうな押し殺したような「わかりました。わかりました」で破る。終わり近くになって、抗議しても効果がないことに気がつき、かれは顔を紅潮させてどもりだした。なんとか怒りを抑さえようとしている。「そうですか。どうしてもとおっしゃるなら。でも、大きな間違いだと思いますがね」それを最後に、うなり声をあげて受話器を叩きつけた。

「何かまずいことでも？」プリゴッツィが即座にたずねた。

モロクは当惑し、傷ついた様子だった。

「まったく、たいした泥沼にはまりこんじまったよ」と陰気に語る。これでプリゴッツィははっきりとふさぎこんだ。

「どうしたんだい」とマットが口に出した。毎回ホートンが電話してくるたびに、マットは自分の職のことかと思うのだった。モロクは、礼儀正しいペテン師どもと張り合うには融通がきかなさすぎる。つきあい方ってもんがわかってないんだ、というのがマットの考えだった。いずれ二人とも路頭に迷うことになる。

「黒んぼどもをクビにしなきゃならないんだよ、わかったか」とモロク。

「黒んぼ？」マットが復唱した。

「ああ、ヒンズー教徒とか……エジプト人とか、最近雇った東洋系の連中全員だよ」

マットは長く低い口笛を吹き、ガーゴイルのように顔をねじってみせた。

「トウィリガーのやつ、はらわたをえぐりだしてやる！」

「落ち着いて、モロクの旦那、落ち着けて！」単にヒンズー教徒数人（「黒んぼの頭痛のタネ」とプリゴッツィは呼んでいた）をクビにするだけと知って、事態はそれほど深刻じゃないと判断したプリゴッツィが叫んだ。

「何がそんなもめごとを引き起こしたんだよ？」

「チャイナタウンの、あの長髪のインド野郎だ。死亡通知をいくつか配達しそこねたら

しい。トゥィリガーが御大にろくでもないことを吹き込んだらだろう。もうカンカンだった。『一人残らず処分しろ』だと。『配達人の黒んぼども一人残らずだ』もう何を言っても聞いてくれる状態じゃなかった。トゥィリガーはインド人に怨みでもあるのかね。でも、おれがホートンなら、すこしは言い返すけどな。あんなあっさり引き下がるなんて、どうかしてるぜ……。最悪なのは、御大は頭に血がのぼりすぎてるもんで、かわいそうなグズどものために何もさせてくれないんだよ。あの連中を牛の群れみたいにあっさり放りだすなんて、おれにはできない」

「おれならそんなことでメソメソしないな」とプリゴツィが発言した。「餓え死にしゃしないって。神様が面倒みてくださるって。あの黒んぼ連中どもは、どうせ愚痴ばかりの無能だったんだしさ」

プリゴツィの告発には、一抹の真実以上のものがあった。いささかでも根性を見せたのは支那人の学生たちだけだった。あとはただの子供で、モロクがおしめを換えてやらねばならなかったのだ。

マットがいきなり割り込んだ。「御大、ストがどうのとか言ってなかったか？」

「しまった、そうだった。ストだ、忘れてた。帽子持って、アップタウンのカルドゥツィの事務所に急いでくれ あそこでもめてるらしい」

マットは慌ててドアに向かった。

「ちょっと待った」とモロク。「御大が言ってたけど……」

「なんて？」とマットは怒鳴った。

「この件はあんまりしゃべるな わかったか？」

「御大に、くたばっちまえとでも言っといてくれ」マットは駆け出した。

「あれこそ忠実な下僕ってもんだ。まず行動して、考えは後から」

このやりとりと同時に、交換台の小太りの人物が立ち上がり、警戒と謙遜を交えてモロクに近づいた。

「もう帰ります」かれはこの十年、五時きっかりにこのせりふを言い続けてきた。いつもまったく同じ調子で。まるで召使が「夕食のしたくが整いました」と告げるように。

「便秘薬はのんだの？」とモロク。

デイブの顔は、ハロウィーンのかぼちゃのちょうちんのようにパツと輝いた。この五時の無駄口が好きだったのだ。一日のほとんどを、交換台にはりついてすごし、街中の百以上の事務所を呼びだし、「船員名簿」と古い習慣にしたがって呼んでいる、控えの配達人のリストを送り出し、休みや退職の報告がいいかげんだと言っては、事務員や主任たちといつも悶着を起こしている。デイブはいつも机に簿記用紙をおいて、そこに書道の技を執り行なっている。この紙が、配達局での日々の出来事の継時的な記録となっていた。用紙の

右上の小さな四角は、いつも空けてあって、そこにかれは天気に関する律義な報告を行なうのだ。この気象報告の記入は、余計なことというわけではない。配達局のアリバイに大きな役割を果たすのだ……。デイクは、ラマ僧が祈り棒を慈しむのと同じ熱情をもって、この用紙を保存していた。

デイクのこれまた奇妙な習慣として、かれは朝、出勤すると、必ず鉛筆を削るのだ。架電から何本通信が入ってこようとも、デイクはまず鉛筆を削らずにはいられなかった。かれの議論としては、もしこの重要な任務を延期したら、鉛筆は全体に削られないだろう、というのだ。そしてデイクの考えでは、細やかで読みやすく流麗な文字で記入することは何にも増して重要なことなのだった。これが配達サービスへのかれの貢献であり、かれが去った後も残って、かれの生産性と完璧な仕事を、黄金の文字で後世に証明してくれるものなのだった。

しかしそれ以外のあらゆる面で、デイクはちんぴらやくざでしかなかった。人好きのしない点ではブリゴツィとどっこいだったが、ユーモアの点では遥かに勝っていたかれの唯一の野心は、ドン・ファンとして練り歩くことだった。かれの趣味がどちらに転ぶかは予想もつかなかった。配達人時代には、掃除婦や漫オスター、助産婦 とにかく、かれを引きつけるだけの低級さと気持ち悪さを持ち合わせている女なら、だれとでもねんごろになってしまうことで知られていた。ある時など、その嗅覚のおかげで副社長の聖域にまっすぐ入りこんだこともあった。かれは巨大なセネガンビア女のバストに心おどらされて、その後を追いかけて回したのだ。このような無鉄砲は、デイクが副社長の声を聞くとときの狼狽に気がつけばかすかに推測できるにすぎなかった。

しかし、この話はまた後で。いまは、本人の表現を借りれば、かれは店を閉めるところだった。そして几帳面な習慣にしたがって、かれは「石版」をモロクの検分に供した。

「デイク、スト騒ぎが起こりかけてるのは知ってるだろう」

「ほう、それはそれは」とデイクは満面の笑みをたたえて答えた。

「でも、そしたら明日の朝に奥さんを病院に連れてけないってことだぜ」

「おっしゃる通りですがね、モロクさん、どうせ来週にまわしてもよかったことですから」かれの口調は、それがまるで下水の修理かなにかであるかのようだった。実は卵巣摘出手術だったのだが。

ブリゴツィの専門家としての熱情が呼び覚まされた。

「奥さんの疾患って何なの、デイク？」

デイクは赤面して、咳払いをしてはもじもじすると、困惑したように二人を見つめ、やっとどもりながら言った。

「モロクさん、あんたから言ってやってくださいよ。おれはあんたみたいに難しいこと

ばが使えないから。なに管っていいましたっけ？」

「輸卵管と言いたいわけ？」プリゴツィが決めつけた。

「そうそう、それぞれ。どう書くの？」

「そんなこと知ってどうする？ 病院にだって書き取りの試験でも受けると思われろぜ」

「そりゃそうだけど」とデイブはさらにニヤニヤと頬を赤らめながら、「でもナヴァロにそのことばをぶつけてやりたいんだよ」そしてモロクに向き直った。舌がもつれそうなことばをぶつくと、ナヴァロの野郎ってすごい顔をするの、知ってました？」

三人は思っきり笑った。手術の見通しはよさそうだ……。

「そろそろ行ったほうがいいぞ」とモロクは助言した。そして意地悪そうに笑って時計を見上げた。

「確かに。これじゃ残業代をもらわなきゃ」とデイブ。

このつまらないギャグに、かれは馬鹿笑いした。

プリゴツィが、デイブの襟首を捕まえて、死んだネズミのようにかれを揺すった。「デイブ、よく聞けよ。今夜はまっすぐ家に帰るんだぞ、わかったな。地下鉄で売春婦を追いかけて回したりしてんじゃねえぞ。さもないと首をへし折ってやる。奥さんについてやるんだ。輸卵管を切るなんて、冗談ごとじゃないんだぞ」

デイブは悲痛な様子をしてみせた。「よっくわかった」

デイブは出ようとしていた。

「ああそうだ、デイブ……出がけに何だけど」とモロクは不思議な合図をいくつかしてみせた。デイブは媚びを売るようにかれに寄り添った。

「いくつ？」

「五もあれば」

「じゃあ、十で」とデイブは、汚ない緑の札束を取り出した。

「上司を甘やかすもんじゃない。絶対返してもらえないぞ」とプリゴツィが叫んだ。

この儀式を終えて、デイブは立ち止まり、一礼した。「忘れる前に一言」と判決を告げるような調子で宣言する。「ここだけの話、七八五番の配達人は『政策』だと思いませんぜ」

「なんで精薄だと思う？」とモロク。上司に数ドル用立てる特権に対するデイブなりの感謝法なのは重々承知のうえだった。

デイブはことばを直されたことなど気づきもせず、楽しげに続けた。かれの発言には、かなりの傲慢さが感じられた。

「いやあ、だっていつも本を抱えてるじゃないですか。しかもイタリア語の。古典だって言っていましたけど」

「別に構わないだろうが」

「そうですけどね、でも、あいつにイタリア語がわかるのかって聞いたら、『いいえ。でも、とにかく読んでみたいんです　気分がいいから』ですとさ」

「なんて本？」

「えーと、『地獄篇』とか言ってましたっけ.....いいんですよ。聞いたことありますか」かれは黄色い切り株のような歯を剥きだして、申し訳なさそうに笑った。

プリゴツィはかれのそでを引っ張り、面接を待つ応募者が読めるようにモロクが手摺に貼り出した、細いボール紙に書かれた赤い文字を指差した。

この門に入るもの、すべての希望を捨てるなかれ

「あれの意味を知ってるか？」

「いや。あんたは？」とデイク。

「『地獄篇』を読めばわかる。デイク、まったくもう、少しは賢くなりたいんだろ。この先ずっと無知蒙昧のままにいる気か？」

「ああそうかい」デイクは、不満げにうなってみせると、でぶのフローリゼルのように足音高く去った。

デイクが去って、二人きりになった。他の職員はみな消えていた。モロクは、閉店時間が過ぎてても一、二時間事務所に残るのが習慣になっていた。何か起きるのを待っているのだ。かれの冒険は、だいたい五時以降に始まった。普通は、仲間の一人が駄弁りに立ち寄る。たまには、群れをなしてやってきて、台風のようにかれを事務所から連れ去る。よくあるのは、この時間が、モロクが仕事を与えて残酷な楽しみをもって観察していた変人たちのために費やされることだった。こうした人物たちに、かれは長時間相談にのってやり、かれらの私生活に気ままに陰気に首をつっこみ、衛生上の助言を与えたり、かれらの結婚を建て直してやったり、夢を解釈してやったり、不平を鎮めてやったり、恐怖症やオブセッションを観察したりした。たまにかれらから金を借り、利子をつけて返してやった。それとも、食事やショーへの誘いにのったりする。あるいは色事の機会がありそうかどうかと思えば、かれらの女房に電話するようにもしていた.....。配達人には女もいた。彼女たちが応募してくると、厳しく詮索した。美人の住所はメモ帳につけておいた。退屈すると、この住所を見て電話する　名前に星がついているのから順に。通常は、この手間は報われた。

こうした観察や経験の結果は、事務所においてあるルーズリーフの記録帳に、入念かつ慎重に記録していった。この記録帳は、かれが崇拜せんばかりの情熱をもって尊敬している、作家たちの作品からの引用を、タイプ打ちも含まれていた。この作品転写作業はかれの秘書に一任された。これらの開示情報が、自分の秘書として働く賢く純情な処女の意識にどのような効果を及ぼしているか、かれが気がついていなかったとはとても言い難い。

彼女はこの任務を、検閲官並の陽気さをもって遂行した。モロクは、養鶏家が一等賞を得た鶏に与えるほどの興味を注ぐことで、彼女に報いた。このノートをもっと満足の大きい栄枯の海へと飛び込むための飛び込み台として利用できないかという期待が生まれた。

一方で、結婚の荒れた重荷がかれを苦しめていた。かれを忙殺する熱を帯びたような活動、次から次へと逃避を見出だし、知識と興奮と性的満足を与えてくれる活動　これが結婚生活の重苦しい影響に対する、なかば意識的な反抗でなくしてなんだろう。かれは、自分が選んだ女性といっしょにいて不幸だった。彼女も不幸だった。この崩壊による平凡なダメージを修復するには、二人とも何か（精力、あるいは理解力？）を欠いていた。

モロクはボロボロの記録帳を取り出して、書き込みだした。プリゴツィはあたりを嗅ぎ回って喜んでいて　応募用紙を読んだり、事務所の文書を読んで考えこんだり　そうしつつも、ここで採用されている半端な手法について、皮肉なコメントの放火を浴びせ続けるのだった。

モロクがむっつりと没頭しているのでかれは苛立った。これはかれのエゴに対する挑戦だった。

「ふーむ。今夜のテーマは何ですか　ルーサーかな？」

「ちがう！」とモロクは、声の調子でそれ以上の詮索をすべて払いのけようと、声をあげた。

「あの本はいつになったら書くんない？　材料なら、そこに『ローマ帝国衰亡史』をかけるくらいためこんでるじゃないか.....よう！」とかれは顔を上げてあいさつした。「衰亡の原因がやってきたぜ」

ハリ・ダスが入ってきた。私服で、帽子をかぶっていない。つやのある漆黒の髪は、そか細い肩の上にゆったりと落ち着いていた。平穏な、歓喜にひたるような雰囲気漂わせている。その態度は率直さが旨だったが、プリゴツィ特有の傲慢不遜な攻撃的性質はかけらもなかった。この世界への高尚な無関心　そう言ったほうが近いだろう。

トウイリガーを激昂させた「黒んぼ」というのはこいつか.....御大ホータンの言う「色つき」.....それがこの、二〇世紀の人類の自称救世主だとは！

ハリ・ダスは、他のインド人仲間のほとんどに比べれば色が浅く、あらゆる面でだれよりも魅力的だった。こうしたことにかけては男よりも鑑識眼のある女性たちは、かれをハッとするほどハンサムだと評した。ほとんど一様に、彼女たちの感嘆が真っ先に指摘するのは、かれの完璧な輝く白い歯の魅力だった。かれがあんなにしょっちゅう、簡単に笑うのは、そのせいかもしれなかった。かれがわれわれ西洋のクズの、ろくでもない制服を着せられる羽目になったのは残念なことだった。故国では、戦士カーストの一人として、かなりちがった外見を呈したはずだ。かれが下院の一員として、上院の硬直したインテ

りたちと上品にわたりあい　そして手玉に取っているところは容易に想像がつく……。安っぽい、出来合いのスーツを着ていると、見放された感じが絵の中に忍びこんでくる。それはかれのせいではなく、時に傑作を縁取っている額縁ほどにも、かれの人間性とは無関係だった。

「これをお話ししようと思って来たんです」とかれは語りだし、そこからチャイナタウンにおける試練についての面白く臨場感あふれる解説に入った。かれの使う、間違いのだらけの強調法は、その簡単な身振りとともに、話しぶりに奇妙ながらも魅力的な印象を与えていた。

初めて採用事務所に立ち寄った二日前に、すでにプリゴツィに紹介されていたにもかかわらず（プリゴツィが自己紹介したのだ）、ハリ・ダスのほうはといえば、ほとんど相手の存在を気に留めていない様子だったのは、特筆に値しよう。かれは優雅に手を振って、周囲を愛でた。しかし、プリゴツィは完全に無視し続けた。これが軽蔑によるものか、それともかれの高貴な無関心の一環なのかはわからなかった。プリゴツィはもちろん、この華やかな黙殺に苛立った。かれの厚顔な自己満足、派手な横柄さ、どろどろした傲慢さのすべてが、あっさりとはき落とされてしまったのだ。しかし自分でも大いに驚いたことに、かれはやがておとなしく耳を傾け、そして物語が進むにつれて、ますます畏怖の念を強めていったのだった。

ハリ・ダスが立ち寄ったのは、モロクへの説明によれば、単に去る前にあいさつをするためだった。自分の行ないに対する詫びは一言もなかった。己れののろさ加減に、非難されるべきところは何一つないと思っていたのだ。

モロクは、人種差別については何も言わなかった。できる限りものやわらかに、死亡通知の持つ重要性について論じた。

かれの発言が、その聞き手に対して与えた感銘は、皆無に等しかった。「インドでは、何にでも時間をかけます。それに、すでに死んでいるなら、急いでみても何の役にたつのですか？」とハリ・ダス。この「アングロ・サクソン流の愚かしさ」に一蹴をくれてから、かれは西洋のエネルギーと無益さに対する印象について、好き勝手に述べ始めた。速度の名のもとに、これほど途方もない犠牲を払って、最終的に得られる価値とは何なのですか？

プリゴツィは、この講演の間中、脚腰の弱いインド人どもという持論をざっと改訂していたが、この機にちょっとしたダイナマイトを爆発させようと考えた。「黒んぼ」という言葉が喚起する反応を見たくてたまらなかったのだ。かれは、弓を引いて、矢を放った。

男二人は、指の間から滑り落ちた大事な花瓶のかけらを見る時のような、あの何とも言い難い虚ろさをもって、ハリ・ダスを見た。モロクは激怒していたが、何も言わなかつ

た。確かに、何を言うにも遅すぎた。プリゴッツィは必要なことをすべて言い尽くしていた。そして、いくらか不必要なことまで。

小さな、のどにこもった笑いが、割れたガラスの響きをもって、ハリ・ダスの侮蔑的な唇からもれてきた。

「インドでは、わたしは問題の種でした。イギリスでは、教育を受けた悩みの種です。もしアメリカ人がわたしを『黒んぼ』に仕立てたいなら、しかたない。ご随意！ わたしはいつでもいい。わたしの問題は経済的なもので、民族的なものじゃないんだから」

「ばからしい！」とプリゴッツィは、慎みをかなぐり捨てて叫んだ。

ハリ・ダスの目に、面白がるような、だが非難をこめた輝きが浮んだ。

「さあ、もう行こう」とモロクがうながした。

プリゴッツィとハリは、冒涇と罵倒の応酬が長引いた後で、延々と相手をヨイショしあう議員のような振舞いに及んでいた。二人に続けさせても、何も得られはしない。それに、プリゴッツィの見解はもうおなじみだった。あらゆることについて、プリゴッツィの見解はもうわかっていた。「魔法と宗教」に関する理論から、産児制限から条件反射にいたるまで。要するにかれは、このニーチェ的な東洋人と知的な道楽にふけりたいわけだ。

「オリンピックにでかけるってのはどう？」とプリゴッツィ。「モロクの旦那」がストリップを観るだけの金をポケットに収めているという事実から、この無邪気な提案が即座に採用されるものとかれは信じきっていた。

「いや、今夜はストリップは遠慮しとこう」モロクは気短そうに言った。「ほれ。小銭が要るんなら、持ってきなよ」そしてプリゴッツィのほうに五ドル突き出した。

プリゴッツィは金を受け取らなかった。遠慮したのではなく、このような形で厄介払いされるのがあ嫌だったのだ。

「だったらこいつ、この馬鹿」とモロクは、プリゴッツィを押し出した。

ハリ・ダスは先に行って、通りで二人を待っていた。二人が事務所から出ようとしたとき、プリゴッツィが何かをモロクの耳に囁き、それに対し後者は声を荒げて断わりを述べた。

プリゴッツィは恥じ入る気配もなく、今度は秘密めかした部分を振り捨てて言った。「おや、それならあなたのあの秘書はどうだい？ 彼女を何とか蕩らしこめないもんかね。向こうもじりじりして待ってるようだし」

再度モロクはかぶりを振った。「お忘れのようだが、おれは妻帯者だよ」

プリゴッツィは金切り声をあげた。「いつも言ってるように、あんたって奴はとんでもない偽善者だよ、え、モロクの旦那！」

そして、いきなり靈感を受けたかのように、かれは踊りだした。プリゴツィが周りをめぐるにつれて、モロクもゆっくりと向きを変えつつ、プリゴツィの指が、実に繊細にうなだれては震えるさまを眺めた。プリゴツィはトスカニーニを観たことがあるのだろうか、それとも外科手術でもやったことがあるのだろうか、とモロクは思った。

通行人が何人か立ち止まって見物していた。ハリ・ダスはその間、街灯にもたれてイブニング・ジャーナル紙の見出しを読んでいた。かれは見出しが一番好きだった……。その下にかかれた内容は、一度も読んだことがなかった。

第4章

地下鉄で、ハリ・ダスは、ジンギスカンがいきなり蘇ったかのような関心を集めた。モロクの思考は、エスキモーのイグルーと赤道の距離並に、採用局長としてのいつもの心配事から離れていた。

二人とも、泥酔しているわけではなかった。そもそも、ハリもプリゴッツィも、事務所を閉めてからカフェに入った時には一滴ものんでいなかった。モロクはジンを数杯のんだだけだったけれど、その「指貫き二、三杯」は、芝居ではなく人生（この人生とは、ピラデルロ的な意味での人生である）の現実の、くすんだ舞台裏の光景をゆっくりと覆う、輝くバクストの幕のような幻想を与えていた。

この暖かなピロード製のクリミアの幕に、記憶から呼び起こされた、鮮やかな色彩のごった煮に染まった、果たされなかった約束で痛々しいカットバックが投影された。かれは、バーで隣に立つプリゴッツィという人物の、道化じみた振るまいを知覚しなくなった。

プリゴッツィという人物も、しんちゅうの手摺も、白いエプロン姿の赤ら顔の人物と、見事に石鹸まみれの鏡に映ったかれの背中も　鼻先の現実すべてが、心地よく加熱ぎみのベッドルームの光景に溶けこんでしまった。この部屋には、鳥かごの底に見られる醜悪な混乱と、悪臭が漂っていた。そこに、婚姻という儀式の見せかけの荘厳さを通過する以前の、ブランシュという名の女性を再び見た。彼女は荒れる大西洋のような緑でくしゃくしゃの化粧着を着て、とんでもないキルトに横たわっている。彼女の唇は、煎ったコーヒーとバターを塗ったシナモントーストの香を放っていた。脇窩は黒く、首や肩にかかるオリーブ色よりも黒い。かれはその香り高いくぼみの一つに顔をうずめ、長く深いキスを与え、かれの肉体のゆっくりとカーブを描く愛撫の下で震えるに任せた。彼女の長い栗色の髪は熱情ではじけそうで、活力を香らせ、かれを包みこんではじらせた。気がつくとかれは、ベッドカバーの下にはいりこんで、舌は懇願のことばを発している。

「あたし、恥ずかしい」とささやくブランシュは、盛り上がる枕の山の中にしどけなく横たわりくちび、恐れと期待で目は飛び出さんばかり。その唇には「結婚」の一語が浮かんでいる。かれは肯定の誓いをもってそれをかき消し、厚い毛布の下でほとんど窒息しそう。壁紙の歪んだ赤い模様が、果てしなく震える暑さの中を泳いでいる。

この夢のさなか、プリゴツィがかれを肘でこづいた。「おい、どうしちゃったんだ」とプリゴツィはバーテンのほうにうなずいた。

モロクは支払いをすませ、五ドルの釣りをプリゴツィにやって別れを告げた。今回はいともあっさりやってのける。いささかの気まずさもなく。

「おれん家に行こう」とかれはハリの腕をつかんだ。地下鉄で、モロクは自分の行動に対して説明を求められているような気がした。「あいつを追い払わずにはいられなかったんだよ。時々カンにさわるんだ。口臭みたいなもんでさ、あるところまでは我慢できるけど、その先は……」としかめっツラをして、つばを吐きたそうな様子であたりを見回した。

ハリ・ダスはこの率直さを立派なことだと思った。いかにも非東洋的。それに、この友情に多大な可能性を感じるようになっていた。

「着く前に、一言ブランシュのことを言っとかないと」と唐突にモロクは切り出した。「最初は悪夢みたいかもしれないけど……何というか、愛想がなくてさ、わかるだろ？でも、気にしないでやってくれ。そういうやつなんだ。ホントはいいやつなんだけどな。ちょっと神経質なんだろう……心配そうな顔してるし。たぶんホルモンの不調かなんかだろう。でも音楽家としては素晴らしいんだ」

ハリ・ダスはクスクス笑った。そして折れた櫛をポケットから取り出して、べとつく黒髪に走らせた。

「おい、お前なら素晴らしい救世主になれるぜ、ハリ。本物の、吊革にぶら下がった救世主だぜ、まったく！」

ハリは天を仰いで声を出した。

「アメリカの女は救世主が大好きなんだぜ。特にそいつがハンサムなら。ところでおまえ、妄想癖にかかってたりしないだろうな。幻聴が聞こえるとかさ……そういうのってないよな、どうだ？」

ハリはこれを、モロクの冗談の一つとして受け止めた。かれはこの手の皮肉を大いに楽しんでいて。

「おまえがどこにでもいる小ガンジーに成り下がろうとしてるなんて、残念至極だよ。ブリキのキリストの一味になっちまうには愛想がよすぎるもんな。それに、その手合いはこの国に、もういくらでもいるんだぜ」とモロクは打ち明けた。

ハリの返答は、地下鉄を降りるに際してのざわめきにかき消されてしまった。駅からは、ほんの数街区の歩きだ。ハリは、通りすぎた多くの教会をふりかえって、非常に感動しているようだった。首をのばしては、無人の通りをにらみ付ける悪鬼像を見つめている。家につく直前、かれは指二本でドブめがけて手鼻をかんだ。

モロクの方は、自分たちが受けるであろう歓迎について思案しており、細君が多少は礼儀を知っているようなふりをしてくれるよう祈っていた。あんなやつ、悪魔にでも食われる！ 彼女ががみがみ言おうとも、モロクは今宵を楽しむつもりだった。

かれは呼び鈴を押して、冷静にふるまおうとつとめた。意外な歓迎が待ち受けていた。

「今晚は！」モロクは騒々しく叫んだ。「モロク夫人ですか？ モロクの旦那ですぜ……お友達にしてご亭主。何か軽く腹に入れてこうと思って立ち寄ったってわけ。遅くなってすみませんね……ところでわが高貴なる友人、先のラホールのマハラジャをご紹介させていただきますかな？ 尊師どの　こちらがわが愚妻です！」

かれは自分のヒステリックな笑いを抑さえようと、軽く会釈した。

ハリはいつもの優雅さをもって、この女性に会釈した。ブランシュは差し伸べられた手をぎこちなく握り、まるでかれが珍しい人形でもあるかのように眺めまわし、唇をかたく結んで一歩下がり、二人を迎え入れた。

「わが邸宅！」とモロクは、ソプラノ歌手の口をつけた手桶さながらの女房に、己れの温和さの一部分なりとも伝えようとするかのように、のんびりとあたりを見回した。かれが無駄口をたたくさまを、彼女は嫌悪を隠そうともせずに眺めた。

「我が家だ！！ 安息の聖域。暖かな暖炉、旧友、古いワイン……！」そしてシェイクスピア劇まがいに腕を広げて見せた。「そして、何よりも亭主の帰宅を待ちわびるよき妻！」かれは妻に背を向けた。「どうだ、ハリ。そう振るいつきたいってほどの場所じゃないよな、どうだ？ ちょっと散らかってるか……使用人がいないもんでね。ブランシュは今週、家事をやってる暇がなかったし」（かれは謝罪の機会を与えるべくこの一言を発したのだった。その態度は、感謝しろよと言わんばかりの印象を与えていた）「ホントの話、ブランシュはその気になればすごく優秀な家内なんだ。なるべきかならざるべきか　それが我が家の大家内問題でね、そうだろうが、この老軍馬さんよ」

「老軍馬」でもなければ「よき家内」でもなかったブランシュの視線は、刺すようだった。指は十本の震える鉤爪と化していた。その指は、どう見ても愛人の手入れの行き届いた指ではなかった。爪は短く厚い。指ごとの動きは素晴らしい　ハンガリー狂詩曲のためだ。

「失礼」と彼女は、ハリに向き直った。「夫は呑んでくれてるようすわね」その声は、ヨモギのように苦々しかった。

ハリは両手を掲げて反論た。「いえいえ、とんでもありません。飲み過ぎだと思ったらお邪魔なんかいたしません」

ブランシュは、自分が化け物二匹を相手にしていることに気がついた。

「まあ、呑んでようと素面だろうと、お二人とも何か食べたいんでしょう」

モロクは臆しなかった。そしてハリのコートのすそをつかんだ。

「ブランシュったら、気が利くとおもわんか。女房は天使だって言っただろうが」そしてブランシュに向き直り、「もちろんだよ、おまえ……もちろん何か食べたいとも。おまえと夕食を食おうと思って、今日は家に直行したんだから」と妻を情熱的に見つめた。そして声を落とし、皮肉と言えと言えないこともないトゲの効き目を増して言った。「それと今夜は、おれたちの愛しい子供はどこかな？ お前の腰より出でた宝石は？」

ハリ・ダスはもう抑さえられなかった。この時点までは、慎みを示そうと最善を尽くしてきた。超然と無関心を装おうと、この奇妙な辛辣劇がどこか海王星のあたりで起きているかのように振る舞おうとしてきたのだが。かれは途方に暮れてモロクの方を見た。モロクはこの訴えに対し、筆舌に尽くし難い滑稽な表情をしてみせると、再びブランシュめがけて放水口を全開にした。

「夕食の準備ができていない、と言うのかね？」

彼女はそんなことは一言も言っていなかった。

「手遅れだったか！」かれは作り笑いをした。「おやおや！ われらが人生の途上に、このような苦難が待ち受けていようとは！ やれやれハリ、王妃どののおことばだ。おれたちにはベーコン・エッグだとさ。やれやれ、わが友よ、ベーコン・エッグとはね。残念無念！」かれは大仰な荘厳さをもってかぶりをふった。

夫の行ないについてブランシュが敢えて行なおうとした謝罪は、ハリ・ダスにこの新しい友達の私生活についての洞察を与えてくれた。かれは深遠な同情をもって耳を傾け、実にもったいぶった物腰をとったので、やがてブランシュは自分の意図した以上のことについて詫びている自分を発見した。

「この人がいつ家に帰ってくるのかまるっきりわからないんです。」と彼女は夫のさまざまな微罪にうんざりして口走り続けた。「電話すらしようとしないんだから。勝手な時に、こんな風にゴロツキと……そうよ、ゴロツキを連れて帰ってきて。それでいて、自分の狼籍をひざまずいて待っていなかったと称して、怒るだけの厚かましさが、よくもあったもんだ」と彼女は感情をこめて足を踏み鳴らした。「この人の連れてくる、へんてこな間抜けどもを、あたしが歓迎できるとでも思ってるのかしら」

「へんてこな間抜け？」ハリは彼女の後から繰り返した。

モロクが口を開いた。「ブランシュは宝石だって言っただろう。あれがこいつなりの歓迎なんだよ。つまりはおまえが紳士だって言いたいんだ 彼の無法者どもとはまるでちがうもんな……。いやあ、わが愛しのブランシュ、お前って本当に紳士を楽しませる才能があるなあ。わがよき友、このマハラジャどのには王家の血が流れているんだぞ。マハラジャになるには王家の血をついでないとな そうだろ、ハリ。それでも、ベーコンエツ

グが喰えないほどお高くないとさ、そうだろ、スワミ？ そしてこのおれも、お前のために料理できないほどお高くないんだ。スワミ、おれが晚餐をつくるから、ヒンズー話でもしてくれや。でも、ベーコンエッグ並に面白い話にしてくれよ！」

かれは二人を台所に引きずりこみ、妻を椅子に押し込むと、食器棚の皿をガチャガチャさせだした。帽子を取るのも忘れていて、それが片目に覆いかぶさっていた。

「さてハリ」とかれは、フライパンを手に登場し、それをお手軽料理の本のように振り回し、「友達の女房に、インドの飢餓と疫病の話をしてやってくれ」

ブランシュは軽蔑したようなしかめ面をすると、スカートをなおした。

友達の亭主は、フライパンで妻にいたずらしてまわっていた。

「おおわが歓びの満月よ！ この宝石を見るが *1」

「ご亭主は、よくこんな……えー……こんな具合に振る舞われるんですか？」とハリは尋ねた。モロクの行ないを、悪意をこめずに称するにはどうすればいいかわからなかったが、しかしこのモロクの野蛮な餌からは完全に潔白でいるつもりだった。

ブランシュは声を落として答えた。「ほとんどは、間違いと生活してるんじゃないかと思えますよ」

「なまやさしいね、妻よ。なまやさしい！」モロクが口をはさんだ。

「あれは慎みも敬意もない人です わたしに対しても、何に対しても。あれは品性下劣で残酷な馬鹿者です」

彼女は無表情にそこにすわり、会話を続けようとする試みはもう一切行なわなかった。自分の首に斧が落ちかかるのを待つ、物言えぬ獣の態度だった。むっつりとした、絶望的な、神よ救い給え的な雰囲気漂わせていた。モロクですら感じ入るところがあった。

かれは妻にキスしようとしたが、思いっきり突き飛ばされてそれを中断した。

「あなたのいたずらが、キスくらいで帳消しになると思うの」と彼女は嘲笑した。「もう放っておいて。あなたにお願いしたいのはそれだけ」

この発言は、モロクをことばに尽くせぬほど傷つけた。まるで自分の刑が読み上げられているのを聞いているのに、その間中、魚釣りに出かけた三十七年前のことを夢見ている犯罪者のようなものだ きらめく日差しの中で、あの小川は何と美しかったことか、鳥のさえずり、自分の無邪気な夢……。かれは本当はこう言いたかった。

「許してくれ、ブランシュ。おれはとことんひねくれてるんだ。お前を傷つけてばかりいたくはないんだ、でもお前がおれにそうさせてるんだ……その冷たさ、その疑惑、その……」

かわりにかれは、疲れきった声で、郵便はなかったかと尋ねた。「バーンズから何かき

*1 現存する唯一の原稿からはこの部分が欠落している。

てなかったか？」

彼女は無気力にかぶりをふった。

「なにもしなか？」

「これだけ」彼女も鈍い声で答えた。

かれはわけがわからぬといった面持ちで封筒を眺めた。見慣れない筆跡だった。破って開けると、手紙の中に、別の封筒が折り込まれていた。ぼんやりそれを見つめる。こう印刷してあった。

われらが安息の聖母神殿教会ニューヨーク市コニー・アイランド

われらが安息の聖母の受胎告知の宴に備えての、例年の九日間の祈りに関するものだった……「拝啓、この荘厳なる九日の祈りの間、決して無為に姿を現わすことのないわれらが安息の聖母は、霊的な要望、無病息災、繁栄、出世、商売繁盛、良縁、安産、就職など、われらが聖母の救いを仰ぐものの願いすべてに対する請願を受けつけております」

かれは読み終えようともせずに手紙を払いのけた。「たちの悪いいたずらだ」と思って。そのとき、別の封筒に気がついた。他のよりもずっと小さく、点線が四本ひかれている。

ロウソクの寄進を是非！

九日の祈りのために……………ードル

「まったく、図々しいやつらだ！ 煉獄から出してやると言われたって、一銭たりともくれてやるもんか」とかれはつぶやいた。

だれもそのつぶやきを気にもとめなかった。ブランシュは、料理に没頭して目立たないようにしていたし、ハりは食器棚の上に詰まれた本の山を漁っていた。

モロクは台所に引きずってきた安楽椅子に倒れこんだ。いささかなりとも使いでのあるものは、全部台所に運び込んであった。この家で過ごしたいと思える唯一の場所だったのだ。

思いはノース・ダコタのロナルド・バーズへと向かった。なんだってバーズは何も言っていないだろう。かつてやりとりした巨大な手紙の束がなつかしかった。ドライバーに対する十ページに及ぶ称賛、「爆弾」に関する小文、ドストイェーフスキーに関する長文……「白痴」についてだけで優に本一冊になるほど……いったい全体どうしちまったんだろう。ブランシュが間に入ってるんだろうか。バーズに、おれのことを書き送ったりとか……中傷を広めたりして？

友だちと呼べる人間が一人でもいれば、人は何にだって耐えられる。

あのエジプト人からの手紙の一節が頭に浮かんだ。「汝の痛みと苦しみを打ち明け、その潰瘍となった心を癒す香膏を見出だせる人間らしい人物がどこかにいるはずだ……」や

れやれ、読んだときには爆笑ものだった。でも、笑いごとじゃない。ロナルド・バーンズは、おれが気にかける唯一の友情をもたらしてくれた。そして、それがいまや消えつつあるらしい。

ロナルド・バーンズは音楽家兼文学者だった。三ヵ月にわたり、かれはディオソ・モロクとその妻と共に暮らし、光を与えてくれた。かれがノース・ダコタに帰還したことで、残された二人は元の木阿弥　単婚の泥沼に足を捕われたまま。一時は、共同生活の深く速い潮の中で喜々として漂っていた二人だが、やがてその潮が退き、二人は泥の中に取り残され、廃船のように身動きがとれなくなってしまった。

ブランシュはバーンズに恋していたのだろうか？　モロクはそうだと思っていた。バーンズはブランシュに恋していただろうか？　そっちのほうが重要だった。二人の友情にひびが入りさえしなければ、妻とかれの間になんか起きようともまるで気にならなかった。バーンズがおれの女房を欲しいなら　結構。さっさと持ってくがいい。自分の困難の解決法として、これより幸せなものは思いつけなかった。でも、もし彼女が欲しかったのなら、なぜバーンズはノース・ダコタに帰ってしまったのだろうか。真実に直面するのがこわかったから？　このおれを傷つけるのをおそれたのか？　この二人は目がついてないんだらうか。二人に好き放題させるようと、おれが身をひいたのがわからなかったんだらうか。

モロクのつつましい蔵書を漁りつつ、ハリ・ダスはそれぞれの本の余白に走り書きを、また巻末には長いことばの羅列を見出し、モロクの回想を四散させるような称賛の声をあげた。

突然、ハリ・ダスは歓びと感嘆の声をあげた。うやうやしい指先で、かれはぼろぼろの一冊をモロクの鼻先につきつけた。

「これであなたが全くのゴロツキではありえないことがわかりました！」

「つまりこいつは、早くもおれをゴロツキだと思いうに到ったってわけか？」とモロクは、相手の噴出に多少鼻白みつつ考えた。

ハリは嬉しそうにページをめくり、モロクの鉛筆による書き込みを読んでほほえみ、黙ってそれを讚えた。あまりに熱意をこめてめくるものだから、まるで巻末に黄金でも隠されているのではないかと思ってしまうほどだ。

「あなたは確かに美を理解している。わたしにはわかります」

かれのことばはモロクを奮起させ、無軌道な興奮のるつぼにかれを叩きこんだ。

「やめろ！」とかれは、叫びながら安楽椅子から立ち上がった。「そんな先を急ぐもんじゃない。言っておきたいことがある。いまのお前の発言は見過ごしにはできないぞ」

いまのかれは、頭に血がのぼりきっていた。

「美の話をしていたな。そう、おれの中にも、わずかながら美は残っているんだ……女房は見ようとしなないけれど、ごくわずか」

かれは自分のことを、ぶっきらぼうなほど突き放した口調で話した。ブランシュ、二人の結婚、熱に浮かされたようにかれが歩き回る台所（退屈なだけでなく、動き回るにも狭すぎるおりに閉じこめられた虎のようだった）このすべてを、前世の岩屑であるかのように、手の一振りであいのけるかのごとく。

「そう、ムケルジ……ムケルジ！」とかれは熱狂的に唱えた（この人物の著作が、この叫びへと凝集したのである）。「そう、ハリ、これこそじっくり味わうべき美ってもんだ。これこそ、とっくの昔に最高級の評価を与えられてしかるべき人物だ。かれの描くインドは生き生きとして、手に取るようで　それでいて、尊く精妙なんだ。読み終えて、おれは泣いたよ……。マハトマ・ガンジーなんか、ガリガリの脚ですわりこんだり、ヴェーダンタ派の屁みたいな念仏まみれの、ご大層な経済談義でもしてるがいいや。でも、ガンジーが癩まみれのケツで一世代ほどすわりこんでみたって、この詩には、おれを揺り動かすムケルジの崇高な美の足下にもたどりつけまい……。なんでガンジーなんか引き合いに出したんだろう。あいつには、はっきり言ってイライラさせられる。ドライな、統計的なキリスト、とでも言おうか。いつもこの世からおさらばしそうな感じで、一方でいつも、あのくだらない断食だのお祈りだので復活しやがる。片足をあの世に突っ込んでいて、世界に世直しを説教する。まったく！　あの非協力だの紡ぎ車だのとかいうおためごかしときたら！　いいや、おれには絶対ムケルジのほうがいい。かれの描くインドの黄昏　『灰塵の雪崩のごとくに落ちかかる』。タージ・マハールは『大理石へと固まった吐息』。

農夫のつつましい戸口が、日没の紫の光を浴びたところの描写を覚えてるか？　それとか、聖者との語らいのために淀んだ水に飛び込んだときの、ガンジス河の一瞬の忘れ難い描写は？　できるもんなら、洗礼派が二人、タイツだけを着てミシシッピー河を漂ってるところを想像してごらんよ。そいつらが旧約聖書について、ずぶ濡れで白熱した議論を戦わせてるところなんて、考えられないだろう」

ハリ・ダスは大笑いした。

モロクは続けた。「残念ながら、おれたちのほとんどにとって、インドなんて阿片の幻覚ほどの現実味もないんだ。あのか弱きマハトマが、統計的な情報をうちまけてわめくと、世界は本当に驚くんだぜ。何百万もの不可触賤民のことだの、争い続ける四十九の宗派や言語だの、無数のカーストだの行者だの、うす汚い洞窟だの売春神殿だお、そんなの誰が知りたいもんか。世界は、インドってところを、総人口の九割が餓死しかかって、コレラと壊血病が猛威を振るってる、そんなもの以上の場所だと信じたいんだ。虐殺とか、悪徳、法規制、下品な無教養さんかを超越した、それ以上の場所だとね。シバのふ

くれあがった白牛どもが消えても、ブラフマンたちの張り詰めた腹が、消化器系に関する教典ともども消え失せたって、残されたインドは、おれの感じでは、まだ謎と恐怖と狂乱のアーケードであり続けるだろう。インドは常に、宗教が人間にとっての日常的な構成要素である場所だ。インドの子等は、宗教がヨーロッパ人が満足してるような安っぽい周縁的なものになることを許さないだろう。かれらにとって宗教は、永遠に特異で触知しがたい大地の産物であり続け、おれたちの「闘争馬車」だの「疾風のような車」だの、宣伝文句だの腕力による脅しだのに耐えぬくだろう。一万年の後、世界が民主主義に耐えうるほど病んで安全になり、すべての人にふさわしい伴侶が与えられても、夜明けは湾の向こうの支那から雷のようにたちのぼってくるだろう。そしてエベレスト山の処女壁を流れ落ちるはサファイアの奔流！ その意味で、おまえの宇宙的浮浪者さんの予言は正しいよ。そうならば、確かにおれたちも、乗用車や大オペラ、エレベータや地下鉄コンクリートの工場やバビロンめいた建築物、床屋のコードや避妊しない避妊薬とおさらばできる……。この発言と共に、この現代世界から残るものと言え、その匂いだけ。ケチャップも、頭痛薬すら残らない！」

モロクがこの想像をどこまで続けたかは、神のみぞ知る。食事はこの演説の冒頭の時点で用意できており、ブランシュはこの長口舌の間中、すわって食事に加わるよう合図を送り続けていた。即席の食事を二人の前に押しやる彼女の態度は、癲狂院の看守さながらだった。彼女はこのような、何の益もない議論が大嫌いだった。結局は買い置きの食料が底をつくだけだ。これらの「聖者」たちの一人として、ケーキの切れも持ってくるくらいの気配りすら見せたことがない。いつも視野の狭い議論ばかりで、発言も偏狭で不明瞭

そして食欲だけは馬並。彼女に口をきくときも、何やら陰険なあてこすりでからかう時だけ。

したがってブランシュが、ベーコンエッグを殻付きのカキのようにすすりおむ、この浅黒い紳士がどの種の人物なのかと不思議に思ったのも、無理のないことだった……。ほどなくしてそれは明らかになった。

ハリ・ダスは、おとなしくモロクの発言に耳を傾けていた。自分が風呂敷を広げ、「虚空を爆撃」した時にも、同じだけの礼を尽くしてもらえるように。まず 一見、東洋的な敬意と思えたものをこめて かれは財布から名刺を抜き取り、うやうやしくテーブルに置いた。モロクはそれを手に取って検分した。

「東洋アカデミー学長、だって？ で、もしよろしければ、この機関の所在地などお教え願えないもんかね」

ハリは歎息を押さえた。「このアカデミーは、残念ながら、まだ物理的には実現されておりません。とりあえずは、ご覧のように、名刺しかないわけです」

「まあ、幸先のいい出発ではあるよな」とモロクは、まじめくさってみせた。

ブランシュは公然とせせら笑った。

ハリは続けた。「友よ、わたしの理想の一つが、かのタゴールがシャンティニケタンに創設した世界的な学び屋と同じ目的や気運を備えた機関を、この西半球にも設けるということなのです。わたしは、あなたの世界とわたしの世界とを隔てる、愚かしい偏見を打ち破りたいと考えています。このアメリカに というのも、最終的な分析によれば、このような実験を試みられるのはアメリカしかないからです あらゆる文化、あらゆる人種が、それ相応の扱いを受けるような大学を見たい。あの自家撞着的な、何でもギリシャ・ローマ起源にしてしまう説を、永遠に打破したい。支那人も応分の栄光が与えられるべきだし、アラブも。スラブ人の多大な貢献を認識しなくてはならないし、黒人の貢献も、マレー人の貢献も……」

モロクは、文明の大河に対してマレー人がどんな貢献をしたのか不思議でならなかったが、黙っていた。

このような機関の創設者が直面する仕事を見積もるにあたって、ハリ・ダスは金や広告、フットボール・チームなどの散文的な必需品については一度たりとも触れなかった。かれはこの折衷的な機関が、同窓会組織もなしに栄えるとでも期待しているのだろうか。フットボールやレガッタのかわりに何があるというのだろう。宗教か？

ほとんどモロクの考えを読み取ったかのように、ハリは最大級の真面目さをもって宣言した。「高等教育を受けたすべてのアメリカ人には、世界の他の偉大な宗教家の教えを知り、学ぶことを義務づけるべきです。あなたがたの聖書に記されたキリストの生涯ですが、あれはあなたがたの救世主より五百年以上も先立って生まれた、大ゴータマの生涯に起きた事件の反復以外の何物でもありません……」

「口をはさんで申し訳ないが、キリストはおれの救世主じゃあないよ！」とモロク。

ハリは寛容に微笑むと、続けた。

「たとえば、いろんなユニークな出来事がありますよね。処女懐胎、悪魔の誘惑、ヘロデ王による罪もないものたちの虐殺。これらはキリスト教だけの神話ではないんです！キリストについてのおなじみの寓話を見てみましょう。放蕩息子の説話、カナの婚儀の説話……こんなのは、キリスト教以前のヒンズー教徒や仏教徒も知っていたのです。カソリック教会の儀式なんて、どれほど仏教から拝借したものが多いことが、想像もつかないでしょう！」

ここでハリ・ダスは脱線して、モロクとブランシュ（というのも、ブランシュもいささかの驚嘆の念とともにこれを聞いていたからだが）に対して、ピタゴラスが前世や魂の転生、美的観察や菜食主義、数の美德、当時のギリシャやエジプトでは知られていなかった、

第五元素の考え方の教義に関する知識をどうやって学んだかについて説明した。「元素としてのエーテルは、当時はヒンズー教徒だけが知っていたものだったのです」

「いいぞ、スワミ！」とモロクは野次った。「こっちの学者どもの中には、何でもギリシャとローマ時代に遡らせちまうやつらがいるからな。たとえば交通信号は、ローマ帝国の渋滞の日々から借りてきたものだ。道路清掃局は、クレタ島の考古学調査から果てしない素晴らしいアイデアを得てる。あるいは開放式の下水　あれはドイツからの輸入品だと思うだろう。それが違うんだな。このアイデアは、クノッソス宮殿の遺跡からかっぱらったものなんだ……。個人的には、ギリシャ人のもっとも重要な発明品は、悲劇だったと思うね」

「それでさえ神話なのです」とハリは、この踊りへのニーチェ的な招待を無視して述べた。

「そうだろうとも」とモロクはぶっきらぼうに答えた。つまりですね、西洋では、伝統が捏造されているため、まちがったものが重視されているのです。東洋人による文明への莫大な貢献、究極的にはどんなパルテノンやローマ法やギリシャ悲劇よりも重要なこれらの貢献……エジプト、支那、アフリカ、インド、日本から注ぎ込まれたこれらの貢献は、あなたがたの知ったかぶりたちによって意図的に矮小化され、あるいはあっさり忘れ去られて、美しきギリシャ・ローマ仮説の連続性を壊さないようにされてしまったのです。

あなたがたの書物には、プラトンやアリストテレス、ユークリッド、イソップ、ピタゴラス、ヒポクラテスなどに関する果てしない称賛が述べられていますが、しかしわたしが絶望的なまでに勉強不足なのでない限り、インド人こそが平面と球面三角法を最初に見出したのだという事実については、一言も言及されていません。数の科学において、ギリシャ人は古代インド人の足下にも及んでいません。たとえば簡単で実用的な代数学について見てみましょう。十進記数法がなければ、これは不可能だったでしょう。それをもたらしたのは誰です？ アラブ人でしょう。そしてアラブ人はそれをどこで得たのか？ インドからなんです……。平面幾何学なんて、結局のところ、いけにえ用の祭壇を建設するためのヴェーダの方法を応用して発展させただけのものですからね。それに音楽はと言えば、七音の記譜法はギリシャの何世紀も前に、インドでは周知でいた。古代ヴェーダ⁶の詠唱から生まれたもので……」

「おいおい」とモロクは機嫌よさそうに叫んだ。「その調子でいくと、そのうち相対性理論ですら時代遅れだとか言いだすんじゃないな」

このように会話は続き、同時に冷蔵庫からは、ジャムや果物、チーズなど、ブランシュが将来の食事に備えて蓄えてあった食料のすべてが、徐々に尽きていった。

モロクの意地の悪い励ましに刺激されて、ハリ・ダスは西洋における尊く重要とされて

いるものすべてを踏み荒らしてまわった。モロクは惜しみなく称賛を与え、前者の材料が尽きればアイデアを提供してやった。カスカラは便秘薬となるのでやがてとりつくされてしまうこと、口臭はライ病に次ぐ恐ろしい病気であることなどについて、二人は完全に合意した。アメリカは、立ち止まっては進む国！ ビッグベンは労働者の偶像！

ブランシュは険悪に薄目を開け、憤慨していた。生温かい血が首の後ろにのぼってきて、思考や衝動をわだかまらせていた。鈍い怒りが舌を硬直させる。それが、クレープのように口にぶら下がっていた。

やがてハリは、当然ながらわが国の英雄たちに矛先を向けた。かれは、かのゲティスバーグの演説のため、リンカーンに対して極めて強い偏見を持っていた。

「ペリクレスがリンカーンのことを予想していたか、そうでなければかの偉大な奴隷解放者が瓢窃者であったと考えねばならないでしょう」とハリは、有名なペロポネソス戦争の戦没者慰霊の演説を引き合いに出して言った。

「そりゃひどい」とモロクは、半分本気で、半分ひやかして叫んだ。「リンカーンまで奪う気なら」と派手に頭をかいてみせ「いっそ大天使ガブリエルを呼んできて、この世をおしまいにしちゃってくれよ。いくらなんでも行き過ぎだ。ワシントンなんかどうなったっていい。どうせ軍服ぬいでパジャマに着替えたら、しょせんはただの女好きのイギリス人不動産屋だ。フランクリン あいつも正体を暴かれてしかるべきだ。チェス選手の息子で、呑んでくれで娼婦あさり。パリの歩道にたむろって、ふしだらなフランス女とじゃれあうのが大好きだったんだから。でもリンカーンとなると……ちょっと待った、このわれらが民主主義には、何かしら神聖なものがあってしかるべきだ。瓢窃者だった、だと？ チッチッチ！ あんなにいい冗談をたくさん知ってる人間だったし……。もっとも、そうならあの南北戦争も、かれにとっては大きな冗談みたいなものだったのかもな。

なあ、ロバート・E・リーについては、何か根にもってることはあるまいな？」とかかれは、最後に思いついて付け加えた。

ハリは困惑の様子だった。

「なに！ ロバート・E・リーを知らない！ いやあ、あれこそアメリカ史上で唯一、非のうちどころのない人物なんだ。この人を前にしたら、グラント將軍なんて安葉巻ばかり吸ってるすげべな田舎じじいだ。シャーマン將軍はといえば まあ、よく言えばだな、こいつは低級な切り裂きジャックだった。ジョージア州の行進を終えたときには、草なんか全部刈り払われて、アリマキさえとりつく場所がなかったって言うぜ。われらが国民的英雄はみんな ブリガム・ヤングも、バーナムも、パッファロー・ビル、ジェシー・ジェイムズ みんな墮落してたんだ。かの哀れな洗濯女キャリー・ネーションに到っては、いいところなんて探したってないくらいだ。てんかん持ちじゃなかったけれど、でも

幻聴をきいたっていうし」

ハリ・ダスにとって、これらの名前はポリネシアの神様の年鑑か、あるいはリディア・ピンカムの「女性の悩み」解決法なみになじみの薄いものだった。

ブランシュは、こうしたたわごとすべてを、礼儀正しくせせら笑いつつ聞いていた。何度か、爆発しそうにはなった。とうとう、立ち上がると、亭主の病んだ精神に関するよく聞き取れないコメントを行ない、もう寝る、と告げた。

「こんなに早くかい、わがそよ風のきみ」モロクはあざけるように彼女の肩に手を置き、引き留めようとした。「ここにおいでわれらが友人に関する事で、お前に言っておきたいことがあるんだ」

「『われらが友人』って、『おれの友人』の間違いでしょう……まさか、この人の寝る場所をしつらえろとかおっしゃるんじゃないでしょうね」彼女は、母親が訪れる予定になっているという、見え透いた言い訳をした。

「ブランシュ、そんなこと一言も言わなかったじゃないか」

「おや、言いませんでしたっけ」彼女は、ハリに向き直り、かれが判事であるかのように、申し立てを行なった。「この人は、家に帰るとトランス状態になってしまうんです。まるでわたしが妻じゃなくて、家具かなんかみたいに扱うんです」

「こらこら。ハリはそんなたわごととは聞きたくないとき。なあ、ハリはマットと寝ればいい。マットは気にしないだろう」

「なぜ気にしないと思うの？」

「だって二人はもう親友だからだよ、なあハリ」

後者は仰天したし、それにもまして居心地が悪くてたまらなかった。だから自分のことはお構いなく、と二人に懇願した。

「何の何の！ 光栄だよ！」とモロクは叫んだ。

実りない会話がまたしばらく交わされた 短剣のようなトゲと、コブラのような毒をこめた会話。しかしどのみちモロクは自分のしたいようにするつもりだった。

ハリ・ダスは、このひねくれた、ばかばかしいやりとりから、一種の悪意に満ちた楽しみを引き出しつつあった。本能的にかれは、主人側に加担していた。そちらのほうに正義があったからではなく、ヒンズー教の女性観のため、ハリの目には、ブランシュがかのフェミニズムなう西洋の悪の果実の最悪の見本のように映ったからだ。何も言いはしなかったが、もしかれの思考を読むことができたなら、それはこういうものだった：しっかりと鞭さえ振るえば、無駄な議論にきっぱりケリをつけられるのに。

外では、サーチライトが並木や壁を紫の光で照らしていた。地上を照らし終わると、それは上方に傾き、天蓋の星屑を掃き清めるのだった。

モロクはハリを眺めた。かれの皮膚は、骨を覆うのがやっとだった。肌の色が薄れ、小便色と化している。

教室の男の子や女の子たちを前にして、「チチカカ湖」と言わせるのは教師としては一苦労だ。だれも真面目にとってくれない。みんな、ふざけた名前だと思う。それにちょっといやらしい響きさえある。モロクも、この状況について似たような気分をおぼえていた。だれかに救って欲しかった。

ブランシュは静かにその場を離れ、自分の夢を捕まえに行ってしまった。その仕草は、ダンスホールの女が、「出だしが卑わいだ」といってマックスウェル・ボデンハイムの小説を投げ捨てる時の、肩のすくめかたにも似ていた。

夜明け近く、ハリはマットのベッドにすべりこんだ。リアドンの眠りを妨げるまでもなかった。妨げるもなにも、かれはそこにいなかったからだ。電報稼業では、様々に多様な体験をすることになる。おそらくマットは、アップタウンの暴動にとどめをさして、それからその業績に大いに満足し、交換手の一人とボクシングの試合にでかけたのだろう。その後は呑みくらべとトルコ風呂だ。それとも夜通し日焼けサロンだろうか。マットは翌朝、非常にはやく出社し、痛む頭を抱え、余生を南の海で過ごしたいという衝動的な欲望にかられるのだ……。

モロクは就寝前の数分間を割いて、「世界に送るメリー・クリスマス」と称するハリのパンフレットに目を通した。一人称で書かれている。一部は非常な興奮状態で書かれたものだった。

「わたしは不用意な発言が本文書にまぎれこまないよう自制している。一気に受け入れられるとは思っていない。しかしながら、わたしを理解すべく定められているのは、全人類の中でもっとも類まれな人々だけであることは確信している。残りは単に、叙階を待つ人々にすぎない……

わたしは己れの教義体系が流動的で、曖昧で、蒸発しかねないものであると自ら宣言する。これは未だかつて提出された体系の中で、もっとも高度に合理的な体系である。わが『警句』にこめられた感情は、わが哲学の壮大な広がり、の微細な断片にすぎない。だが、その警句が示す混沌状態のなかから、やがて秩序が生まれ、その秩序にてこのわたしは、喜んで名付け親となろう。それは不調和状態から生まれる調和であり、巨匠たるこの芸術家の喜びのために世界が踊る、聖なるリズムでもある……」

「巨匠たるこの芸術家！」モロクはこの誇大妄想をしばらく楽しんだ。かの巨匠たる芸術家はすでに高いびきをかいていた。その「警句」が夢の表面に、おもちゃの風船のように漂っている。もはやトウモロコシや臍膜瘤、「チャーリー・ホース」などの神秘的な現

実は、意に介していなかった。月の輝く谷間の、高い草原の草の中をかれは歩き、クローバーの香りも、かれの鼻孔にとっては香料のごとくであった。

「まともな食事ときれいなシーツ、柔らかな寝床があれば、こいつもこの救世主妄想から抜け出すだろう。アリマタヤのヨセフの役を果たすのは、おれにかかっているってわけか……やれやれ」かれはあくびをして、伸びをすると、タバコに火をつけた。雑念が湧いてきた。眠りを締め上げて妨げ、翌朝ともなれば、多少常軌を逸しているではすまないものになる雑念の群れだ。かれは自分がクエーカーの集会に出ているところを想像した。「出産の宗教的側面について」の講義を終えたばかりの友人、巨匠たる芸術家のため、寄付をつる帽子をまわしている。事業家としてのかれの成功は、確固たるものだ。帽子はいっぱいになっている。もしこの道化芝居が何度かうまくいけば、次はクリスチャン・サイエンティスト相手にやってみよう……そうすれば、電信会社なんかクソくらえ。巨匠たる芸術家は、自分たちを待つのがどんな金床なのかもわかっていない。カリフォルニアにさえたどりつけば……。カリフォルニア。黄金のクジラの地。カリフォルニア、新興宗教が毎日のように生まれる地。アメリカ人に生まれてよかった。アメリカ、機会に満ちた地。金持ちはいっそう金持ちになり、貧乏人はますます貧乏になる地。必要ならば、おれは改名だってするぞ……総監督モルデカイ・ブラウン！

支那人社会の上層部では、もっとも好まれる自殺の方法は「金箔をのむこと」だった。金箔が声門につまり、死がもたらされる。同様に、ディオンのモロクが紡いだ繭の網は思考の窒息を招き、かれは快適に眠たくなってきた。頭に浮かんだ最後の印象は、「イブニング・テレグラム」紙の競馬特報版についてのものだった。「オリジナル、四着入賞！」たいして興味をそそるものでもなかった。禁断図書インデックスから除かれた書物と同様に。

第5章

ブランシュは自分のことを過去形で話すクセがついてしまった。まるで自分が中古家具でもあるかのように。心と精神は痩せ衰え、いまや馬めいた様相すら漂わせつつある彼女の表情と同様に、とげとげしくなっていた。彼女の吐息は、プロテスタント教会めいた雰囲気がする。陰気で、猜疑心が強だけでなく、貧相で、融通がきかず、心が貧しかった。

この夫婦にとって、口論するのは神父がアーメンと言うよりもたやすいことだった。幸運なことに、夫婦が二人きりになることはめったになかった。モロクがたまに帰宅するときには、いつも訪問者がいたからだ。もちろん、ブランシュのせいではないのだが。彼女はほとんど他人と顔をあわせなかった。友だちというものを信じていないのだ。

通勤中、モロクはしばしばこの悲しい状況に思いをはせた。ブランシュとの暮らしは、思い描いていたのとはなにもかも、完全にちがったものになってしまった。求愛時代にまで思いがさかのぼると、かれはほとんど飛び上がりそうになった。これがあの、同じブランシュだろうか。これがあの情熱的で衝動的な女だろうか。マチネーに連れて行って、暗闇をいいことに、数々のいたずらを仕掛けてやった、あの同じ女なのだろうか。

自分の秘書のことを考えると、思ったとおりの満足感がわいてきた。ほっそりした、十八歳の処女で、皮膚はマグノリアのしっとりした花のようだ。毎晩、臭い地下鉄の空気の中に疲れて乗りこみながら、かれは彼女を誘惑する方法を新しく練り直すのだった。彼女の美しさは、ドラマーたちに倒錯的な好奇心を引き起こし、キリスト教と女性たちのねたみと絶望を引き起こすような、ユダヤ女のつまらぬ美しさではなかった。雄子子はマルセルを見て、忘れられた魅力のはかない保護地を思い出すだろう。美術館の花瓶でしか見られない類の魅力だ。

いつもかれが自分に言い聞かせることだが、自分の愛する女と結婚できなかったのは、残念至極だった。もうずっと昔のことだ、初恋……唯一の愛だった（みんな、初恋のことはそういうふうに語るものだ）。もはやかれは、その恋を想うと正気ではいられなかった。

初恋の相手は、伝説の美しさを誇る、青白いモナリザなどではなかった。コーラは豊満な胸をした女傑だった。彼女のことを想うたびに、かれはあのしっこりしてツンと上を向いた胸の思い出に、刺すような痛みを感じるのだった。そして、あの暖かい乳のような吐

息にも。

十七歳にして、コーラは北極の夏のようなようだった。オーロラの戯れのもとで輝く青い氷山のような、冷やかで陶器のような目から世界を見渡している。十年の歳月で、コーラの記憶も薄れてしまった。残っているのは、きついボディスとサッサfras香のかつらの記憶だけ。グリーンポイントのことを考えると、どうしても心臓が激しく引っ掴まれる気がしてならない。マウジャー通り、コンセルイエ通り、フンボルト通り。コーラと散歩したことのある通りだ。いまや見捨てられたこの通りは、彼女一人に捧げられていた。本当のことをいえば、かれはこの通りの石の舗装にキスしたことすらあるのだ。もちろん夜遅く、非常な苦悶に悩まされているときにだったけれど。

ここで話題にのぼっている時代とは、今世紀の最初の十年のことだ。長ズボンをはいた当時の青年たちは、パーティーを開いて「郵便局ごっこ」や「枕にキス」などのゲームをするのを、恥ずかしいとは思わなかった。それどころか、クラブさえつくり、お互いの家で会えるようにした。また、「思索家クラブ」を自称するのに何のためらいもなかった。このような遊びがなかったなら、モロクは思春期の若者の情熱と騎士道精神のすべてをにかけて崇拜していた、この女神にキスすることなど決してできなかつただろう。何ヵ月も、かれは毎晩のように、夕食の後で長い散歩にでかけて自分と闘った。そうやって時間をつぶすのだ。なぜなら、コーラが自分の愛に気がついてくれなければ、この先どうやって生きていけばいいのか、想像もつかないからだ。だが、彼女に口をきくのも怖いというのに、どうやって彼女に気がつけというのだ。電話を使うとか、劇場に誘うとかは考えられない。彼女の声を耳にしたら、派手にどもりすぎてしまうだろう。あるいは、暗闇の中で彼女の隣にすわったりしても。いいや、こういうことは、自分のとても及ばない勇気が必要とする。かれはむしろ、長い散歩をして、一時間後に、まるで偶然のように、彼女の窓の下にたどりつくほうがよかった。そこに一分以上立ち止まるのは怖かった。ドアがいきなり開いて、彼女の家族、たとえば妹などに見つかり、からかわれるかもしれないからだ。

とはいいつつも、かれの秘密は他人の知るところとなった。クラブの他のメンバー（みんなツラの皮の厚いやつらばかりだ）は、かれを笑いものにするようになった。コーラの名前が会話に出ると、かれは派手に赤面してどもる。みんなは、コーラがいかに素晴らしい女神かを見る目がまるでないのだ。かれらなりの下品な方法で知りえた彼女は、ただのがっしりした体格のいい、生气と楽しさにあふれた女の子だった。通りや馬小屋や、小道で遊んだその子が、聖処女扱いされるのは、かれらにしてみれば非常に不謹慎な意味で面白いことなのだった。そりゃ見てくれはいいし、デート相手には最高だし、キスも極上だけど、しかしねえ！ あれがグリーンポイント唯一の女の子ってわけでもあるまいに。エセル・ティルフォードだっているし、ヴァイオレット・マンソンも！ あの子たちで何が

不満だ？

ある夜、みんなはモロクを男にしてやろうと思いついた。かれにしこたま呑ませる。そしてかれら十二人の若僧は、キュンメルとライン・ワイン漬けになって、ふらふらと外に出た。そして一直線に、コーラの住むマウジャー通りに向かった。モロクは、敢えて引きずられるまでもない。馬車の中で立ち上がり、わめいては腕をふりまわしている。「すごいことを思いついた。コーラの窓の下で、セレナーデを歌ってやろう！」と吠える。

彼女の家の前で一行は止まり、モロクを道の真ん中に引きずりだし、神秘的な儀式を執り行なった。みんなの叫びと笑い声は、死者も目をさましそうなほど。でも、だれも窓辺にあらわれない。カーテン一つ開かない。

「出かけてるんだろう」とモロクは考える。この考えに勇気づけられて、かれはポーチにさっさと上がりこみ、演説を始める。

演説は、気違いじみて、すばらしかった。火山のような力強さでほとばしり出させる。胸に秘めておいたすべてが、一気にぶちまけられる。空から宝石を奪って彼女の足下に捧げんばかり。

歩道の無骨者どもからは、騒々しい大喝采が沸き上がる。これほど笑える代物は聴いたことがなかったのだ。モロクの株は一気にあがった。クラブの次期会長はこいつに決まりだ……

そしてコーラはといえば　この気違いじみた告白のさなか、彼女はどこにいたのか？

ベッドの中で、バレリーナになる夢でも見ていたのか？　そうだったらよかったのに。でもコーラは、夜着姿で窓辺にひざまずいて、このいかれた道化の一言一句たりとも聞き逃すまいとしている。部屋の暗さで彼女は外から見えない。彼女の方もかれを見ることはできないけれど、でもそのことばだけで全身がぞくぞくする。こんなに自分を愛してるなんて、あの人はどうかしてるんじゃないかしら。あの馬鹿ども、いったい何を笑ってるのかしら。

自分がかれをどんなに好きか、決して悟られてはならない、と彼女は誓う。「どんなにって？」と彼女は自問する。この瞬間まで、あの人が自分にとって、いささかでも重要性を持っているとは気づいていなかった　少なくとも、こういうふうに大事だとは。「なぜこれまで何も言ってくれなかったのかしら。あたしが怖いのかしら」彼女は自分の力に狂喜して、憑かれたような歓びに腹を抱きしめる。「ああディオ、あなたが知ってればねえ！」と彼女はつぶやく。そして恋人の影をかき抱く。ひざ小僧は、カーペットの痕がついてでこぼこだ。背筋を震えがかけぬける。

人生が扱う、この無意味な苦悶は何ともの悲しいことか。コーラは疑問の余地なくディオ・モロクの結婚すべき相手だったのだ。彼女は与えうるすべてを持っていた。愛、健

康、美。ああ、かれ自身、それが痛いほどよくわかっているのだ。彼女を愛し過ぎて、彼女の足下に這いずって行って、踏み台代わりに使って欲しいと懇願せんばかりなのだ。

「もうこんなことは二度とあるまい」とかれはつぶやく。

このような危機に際して、心はなんと正直に語ることか。後に、かれが愛したいと思ったとき、かれが再び華開くべきありとあらゆる理由があるときになって、心は奇妙に虚ろなままなのだ。いまではもう、何か偶然が記憶を呼び覚ましてもしない限り、コーラのことを考えたりはしない。そういう時でも、自分が取り返しのつかないほど自分自身を彼女に捧げてしまったのだ、ということには、かれは思い至らない。そのような贈り物は、二度と繰り返すことができないのだ。

しかし、もとに戻ろう……。クラブは、催しを開催する。これを最後に、「思索家クラブ」はしばらくこの種の馬鹿騒ぎからは遠ざかる。仲間の数人が大学に行ってしまうのだ。モロクもその一人である。

催しに、不自然なところは何一つない。同じ単純な出来事の繰り返し。来たるべき深い人生の影など、みんなの楽しみに落ちかかる気配すらない。すべて喜びだけ。若さが己れを謳歌している。明日も今日と同じでないはずがあるうか。未来に立ち向かう自分の能力を疑問視する者は一人とていない。

モロクもまた、この間抜けな信念を共有していた。しかし、かれには自信を持つだけの理由があった。かれは大喜びだった。今夜のコーラは、えらくおれに優しいじゃないか。ほかのみんなには目もくれない感じ。よし、大学に行って、一旗あげてきてやる。そして戻ってきた暁には……

「なんだって？ おれを呼んでるの？ 彼女が？」

若きディオ・モロクは立ち上がり、騒々しくかましい集団の中をかきわけてゆく。部屋がぐるぐるまわる。彼女に何と言えがいいのかもわからないし、廊下で彼女と対面したとき、自分がどんな行動に出るかもわからない。この晩ずっと、かれは誰かを外に招いて「少し手紙をもらうようにする」順番がまわってくるのを待ち詫びていた。彼女の方から声をかけてくるとは……まったく予想もしていなかった。

あと数歩というところになると、はやくもかれは、自分がご大層な人物のような気がしてくる。女どもはおれにイカレきってるんだ……呼ばれるまで待ってられないくらい。憎いね！ いやあ、おれってそんな魅力的かなあ。

廊下のほの暗い明かりの下で、コーラがかれに向けた顔は、この世でもっとも美しいものだった。一目見ただけで、それまでの空元気はどこかに消えてしまった。ことばは一言も交わされない。

かれの腹一つでこの女神にキスできるのだ。

コーラは待ち詫びている。顔をちょっと仰向け、腕をだらりと垂らしている。彼女の腹は波打っている。それを見て、かれはどうしようもなく震えだす。こんなに彼女に近づいたのは初めてだった。夢の中でさえも。

わけもわからぬうちに、彼女が腕の中にいた。唇が触れ合う。彼女の肉体の感触はかれを仰天させる。その興奮はすごく強烈で、すごく独特で、叫びだしたいほどだ。これまで女を抱きしめたことはなかった。そうなる前には、多少の争いを経なければならないのだろうと想像していた。いわゆる「小競り合い」というやつだ。でも、コーラはからだの力をぬいて、モロクの腕の中で揺れている。何の抵抗もない。彼女のほうも、自分にしがみついているのがわかる。彼女の腕にこもった力が増している。

もはや、口は彼女の口に固定されてはいなかった。彼女の耳を、目を、のどを求める。そのたびに彼女はうめき、何度も繰り返す。「ああ、神様！ ああ、神様！」かれはもはや、自分が何を口走るか、何をするか、気にもとめない。突っ走れ！ 征服しろ！ むさぼれ！

もう何も見えなくなっている。

彼女を壁に押しつけ、全体重をかけてのしかかり、髪をなで、しゃがれた熱情をこめて彼女の名前をつぶやく。その荒々しさが、彼女を脅えさせる。こんな情熱的になるなんて！

「こんなにあたしを愛してるんだわ……！」

彼女の方も、その任を果す。圧迫には圧迫でかえすのだ。唇は湯き、あざになっている。

「神様、こんなことを考えるなんて、あたしをお許してください！」

許すもなにもない……彼女はかれが自分に吸着して押し潰すがままたにさせる。「ああ、どうなっちゃうのかしら」彼女は考える時間が欲しい。それをかれに訴えようとする。

「あ、ちょっと、この人どういづつもりかしら？」

かれの手が彼女につかみかかり、彼女の身体の上をさまよう。動きが痙攣的になる。何やら獣めいてくる……。

紳士が淑女に対しては決して行なわない類のことがある。情熱のさなかにあっても、である。人は、女性の身体をギターのように弄んではならないのだ。

ディオーン・モロクは腕に顔をうずめ、壁にもたれかかる。乾いたすすり泣きの声だけが廊下にこだまする。

このエピソードのわずか後、父親が大学の資金を与えてくれる。もう遅い。かれには別の試練が待ち受けているのだ。

父親がやっとの思いで捻出したその金を、かれは自分の母親並の歳の女性に浪費してし

もう。かれはひっかかったのだ。

コーラはもはや手が届かないほどに遠ざかって、もうかれは何も期待しない。甘く、謎めいた、痛々しい性の世界が開ける。ポーリーンはかれの母親であり、そして妾である。彼女は何かがみつくものを、彼女が望んでいる奉仕をさせてくれる相手を求めている。ディオンのモロクは諸手を挙げて彼女を受け入れる。そして、牛にしがみつくだニのように、彼女の肉体にくっつく。

自分の方がより多く奉仕しているのだ、という考えが、かれをほっとさせる。

ポーリーンにはからだの弱い、神経症の子供がいる。ジョージという名のこの子は、彼女の愛人より一歳歳下なだけだった。夜になると、彼女はジョージに優しくキスして、ベッドに入れてやる。それから、愛人にキスして、いっしょのベッドにしのびこむ。朝になるとジョージは、安らかに眠る母親を見出だすのだ。

数ヵ月たって、モロクは自分がこの愛人といっしょで幸せなのだ信じかけている。仕事もみつけた。つまらない仕事ではあるが、それでも彼女と暮らすには十分だった。ジョージは療養院に送られる。ジョージがいないほうが好都合だ。偽装しなくてすむ。どうせジョージはもうすぐ死ぬ。ポーリーンもそれを知っている。モロクも。

子供ができたという話をポーリーンが打ち明けると、彼女の愛人はきわめて不満そうな態度を示した。愛人にとって、妊娠というのは見逃し難い罪なのだ。ポーリーンの愛人は、この事故を男性特有の方法で解釈する。これは罠だ！ この考えは、友だちや助言者たちの意見とも符合するので、ますます強化される。だれもこの異常な関係を、いささかでもいいものとは見なさなかったのだ。「絶対に長続きしないよ」これが衆目の一致した判定であった。

かわいそうなポーリーン！ 誰一人として、彼女の愛情の深みを探ろうと少しでも試みようとはしなかったのだ。その年齢故に、彼女は陰謀家であり、色きちがいであると決めつけられてしまった。いい歳した女が、子供と恋に落ちるなんて！ 彼女に対してなんと辛辣なことが言われたことか！

追い打ちをかけるように、ジョージが物故する。ポーリーンは悲しみに沈む。もはや、息子も愛人もいない。ディオンは彼女から逃げ隠れているのだ。

ポーリーンは考える。ジョージが死んだと知ったら、それでもディオンは自分に会いたがらないだろうか。だが、彼女はこの考えにすぐに飛び付こうとはしない。あらゆる角度からそれを検討してみる。人生と幸福がこれにかかっているのだ。動きを誤れば、ディオンは永遠に失われてしまう。

慎重に、彼女はかれという人物を再構築してみる。まず、かれは自分を愛しているのだろうか？ かれが逃げているからといって判断を誤ってはならない。かれは脅えているの

だ。これまでだって、男に逃げられたことくらいある。

単なる哀れみだったとしたら？ 単に彼女の身体が目当てだとしたら それだけだったら？ だったらどうする？ だったら？

こうした疑問が彼女を半狂乱にする。一方で、ジョージの葬式のことも考えなくてはならない。それに腹の中にいるろくでもない赤ん坊も……こっちも何とかしなきゃ。でもどうやって？ どうやって？

彼女は脅えきった目で部屋を見渡す。かれの本がまだあたりに散らかり、かれと二人きりで過ごした、静かで平穏な夕辺の思い出 ああ、それも数えきれないほどの で彼女をさいなむ。機械的に立ち上がり、本の題名を見てまわる。何の本やら、彼女にはまるっきりわからない。当惑させるような題名ばかり。かれの精神は、彼女が探求しなかった部分の一つなのだった。

一時間後、彼女は決意を固めた。電話に向かい、ディオンの家を呼び出す。彼女の声は消え入りそうでおずおずとしている。

「ディオンの、ジョージは死んだとお伝え願いますか。ええ。それだけです。わかるはずです」

翌朝の朝食時に、かれはこのメッセージを与えられる。

「ジョージって誰だ？」とかれの父親。

「ジョージ？ ああ……ちょっとした知り合いだよ。お父さんの知らないやつ」

かれはコーヒーをすすり、新聞を読み続ける。報せはかれを動かすが、ポーリーンの期待したようにではない。この報せが本当なら、かわいそうな女だと思う。しかし、本当に本当なんだろうか？ それとも、これもまた罠ではなからうか？

一週間後、ポーリーンは半狂乱となる。愛人の不実さを確信したのだ。もはや彼女にとって、かれは怪物となる。子宮の中の畜生を絞め殺してやりたい。ディオンの、こんど会ったら絞め殺してやる……

日毎に、暗闇が近づくにつれて、彼女はかれの家の前に陣取る。バッグには、弾をこめた拳銃。そして毎晩、惨めに待ちくたびれて、彼女は自分の部屋に戻り、拳銃をバッグから取り出す。疲れ果て、怒りと悲しみで我を忘れ、彼女はその武器をもてあそび、練習のため鏡の中の自分に狙いをさだめる……。

彼女に引き金を引く強さがあるだろうか？ 指は恐怖と恐れで弱々しい。

「こんなことじゃ何の解決にもならない！」と彼女は自分にささやく。「ああ、どうしてあの人に戻ってくるべきだわ！ あたしをこんな風に一人にしておくなんて、ひどすぎる！」

彼女は銃を放りだして泣く。

この彼女の愛人には守護天使がついているにちがいない。かれを危害や、かれの手に負えない運命から守ってくれているのだ。かれはポーリーンの行ないについて、いささかの疑念も持ってはいない。もし誰かが拳銃のことをかれに告げたとしても、笑うだけだろう。「いずれ立ち直るよ」とかれは自分に繰り返し言い聞かせる。日毎にかれはかたくなになり、ますます自分に愛想を尽かしてゆく。

もしわれわれが、初夏のある晩、この劇的な事件のわずか数週間前に、ポーリーンとディオンのいっしょにいたなら、ポーリーンの愛人側の、この決然とした態度をもたらした拷問について、いささかの知見を得ることができたかもしれない。

非常に暖かい夜で、ポーリーンは息がつまりそうだとこぼしていた。二人はコニー・アイランドに乗り出すことにする。ルナ・パークでのバンドのコンサートを聴きながら、二人は人造湖の上空高くの綱渡り曲芸をながめて楽しむ。行楽客でいっぱいのボートが急傾斜の流れをすべり落ちて、水面に激突する。その悲鳴と混乱の上空で、パラソルを持った女は巧みに動き回る。タンホイザー序曲の最初の数節のように、まるで空中に浮かんでいるかのようだ。やがて二人は立ち上がり、ダンス・パビリオンに向かってそぞろ歩き出した。ポーリーンには少し運動をさせたほうがいい、というのがかれの考えだった。

パビリオンに並行して歩きだしつつ、彼女の現状を鑑みて、この運動を彼女に強いるのが最適なことかどうか、かれは疑問に思いはじめる。自分がこれからくぐりぬけることになる試練のことなど、かれはまるで予想してはいない。

まさにそのパビリオンの階段で、息をのんで二人を見つめているのは、コーラだった。

丸一分も見つめ続けたところで、かれのほうも彼女の存在に気がついた。コーラは破壊的な一瞥でもって、ポーリーンをのみこむ。彼女がかれの腕にしがみついている様を見て取る。二人の親密さを理解するには、一言の解説も不用だ。彼女が嘘だと思ってきた、あの醜悪な噂はすべて本当だったのだ。ディオンはこの女と同棲しているんだわ。

「この娼婦めが、子供を愛人にしたてたりして」と彼女は思った。ゲッ！ 何と忌まわしい。街娼を拾ったのならまだ許せる。でも、これは……かれが歩く意気消沈した様子を彼女は見て取る。「恥じ入ってるのかしら。ふん、当然よ。自分の母親並の歳の女じゃない」

ディオンは目をそむけた。自分がまずい状況になっているがわかったのだ。

「神よ！ 彼女の横を通り過ぎるのに何秒かかるかな」

かれはポーリーンの腕をしっかり引き寄せて、彼女を急がせようとした。連隊から除籍されようとしている兵士のようなようだった。もはや、自分を縛りつける恥以外のことはなにも考えられない。

あいさつなしにコーラの横を通り過ぎるのは考えられない。一瞬でもいいから顔をあげ

て、うなづく程度のことでしなくては……ポーリーンがこんなにしがみつかないでくれたら！ そうすれば、おばさんだとか何とかごまかすのに。彼女の身体の線を思うと、嫌悪の波が全身を走った。あまり目立たないといいのだけれど。

ああ、なんと残酷な苦境であることか！（かれは自分のことしか考えていない）

とうとう、これ以上は先送りにできなくなった。あと一步で、何とかしなくてはならない。頭はガンガンして、舌は渴き、こわばっている。自分が十分に間抜けなのはよくわかっている。それでも、なんとか平静を保とうとする。

かれの唇は、空疎な無言のあいさつを発する。自分では「ごきげんよう」と言っているつもりだ。紳士が、知り合いの女性と散歩を楽しんでいるかのように……まるで非常に気のおけないあいさつであるかのように。軽く会釈して帽子に手をやりつつ、背骨がこわばる。

それがあまりに短時間に起こったので、ポーリーンはほとんどその仕草に気がつかないところだった。数歩、二人は黙って歩く。やがて、ポーリーンは穏やかな声で尋ねる。「どなただったの？」そして、かれの頬の紅潮に気がつく。「あらディオ、赤くなってるじゃない！」かれは口ごもりだす。「ねえったら、誰なの？」と彼女はかれを引き寄せて懇願する。

かれは、振り返るなど彼女に頼む。「いま教えてやるから。そんなに赤くなってるか？

わあっ！ あんなナンセンスは乗り越えたと思ってたのに。なんだって赤くなったりなんかするんだろう。まあいいか。誰なの、だって？」

この時には、ポーリーンはかれをまじまじと見つめていた。もう逃げようがない。それでいながら、かれはポーリーンを傷つけないで済ませた。このコーラとの一件は終わったことなんだ。まだ赤くなったままだろうか、とかかれは考える。

「なあポーリーン、おかしなことは考えないでくれよ。何でもないんだから 昔つきあってた子なんだよ。かわいい子だったけど、たいしたことなくてさ。すごく好きだと思ったこともあったけど……でも、もうずうっと昔のことだ。長いこと忘れてたよ……。でも、こんなところで出くわすとはね」そして貝のように黙ってしまった。

かれの「ずうっと昔」にだまされるポーリーンではなかった。この表現に、彼女は綱渡り曲芸のチラシ並の真実味しか感じられなかった。そして、こうした曲芸師の故意の失敗の一つ一つに心臓が止まりそうになるのと同じく、かれの断言にも関わらず、彼女の心は恐れに苛まされるのだった。断言にも、やりすぎというものがある。空気は危険に満ちていた。しかし、彼女は自分の恐怖について語らずじまいだった。

かれの赤面が理解できたのは、ずっと後のことだった。彼女が拳銃を完全にしまいこんで後のことだ。それは、彼女の恐れを裏打ちするものだった。

第6章

レスリーの両親は、ちょうど大成功のサーカス巡業から戻ったばかりだった。二人は十八ヵ月出かけていた。この前後の二回のあいさつの間に流れた時間は、愚直な青二才を、無愛想な口の悪い、愛情が歪み、かつての素直さが雇気楼のように消えた若者に仕立てあげるのに、十分なものであった。

レスリーの母親は、愛情に満ちた、人を疑うことを知らない生き物で、その献身ぶりは、まずは彼女の夫たちに、それから彼女の息子に押しつけられたものだった。最初の夫は鉄道員で、呑んでくれては彼女をぶちのめした。アル中の譎妄症の発作で死んだ。レスリーはほんのかすかにしか父親を覚えていなかったが、その記憶を慈しんでいた。義父については、まったくどうでもよかった。かれは、いつか矯正すべく母親が結婚した、まったくの他人でしかなかった。

この人物は、最初のキャリアである「詐欺師」業で失敗し、矯正施設でお勤めをすませたから、レスリーの母親と結婚した。それ以後、かれは「いかさまと呼び込みをやりつつ」不安定な生活を引き延ばしつつ、過去を否定しようとしてきた。少年時代、レスリーはこの二人とともに世界中をまわった。一行が足を踏み入れていない文明国は、ほとんどないくらいだった。かれの体験の話が出たついでだが、レスリーは自分の仲間の一行を、いつもサーカス連中と呼び習わしていた。信じやすい人は、この漠然とした表現だけで妄想が満たされる。詳しい説明を求められれば、気分の赴くままに、ライオン使いや曲馬師、アクロバット師などについて、より具体的に語った。実のところ、かれは自分の親を恥じていた。母親はともかく（彼女にはどうしようもないのは、かれにもわかった）、義父のほうを。

過去三年間、かれはもっと散漫でない教育を受けるため、後に残されることとなっていた。しかしながら、かれの教育は、すでに年齢相応をはるかに上回るものとなっていた。学校教育の、静かな、去勢された、代用品じみた形態は、かれの趣味に合うものではなかった。十五歳にして、かれは人生 特にその重要な側面 についてオールドミスどもや官宦ども（かれらの感情的活力は干からび、破産しているのだが、それゆえにわれらの時代にあって、若者たちの指導者としてふさわしいと考えられている）などよりも、

ずっと詳しくあった。

両親の最後の巡業の間、かれは道を踏み外し、仕事についた。それも一つではない。わずか一年の間に、かれは十二以上の仕事を転々とした。かれには、採用担当者や事業家たちが「人柄」と称するものを持っていた。自分を売り込むのは、いともたやすい芸当であり、かれはそれに魅了された。倦怠感の発作に襲われれば、さっさとやめた　どうせすぐに次のが見つかる。推薦状を書いてもらうなど、銀行の頭取が絹のタキシードを着込むのと同じくらいたやすいことだった。サーカスのテントの下で息を呑む田舎者どもに魅了されたように、いまのかれは、ベテンにかけられた雇主たちの豊かな愚かさぶりを探求したいと思っていた。

モロクがかれを雇ったのは、スリが共同謀議を図るようなつもりでのことだった。かれはレスリーの「社交術」には、いささかもだまされなかった。仕事を始めるにあたって、かれはこう警告した。「やることはちゃんとやれよ。さもないとぶちのめしてやる」そしてそれ以降、かれはあらゆる局面で、レスリーのうぬぼれをこまめに叩きつぶしていった。一瞬たりともレスリーに、自分が便利な（そして従順な）道具以上のものだと思わせるようなことはしなかった。好きなときに、その場で首にできる存在だと思い知らせた。こういった方面で、かれは独裁者のごとき力をふるった。

一方で、別種の訓練も進行しており、これが代償となって、レスリーの精神をすり減らせる苛立ちを鎮める働きをしていた。モロクは、さまざまな亡命者の作品に親しむようかれを導いたのだった。ハーバート・スペンサー、ウィンウッド・リード、クロポトキン、ド・ゲールモン、ニーチェ、ラツコ、アンブローズ・ピアス……。

というわけで、レスリーはしだいに、自分が神に雇われているという信念を持って行動するようになってきた。それも非常に暖かい、人間的な、親しみやすい神様で、気さくで、親切な兄貴のように親身になってくれる神様だ。かれの目に映った自分の救い主は、不道德で、気ままなうそつきで、より大きな真実を大事にして、狂信家たちのなかで一人疑問を抱き、あり余る健康と強さだけのために破壊してまわる、偶像破壊者だった……。かれはそれを真似ようとした　時に大失敗しながらも。足かせを引きちぎり、真に最高天に属する領域で、己れの驚の翼を試してみたいという強烈な渴望が、かれを捕らえて放さなかった。

かれの世話を託された叔母は、一家の唯一の親戚だった。レスリーの母親は、その義妹の屋根の下に息子を住ませるといふ思慮について、それなりの不安を抱かなかつたわけではない。ソフィー叔母は、四十にならんとしている女性であり、誰が見ても太って官能的だった。彼女の夫は結婚後しばらくして他界し、自分の魅力を世に示さなくてはならないという窮地に彼女を追い込んだ。多少とはいえ歌唱の才があったので、それをユダヤ教

会の舞台に提供してわずかな食料を稼いでいた。その生活は熱狂的で、無秩序で、一本通った芯というものが皆無だった。人生の緊急時に対処するための智慧の名残は、思春期の泥沼から漁ってきた程度のものでしかなかった。その行動は、欲求の充足と、虚飾に満ちた演劇の技法の間を行き来していた。永続的な慰謝を見出だせないため、彼女は己れの閨房を売春宿に作り替えた。この滋養豊かな環境にあって、レスリーは雑草のように生い茂った。ここでかれは、アフロディテやサテュリコン、フロッシーなどといった宝物を見出だした。彼女のかつての崇拜者たちが供出していった贈り物である。この古典世界への早すぎる導きの悪影響に加え、ソフィー叔母はかれをそのスキャンダラスな愛人の当事者に仕立て上げ、気の向いたときに己れの情熱的な探求を煽るための道具として濫用したのである。後にかれは、彼女がその癒せぬ渴きを満たすための、淀んだ泉とは相成った。

到着後間もないある朝、レスリーの母親がかれを（穏やかにではあるが）叱ったのも、差し迫った災厄の予兆を振り払うためであった。彼女は、息子が叔母に対して示した、目に余る不敬ぶりに驚かされた。そこには、単なる反抗的な若者の挑戦的態度といった水準を遥かに上回るものがあった。苦痛に満ちた親密さが突き出し、その腐敗ぶりを彼女の心の中に潰瘍のように埋め込んだ。彼女は息子が自分を心の中から追い出したこと、その下劣さにおいて抑圧的で息を詰まらせる、忌まわしい秘密を持ったことに浮かれているのだ、ということ、悲しみをもって見て取った。

「レスリー、お願いだから、お母さんたちといっしょに暮らしてちょうだい。お父さんも心配なさってるから」と彼女は諫めた。

レスリーは苦々しげに答えた。「あれはぼくのお父さんじゃない。うす汚いユダ公だ。あんなやつのことなんか、一言だって聴きたくない」

「恥を知りなさい、レスリー！ 何という口のききかたですか。お母さんのいない間に、そんな態度をとるようになったとは」

いかにもきつく、汚ないことばではあるが、母親がそれを聴いたのは初めてではなかった。これまでは、こうした爆発にも何とか理解を示そうとしてきた。こうした悪意は、嫉妬によるものだと考えてきた。しかし「ユダ公」という言葉は痛々しかった。かれのとげとげしさに、これまでとは異質の性格をもたらすものだった。

「ぼくのお父さんはあんなじゃなかった、そうだろ。お母さんを殴ったっていうけどさ。ぼくはそんなの見たことない……小さすぎて気がつかなかっただけかも。でも、ぼくのは大事にしてくれたよ。あのユダ公 あいつが教えてくれたことなんて、犯罪だけだ」

「なぜそんな言葉を使うの？ このわたしだって、あなたのお義父さんと同じユダヤ人なのよ。あなただって、キリスト教徒の血がご自慢のようだけど、ユダヤ人なのよ。だ

だっ子みたいなこと言いなさんな。こんな話はしたくないわ　あなたが自分のお父さんをどんなに愛してるかは知ってるけど　でも、レスリー、坊や」　「坊や」という言葉はかれをとことん苛立たせた　「あなたのお父さんは、今のお義父さんの半分だって、わたしにはよく　」

レスリーはせせら笑った。「ふん、なにはともあれ、牢屋にぶちこまれたりはしなかっただろ。せいぜいが呑んでくれるくらいで。それだって、お母さんが止めればよかったんだ。愚痴ばっか言ってないで、何とかお父さんを変えるようにすればよかったんだ。少なくともお父さんは、間抜けな貧乏人どもの群れからかすめとって生計をたてたりはしてなかったからな。あいつなら、死人の目からだって小銭をかすめてまわるだろうよ！」

「レスリー、お義父さんに対してそんな口のききかたは、許しませんよ。あの人がこの世を聞いたなら、死にそうなくらい叩きのめされますからね」

「おやそう？　やらせてみたら？　あんな脂肪の塊相手なら、何とか太刀打ちできると思うぜ……。ぼくのせりふを話してやるといい。あんなやつ、怖くないぜ　もう今じゃね」(かれが受けたせっかんは、まだまだ自分の優位性を確立するには間があることを思い知らされるに足るものだった)

母親は、懐柔作戦に出た。かれの父親の強情さ、脅しで立ち向かうことの無駄さ加減を思い出したのだ。

「なぜ自分の同胞に対してそんなに辛辣になったの？　わたしはあなたを立派なユダヤ教徒に育て上げたつもりよ。あなたがいま、お父さん　つまり義理のお父さんの話をするときみたいに、わたしがキリスト教徒を悪く言ったことがあった？」

「ユダヤ教徒としてぼくを育てたくせに、外に対してはキリスト教徒のふりをしてるじゃないか。そのほうが仕事に好都合だから。それが立派なユダヤ教徒なわけ？　だいたい、ぼくにはユダヤ人の血は半分しか流れてないし、今後その半分とは縁を切るからな。どうせただの宗教なんだから、自分で何を信じるか選ぶ権利がある……。何も信じちゃいないけど　でも絶対にユダヤ教徒にはなるもんか！　だれもぼくがユダヤ教徒だなんて思わないんだから、あえてなりたくもないユダヤ教徒のふりなんかする必要もないだろう。べつにお母さんの宗教を取り上げようってわけじゃないんだよ。でも、自分なりの生活を自由に送って、自分の好きな考え方をして、自分の好きなように信じたいんだ。お母さんが行っちゃってから、いろいろ読んで　それと考えて(と後から思いついて付け加えた) たんだ。それで物の見方が変わったよ」

「いい方向に変わらなかったのは残念ね、レスリー」と母親は悲しそうに言った。かれの所有している見慣れぬ書物については、一言言おうと思っていたところだった。それがかれを墮落させているのだろうか？

「この本は誰にもらったの？」それがかれ自身の選択でないのはわかっていた。

「モロクだよ」

「モロク？ 誰、それ」

「上司だよ」

「だったらモロクさんと言うべきでしょ？」

レスリーは馬鹿にしたような笑みを浮かべた。「そんな必要はないんだ。ダチなんだから。いっしょにつるんでまわってるんだぜ」

「その方にお目にかかりたいものだわね。あなたみたいな子供の、どこがそんなに気に入ったのかしら。あなたなんか、まだ半ズボン卒業してもいない子供じゃないの。一人前の男ですらない」レスリーは彼女をにらみつけた。「もちろん、自分じゃそのつもりでいるんでしょうけどね！」

レスリーはこのつつこみをもくさつし、自分の上司について情熱的にまくしたてた。「まさにそこなんだよ。モロクはぼくを子供扱いしないんだ。信頼して、いろんなことも打ち明けてくれるんだ。もうあの人のことなら何でも知ってる。いっしょにいと、ぼくも一人前になったような気分なんだ。モロクと対等な。ぼくに言わせりゃ、あれこそ本物の男だね」

「自分の上司のことを、そんな気安く言ったりして。その方、お幾つなの？」

「えーと、知らないや。三十か四十。結婚してて、子供がいるんだ……かわいい女の子でさ、頭がよくて 話すのを聞かせられたらなあ。モロクもこの子を立派にあつかつてるんだ。うん、ぼくも子供ができたら、あんなふうに育てたいや。腹をたてたり叱ったり、全然しないんだ。ほんとに筋道たてて説明してきかせて……そういう人なんだよ。みんなを同じように扱うんだ。王子さまみたいな人だよ！」

この賛辞の間、母親の方は何度か感情を押さえこむのに苦労した。最初は笑いだしたかった かれの考えがあまりに散漫だったからだ が、その熱のこもりかたと真剣さ、その言明の熱気に感嘆し、やがて新しい感情が沸き起こってのどをつまらせるのだった。自分はこんなに早く厄介払いされてしまうのだろうか？ この少年をほとんど理解していないのに、もう取り上げられてしまうのだろうか？ すでに、これまでずっとあてにしてきた信頼、秘めた試練の時にあって心の光明であり支えとなった信頼は、自分のまったく知らない、そして本能的に恐ろしい人物に奪われてしまった。わずか数ヶ月の間に息子を完全に虜にしてしまった、会ったこともないこの男の影響力は、彼女を動揺でいっぱいにした。

「うちにつれてらっしゃい。ちょっとお話したいわ。あなたのことをどう思ってるのか、是非うかがいたいから」と彼女は、自分の動揺を完全に包み隠して、穏やかに言った。

「今夜にでもつれてくるよ。向こうも会いたがってたから。あの」かれは、その名前で自分の唇を汚すのを拒絶した。「あいつのことは全然言っていないんだ。いっしょにマルセルもつれてくる。マルセルはモロクの……モロクの秘書なんだ。気に入ると思うよ。ぼくのガールフレンドにしてもいいくらいなんだけど、モロクが先に」そこで中絶した。自分がしゃべり過ぎたのはわかっていた。

「なるほど、そういう人間なわけね。秘書といちゃついて お楽しみの付き添いにあなを連れてくってわけ。よくわかりました。どうせそんなことだろうと思いましたよ。で、その、奥さんはなんとおっしゃってるのかしら？ それともその方、奥さんには秘書のことは話してないの？」

レスリーは耳まで真っ赤になって、口ごもった。「もう奥さんとの愛情はさめちゃったんだよ。もともとうまくいってなかったんだ。とにかく、奥さんはモロクをわかってやらないんだ。ぼくじゃうまく説明できないよ、会ってくれなきゃ。お母さんの考えてるような人じゃないんだから。モロクが話すの聞いてごらんって……そうすれば信頼できる人なのができるから」

「そういうこと！ おまえ、自分じゃその人の弁明ができないけど、本人ならわたしを説得できると思うわけね。さぞかし口のうまい人なんでしょうね。その人が、白を黒だと言えば、おまえはそれでいいわけだ。あっさり言いくるめられるんだ。哀れな子だよ、自分の鼻から先が、まるで見えてやしない。もう自分の宗教を信じたくないだ。それじゃご不満なんだと。それだけじゃなくて、何やら放蕩者を崇め奉って、いかれた本を貸してもらって、売女をまわしてもらってるわけ……」彼女は完全に我を忘れてしまった。舌からは、汚ない形容辞の一群が転がり落ちた。基盤となる具体的なものを何一つもたなかった彼女は、己れの憎悪（もはやそれは、隠しようもなかった）を中傷の洪水に埋もれさせた。

レスリーは怒りで蒼白になった。自分の耳を疑った。自分の実の母親がこんな口のききかたをして、モロクに対してこんな卑劣な罵倒を浴びせてるなんて。ばかげてる。かれは驚愕した。こんな激怒するなんて！ こんな荒々しく！ なぜ？ なぜだ？ モロクがお母さんに何をしたってんだ？ お母さんはあの人のことなんか、何一つ知っちゃいないじゃないか。ぼくがもらした不用意な発言だけだ。しかも、自分はそれを口には出してなかった。出す寸前のところでストップをかけたじゃないか。お母さんは真相に気がついたのかも知れない。でも、何の証拠もないだろう。せっかちな口のききかたをする前に、ちゃんとした証明が必要なはずだ。

母親は、吠えたてるのをやめた。自分で自分の性急さがこわかった。まるで、どこかの気遣いがしゃべるのを聞いているようだった。自分が恥ずかしかったが、自尊心ゆえ、それをいささかなりとも認めるつもりはなかった。いずれにせよ、彼女は頑固だった。

「その人をここにはつれてこないでください。わたしの許可なしに、絶対呼んだりしないでね」と彼女は、怒りをくすぶらせて言った。

かれは反抗的になった。「こんな爆発の後だもん、呼ぶつもりはないよ。かれが侮辱されるのを横で見てろって言うの？ ごめんだね。それとってとくけど、ぼくはもうこの家とはおさらばだよ。売女だの不倫だのって ソフィー叔母さんはどうなんだよ。ぼくが知らないとでも思ってるの？ 叔母さんの……えー……その……」叔母の行動をどう簡潔に表現すべきか、かれにはわからなかった。

母親が折れた。「ああ、この子ったら、どうしちゃったのかしら。あの無邪気さはどこに消えたのかしら」と彼女は思った。そして息子にどうかとどまるよう懇願し、自分の愛情を示す機会を与えてくれと頼んだ。お義父さんのことは心配しないで。おとなしくさせておくから。ね、お前を喜ばせるためなら何でもするから、どうか去ったりしないでください。「わたしの腕は、お前を抱きしめたくて痛いほどなのよ。だって、こんなに長くお前から遠ざかっていたんですもの。お前を置いていくじゃなかった。ああレスリー、レスリー、許してください。お前を傷つけるつもりじゃなかったのよ。モロクさんをつれてらっしゃい。その人を怒らせるようなことは絶対にしないから。お友達になるようにするから。ね。お呼びしてください。ただ、お願いだから出てったりしないで」こう叫んで、彼女は激しくすすり泣き始めた。

かれは心動かされた。「お母さん、頼むからやめてよ。別にいますぐどうこうしようってんじゃないんだから。でも、もうこれ以上あの売女」このことばが思わず滑り出るところだった。「売女」というつもりだったのだが、母親が身震いするのを感じて、それを止めたのだった。「ほら、ソフィー叔母さんはあの調子だからさ、わかるでしょ？」と付け加えた。母親は、もちろんかれの意味するところを十分過ぎるくらいわかっていた……。

「薄汚い娼婦めが！」と彼女はつぶやくように罵り、レスリーは背を向けて涙をぬぐった。

その日、終業時に、レスリーはモロクとマルセルに、叔母の家にきていっしょに夕食でもどうかと誘った。同意を得やすくするため、地下室に聖餐用のワインが一樽あるとも付け加えた。

「この家とはおさらば」というレスリーの決意は、モロクが自分を引き取ってくれるという信念に基づいたものだった。母親にこれを告げなかったのは、ただでさえもめている状況を鎮めたかったのと、モロクが賛成してくれないのではないかという疑念があったためだった。モロクは初めから、レスリーが両親と暮らすべきだと固執していたのだ。

レスリーは今回を、モロクと真面目な話し合いをもつ機会として捕らえていた。できれば一対一で話したかったが、モロクがそんなに自分を重要視してくれないのでは、と恐れていた。したがって、招待をマルセルにまで拡張したのだ。二人とも、それは名案だと同

意した　モロクは首がまわらなくなっていたからだし、マルセルは、費用が自分持ちになるのが嫌だったからだ。

「ブランシュはどうするの？」とマルセルが尋ねた。

モロクはせせら笑った。「えらく心配そうな口ぶりじゃないか。まるでそれが、直面すべき大問題だともいわんばかり。レスリー、ちょっとうちに電話を入れといてくれや、それと……今度はもう少しもっともらしくしてくれよな。いかにもって感じで」

マルセルはこれに猛然と反対した。

「あんな忌まわしい嘘八百を聞くくらいなら、あたし自分で電話する。少なくとも奥さんに優しくくらいはしてあげられるでしょ？」

二人は数分ほど口論し、モロクはまたレスリーに向き直った。

「さっさと言ったとおりにしろって。今更新しいこと始めてどうなる。良心を育てるには、もう時間が遅すぎるだろ」

レスリーは服従したが、受話器をかけると、かれは重々しく言った。「これが最後だ。もうこんなうす汚いことはしない。なんで離婚しないの？」

モロクは壊滅的な一瞥をくれた。

「ほほう、道徳家気取りかい。次は教会にでも入るかな、レスリー坊や……それともお前の場合はシナゴークかな？」

少年は、痛いところをつかれたので、すごい形相でにらみかえした。

「ちょっと、言い過ぎよ。今日はこの子を傷つけすぎてるわ」とマルセルがつばやいた。

モロクはそれを無視した。「まさか自分のユダヤの血を恥じてるんじゃないかな、え、レスリー。おれなら恥じないな。自分らしさってのは、そこからくるんだから。それと、道徳的な動機づけもな。自分が完全に腐りきってるなんて、一瞬たりとも思うんじゃないぞ。ユダヤの血だって、そう悪いもんじゃない……そこにこそお前の救いはあるんだ」

レスリーは真っ赤になってうつむいた。いまでは全身全霊をこめてモロクを軽蔑した。ぼくをこんなに傷つけられるやつなんかいない　義父ですら。この懲罰的な舌鋒よりは、殴られたほうがましだ。

しかしながら、数分のうちにかれの機嫌はおさまった。モロクの報復の鞭にあって、マルセルが縮み上がるのを見たからだ。かれは思った。「神様、ぼくもあんな残酷なことが言えたらなあ……しかも、本気でなく」

べとつく、うっとうしい夜で、熱気はからだのまわりに綿製の霧のように巻きついていった。レスリーのアパートでの熱気は、押し潰されそうなほどだった。壁はかびじみでいて、ソファも白かびで変色した感じだった。マルセルが食事を用意する間、モロクは

レスリーの家のアルバムを眺めて楽しんでた。ソフィー叔母さんというのは、シュークリームみたいだ、と思った。「この人って、ラップ人かなんか？ それともクロアチア人？」レスリーは、悪臭をかいたときのように、顔をしかめた。「この人って、舞台で何するわけ？ 太った淫らがましい脚だなあ」

レスリーは説明しようとした。自分でも、同じ疑問を抱いていたのだ。

「天職を間違えたな。売春宿のおかみさんになるべきだったんだよ」とモロク。

かれは、まるでメトロポリタン美術館のエジプト部門にいるかのように、あたりをかきまわっては興味をひいた物体を検分してまわった。

レスリーがデミジョンのコルクを抜いて、三人は聖餐ワインを味見した。リラックスした雰囲気を訪れた。モロクも、多少の賛辞をはいたほどだ。

「何と優雅な生活 神父ってやつはまったく！ Tポーンステーキ、ハバナ産の葉巻、売春宿か尼僧院へちょくちょく訪問、カーテンの向こうでわい談を山ほど……どうりでみんな、艶がよくって満足そうなわけだ。一人残らず、見てると仔牛のケツを思わせる……」ここでかれは、タンブラーいっぱい聖餐ワインを飲み干すと、レスリーに派手にウィンクして見せた……。「貴兄も空けてしまいたまえ！」ワインは飲み干され、のどを通り過ぎるにつれて、心地よいゴボゴボという音をたてた。

マルセルはストッキングを脱いだ。まだ、暑さについてこぼしている。「明かりを落としてくれ」と、みんながテーブルにつくとモロクは言った。「それと、おい、マルセルにキモノでもやってくれないか？ 服を脱ぎたくてしょうがないらしいから」

レスリーは飛び上がり、マルセルは固辞した。

「ならいいよ。勝手にゆだるがいい」

食事が進み、ワインが数本なくなるにつれて、マルセルは考え直した。彼女はだまされたがっていたのだ。

「でも、あなたのおばさんが急に帰ってきたら……？」

「帰ってこないって」とレスリーが即座に答えた。「それに、帰って来たっていいじゃない。別に裸でうろついてるわけじゃないんだから」かれはモロクの方を見て応援を求めた。

「そうだよ」とモロクもすかさず言った。「何を考えてるんだ。楽にしろって」(かれ自身は、すでにシャツを脱いでズボン吊り姿だった)「ほれ、ワインをもう一杯」

「わかったわよ。着替えられるところ、ない？」とマルセルはおずおずと言った。

レスリーは洗面所を示し、彼女に絹のキモノを手渡した。

マルセルは洗面所でグズグズと時間をつぶし、モロクの声が低く果てしなく続くのを聞いていた。モロクは回想の渦に転がりこんでいた。

レスリーは、いつになったらかれと二人きりで話す機会が持てるのかと思った。

「それと、こんなおかしなこともあったっけ」とモロクは語っていた。「ちょうど……そう、恐ろしいくらい今夜と似てる夜だった。浜辺に女の子といたんだけど　どこでどうして拾った子だったかは忘れた。でっかい観覧車の影にこもっててな。不思議に感動的だった　窒息させるような湿度の毛布の中を、観覧車がゆっくり堂々と横切ってくところがね。服を引きちぎって波の中に飛びこみたいという気違いじみた欲望がおれを襲った。これ、真面目な話だぜ。しばらく弄んで、気が済んだらポイッってな思い付きとはちがったんだ。もう全力で抗がわなきゃならないほどのオブセッションだったんだ。毎回、飛び上がってこの衝動に身を委ねようとするたびに、観覧車のでっかいかごが、へりに向かってすべり出してきて、まるで海にノーズダイブするみたいでさ。そいつが虚空へのおそるべき突進を始めると、乗客が息を飲んだり悲鳴をあげたりするのが聞こえたっけ。たぶん、これが起きるたびに、一瞬ながら、おれの考えはそらされてたんだろう。このよじれた鉄の塊によって、この脳天気な連中がいきなり死へと放りだされたら、いったいどうなるだろうってね。それが発展して、おれは神に思いをさせた。別に深遠なる考えにふけたわけじゃない……よくある、美しい雲上の玉座に漂う、しかめつらのひげの巨人とかいった、普通のくだらない考察。おれはこう考えたね　じいさんよお、もしあんたがホントに存在するもんだとしても、おれはまるであんたをうらやましいとは思わんね、ただしあんたの記憶だけは別だけど。三秒のうちに、おれはまちががなく歴史を五百ページ分も駆け抜けたよ。いつまでもそこに横たわり、この膨大な、無意味な装置の絶え間ない動作音に呪縛されてた。腕の中の女は、ちょっととまどってるようだった。おれが向こうの思ってたような要求をしないもんでね。おれとしては、どうせ断られるのがわかってたからな。すると　いやあ、ほんとおれたちの真上だったんだけど　アコーディオンがいきなり外れてきたんだよ。その効果ときたら、彗星がいきなり軌道から外れてきたのを見たくらいすごかった　もうどこにも逃げ場がない」

この語りはレスリーによって中断させられた。かれは、説明し難いヒステリーの発作に見舞われていた。頬を涙がつたい落ち、笑いの痙攣で破裂するのを防ぐべく、腹を抱えていた。

「どうかしたか、坊主？」モロクは、自分の話のどこがそんなにおかしかったのかつかみ損ねた……「まだ話が終わって……」

「待った。ちょっと待った」とレスリーがはじき出すように言った。「いまはやめてくれって」

マルセルが戻ってきて明かりを消した。それからモロクのところに行って、ひざにすわった。突然のうす暗さに、後者は偶然、片腕を彼女のキモノのゆるい袖にすべりこませ

てしまった。彼女の肉体は柔らかな夜であり、粉のようになめらかだった。身動きする気配すら見せない。やさしく、いかにも自然に、かれは女のキモノの前をはだけ、両手でその肉体の凹凸を包みこんだ。ヘプタメロンの葉の間で押し潰されたスミレの花ほども、かれの抱擁に抵抗しようとはしなかった。二人の唇が出会い、闇の静けさと競った。数秒後、マルセルは姿勢を正して、早口で神経質そうに、スタッカートでしゃべりだすのだった。

明かりが消えてからの一瞬、室内は真っ暗で、レスリーは自分の受けた印象に自信がなかった。とはいっても、なんとなく居心地が悪く、奇妙に血が騒ぎ、まるでこの静かな集会の中毒をエーテルが伝えたかのようなようだった。

マルセルは、モロクに話の続きをせがんでいた……。「レスリー、なぜあんなに笑ったの？」

「あのアコーディオンだよ！」かれは喘いだ。「続きは堪忍してよ！ 頼むから！ 我慢できない！」

後の二人はかれがおさまるのを待った。

「あの人は、アコーディオンなんか絶対に聞いたことないはずだよ」とレスリーは、自制すべく雄々しい格闘の末に、やっと吐き出した。「どっかの本で読んだか、そうでなきゃでっちあげたんだ。絶対にそんなこと、起きなかったはずだよ。アコーディオンとはね！

絶対にありえないよ！」かれは再び噴出しそうな気配を見せた。

「やれやれ、アコーディオンなんかどうでもいい。ちょっとレコードでもかけようぜ」とモロク。

マルセルはサッと立ち上がった「レスリー、あたしに選ばせて、ね？」

彼女がひざまずいてレコードを見る横で、レスリーはマッチをともした。そうしつつ、半ば開いたキモノの中の、スミレ色がかった彼女の乳房を挑戦的にのぞきこんだ。手が激しく震えて、マッチを落としてしまった。マッチはすぐに消え、かれは別のマッチを捜し回らなければならなかったが、その間、突然の暗闇に乗じて、彼女の身体に身を押しつけた。彼女のふとももの感触に全身が火照った。計画的なエクスタシーで全身がゾクゾクした。

「一曲だけ踊ろうよ」とかれは、こっそりささやいた。

マルセルは即座に立ち上がると、かれの横を離れた。彼女もまた震えていた。ちょうど太平洋の島々が、陽光から滑り出る直前、絶滅の雪崩のもと、死にゆく情熱で輝き震えるように。

マルセルとモロクがダンスを実行しているかのようなふりをしていた床の空間は、不整形な広がり、丸みを帯びた帯状の広がりとも言おうか、そこに椅子やその他の物体が

点在し、二人は慎重に、カタツムリのような速度でそれらにぶつかるのだった。

レスリーは長椅子に飛び乗った。二人の欲望をそそる動きを追うのに専念していた。頑張れば、二人の熔接されたからだを何とか見分けることができたが、そうするかわりにかれは身をのぼし、目を閉じて、二人の荒い不規則な呼吸や、欲望潰けの足が床をこする音に耳を傾けるほうを選んだ。ときどき、二人がまるで動いていないような印象を受けることもあった。すると、吐息が荒さを増す。部屋の空気そのものが、二人の震えるような恍惚によって活気づいていた。かれは完全に圧倒された。

マルセルのふとももの感触がこびりついていた。このため感覚がピリピリする。向こうはどう感じたんだろう。そしうて、そう思った直後、あの機会をもっと利用すればよかったという後悔に襲われた。次の機会を彼女が与えてくれるなんて、期待するだけ無駄だ。くれたとしても、憐れみでのことになる。彼女のろくでもない同情なんかいらぬ。でも待てよ……このまま彼女を調子にのせておけば、見てるといい。悲劇の物語を持って、いずれ彼女のほうからやってくるぞ……ぼくの優しいアドバイスを求めて。そうしたら、彼女の求めてるものを与えてやろう　そしてそれ以上のものも！　まったく、あの子はモロクの目当てがなんだかわからないのかな。彼女がディオンをとんでもない崇拜対象に仕立てあげてるのを見ると、かれは胸が悪くなった。目をふさいだまま、畏にまっすぐ向かってる　彼女のやってるのは、要するにそういうことだ……。モロクも、この誘惑を実施するんなら、別の晩、別の場所を選んでくれればよかったのに。そうとも、これはただの誘惑だ。それ以上の何でもない！　じきに何かが起こるのが肌で感じられた。ブンブン匂ってる。

モロクとマルセルの二人は、激しく発汗していた。

「何か冷たいもんはないのか？」とモロク。

「あるよ……見ずでよければ」とレスリー。

「たいしたもてなし役だぜ、お前は」

「ちょっとそこらで何か買ってきてよ。あたしがおごるから」これはマルセルのせりふだった。彼女は財布を取りに、洗面所に駆け出した。

横を急いで通り過ぎる彼女の、細く白い脚の輝きが目に入った。手を伸ばして彼女をつかみたくてウズウズした……どこでもいいから彼女を捕まえる。二人がやってきて、この家を密会所であるかのように利用しているのを見ると、かれは無性に苛立った。二人がぼくの気持ちも多少は考えてくれてるなら、まだいい。でも　まったく、ぼくなんてシラミ以下の存在みたいじゃないか。

かれは、彼女の差し出した金を、ありがたさのかけらも見せずに受け取り、ポケットにねじこんだ。

「どのくらい消えてほしい？」ときつい口調でかれは尋ねた。

「きいたふうな口きいて！」マルセルは癩癩を起こしたかのようにやりかえした。「すぐ戻ってくるのよ……あたし、のどが渴いて死にそうなんだから」

「渴いてるのはのどだけ？」とドアをたたきつけつつ、かれもやりかえした。

「なんてうす汚い若僧」マルセルは手探りでソファに向かった。そこにはモロクが、静かにタバコをふかしていた。吸い殻を床に投げ捨て、踏みつける。それから彼女を捕まえ、長椅子のところに抱えていった。

「あの子にこんなところを見つかるのはいやよ」とマルセルはつぶやいた。「ホント嫌味な悪ガキなんだから」

彼女の下腹部の大理石に貼りついていたモロクの唇は、意味をなさないモガモガで答えた。レスリーにこんな状態のところを見つかるのが、死体置き場で見つかるのが、モロクがまったく気にしていないのは明らかだった。かれの感情は、自分の妻が死刑台にあがるのを見つめつつ、一方で自然法則に、自分自身がゴルフのクラブハウスのテラスで、ジン・リッキーをすすっているのを見ている夫の感情にも比すべきものだった。

焦げ付くような西風が、うだるような部屋に侵入してきた。海風の香りが、かすかに、しかし確実に、マルセルの乱れ髪にしみとおった……。

嫌味に振る舞うべく、レスリーはさっさと戻ってきた。ふたりのからだの位置はわかっていたけれど、照明の明かるい通りからやってきたので、肉体のからみあいの詳細を見分けるのは不可能だった。

「お二人さん、急にここを出なきゃならなくなったら、どうする？」レスリーの声色は、敵意と歓喜の豊かな混合だった。

「うーん、セントラル・パークにでも行くよ」モロクは特に関心も見せずに言った。

「何をとんがってんのよ！」とマルセルはかれから離れて言った。「レスリー、あんたって、ただのうす汚いませガキじゃない！……あたしたちがカンに触るんなら、外に出てだれか引っかけてらっしゃいよ。抜くもの抜いてくりゃいいのよ！一晩中悶々としてるんじゃないわよ……あたしたちに死ぬほど邪魔したりしてないでさ。そりゃ思春期なんだからしょうがないだろうけど」

「ピアトリス・フェアファックスの、若者の悩み相談にでも手紙書いたら？」とモロクは、ピロードのようになめらかな声で言った。

マルセルもいっしょにからかった。「ああ、そりゃいいわね！」

「二人とも、地獄に落ちちまえ！」

「おやおや、こんな暑い夜にかい？」モロクは穏やかに酒びんを開けにかかった。「レスリー、コルク抜きをもってきてくれやな」

「他にご希望の品は？」かれは通常はベッドルームと関係のある、様々な用具を並べたててみせた。

「おいレスリー！ 何を苛立ってるんだ。落ち着けよ。こないだ言っただろう。ここは自由な国なんだ。気に入らないなら、よそに行って好きにすればいい」

「まあまあ、この子の気持ちも考えてあげなさいよ」マルセルが懇願した。「そんな期待してもしようがないじゃない。まだ子供なんだから」

この一言で、レスリーはまっすぐに爆発への道を進んだ。

「あんたらの自制心もたいしたもんだよ！」かれは軽蔑したように発した。「ぼくの一存で、ここからあんたらを追いだせるって知ってた？」

「まったく、完璧なもてなし役だなあ！」とモロクは叫んだ。「まあ一杯やれって。そしてたら落ち着くから。マルセルと踊る時には自制が山ほど必要になるんだぜ。自分を抑さえるって……」

マルセルは急いで口をはさんだ。「いいえ。今晚はもう、ダンスはたくさん。だって暑すぎるもん」

「わかったよ。こいつをかたづけて、セントラル・パークをちょっと散歩しようか」

「お二人とも、お楽しみいただけましたかね」レスリーがうめいた。

「もちろんだとも、坊主、もちろん楽しんだとも……。ただ、今度はワインはもっと酸味の強いやつにしてくれよな。この甘口のはどうもいかん」

「とか何とか言いつつ、ボトル二、三本は空けたみたいだねえ」

「せっかく出してもらったんだからな。単なる礼儀ってもんだよ」

「へえ、次はそんな礼儀正しくしないでくれていいよ」かれは背を向けて、部屋を大股に歩み出ようとした。そして肩越しに一言投げつけた。「あんたら二人になんか、全然会わなきゃよかった！」

「なんて癪癪持ちかしら！」マルセルがつぶやいた。

「レスリー！ 軽くメリーゴーラウンドにでも乗らないか？」

返答なし。

外に出ると、暑さも少しはしのぎやすかった。マルセルはモロクの腕にぶらさがっていた。そのまま黙って数街区を歩いた。

「どうしてもセントラル・パークを通るの？」マルセルが突然尋ねた。

「いいいいいや、別に……近道だってただけけど」

「ディオ、あたし、あなたとお話がしたいの」

「公園で話せばいいだろう」今更何が気がかりなんだろう、とかれは不思議に思った。

彼女はためらっていた。かれは、彼女が何を言いたいのか十分に承知していた。なぜ知らないふりをするのだろう。彼女は時々自分が嫌になった。セントラル・パークなんて、見世物小屋並に不適當な場所に思えた。

彼女は自分の考えがあまりに明白なのを隠そうとした。「ディオ、つまりこういうことなんだけど。あたしたち、もう全然話をしないじゃない。昔はいろんなことを、話してくれたのに。もう何も打ち明けてくれないでしょ。忙しくてあたしには声もかけてくれないじゃない……ねえわかるでしょ……。つまり、あなたはいい同志じゃないって、つまりはそういうことよ」

モロクは抗議した。「おいおい！ そりゃひどいよ。まったく！ 一日中事務所で、おれはお前に近寄って抱きしめたくてしょうがないんだぜ。ただ、最近じゃ二人きりになる機会がないだけだって」

これは彼女が喚起することを期待していた情熱的なことばとは、いささか異なったものだった。どうもかれは、ひどく単細胞になりつつあるように思えた。

二人は無人のベンチにやってきた。

「すわれよ。別にそんなすぐに帰りたいわけじゃなからう」

「ちょっとだけよ、ディオ。明日は定時に会社でしょ」

「明日のことなんか思いださせないでくれ」とかれはつぶやいて、なれなれしく彼女を引き寄せた。

「よして……ここじゃいや」と彼女は頼んだ。もがき離れようとしたが、万力に締め付けられたようで逃げられない。

「マルセル、お前のおかげで気が変になりそうだが、え？」かれは唇や肩にキスの雨を降らせ続けた。「ここだって、いいじゃないか。え？ まったくお前って、ゾクゾクさせやがる！」

しばらくして海底から二人が浮上すると、隣には同じようにあたりが目に入らなくなったカップルがすわっていた。

行きましょう。ベンチは他にもあるわ」とマルセル。

二人はだまって立ち去った。本能的に二人は道を離れ、生い茂った草地を横切った。モロクは頭を垂れ、いかがわしい放心状態に没頭していた。

「ねえ、何か言ってよ」しばらくして彼女が言った。

「言えないんだ」かれは荒々しく答えた。

二人はピタリと（まるで誰かが合図したかののように）足を止め、向かい合った。彼女の腹部が期待するように波打った……。

「ねえディオったら、せっかちなんだから！」

彼女は太いカシの、荒っぽく押しつけられた。

「痛いわ……やめて。ねえってば　潰れちゃう」

「黙れ」かれは歯をくいしばってつぶやいた。「痛くなんかないだろう」

かれは横柄に、野蛮に、彼女にのしかかった。怒ったような手つきで、痙攣的に彼女につかみかかる……。彼女は喘いでいた。

「ちょっと、ホントにやだってば！」そして彼女は声を落とし、それはまるで鼓動のように聞こえた……。「ディオ、あたし、こわい……」

「だったらいい加減にしろって」苛立ち、憎悪に満ちているような声だった。彼女は髪の毛をつかまれて引きずり回されているような気分だった。

「面倒なことになるわよ」彼女は優しく言った。

「知るか！」

「でも、ねえ聞いてよ……ここにいるのを見つかったら？　奥さんはどうすると思う？」

「そうそう　うす汚いことを考えるんだ」

「だって、しょうがないじゃない。こないだのこともあるし。またあの手のろくでもない変態につかまりたいの？」

その恥ずかしいエピソードを考えると、かれも顔をしかめた。

「うん、そうだな、お前の言う通りかもしれない……おれも時々我を忘れるから」かれは情けない様子であたりを見回した。「おれたち、どこにも行き場がないのかよ」

二人は再び歩き続け、それぞれがこのなぞなぞに対する答えを見つけようとしていたが、どちらもなんら結論に到達できなかった。

ついに、宝物のクルミを埋めるリスの密やかさをもって、マルセルはその腹部を、メトロポリタン美術館のそびえたつファサードが投げかける、影のプリズムの中に隠した。

ここまでは、彼女も抵抗を示さなかった……。

サナギという脈動する墓石に封じ込められたチョウのように、マルセルは艶然たる翼をもって羽ばたき、夜明けの到来という奇跡を待ちこがれた。愛撫に屈しつつ、彼女は己れの救いををもたらず恍惚を捜し求めた。

彼女の苦闘する翼を包みこむしげみは、カテドラルのヴォールトの骨格並の強靭さをもって……。彼女は、いまや夜明けのかすかな光に照らしだされ、ほのかに色づいた窓に押しつけられるエクスタシーに我を忘れた。愛人の声は、砕けるような和音の荒々しい響きに埋もれていた。かれの唇は、口に出すのとはばかられる恐怖を叫ぶ生傷のふちにあり、その傷の苦悶は玉突き状のオルガンの息詰まるくすぶりと入り混じる……。圧倒的なエネルギーの奔流に精気を受けたその瞬間、彼女のめくるめく欲情は、彼女という存在のはかないフィラメントを焼き切るかのようで、彼女は潮解状態の洪水に飲み込まれ、

雷のような和声が轟き、半円筒ヴォールトが裂け、彼女の精神の神殿が光のまばゆい洪水に洗われるのだった。飛ぶためのものであるべき彼女の翼は、このような支持には不向きであることが判明した。フルートの悲しげなこだまにも似た振動が、しっとりした彼女の翼の絹を覆いつくした。一万もの物憂い小夜曲の倦怠が彼女の腰の空閑に侵入し、震えるカーブで彼女のくしゃくしゃの姿を覆った。

マルセルの夢見た犠牲 処女の幻想によってあおりたてられた幻想 は、かの月の女神アスタロトの呪文の下で費え去った。古代の伝説のいけにえたる雄牛百頭に代わって、捧げられたのは彼女自身、「耕された処女性」なのだった。はかなくときめく彼女のシルエットは、その儀式の最中に、隠れていた草の暗い深みから、美術館の純白の外壁のもとへとさまよい出ていた。

現実が暴力的に蘇るにつれ、彼女は新しい自分の姿を幻視した。花崗岩の台座にまたがる震える三重の恐怖。月の物ぐるおしさに触れられ、彼女は人生の岐れ道を司るという女神ヘカテ そしてその信仰はまた、死者の影や幽霊、魔術とも関係しているというの姿を見て、恐れおののいた。その女神の足下からはヘビどもが現われた。ヘビは彼女の髪にもいた。そして手には火のついたたいまつを持っているのだった。

第7章

目覚ましは、律義に七時半に鳴った。モロクは寝返りをうって、聞こえないふりをした。ブランシュは毎朝のごとく、かれを起こそうと勤めたが、無駄だった。かれは頭にカバーを積み上げ、ボールのようにうずくまってみせた。

「また休むつもり？」

不承不承、かれは頭をカバーの中から突き出した。「病気だって電話しといてくれ。今日は会社には行けない……。疲れきってるんだよ。もう二時間だけ寝かしてくれ。頼む」

ブランシュはこの種の嘘が大嫌いだった。かれはいつも、彼女に言い訳をさせるのだ。自分で起きて電話をするよりは、職を失うほうがましってわけね……。

彼女が電話をしたと知ったとたん、かれは別人のようになった。一瞬にして毛布がはねのけられる。ベッドから飛び出し、夜着姿で走り回り、彼女に向かって百面相をしてみせ、オペラまがいのアリアの断片を歌う……。うたう？ 休日が確定したかれは、皮製の肺を持っているかのようだった。

「ブランシュ、ベーコンエッグでもつくってくれ」とかれは喜々として求めた。そして唇を鳴らす。厚目の唇だったので、この目的には好都合だった。「フライパンの料理が匂ってくるようじゃないか……。それとユダヤ式のパンのでかいのを一斤買ってきてくれ。コーン・ブレッドを一キロばかりな。白いパンなんか買ってきたら、おまえのしみったれたのどをかき切ってやる」とかれは、のどで奇妙なしわがれた音をたててみせた。長い練習でコツをつかんだのだ。「ストリップ」を見て覚えた技だった。その音にあわせて、手をゆっくりとのどに走らせた。「耳から耳までな」とふざけてみせ、じぶんのひょうきんぶりに至極ご満悦である。

この予期せぬ休日は、ブランシュには嬉しくもなんともなかった。この人が新しい仕事を見つけるまでにはどのくらいかかるかしら。かれがさぼるたびに、だれかに見られて上司に報告されるのではないかと、と恐れて彼女は拷問にあっていような気分になるのだった。

「でかけるついでに芝居の切符も買ってくるの？ それともいつも通り、お一人でどこかうろつくつもり？」

「おまえの好きにしたらいい」

彼女がドアに手をかけ、出かけようとする、かれは慌てて付け加えた。「いや、今日は道化芝居見物はよしとこう。道化芝居には飽きた……。やっぱ家にいて、少し書き物でもするか」

「あなた、自分の仕事を忘れないでよね」と彼女は投げ付けた。「そんな本なんか書き始めたりしないで」とドアを叩きつけて閉め、悪意を表明する。

本なんか書き始めるな、だと？ 書いて何が悪い？ それこそまさに、かれのやりたいことだった。なぜほっといて、好きにさせてくれないんだ？ あいつさえもう少し寛容で、おれのやtingることにもう少し興味を示してくれりゃあ、一冊書き上げられるかもしれないのに。いつも「仕事」のことばかりよくよしやがって。まったく、あいつは他に考えることがないのかね。おれw二週間ばかり遊ばせとくくらいなら、土方でもやらせるほうがマシってなやつだからな。こっちはあいつに、好きなことを何でもやらせてやtingるのに、ただし家賃の支払いが滞らず、彼女も帽子を新調できるだけの金を持てる範囲内で、だけど。ところであいつ、ピアノの先生をやった収入はどうしてるのかな。一度も見たことがない。こっちには、週五ドルでやりくりしろと言う。それも細々と計算をしたうえでのことだった。交通費はいくら、昼食はいくら、タバコはいくら等々。たまに葉巻を買う金くらいくれりゃあいいのに。道化芝居を観に行く金とか、ルナ・パークに行く金とか。別にどうしてもそんなことがしたいわけではなかったけれど、でもポケットに手をつっこんで、札が何枚か指先に触れるってのはいいもんだ。毎日昼飯代を借りたり、デイブに芝居に連れて行ってもらったりするのは飽き飽きだった……。一年に何冊本を買った？ 何回コンサートに行ったり、講演を聞きにいったりした？ まったく！ 男が夜毎に他の女と羽をのばすのも無理はない。おれにだって気分転換が必要なんだ。そうとも……気分転換だ。

二人はいつも通り、新聞を回し読みしつつ、無言で朝食を食べた。一回だけかれのほうに歌い出そうとしたが、彼女があまりに渋い顔をしたので、ことばがのどから上にあがってこなかった。

「とりあえずちょっと散歩してくる」二杯目のコーヒーを飲み終わると、かれはそう宣言した。

「インスピレーションを求めてってわけ？」

「いいや。女をひっかけに。そう言ってもらいたいんだろ？」

「わたしのためなら急がないで。どうせ戻る頃には、わたしも出かけてるから。あなたの……執筆の邪魔をする気はさらさらありませんからね」

彼女は青ざめた笑みをなげかけ、食器を集めて流しに積み上げた。次の食事まで、その

まま放っておかれるのだが。

「クソくらえ。おれに言わせりゃ、おまえなんか溺れて死んじゃうがいいや」とかれは思った。

彼女は隣の部屋にいて、リストの狂詩曲十四番を弾きはじめた。「勝手に弾いてる。そんなクソ楽器なんか壊しちまえ」とかれはつぶやいた。

かれの気を狂わせるものといえば、これはもうリストをおいて他はなかった。「あのジュークボックス並のケチな作曲家め！ あのスケベな絶倫ホラふきめ！」修道院で音楽を勉強するとああなるのだ……あいつの先生のドロテア尼ときたら！ ジョルジュ・サンドの焼き直した……。あの女の口ででっかい葉巻を押し込んで、ケツを引っぱたいてやれたら清々するだろう！ レズどもの群れだ あいつらみんな！ 悪徳取締協会を呼んできたらいい！

かれはセーターと帽子を身につけ、道を歩きだした。空気ははじける感じだ。すべてがくっきりと、差し招くように見えた。スズメの群れが、通り向かいの教会の鐘楼を出たり入ったりしている。二人が住んでいるのは、陰気なお高い地区だった。ご近所はみんな、えらく慎み深い連中ばかり！ ネクタイなしに外に出るなんて考えられない……。ブラウンストーン造の高級住宅が何列も何列も続き、重々しいドアと、窓には鉄格子。数軒に一軒は必ず医者だ。それも、いかにもアメリカ的な名前をしている。「エドワード・ミッチェル・スワン医師」往診一回につき五ドル 類似療法、prince-nez、「おばあちゃんはお元気？」……とはいえ、この近所には鎮静効果があった。かれの精神も、穏やかに作動している証拠を見せはじめた。かれは回想を始めた。

結構！ ひょっとして、しばらくしたら本当に仕事に行こうか 道化芝居なんか観にいかないで。おれだって本気のときは本気なんだってのを見せてやる……。まったく、あいつをおれの頭から締めだしておけたらなあ！ 彼女はかれの脳のフロンティアに、性悪な死肉あさりのハゲタカのように旋回しておりたつた。「おれのハゲタカか！」とかれは考えて、力のない笑みを浮かべた。

このようにかれは歩き続け、過去の奇妙なできごとについて考えつつ、面白い建物のファサードがあれば止まっては見物し、モノにし損ねた女たちについて考え、その間ずっと、頭の片隅では、何について書こうかと思案するのだった。これが悲しいところだ……疲れる面倒ごとばっか、おれに死ぬまで面倒をかけるだけのための創造されたとおぼしき友人どもばっか。貴重な時間を食い潰す、ありとあらゆる無意味な袋小路。何も達成できない。

通りや、地下鉄や、あるいは意識が水車用の流れのように駆け抜ける夜のベッドでかれが行なう独白は、白い紙を前にすると、一つとして呼び起こせないのだった。おれは自分

を相手にどんな凄い談笑をしてるものやら！ 「書き留めろ、書き留めろ！」とかれは声に出し、拳を握り締めて機械的にふりまわす……。

この抽象的な混沌の中を歩きだしてかなりの時間がたつが、自分のおかれた環境も多少は認識していた。ハッと気がつくと、見慣れた道をたどっていた。若き日を過ごした昔のご近所を目指しているのだ。そう思うと気が晴れた。何度もあったことだ。意のままにさまよい出ると、いつのまにか足が、あのおんぼろの掘っ建てやガスタンク、フェリー棧橋、むさくるしく熱気に満ちたゲッター暮らしの、あの懐かしい地区に向かっているのだ。

くねくねした憂色の道の迷路を抜けて、広く交通量の多いベッドフォード通りに出た。それは歯の抜けた娼婦のように、悲しげな高齢をもって微笑んだ。ベッドフォード通りのどこが、かれにかくもアピールするのだろう。念のため申し上げれば、アップタウン側の住宅街ではない。そこでは陰気なブルジョワたちが、気取った堅苦しいアパートに住んで、燕尾服と山高帽（そう、ベッドフォード通りでは、まだみんな山高帽をかぶるのだ

ただし日曜の午後、ガブ飲み宴会と男性向け聖書教室のひけた後だけだが）を身につけて、日曜の午後に遠乗りして過ごすのだ。……うん、これはかれにはどうでもよい部分だった。噴水の近く、通りの幅が広がり、威厳がそなわり始めるあたり　それが大事な部分だった。

しかし、悪魔の名において、いったい連中はおれのベッドフォード通りに何てことをしてくれてるんだ！ 毎度戻るたびに、そこはひどくなる一方だった。まるで一丁らのフロックコート散歩の前ごとに注意深くブラッシングする高齢の家長のようなものだ。それだけ入念に手入れしても、時々ボタンが取れ、肘がテカテカになり、袖口が擦り切れる。でも、服のラインは保たれる。何があってもそれだけは変わらない。それがよい店で買ったもので、高級品なのができる。ラベルを見るまでもない。それがハンガーからぶら下がる様子　それがすべてを物語っている！

ベッドフォード通りも、何かそのようなものだ。……「ユダ公」どもは、勝手に来て、尖塔のてっぺんにへんてこな星をくっつけ、教会をシナゴークに仕立てあげてるがいい。古いブラウンストーンの高級住宅建築を買い取って、改修してこじんまりした毛皮屋にするがいい。あるいはパリ風婦人帽子屋にでも……なんでも好きなものにするがいい！ でも、形はそのままだ。通りのラインはそのまま残る。だれもそれは奪えない……。もはや誰にも否定のしようがなかった。ニューヨークはユダヤ人のものだった。どこへ行っても、ユダヤの看板だらけ。宴会や結婚式用のけばけばしい式場、パストラミやチョウザメ、鮭の燻製、臭いチーズやソーセージがウィンドウにぶら下がっている……それと反吐にまみれたようなコールスロー。時間がたてば、歯医者がやってきて、自分の窓に小さな白い看板を出す。「無痛歯科治療」　嘘つきめ。そんな恩恵をもたらしてくれる施設は、

ブルックリンに一軒あるきりだ。「無痛のパーカー」……そして歯科医の到来とともに、整体師やマッサージ師、音楽教師がやってくる　ビジネスの切れ端を求めて、穴につつかえた豚のようにわめきたてる。それが何であろうと、誰であろうと、何の違もない。みんな生計をたて、自分を売り込み、生徒や患者を集めて自分のインチキ薬や喰えない食料品を売りつける。

なぜかれらがこんなにも嫌いなのだろうか。苦勞を重ねてきた（本人たちもそう認めるだろう）まったく無害なこれらの人々を？　別にかれらの商売人としての才覚やインチキな知的生活が、この国をダメにしているわけでもあるまい、え？　確かに、さほど直接的な影響はない、が　簡潔に言うなれば、「連中は臭い」ということだ。嫌いな対象について騒ぎ立てるのは好きじゃないが、しかしまさにそういうことなのだ。連中は臭い！　まるでヴァーヂルが述べている唾棄すべき生き物のようなものだ。何もかもクソまみれにしゃがる。連中のいるところでは、生は粗野になり、安っぽくなり、下品になる。聖なるものだろうと世俗的なものだろうと、人生だろうと捨てられたチョッキだろうと、女の操だろうと　すべてが値札で汚されてしまう。……ベッドフォード通りに限ったことではない。この大都会全体が、虫食い状態だった。

十分に締め上げてやれば、このさまよえるやつら自身それを認めるだろう。やってみるといい。隅っこに追い詰めろ。鼻面を地べたに押しつけてやってから、腹を割って話をしようと思ちかけるのだ。「さあ吐けよ、このホラ吹きめ。白状しちまえ、このクソいじり野郎！　この惨状は、いったい誰の責任だ？」連中がめそめそと泣き言を並べ、見え透いた言い訳をする様子を見てやるがいい。ロシアだ、白ん坊どもだ、ポグロム（ロシアでのユダヤ人迫害）連中だ、などなど、月並なでまかせの一覧が出てくる。もう少し締め上げてやれ。……「じゃあ今、お前らに汚ないハンカチを使えなんて言ってるのはだれだ？　清潔なハンカチを禁ずる法律でもあんのか、この国にはあ？　なんでゴミを通りに投げ散らかしてばっかいるんだ？　そのためにゴミ箱ってもんをあてがってやったんだろうが……毎日てめえらのクズを集めてやってるだろうが？」……もちろんそれにも答は返ってくるだろう。顔がドス黒くなるまで議論しまくるだろう。最後には認めるはずだ。「おれたちは汚ないのが好きなんだ！」と。連中にとって汚ないのは、ドイツ人が几帳面だったり、アイルランド人が貧乏だったり、カソリックが無知だったりするのと同じくらい自然なことなのだ。「血は争えないってやつだ」とかれはつぶやいた。哀れな、だらしのない、汚らしい畜生ども！　かれのほうも同様に、決してそれに慣れることができなかった。連中を公然と罵倒できたらなあ！　あるいは樽の板でもって、連中の太ったケツをぶちのめせたら！　清々するだろう！

噴水のところでかれはしばらくぶらつき、水しぶきの輝きを楽しみ、つぶやき、少年時

代のちょっとした面白い出来事が頭に浮かんだかのように、静かに微笑んだ。この通りを、カーマイケル博士に腕を捕まれて歩く自分の姿を思い起こした。二人はクライマー警察署の係官に、自転車が盗まれたことを報告しにいくところだった。まったくあのカーマイケルって野郎は鼻持ちならないやつだった！ ブルックリン中探しても、あれほど意地悪な校長がいただけるか？ いつも礼儀正しさを要求し、所有物にはえらくこうるさいやつだった。みんなが便所で鬼ごっこをしているのを見つけたときには、激怒したふりなんかして。説明の機会なんかまるで与えてくれなかった。でも、あの便所のドアを叩きつけたり仕切りをよじのぼって越えたり、便所を全部一挙に流したりするのは面白かったなあ……そりゃ確かにちょうつがいを痛めたかもしれない、でもそれがどうした？ 男の子なんだ、仕方ないだろう。それに長い目で見れば、便座が二、三個壊れたところでなんだ？ エネルギーのはけぐちを間違えただけのことじゃないか……。でもカーマイケルにそんなことは言えなかった。あの老いぼれは、自分のはげあがった脳天以外には、この世に一人として友達がいなかった。あんな不平屋が、冷たい廊下を歩いてるところを想像してみるがいい。偽善屋の気取り屋だ、鼻を空に向けちゃってさ。いつも同じきちきちの古スーツを着て。腹の出た長老派の訓戒員、カタルの末期症状。なんでもラテン語の教師に「お熱」だと言われていて、終業後にも彼女を残して事務作業の手伝いをさせているという噂だった。事務作業が聞いてあきれろ！ もしかして、それだからあいつ、あんなにしょっちゅうラテン語の授業に顔を出したのかも。自分の興味をかきたてるべくそうしているんだ、などと言って。ジュリアス・シーザーやルベリウス祭、ヴェルキンゲトリクスなんかについて、ばかげた質問をしてみせて。それと、あいつがああのラテン語の発音を引き延ばすときの、あの作り笑いときたら！ おれたちがキケロの高貴な韻律を味わえるように、耳を訓練してくれているのだ、などと信じこませようとして……人に何かを信じさせる腕では、神父にすら劣るやつだった。それからおれたちに、目の前でそれを翻訳させる。自分でもやってみようとかいって。その実あいつ、本をさかさから言えるほど、丸ごと暗記してたんだからな。かれ^{*1}も小ずるい古だぬきだったよ。片目はカティリナの極悪非道の行ないに据え、片目は自分のペン先に据え、プリリアンティンの笑みを浮かべて高いスツールに座り、校長が何か利口なことを言うたびにほめそやし　利口と言っても、彼女から見た「利口」である。なぜなら、他のだれ一人としてそれが利口だとはまるで思えなかったからだ（ただし、言語に関する吹けば飛ぶような笑止の理論を、一時間にわたって開陳するのが利口と呼べるなら、話は別だが）。

まあ、ユダ公どもがやつを始末してくれた……。

「生徒諸君、ヴァージルにもっと親しむために、追加で読書をしたいとは思わんかね？」

*1 訳注：文脈から見て、これは彼女であるはず。

サミー・モスコウィッツが即座に口を開く。「無理です。とうちゃんの店を手伝わにやならんし」

「しかし、榮譽ある成績でもって卒業したくはないかね、モスコウィッツくん？」

「うんにゃ……卒業できればなんでもいいです。ここを出たらすぐにでも歯科に進むもんで」

「きみはどうだ。きみは」とかれは、教室のキリスト教徒たちに探りを入れる。

「目が悪いもんで」……「音楽教室にかよってるから」言い訳の山。ルペルカーリア祭の儀式や、プルタルコス「偉人伝」に興味を持つ者など一人もいない。かれは悲痛なおももちでかぶりをふる。「世代は変わりましたな、ディロン先生」それだけ言うと、かれは本を閉じる。カーマイケルが去ってドアを閉めると、イジー・レフコウィッツが鼻を鳴らしてみせる。

「まあひどい」とディロン先生がさえずる。「いまのひどい音をたてた子は、いますぐここに出てらっしゃい」

沈黙。

「いまのいたずらを行なった子に、三分間あげます。その間に立ち上がって、謝ってちょうだい」

さらに沈黙。

「ディロン先生、ぼくは帰っていいですか？」

「ええ、ライトくん。あなたじゃなかったのは確かだから」

彼女は苛々と物差しで机を叩き、犯人が名乗りを挙げて、他のみんなを罰の道連れにしないだけの度量を示すのを期待する。さらに数分待って、それから腕時計を見た。「そうですか。それならみんな放課後残って、不規則動詞の活用をおさらいしましょう。今週ずっとです」

レフコウィッツくんが、息の下でつぶやく。「このくされチーズのかたまりめ！」

「何をそんなにブツブツ言ってるんですか」と彼女は憤る。かれが犯人なのをほとんど確信しているのだ。

かれは哀れみを請うように言う。「とうちゃんの手伝いがあるんです」

イジーのインチキを回想して、モロクは軽く笑った。イジーは自分の外見を裏切らなかつた。アナーキーで、しかも榮譽なし。みんなが罨に落ちると、集団本能が発動された。それからみんな、カール・マルクスやバクーニン、クロポトキンの腕に逃げ込み、その長い鼻を反ユダヤ主義の砂にうずめた。それ以降、魂を揺るがすパニックの最後の一滴が汗腺から排出されるまで、かれらはその stribilious な性向の全精力を傾けて、労働の哲学を信奉するようになる。これは、哲学が議論によって壊滅させられるまで続く。

とはいえ、みんな知的じゃないか、とおっしゃる。その通り。かれらはインチキを看過するだけのドライな知性を有し、詐欺を至高の美德にまつりあげる。愚かな！かれらの知性なんてそんなものだ。呪文を唱えるなんて、馬鹿な非ユダヤ人じゃなきゃできない。六〇点で楽々パスできるところを、敢えて百点を目指すなんて。……でも数多くの偉人を生み出してるじゃないかって？確かに　でも、低能だのクレチン病だの水頭症だの、犯罪者だの殺し屋だの、ポン引きだの娼婦あさりだのになると、なぜ追及の手をゆるめるんだ？……この世のあらゆる大科学者、あらゆる大作家、あらゆる大指導者は、みんなユダヤ人だった　少なくとも一時は！

辛抱強くてつつましか、だと？　そう思うのは、カナル通りやイースト・ブロードウェイをひげに顔をうずめて歩いている連中を見てるからでしょう？　だがそんなことはまるでない！　一人にすれば、ユダヤ人は一人残らず自分達の優秀性を認めるだろう。われわれがいなければ世の中は動かないんだ、と。かれらは肉体の政治における一大勢力なのだ　そんなたわごとを聞かされるだろう。……聖書を書いたのはだれだ？　救世主を与えてやったのはだれだ？　映画をつくってるのはだれだ？　オペラや交響楽団を支えているのはだれだ？　それを指揮するのは？　世界の傑作を執筆しているのは？　梅毒治療薬サルバルサンを開発したのは？　針の取引を組織化したのは？　八時間労働をもたらしたのは？　公立学校の教材を提供しているのは？　下水道の増加、街灯の増加、劇場の拡大、華やかなネクタイ、短いスカート、透明パンスト、夏の毛皮、公営ゴルフ場、公共浴場、ホワイトハウスにカソリック、黒人の解放などなど、すべてを求める強欲な絶え間ないアジテーションの底に立っているのはだれだ？　ふたを開けてみると、かれらが見逃したものは数えるほどしかない。脱落部分：シェイクスピア、ゲーテ、ミルトン　そんな半端な名前が一つか二つ。建物がそこらに一つか二つ。聖ペテロ大聖堂にタージ・マハール。近代以前の絵の世界。神よ、レンブラントってユダヤ人でしたっけ？　もうだれも自信がない。都市の市長にユダヤ人が選ばれるんだから、無理もない。連中が「パルシファル」の父や「ジャン・クリストフ」の作者にまでちょっかいを出すんだから。もしこんなナンセンスが続くようなら、やがてはバーナード・ショーまでが自分のユダヤの血筋について発表することだろう。……しかし、ほぼ確実な非ユダヤ人も数人はいる。ブッダと孔子。しかし、これもユダヤ大百科にあたってみたわけじゃないから……。

腕の下に本を抱えた子供たちの群れが、通りをやってきた。昼休みだ。もう少し通りを下だと、モロクはアンピオン劇場にやってきた。母と二階席にすわって「遙か東の彼方」を見た、あの古きアンピオンだ。だれかがアンピオンにもユダヤ印を貼り付けた。ルドルフ・シルドクラウトがなんとかシュレヒリヒカイトに出演とか何とか。ポスターは、アビシニア出身の独唱家の来訪を告げていた。太った真っ黒な、扁平鼻と分厚

い唇の女だ。「ほう、そこまでやるかね。ユダヤ人をアフリカからも掘り出してくるわけだ。いずれメソポタミアやチベット、いずれアラスカからも見つけてくる。いずれアメリカ・インディアンだって、自分の民族的な謎を奪われることになる……」

これほどまでに過去の栄光に浴して生きた人々がかつてあっただろうか。かれらが同化を試みるよう勧められたこともあった。お断りだと！ まるで過剰な公共的かゆみへの冷水療法のようなもの。同化なさりたくないそうだ。……同化するにはお偉すぎるそうで。でも、そうはいいつつも同化は進んでいた。たとえばドナルド・フレミングとその二番目の妻ローダ。彼女はインテリゲンツィア層出身の端正なユダヤ女である。二人は、このいい加減にくたびれたユダヤ人問題に対する解決法を試していた。つまり、ドナルドが同化のほうを担当して、そのとぼっちりを受けるのがローダ、という具合だ。ローダの両親が訪ねてくると、かれらはかばんの止め金のように、あるいは何の害意もない口ウソク台のように、隅っこにつつましく立っている。そういう事態になると、ドナルドは通常なにかと口実を設けてでかけてしまう。チェスクラブで約束があるとかなんとか。そこにはもっとユダヤ人がいる。やつらとチェスをするのは構わない。でも、いっしょに暮らす？ そうなると話は別だ。……いいや、ドナルドが反ユダヤ主義者になったということじゃない。まさか！ その反対に、ドナルド・フレミングほどユダヤ人を強硬に弁護した人物はいない。弁護人として強硬過ぎるほどだ。ちょっとこの件にこだわりすぎだと思わせるほど。だって、ユダヤ人ども自身、かなり上手に自己弁護をやっているのだから。もう数百年にもわたって自己弁護を繰り返してきたのだ。非ユダヤ人やキリスト教徒は、この件では常に初心者にすぎない……。とにかく、フレミングが後足で立ち上がってユダヤ人についてわめきたて始めると、聞いているほうは質問が山ほど浮かんできてじれったくなってしまうのだ。

ほうほう、そうですかい。かれの友人五人はイスラエルの娘たちと結婚した、と。それでみんな仲よくやってる、と。離婚もないし、皿を投げつけあうような大げんかもなし。なぜだ？ 明らかにそいつらの女房は、単なるベッドの相手でもなければ、おさんどんでも、欠点丸だし女でもないのだ。いろんなことを話し合える相手なのだ。本や政治、結婚問題、聖パトリックの奇跡、チェスの問題など、通常非ユダヤ人がサロンやビリヤード場に持ち込む百一もの問題など。このユダヤ人の女房どもは、自らの家をビアホール並に魅力的にすることについて、何のためらいも、金銭的な出し惜しみも見せなかった。……一方で一日中部屋をいじくりまわし、亭主が帰ってきたときには背中が痛いと思痴ってまわるような連中でもなかった。外に出て、プラスチック・ダンスや蠟染め、音楽の講習会などに通い、無料の芸術教室に出席するのだった。言い換えると彼女たちは、亭主が鼻を突っ込めるような、装飾品に自らを仕立てあげるのを拒んだのだ。彼女たちは、自分達独

自の暮らしを送り、それをうまく組み合わせていた。……さて、ブランシュを見てみるがいい。かれの友人どもがめとったユダヤ女の誰よりも、才能ならあふれている。しかし、その賜物で彼女は何をするか？ 何も。まったく何一つしない。しかも一日ごとに、ますます忘れていく。ストラビンスキーやシェーンベルグ、オルンスタイン、ホネガーの作品を弾いてみようかなどとは、思いつきさえしない。興味がないのだ。同じものを繰り返し繰り返し弾くだけ 修道院で学んだものだけだ。技巧は完璧。表現は、ホイール仕込み。アイデアは皆無。魂は皆無以下。モロクの印象では、彼女にはピアノは無駄というものだ。洗濯板のほうがましだったろう。ピアノの動きは全部身についていた。適切な手首の動き、停止は万全、レガートも見事 インスピレーションだけは皆無。ドロテア尼がアルペジオをしかじかで弾けば、同じような仕上がりになるだろう。

いつだったか、オルンスタインのコンサートの切符を買ってやったことがあった。彼女は精神病院のシェイクスピアのように激怒して帰ってきた。会話の断片が脳裏に蘇る。

「どうしたんだ、独創的すぎたか」

「独創的？ 安っぽいと言ってよ」

「じゃあ気に入らなかったんだ」

「あの人は、自分の作品以外は弾くのを禁じられるべきよ」

「そうかい、おまえならかれを検閲官に追いかけ回させるのも辞さないだろうよ」

「ただの派手好きなユダヤ人じゃないの。縁日芸人よ」

「ほう、ユダヤ人ときたか。まあ向こうは気にしないだろうよ。でも、お前の頭に血をのぼらせることはできたわけだ」

「激怒させたって意味なら、その通り」

「それだけでもたいしたもんだ。お前の演奏ときたら、エスキモーのイグルー内ですら、なんら動揺を引き起こせまい」

意地悪い言い方だったかもしれないが、その意味は彼女にも伝わったようだ……そして彼女のドロテア尼とやらにも！

モロクはぶらぶらとろうつき、清潔な昼飯の食える場所に目を光らせつつも、古い町を町をますます深く探索するに連れて、ますます内省に息がつまりそうになっていった。エディー・カーネイやトム・ファウラーはどうなってしまったんだろう。それと、あの真面目そうな面のガス・ミルズは？ これらの名前は回想を呼び起こした。石敷の通り（トラックがガタガタと通り過ぎる、あの昔のコップ型の敷石だ）に、自転車用のアスファルトの帯が路肩に走っている。ボブ・ラムゼーがめまいのするようなハイ・ホイールの自転車に糊、そのすぐ後ろにトム・バックレーが高級な車高の低い「コロンビア」に乗り、まぶしい日曜の朝にアイランドに向かう群れを率いている。聖なるカソリック教会の名にお

いて、まったくあいつらみんながどうなったのか、是非とも知りたいものだなあ！ シング・シングで宴会か、それとも裁判所の被告席か？

過去が暖かく霧に包まれて蘇ってくる。あの頃は、世界が何とまばゆく希望に満ちていたことか！ 通りに出て遊ぶ以外、何もすることはない。暗くなったら、階段を駆け上がってハンス・クリスチャン・アンデルセンに取り組みばいい。そして土曜は本当に素晴らしい日だった！ まだ朝はやいうちから、お母さんのために食器を洗ったり窓を洗ったり！ 一時になると、かれはスタンリー（当時はスタスだった）といっしょにノヴェルティー劇場の外の列に並び、二階席に10セントで入れるのを待った。あのボードビルショーは忘れられない。それにあの、劇場の外で、南北戦争の南軍の制服姿で立ってみんなをちゃんと並ばせていた、でっかいハンキーとボブ・マローニも忘れられない。でっかなごつい肩と、カリフラワーのような耳をしていた。見かけは、釘のように堅苦しい。でも微笑むと、一面黄金。それにかれの持っていたあの重いステッキ！ 上の階に上がって、暗闇と臭いのなか、オーケストラの登場を待つのは、いつもすごく長く感じられたものだ。二階席の傾斜はすごく急で、最初は息が止まりそうになった。突然ボブ・マローニがああ曲がったステッキで二階席の手摺を叩く。「帽子をおとりください！」と叫ぶのだ……その一言で、みんなキリストに対するような畏怖をおぼえたものだ！

かれは空き家になった店の前で足をとめた。醜い文字でけばけばしい看板に「救世業」とあるのに惹かれたのだ。汚ない窓をのぞきこみ、店の奥にに掲げられた祭壇の上の旗の、巨大な文字を読み取って、かれはクスクス笑った。

我を信ずる者は死ぬことはなく、ただ……

かれは満足げに壁をながめ、罪人たちが留意すべく目立つように掲げられた、おなじみの文章や警句をながめて考えこんだ。どうも、どれか一つ心に留まっているものを探しているようだ。そう、あそこにあった。あの平和な勧告「床につばを吐かないでください」

すべてがはっきりと蘇ってきた。かれとマット・リアドンが冗談でふらりと立ち寄り、ほとんど改宗させられそうになった夜のこと。ほとんど！ ヒステリーの発作に襲われなければ、危なかつたろう。かれはマットにこっそりと話しかける。「あそこのやつを読んだか」そしてマットは息を殺してそのことばを読み、なにか下劣で意地の悪いものを付け加える。それからマットが「あそこの向こうのやつを読んだか」そしてかれ（モロク）が、その掲示と対応するような何か呪文を思いつく。……突然巨大な低温の声ががなりたてる。「パウエルさん、歌の用意をしておくれ！」（「逃げ出す用意をしておくれ」とマットがささやき、かがみこんでしかめっ面を帽子に隠す）……「さあさあ、どなたがざんげなさいますかな」と巨大な低音がとどろくアザラシの声労働組合幹部の凶々しさ。巨大な毛むくじゃらの手（まるで鍛冶屋の手みたいだ）、葬式用のパーラー・スーツとハーバート・

スペンサーみたいなおでこ。……「われわれみんなで、集会の後に出向いてわれらが、奪われし姉ブラッチフォード婦人を呼ぼうではないですか。この美しき賛美歌七十三番の後で、みんなして一体となって出向きましょう　そしてあの美しい顔を拝見しましょうさあ、兄弟たちよわれわれが賛美歌七十三番を歌う間、ご起立願います。『主よ、わたしの足をより高き地に』　さっき言いかけていたように、われらの尖塔を美しく純粋に塗り替えるべく、あそこに巨大なクモのように登ぼった職人たちを見たとき、この素晴らしい古き賛美歌の歌詞がわたしの唇に浮かんだのです。『主よ、わたしの足をより高き地に』」賛美歌が終わると、か細いキイキイ声が後ろの方から響く。「救いとその御力のために神を讃えましょう！」部屋の四隅から交互にコーラスが響く。「アーメン！　アーメン！　ハレルヤ！」葬式スーツを着た歩く代理人が、再度わめきたてる。「キリストは代償を払ってあなたを購入したのですよ、兄弟……カルヴァリで自らの貴重な血を流されたのです。……さあ、だれか加わって……だれか。参加するんです。だれでもいい！」臆病そうな、震える声が聞こえた。「いやね、みなさん、あたしゃ証言にはあんまし向いてないんだ。ご存知の通り、いつもはだまってるようなやつでして。でも、あたしが聖書ですごくすごく気に入ってる一節があって、確かコロサイ人への手紙三章だだったと思ったけど『ただ立ちつくして神の救いを見るがいい』……ただ立ちつくして。ひたすら黙って。兄弟、姉妹のみなさん　あたしがやってみた中で、一番むずかしいことですよ。一度も成功したことがない。やっpegらんさい。ひざまずいて、そのままあの方のことを考えて、じっとしてるんです。あの方が語りかけるのを聴くんです。あの方に語らせるんです。こっちからあれこれ問いかけずに。あの落ち着いた小さな声に耳を澄ませるんです……どんなにむずかしいか、やってみるといい。自分の口は閉じておくんだ！　神に語らせるんだ！」（マットはモロクをひじてつつき、まっすぐ頭上にある物に注意を向ける。「キリストはあなたを愛しています」という文字）　そいつはハンカチを口につめて、けいれん状の歓喜の声をおさえる。またもやあの大音響の声。「パウエルさん、次の賛美歌の準備を」（マットがささやく。「そういうお前は戴冠準備でもしてる」）……「さて、ブラッドフォードさんのご子息に最後の別れを告げるに先立ちまして、もう一曲美しい歌を歌いましょう。わたしの大好きな曲です。「わが友キリスト」もちろんキリストがわれわれの友であることは、みなさん十分にご承知ですよ」（マットは素直につぶやいた。「もちろんだとも、すが目の世間中に触れまわってやるよ」）……「ああ、人々よ、もしおまえたちが子羊の血で洗われなかったなら、この下界でおまえの名がいくら書物に登場しようとする意味もないのだ。神を先送りしてはならない。明日では遅すぎるかもしれない。今夜にでもかれの元に赴くがいい。……さあ、みなさんごいっしょに。『わが友キリスト……』」という具合に歌と踊りが小一時間も続き、やっと「あの美しい顔に最後の別れを告げる」時がきた。二

人は爆笑していた。会衆全体　罪人たち、悔い改めた者たち、コロサイ人、お高いパリサイ人たち、陽気な女たちやいかれたソプラノたち　がこちらを見つめた。こうした視線はエジプトの「石造都市」の彫像に見られるものと同じだ。だが、とうとうそれも終わった。ディック司教さえ、その青白い非難の視線を使い果たしたからだ。最後の訓戒がやってきた。「さあプリチャードさん、明かりを消してください」……

モロクは思った。「そうともプリチャードさん、消しちまってくれよ。それと、一夜の宿とセコい施しを求めて帽子をまわす脂ぎった物乞いにざんげする、人間のクズどものゾツとする列の風景も、いっしょに消してくれ。波打ちトタンの天井や、『キリストはあなたを愛しています』だの『床にツバを吐かないでください』だのと絶叫する、気違い病院の壁を忘れられるように、明かりを消しておくれ。そう、プリチャードさんは明かりを消して、パウエルさんは歌の準備を！」

救世伝道から我にかえり、かれは脇道にそれて、間もなく堂々とした古びた建築物の前に出た。よく手入れの行き届いた芝生をはさんで、ツタに覆われた教区牧師の家が建っている。この古い長老派教会の、不気味な重量感ある扉から、かれはある六月の日出てきたのだった。ピロードのイートン・ジャケット姿で、巻毛頭を覆うのは、ボンボンつきの房つきベレー帽、そのバンドからは純白の羽が顔をのぞかせている。広い玄関階段を、日曜学校用にめかしこんだ、その騒々しい少年少女の群れは行進して下り、ベッドフォード通りの疲れ切る行進への第一歩をしるした。あの記念日にこそ、かれはベッドフォード通りの呪縛にとらわれたのだ。あの日、この広い大通りは歓声をあげて微笑む群集で埋め尽くされていた。旗が陽気にうち振られ、楽隊が演奏し、眠気を催させる沈着な茶色のフロントは、その重々しい真面目な役割を演じた。その後にはアイスクリームとソーダ水がきて、それから金文字の名前入りの革装聖書授与式だ。

おれはなんと奇妙な子供に見えたことだろう。まちがいなく小さな臆病者だっただろう。イートン・ジャケットを着て、帽子には羽を差したりして。とはいうものの、全部がかれ一人のせいというわけではない。かれはこの組み合わせの考案者ではなかった。

あの日、腕の下に新約聖書を抱えて家路についたかれに、何が起こったんだっけ。口論したあのユダヤ人少年の名前はなんだっけ。不思議なことに、すっかり忘れてしまっていた。とにかく、覚えているのはかれがモロクを殴り倒し、グランド通りとドリッグス街の角にある果物屋台の下にうずくまったモロクを残して去ったということだけだ。その日のさらに後で、エディー・カーネイに出くわした。小山のようなエディー・カーネイ、と当時は思ったものだ。そしてエディーはこう言った。「お前にそんな根性があるとは思わなかったぜ」そして心をこめて握手してきた。……この小さなエピソード以降、かれは少年たちの仲間になった。かれらと一緒にどこへでも行った。空き地で尻の軽い女の子と遊ん

だり、石を投げあうようなグループ同士のけんかを手伝ったり、ブリキ工場の窓を夜中に割ったり、グランド通りの服屋の前のショーケースを倒したり。

かれは南三番街に沿ってぶらつき、寝具やアイスボックス、ゼラニウムなどが一面に並べられて華々しい非常階段を見つめた。海牛どもが、そのダランと垂れた尻を、路側の藤椅子上に配置していた。ある者は、通りをはさんだお向かいと、苦勞しつつ会話をしていた。ある者は、ガキをあやすのに刺激的な娯楽を見出だしていた。多くは象皮病を患っているか、あるいは子宮脱出症を患っているかのようだ。全員が巨大な乳腺を持っており、中身の母乳をじくじくにじませているようだった……。毛皮のコートを着た一頭（イルカの種類とおぼしい）が、息子のズボンと格闘している。その息子の方は、ぼうこうを空にしたくてイライラして待っている。モロクは、親愛なる母親がコート袖から落ち着きはらって小便を振り払うのを、図々しく見つめながら立っていた。彼女を恥じ入らせるのを恐れてはいなかった。そんなことは不可能だからだ。一瞬、その鈍感さを称賛したい気持ちにさえなりかけた。彼女に近寄って肩を叩き、「奥さん、お宅にはトイレがないんですか？」と言ったら？ リッツ・カールトンで大麦ケーキでもごいっしょしませんか、と誘うような、いんぎんでよそよそしい口調で、まさにそう言ってやりたかった。……彼女たちは、どうしてこんなスラム流のエチケットにこだわるのだろう。もちろん、尋ねてみてもしょうがない。どんな地区を占拠しようとも、このスラムの生活が口を開き、華開いては栄えるのだ。もしこれが夏なら、みんなナイトガウンとスリッパ姿で、魚並に平然とあたりをうろつくのだ。アヒルが水蓮の間を滑りぬけるように、ゴミの間をぬいながら。ガキどもは、よちよち歩きができるようになると同時に、歩道をうろつき、手鼻をかむように訓練される。牛乳びんは二階の窓から投げ出され、道の真ん中で粉々に砕け散る。夜の到来とともに、邪悪な顔つきのネコどもが通りを占拠し、交通の流れを妨げる腐敗した残飯を漁る。汚れた、吐き気を催す通りのゲロにも負けず、赤ん坊たちは通りに連れ出されて母乳を与えられる。そして奇跡中の奇跡とも言うべきことに、それはバラのように開花するのだ！ あの満タンの乳房が一番怪しい……！ どう説明をつければよいのだろう。ゴミの腐敗臭が彼方の地の優しい思い出を蘇らせる、なんてことがあるのだろうか。

イスラエルの子ら。神に選ばれたる民！ ディズラエリが「ユダヤ人は吸収され得ない。優れた人種が劣等人種に吸収されるのは不可能である」と言ったときに念頭においていたのは、この連中なのだろうか。モロクはユダヤの予言者たちについて想起した（というのはゲッターの慣用的な表現である）。エルサレムの通りを裸でうろつき、神がこの街を裸にしてしまうことを住民に示したイザヤ、この街が腐敗し衰退することを示すため、クソを食らい、ボ口をまとったエゼキエル。そのすべてが粗野な外見をして、装束は不潔で、木の根や野生の蜂蜜、たまには草や花を食べて生き延び、山で岩から岩へと山羊のよ

うに飛び移って暮らしている。……そしてモーゼ、イスラエルの生きたユダヤの証しの人物！ 主の尻をのぞき込んでいる！

ウィリアムスバーグ橋への進入路をつくるために拡幅された、ヘブンマイヤー通りを下る。得体のしれない荷物で悲鳴をあげる屋台で一杯だ。ここでなら、コーヒーポットから寝室からフォードの部品まで、何でも買えた。モロクは慎重に日除けの下を通るようにした。さもないと、汚物入りのバケツが頭上でぶちまけられたり、あるいはそこらじゅうに旗布のようにひるがえる、灰色の羽布団から、シラミが落っこちてくるかもしれない。「きわめて生産的な人々ですな。活気に満ちております。無害で、法を遵守し、群れをなす人々。かれらの子供たちを、一人残らず……」ゲーッ！ かれは嫌悪で吐き捨てた。「みんな追い払え。シオンの街へと送り帰せ。主よ、この屋台やガミガミ女どもの荒野からかれらを導き出したまえ。……それと、割礼を受けた息子たちすべてに、清潔なハンカチを与えたまえ！」かれは押し合いへし合いする群集の中をぶっきらぼうに歩き、肘で人ごみをかきわけ、ウールだらけの雲の中から鼻を、少しでもいいから、汚染されていない空気を嗅ぎ取るうとした。

昔の住区の、気が滅入るような変貌にがっかりして、その原因とおぼしき嗜糞症を有する神の害虫どもに激怒しつつ、かれはベッドフォード通りに戻って市内横断バスに乗った。

道中は、それなりに気の晴れるものだった。一行が揺れながらケント通りに入り、古いブロードウェイ・フェリー（今では運航を再開していた）を視界におさめつつ通り過ぎると、かれの気分は即座に変わった。新鮮な河の生活を、古い木の門から熱心にのぞき込みつつ、かれの心は輝かしい記憶で満たされた。頑丈な醸造所の馬車が、開いた門をガタガタと出入りするのを再びかれは目撃した。そして街角を彩るカフェのスイングドアを通過して、活気に満ちた路上の生活が行進するのを見た。柔らかな口髭から冷たい泡が滴り、古臭い黒板が軽食サービスカウンターの上に掲げられる光景が、ブルックリンの何たるかを告げていた。麦わら帽子を被った男たちの躍動する議論。かれらは、襟の広いスーツの下で汗ばみ、そのスーツは重い時計の鎖のためにたわみ、その鎖はアルメニア文字のようにみぞおちを横切って垂れている。そしてフェリーの対岸の馬車ときたら 乗船する時に、何と揺れて跳ねることか！ 馬車の真ん中には大きな石炭ストーブがあって、その鈍い輝きで寒さを締め出している。あの時代は、吹雪が街を強烈に襲ったものだった。

まだフェリーや一八九〇年代の黄金の優しい日々を夢見ている時、巨大で華やかなクルーザーが投錨して揺れているのが視界の片隅に入ってきた。巨大な鉄製石炭ドックが、梁や桁の入り組んだ網目とともに、現れては消えた。その彼方一面は、緑にけむるくたびれた歩哨のようにそびえたつ摩天楼ばかりだった。最後に、古いウォーラバウト市場が、小川の油の浮いた水面のすぐ向こうに横たわっているのが見えた。小川を特徴づける、あ

の腐敗臭からはそれなりに遠ざかって位置している。

不思議なことに、絶え間ない変化のさなかで、市場は生き延びていた。建物は一つとして変わっていないようだった。もっとも、ここでもかなりの変貌が生じているのは、まちがないのだが。何列も何列も並ぶ、低層の赤れんがの倉庫が、製品を満載し、手押し車や台車、ズック袋で沸き返っている。ウォーラバウト市場には、何やら古風なところがあった。そう見えるだけなのかもしれないが、しかしこの市場の与える印象は、永続性と耐久性なのだった。まるでオランダのアメリカ植民担当官だったストイヴェサントがその重々しい手を差し伸べ、これを除去するラテン系の連中やユダ公どもを欺いたかのようだった。

第8章

その日の午後、モロクが自宅に帰りつくと、玄関の階段にシド・プリゴツィがすわりこんでいるのに出くわした。相手は相変わらずの様子、あるいは多少いつもよりひどい状態だった。だらしなく、脂っぼく、帽子もない。その容貌は、歓迎を表わすつもりとおぼしき嫌味な笑顔によって引き延ばされていた。

「おやおや、これはモロクの旦那！」と声を張り上げる。「お目に掛かれてうれしいတာありませんや。てっきり病気で伏せてるもんだと……」

「そんなはずがないのはわかってるだろう」

「ほほう！ また例の十八番ですか。なるほど。また一日さぼった、と。こんどはどうしました？」

モロクは、せせら笑いをもって、このたわごとを終わらせようとした。

「まったく！」とかれは口を開いた。「おれが休みを取る度に、何で訪ねてこなきゃならないんだよ。そうやって寄ってくれるとおれが喜ぶとでも思ってるのか？」

プリゴツィはこのあいさつの間、ハゲタカのように階段に腰掛けていた。そして今度は立ち上がると友人モロクのまわりで踊りまわった。もみ手をしつつ、しゃべりながら百面相をしてみせる。そしてこの奇妙なパフォーマンスの間、次から次へとせりふを射かけながら、かれはまったく好もしからぬ態度で、相手の頭のとっぺんから爪先まで観察し続けるのだった。

「つまりおれがあんたの休暇を台なしにしたってわけかい……え、モロクの旦那？」

この「旦那」ときたら！ まるで歯医者ドリルのようだ。……たまにこの一言を聴いて、モロクは逃げ出したくなるのだった。

「入れよ。中で話そう」とかれは静かに言った。

「やめとく。なんで中に入るんだよ」とプリゴツィはそのキイキイしたかん高い声で叫んだ。「あんた、公衆の面前でおれと話をするのが恥ずかしいんだろう。自分の家の前で、おれに踊ったりしてほしくないだろう。わかったよ。それじゃ階段にすわろうぜ。おれは大臣みたいにふるまわなきゃならないってわけか」かれは間をおいた。「さて、モロクさんとおっしゃいましたな。何をお悩みなのか話し手いただけますかな。おっと、い

けませんな。何も悩みがないなどはおっしゃいますな。裏に誰やら女性が控えているのは百も承知ですからな。さあ、吐いておしまいなさい……どなたなんです？」

モロクは笑った。が、自分で意図したほどの軽蔑はこめられなかった。「いつもスカートか。続けてくれ。お前の安っぽい心理学的たわごとを出してくれよ」

「ほら来た！ おれの言った通りだろうが！」プリゴッツィは飛び上がるように立ち上がると、寒暖の上でジグを踊り始めた。……「さあ、吐いちまえて。白状せい！ おれの目をごまかせると思うな。……今日はなかなかいい目にあってきたみたいじゃないか。顔色悪いし、目の回りにちょっと隈ができてるぞ」

「いい加減にしてくれよ。別にいい目になんかあってないって。別に女のことで悩んでもいないし」モロクは少し考えこんだ。「だいたい、おれが真実を言ったらどうだってんだ？」

「うーん、そりゃ場合によるなあ。真実だって？ 一言言わせてもらえるかい、モロクの旦那？……あんたの中には真実なんかカケラもねえよ。あんたは筋金入りの嘘つきなんだから。自分にすら嘘をつこうってやつだ。この瞬間には、自分がおれには正直だって思いこんでるけど、深くつつこんでみれば、おそらくはまたあんたがごまかしてるのがわかるんだぜ、しかしながら、まずは聴かせてもらおうか」

「お前も、いい加減におれが自分の患者だっていう幻想を捨ててくれれば……」

プリゴッツィが割り込んだ。「うん、なかなかいい感じだ。今日はずっとお前につきあうことにするよ。何だか知らないけど、こいつはちょっとつきつめなきゃな……。おいおい、そんな嫌な顔すんなって。おれは招かれざる客になるなんてめったにしないし、たまにやっても、たいがいはちゃんと夕食代を払ってるだろうが」

モロクは、プリゴッツィが受ける歓迎のことを考えていた。ブランシュはかれを余計者扱いするのが常だった。

「おれが寄ったのはだねえ、あんたと真面目に話をしたかったからなんだよ。あんたが病気じゃないのはわかってたとも。なあ、ざっくばらんに話してくれよ 何かおれが力になれることはないか？ 何を悩んでるんだ？」

モロクはかれに対する愛情を隠そうと、かれの背中を派手にどやした。

「お前って、わからんやつだなあ。何で休みをとったぐらいで、お前の地獄めいた取調を受けなきゃならないんだよ。おれがなぜ仕事にいかなかったか知りたいって？ じゃあ教えてやろう……笑うなよ！ 正直に話そうってんだからな。実は本を書きたいと……」

プリゴッツィは態度を和らげた。これはかれが予期していた内容ではなかった。

「ちくしょうめが」とかれは重々しく言った。「だったら家にいて書いてるよ。別に仕事をやめるとは言わないけど、まったく、毎夜毎夜、マルセルだのベティだの、この女だの

あの女だのと出歩いてんじゃねえよ。いいから書いてみろって。おれはお前を信じてるんだから！」

「本気か？」いきなりモロクは口ごもってしまった。「お前、本気でおれに書けると思うか？」プリゴツィが答えられるより先に、かれは続けた。「いや待った。説明させてくれ。今みたいな質問をするなんて、すごく変に聞こえるのはわかってる。自分が書けるかどうかなんて、自分が一番わかってるはずだもんな。でも、おれはまったく途方にくれているんだ。なぜか書き始められないんだ。誰かが、というか何かが、いつもおれとおれの衝動との間に立ちただかって、おれのエネルギーを奪い……」

「ブランシュのことなんだろうな、それは。誤解しないでくれよ。別にブランシュが、悪意をもってお前のやりたいことを邪魔してるって言いたいんじゃないんだけど……でも、まったくよう、なんだって邪魔されればなしでいるんだよ」かれは声量を一目盛り落とした。「お前を傷つけたかな？ 別に責める気はないんだぜ」

「大丈夫。続けてくれ。話を切り出してくれて嬉しいよ。誰かにこの話をしたくてたまらなかったんだ。お前の狙いはそんなに外れてないぜ」

プリゴツィは、モロクを助ける方法がずばりわかったことで、途方に暮れているようだった。モロクがこういった事柄で、かれに信頼の栄誉を与えることは滅多にないことだったのだ。これが他の事柄なら、話はちがっていただろう。モロクの示した感謝はあまりに親密なものだったので、プリゴツィは狼狽してまるで脈絡のないことを口走り、思ってもみなかったことを言ってしまった……。それ以外にも、かれの慌てぶりを示す印はあった。二十日大根のように真っ赤になり、目はうるみ、唇は結婚の申し込みをしているかのように、震えて引きつった。

「ところで、今日はどうしてたんだ？ まだ話してくれてないじゃないか。ストリップか？」

「まさか！ なんだってそんなことを？ 水族館にでも行ったかもしれないなあ」

「モロクの旦那、人はベリー・ダンサーを見に、水族館になんかは行かないもんなんですよ。で、どうだった、今日のクレオのステージは？」

モロクは微笑んだ。力ない、哀れっぽい微笑だった。

「まあ仕方ないんだろうな。でも、これだけは言っておく。ストリップってのは、ほとんどはおれの創作なんだ！ 時には人を景気づけるためだし、時には自分のグロテスクさに対する欲求を満たすためだ。多くの場合は逃げ口上だし、女がまわりにいたら、会話にサビを効かせて貴重な時間を無駄にせずに親密な基盤をつくるための方便なんだ。わかったか？」

「正直言ってわかんないなあ、ディオ。そういう行動にはなんか奇妙なところがあ

るぜ。とはいえ、それは目下の話題じゃない。もすストリップでないなら、どこにいたんだ？」

「長い散歩」

「それだけ？」

「それでたくさんだろう。朝飯以来ずっと出歩いて、うろつき、考えごとをして、ぼんやりして、暇をつぶしてたんだ」モロクは自分の精神状態について長々と披露に及んだ。相手は深遠な面持ちで耳を傾けた。モロクがこの率直で大仰な態度で話すとき、かれの心の窓はすべて開かれるのだった。この友人が求めることであれば、なんであれ大きすぎることはなかった。自分でもそれを認めるのがほとんど恥ずかしすぎるくらいだったが、それが実態だった。モロクのためなら、かれは他の誰に対するよりも大きな犠牲を払うつもりだった……自分の女房に対するよりも。

モロクはこう言っているところだった。「こんなこと、お前に言ってもしょうがないんだけどな、シド、おれのいまの仕事は、本当にうんざりするんだよ。おれなんかじゃなくて、YMCAの秘書がやるべき仕事だよ。誰か、感情がカキの殻に封じ込められてるような人間がさ。おれは軟弱過ぎる。なんだっておれがこのキリスト並のアホなことになっちゃったのか、さっぱりわからん……」

「大将はお前を買ってるじゃないか、ディオ」

「うん、わかってる。ついこないだも、おれがずば抜けてるって言ってくれたよ。でもついでに寛大すぎるといって説教をくらわしやがった。おれがいつも借金だらけなのを知ってるんだ」

「少しでも返ってくるのか？ いつも気前よくばらまいてるあの金は？」

「スズメの涙。それ以上は期待するほうがバカだ」

「まったく涙ぐましい太っ腹ぶりだよ、ディオ。少しは自分のために何かしたらどうなんだ。どういうつもりだよ。死ぬまで働く気か？」

「わかってる。わかってるって。どうしろってんだ。手すさび小説の山でも書けっか？ 正直言って、五時になるともうぐったりなんだ。会社がおれを、身も心も消耗させきってるんだ。それで家に帰ると、今度はブランシュだ。トーテムポールといっしょの食卓につくってのが、どんな気分かわかるか？」

「エッダはどうなんだ？」

「じゃあベテルギウスはどうなんだ？ そのくらいエッダには会ってないんだ。ブランシュのちくしょうめ！ 手管を弄して子供をおれの手の届かないようにしやがる。はらわたが煮えくりかえりそうだ！ おれが污染源だとでも言わんばかりに！」

「エッダのことはいろいろ考えてるんだろう？」

モロクの顔貌に苦悶の表情が広がった。プリゴツィのことばは、たいまつのように、かれの思考を燃え上がらせた。

「くそう、時々ブランシュを殺してやりたくなる！」

ブランシュ憎さのあまり、かれはエッダのことをすっかり忘れてしまった。

「まったくひどい話だよ」とプリゴツィが述べた。「ブランシュのことを言ってるんじゃないぜ。エッダだ……一番とばっちりを食ってるのはあの子なんだぜ」

「わかってる」モロクの声は和らいだ。そして震えだした。「ブランシュ以外、この世でおれにこんことさせる奴はいない。こんな、口げんかと争いなんて。おれは心底うんざりしてるんだ。だって、おれたちは何の理由もなしに、お互いに噛みつきあってるんだから！ たとえばこないだの夜なんか、おれたち二人ベッドに横になってたんだ。彼女は向こうの部屋で、おれはこっちの部屋で。二人とも眠れなくてな。とうとう起き上がって、お互いに罵倒しあいはじめた。こうやって話していると、知的な人間二人があんな具合にやりあうなんて、自分でも信じられないけどな。もう気違い二人みたいに怒り狂ってわめきあった。なんて罵詈雑言！ ホントにひどかった……。それで、ついには二人とも頭に血がのぼって、二人同時にベッドから飛び出して、おたがいの喉ぶえめがけてとびついたんだ……」

モロクはそこで間をおいた。

「ここだけの話だけどな、おれはこう思うんだ。時々だけどな、おれ、あいつは実は殴られたがってるんじゃないかって気がするんだ」

「殴られたがってって　まさか……」

「そうとも……殴ったさ。否定する気はないよ。おれの立場に置かれた人間なら、そうしないやつはいないと思うね。……あいつはつつ立って、おれにガミガミとまくしたて、くやしかったら手だししてみろと言わんばかりに、下劣きわまりない罪におれを問うんだもん……どうしろってんだ。黙ってにらみつけ続ければ、あるいは彼女にやめろとうながそうもんなら、向こうは叫び始める。それもすごい叫び方だぜ。近所中が目を覚ましたんじゃないかな。それもすごい罵倒をわめきたてる。薪の山みたいに次から次へと積み上げる。やがて、こっちの限界を越えて、するとドカーン！　おれのゲンコツが自動的に飛び出す。その瞬間におれは早くも後悔してるけど、でももう遅い。あんな悪口にあったら、聖人だって傍観して我慢してるなんて無理だろうよ。……とにかく、昨日そうやってぶん殴ったら、パタンって倒れちまいやがった……うめき声一つたてやがんない。おれの気持ちはわかるだろう。良心の呵責に苛まれてやつ」

モロクはまた間をおいた。プリゴツィは一言も発することができなかった。

「この騒ぎで、子供が目を覚ます。ブランシュを求めて泣くんだ。暗い中であれだけの

騒ぎがあって、いきなり静かになったからな……あの子は怖くて身も凍る思いだったろうよ。おれだって脅えてたし、嫌でたまんなかったとも。まったく、こんな具合に子供を育てるなんて！ 神かけて、死んじまいたかった。もちろん、おれはすぐにブランシュを介抱したよ。抱き上げて、優しく話しかけて顔に水をかけて、髪をなでて。……一番おれが傷ついたのは、彼女が一言も口をきかなかったことだ。叱責もない。一言も。何一つ。ただおれを優しく見上げて、大きな笑みを浮かべるだけ。彼女の目は大きく見開かれて、おれの目をじっと見据えてる。そして何より奇妙だったのは、その目には信頼と、たぶん哀れみ以外に何もなかったんだ。おれは思ったよ。『神よ、こんなことはもう二度としません』って」

モロクはヒステリックに笑った。ある考えが浮かび、かれを恥辱で満たし、それが唇を離れたばかりのせりふの熱意を裏切るかのようにだった。

なぜだろう。ああいう瞬間にはいつも高揚感を感じるのだ。このドラマを繰り返したいという不思議な（だが実現はしない）渴望を感じるのだ。あの穏やかな短い時間、妻を腕にかき抱いて優しく話しかけたことが、それに先立つすべての惨めさと墮落の穴埋めであるかのように。なぜだろう。

「失礼。別に笑う気はなかったんだ」とモロクは声に出した。

プリゴツィの顔は、メスの下のカエルの脚のように引きつっていた。

「もう何も言うな。事態がそんなにひどいなんて知らなかった。ブランシュもかわいそうに……ホントかわいそうに。彼女こそ憐れまれてしかるべきだ。あんな繊細な女性を、いつまでもそんな風に扱っちゃいけないよ。いつか壊れちゃうぜ……。それにディオ、正直言って、お前が描くほど彼女がひどいはずはないと思うな。彼女にだっていいところはあるはずだよ。さもなきゃお前も結婚しなかつたらうに。今からでも遅くないから、もう一回二人で出なおせよ」

モロクは返事をしなかった。プリゴツィの発言に憤慨していたのだ。どうしたって言うんだ　プリゴツィはアホか？　なんでこいつ、プリゴツィは、みんなおれのせいにしたがるんだ？　たった今、あの状況じゃどうしようもなかったってことを、説明してやったばかりだろうに。もちろんブランシュはそんなに悪くないとも。自分の誇張の程度くらい十分わかってる。でも、あんな状況で、だれが公明正大な態度を保てるもんか。これは国家間の戦争じゃない。内戦なんだ。お互いの寝首をかき合う抗争で、両方が消耗し尽くして終わる……。「二人で出なおす」！　大嫌いな文句だ。

プリゴツィは続いていた。「あんたが時々はまっとうな感情を抱くことは知ってるよ。でも、そんなに頭がごっちゃになってるなんて！　不思議だな」かれは独り言のように続けた。「人間の知性が、こんな人生や幸福が決定的に左右されるようなときには、どこか

に行ってしまうなんて」

かれは間を置いて、自分の言葉の重みが十分に理解されるのを待った。

「この妻と夫の争いなんて、別にスフィンクスの謎ってわけじゃないだろ。あんたはそれを謎めかせて、まるで処女懐胎の秘密まがいにしてるけどね。今はすごくややこしい混乱状態になってるのはわかる。でも、もとはすごくささいな不満から始まったんだろ……それも双方の。あんたに必要なのは顕微鏡だよ　鼻のすぐ下のものを検分するためのね。肉体的な気晴らしを求めてうるついたりするなって。奥さんの内分泌系は、たぶん鉄道事故にあったみたいになってるんだ。それを言えば、あんたのもそうだけだな。精神科医のところへ行って、家庭問題が解決できるなんて、一瞬たりとも考えるなよ。連中が特効薬を持ってるんなら、裁判所はいらないんだからな。あいつらなんて、毛生え葉を売ってるハゲの薬屋みたいなもんで……」

通りをやってくるブランシュの姿が、プリゴッツィの脱線に終止符を打った。エッダは母親の手を逃れて、父親を迎えに駆け出した。モロクは彼女を抱きあげ、宙にほうり投げた。

モロクが娘を暖かく抱きしめる間、プリゴッツィはブランシュと、つららのような社交辞令をかわすしかなかった。

ブランシュのほうは、奇妙なことだが、自分の意図したよりも暖かい態度をプリゴッツィに対してとった。トルコ風呂を出たばかりで、まだ慣れきっていない心地よい痛みに体中がピリピリしているときのような、受動的な気分だったのだ。ひょっとして、夫が早めに帰宅したのを見てホッとしたのかもしれない。彼女はそのたいしたことない満足を、かれらの発言に対してあまり不機嫌でない反応を示すことで表明し、これが礼儀正しさの盛りでは、彼女の存在への誠心誠意の気遣いをもたらすことになった。

概して彼女は、二人のわけのわからない議論には飽き飽きしていた。読んだこともないような本への言及、ほとんど理解できないような理論だの原理だのをめぐる、ご大層な喧々ごうごうの議論。この長ったらしい討議は、いつも彼女に、夫はどこまで本気なのかしらと思わせるのだった。この人、プリゴッツィのほらを、どこまで本気で評価しているのかしら。彼女の上品な耳には、かれらの使うことばは粗野で異端的で、自分が真実であり、神聖と信じているものすべてを破壊するものだった。特に、セックスの領域での二人の探求がそうだった。夫の無頓着な告白は彼女を驚かせ、そして深く傷つけた。診療的な情熱につき動かされた二人は、どんな細部も省略しなかった。出歯亀のように、かれらはどんな些細なことでも、ぞっとするほど親密なことでも詳細に観察して記録した。こうしたおそるべき議論のさなかで、彼女が分析を許したとすれば、彼女の感情は、性科学の鍵穴を通して検査されている、処女のそれにも比すべきものだっただろう。こうした議論

で、考えや発言の失礼さに対する詫びは一言たりとも発せられなかった。反対に、彼女が頑固に会話への参加を拒んでいるという点は、こうした議論を特徴づける間抜けな誘いをさらに引き延ばすための、絶好の口実を与えるだけだった。夫の声が聞こえるようだ。「ブランシュ、お前も加われよ……別に個人的なことじゃないんだから」

「個人的なことじゃない」　これがとどめだった。つまり自分は、夫の見積りでは単なる材木程度の存在なんだ。気が向けば火にくべて、熱っぽい議論の燃料にできるくらいの丸太にすぎない、と。まったく見下げ果てた連中だ。特にディオ。本来なら彼女を保護すべき立場にある者が、彼女の不快感から最大の満足を引き出しているなんて。その相棒はといえば、ただのしゃばりなチビのユダヤ人じゃない。フロイトだのユングだの、クラフト・エビングの疾患だの、何だかんだとたわごとばかり　あんなのみんな、自分の淫らな考えをぶちまけるための口実にすぎないじゃないの。誰かに紹介してやると、五分後には相手の分析を始めるかれには、もううんざりだった。家にこもって、奥さん相手に分析してりゃいいんだわ。なんだってウチにきて、こっちの生活に鼻を突っ込んでほめごとの種を撒き、洗面所に何日も残る脱毛剤の匂いみたいな、ろくでもない問題を残してくのかしら。かれが帰る時のニヤニヤ笑い（まるで薄汚れたナプキンみたい）はこう言っているようだった。「さあ、これであんたらの生活がいかにめちゃくちゃか、よくわかったでしょう。さて、できるもんなら、こいつを修復してごらんなさい！」

プリゴツィの訪問は、まるで台風のような力をもって、二人を本来の軌道から放りだし、瓦礫の散らかる中に、鬱々としたまま置き去りし、未来のおそろべき不確実性の中に直面させるのだ。かれの猛威は、彼女の心のしつらえをガタガタにし、欲望を麻痺させ、魂をゆがめてしまうのだった。

この嘲笑の最も不愉快な部分は、夫の態度だった絶えずこの惨めなうす汚い生き物を弁護し続けている。絶えず彼女に、プリゴツィは最も純粋な精神で満たされており、かれこそはこの世で唯一の真の友なのだ、と説得しようとする。彼女に、敵意を捨てるよう説得する……そんなのはただの反ユダヤ感情の偽装なんだと称して（そういう自分だって、ユダヤ人嫌いのくせに）！　反ユダヤ主義なんて、プリゴツィが言いだすまでは聞いたこともなかったのに！　人種としてのユダヤ人になんて、まるで何の関心も持っていなかった。とにかく、集合的にせよ、個人的にせよ、連中とは関わりを持ちたくないだけだった。連中がどうなろうと知ったこっちゃない。パレスチナにシオンの国を築きたいって？　勝手にすれば？　彼女としては、こっちに構わず、家に近寄らないでくれればそれでよかった。

ブランシュが、この侵入者に対して文明的にふるまうべく最大限の努力を払っているのは明らかだった。

「夕食までおいでになるんでしょうね？」と彼女は尋ねた。その声の調子は、義母に週末泊まっていくように勧める時のような、反語的な雰囲気をもっていた。

プリゴツィの声に、真心がこめられた。

もちろん。彼女さえよければ。このかれの言葉が実際に意味していたのは、彼女がもっと率直になるべきだということだった。「この女、こんな風におれを嫌う権利はないはずだ」とかれはつぶやいた。「もちろんいさせていただきますよ」とかれは繰り返した。

ブランシュは夫に向き直った。「お金、ある？」

プリゴツィは抗議した。「ああ、わたしのためにわざわざ何か用意しようなんて、そんな気遣いはご無用ですよ。そちらさえよろしければ、適当にありあわせのものでいいんです」

「そうなるよ、わたしが何も食べないことになるんです」とブランシュ。その口調はぶっきらぼうで、とげとげしくなっていた。

「あなたたち、決して思った通りのことをおっしゃらないのね」と彼女は説明するように付け加えた。「別に特にあなたのことを言ってるわけじゃないんです」とプリゴツィの傷ついた表情を見て、かれに向かって述べる。「ただ、あの自分勝手な」と夫を指差し、「あれが、馬みたいに食べた後で、なぜ他の家族が何も食べなかったのか、なんて後になって言いたすもんですから」彼女は夫に、肉を買ってくるように求めた。

「悪いけど、おれ本当に文無しなんだ」モロクは弱々しく言った。

プリゴツィは即座に、ちょっと行って何か買ってこようと申し出た。「いっしょにくる？」

「いや、ここで待ってる」とモロク。かれは夢見るような状態に陥っていた。

ドアがプリゴツィの背後で閉まると同時に、ブランシュが燃え上がった。

「なぜそうやって、いつもあたしに恥をかかせなきゃならないの？ お友達を呼んでおいて、買い物のをさせに追い出すなんて！」

「夕食に招待したのはお前だろうが。おれじゃない」

「わたしが！ ええそうでしょうとも。それでもしわたしが招待しなければ、愛想が悪いと言って責めたんでしょ。わたしがのやること為すことすべて、何かしら揚げ足を取らずにはられないのね」

「ブランシュ、頼むから落ち着いてくれよ。何度も言ったじゃないか。この連中は、自分たちがもめごとの種になるのを嫌ってるんだ。だいたい、なんであっさり行かせたりしたんだよ。おれの見積りだと、ここには十人くらい軽く食べられるほどの蓄えがあるはずだろう。またいつものセコい手口か！」

かれは求刑を加算して、オーバーヒートしつつあった。そして激しさを増して彼女に嘔

みついた。

「おれが友達を訪ねたって、一瞬たりともこんなみずぼらしい扱いを受けたことはないぞ！ まったく！ だれかがここに来るたびに、お前のせいであやまらなきゃならないとはな！」

ブランシュは、自分の行ないをまったく恥じていないことを表明した。「少なくとも、わたしは公然とやるわ。あなたのお友達も、その点は買ってくださいることでしょよ！」

「いいか、お前が連中を嫌ってるのは知ってる。別に、連中のおしめを替えてくれとは言わん。でも、そんな冷血なふるまいをする必要があるのか？ 我慢できないのか？ たとえばお前の友達はどうか。おれはこんな扱いはしないだろうが、え？」

ブランシュはこれに対し、何も言わなかった。友人がいるときのかれの振舞いに関する記憶を合計するのに忙殺されていたからだ。かれが色目を使い、結果としてその友情を失うことにならなかった友人が、一人としていなかったことを、再確認しようとしていたのだ。

かれはその沈黙を、自分に恥じ入っているのだと勘違いし、この機会を捕らえて別の争点を持ち込もうとした。

「これでおれがなかなか帰らない理由もわかるだろう」

彼女は即座に反撃した。「へえ、そういうわけだったのね。つまり、お仕事が忙しくて帰れないわけじゃない……？」

「またその話か。どうしろってんだ。二人して、こうやって一晩中角突き合わせてる気か？ おれが友達を連れてきた時を狙って、そうやって不平をぶちまけるんだからなあ。連中がお前の苦情を聞いて楽しいとでも思ってるのか？ いい加減にしるよ。どのみちお前の言うことなんか信じやしないだろうし」

ブランシュは、フライパンを叩きつけた。

「へえ、なぜ信じないのよ」その声は、金切り声になっていた。「なぜ信じないのよ」

かれは驚嘆して彼女を見た。こんなつまらないことで、こんなに激怒するなんて！ あと一分もすれば、二人で侮辱された者と傷ついた者のコメディのリハーサルを開始することだろう。あるいはチャーホフが短編を構築するような、せっかちな安易さで急転するかもしれない。新婚初期のある出来事が脳裏に浮かんだ。……二人は夕食を食べていた。ちょっとした一言が、彼女の気に障った。一瞬のうちに、二人は床の上を転げ回り、本気で取っ組みあっていた。フレミングも同席していた。かれはどうしていいかわからなかったようだが、ブランシュのスカートのめくれをなおすだけの正気は、持ち合わせていたのだった。彼女が脳天をかち割られる危険にさらされていることよりも、その憤みを保つほうに関心があるようだった。

彼女が振り回す包丁の輝きが、かれを正気に戻した。ブランシュは本気でかれに突っ込んできた。

「なぜ信じないか教えてあげましょうか。あなたがいつも、わたしを嘘つきに仕立てあげるからよ！」彼女は歯をくいしばって言った。

モロクは彼女の手から包丁を取り上げた。ブランシュはそれをぼんやりと眺めた。妄執にとりつかれ、いきなりそれから解放された人間のような表情だった。

「ブランシュ、頼むよ。いい加減にしるって。どうしてもって言うんなら、せめて……」

「せめてお友達が帰ってから、でしょ……わかってんのよ」

「ちがう。そんなことは考えてもなかった。エツダだよ。こんなのがあの子の耳に入るの、ほら、よくないことだろう」

「へえ、そうなの。まあ可笑しい。自分の悪い噂があの子の耳に入らないように、そんなに慎重になるなんて。女友達と出歩いている時にも、あの子のことを考えてるの？」

「やめろ！」かれは脅すように彼女に向かった。「もうたくさん！ お前はイカれた阿呆だ。聞いてんのか！」

「へえ、あたしが？ そういうあなたは何よ。とんでもない気違いのくせに」

かれは、妻の横の椅子に沈みこみ、両手で頭を抱えた。

「ママ、どうしたの？」エツダが、おもちゃで遊んでいた隣室から叫んだ。

「向こうで少し遊んでやってよ」とブランシュは急いで言った。自分のきついせりふを後悔していたのだ。

かれはしょんぼりと、子供の部屋に入っていった。祭壇に向かう悔い改めた者のような様子だった。

「パパ、なんであんなにけんかするの？」エツダが首に抱きついて、キスした。

モロクは片手で彼女を抱き上げ、残った手で涙をぬぐった。「けんかじゃないよ。ちょっとお母さんと遊んでただけだよ。お芝居なんだ」とあやすように言う。

「そうなの？ 面白いな。あたしともお芝居して」

かれはそっと子供をおろし、床にすわった。「おいで。じゃあ、パパがお馬さんだってことにしよう」そして思いっきりかがみこんで、子供が背中によじ登れるようにした。小さな腕が首に巻きつき、息を詰まらせるのを感じた。ああ、誰かが本当におれを締め殺してくれたら！

「パパ、ねえ、毎日帰ってきてよ。あたしと遊んでよ。ママもそう言ってるよ」

「そうするよ。そうする」とかれはつぶやいた。頬をつたい落ちる涙を、止めることができなかった。頭を床につけ、唇にのぼるすすり泣きを払いのけつつ、からだを軽くゆすって彼女を上下にゆするのだった。

「そうよ、パパ！ もっとやって！ もっと！」こんなに構ってもらえて、子供は狂喜していた……。「この子の要求は何と憤ましいことか」とモロクは思った。

この遊戯の最中に、プリゴツィが戻った。

「大将は？」

「中でエッダと遊んでいます」

プリゴツィが送電線に手をはわせたとしても、こんなにショックを受けたりはしなかっただろう。

「ほほう、そういうわけですか！」かれは昔ながらのようにもみ手をしていた。「今度は優しい親の役を演じている、と！」

ブランシュは憤慨した一瞥をくると、顔をそむけた。プリゴツィは中に入って、遊戯に加わろうとした。でも、エッダはかれになど用はなかった。

「あっち行ってよ。おじちゃん、やだ」

子供の叫びが、かれの衝動を押しとどめた。今度は、こっそり侵入しようとする。しかしそれも効果はなかった。

「おじちゃん、嫌い。あっち行って」と彼女は固執した。

モロクは彼女をなだめようとした。「この人にそんな口をきいちゃいけませんよ、エッダ」でも、彼女は頑固だった。彼女の敵意が本物であり、単なる子供の気紛れな拒絶でないのは明らかだった。

しょんぼりしてモロクは言った。「無駄だよ。おれを嫌ってるんだ。無理強いしたってしょうがない」

子供のあけすけな敵意にとまどって、かれは台所に戻った。「おれがユダヤ人だからかな」しかし、この考えは即座に捨てた。「まだただの子供じゃないか」かれの思考は、あれこれとさまよった。「子供は醜いものにすぐ脅える」とつぶやき、次の瞬間、王女の誕生に際し、かれが初めて鏡を見たときに訪れた終末が、かれを再び襲っていた。かれの思考は、台所の壁にかかっていた鏡に導かれていたのかもしれない。所有者よりはるかに長持ちして、決して消えることのない、しかし完全に荒廃した代物の一つだった。染みがあちこちに散って、反射像も完全に歪んだ鏡だった。

プリゴツィはそれでも立ち上がった。まちががなく、その不気味さ故にその鏡に惹かれていたのだ。そして、それがクレーター口でもあるかのようにのぞきこんだ。思慮ぶかげにひげをさする。かれの持っているこの顔が、アポロンの顔ではないということをは、自分自身にすら隠すのは不可能だった。むしろ、ゴミの山のような顔だった。

プリゴツィは哀れな様子で再びすわり、ブランシュが走り回るのを眺めるにまかせた。ブランシュは派手に愚痴っていたが、何ら結論には達しないようだった。かれを会話

に加わらせようという試みもなかった。しばらくは力ない指先をパタパタさせつつ、興味のあるふりをしていたものの、やがてそのふりでさえ、かれの落胆が増すとともに失われていった。そして全身から力がぬげ、でかい、くしゃくしゃの頭が胸のほうに垂れて、陰気に揺れ、かれは眠ってしまった。

ブランシュはチラチラとそちらのほうを眺めていたが、彼女の関心は、囚人を監視する刑事のそれに近かった。「うす汚いユダ公め」と彼女は繰り返すつづやいた。

もしブランシュにかれの心が読めたら、プリゴツィ自身もこの感情に、不思議にも同意していることを発見したことだろう。

かれは心から本物の友達になろうと希望したのだった。希望した、とわたしは言った。しかし、その希望は、かれがずっと知っていた事実の発見によって失われてしまった。それは、自分がただの奇形で、陰気で、血管にはユダヤの血が流れる汚らしい生き物だ、という事実だった。

第9章

氷河のような滑らかさでもって進行中の食事のさなか、呼び鈴が鳴った。スタンリー・ミラヴスキだった。かれのあいさつは一言だけだった。「こんちわ」

「帽子を取って入れよ」とモロク。

スタンリーは鼻を鳴らし、壁際の背もたれの高い椅子に、まっすぐ腰掛けた。椅子をテーブルに寄せようとしめない……遠慮して、そのままの場所にとどまった。「あたしゃここで結構」と、特有のぶっきらぼうな口調で口ごもった。かれの態度は、一同がまるでうちとけていなかったのかもしれない、ということを物語っていた。

かれの表情の厳しさにも関わらず、非常な質素さにもかかわらず、この人物にはどこか雄弁で、人を引きつけずにはおかないものがあった。スタンリーはポーランド系だった。それを悟るのに、長くはかからない。訛りでわかるのではない　訛りはなかった。話すのは粗野なアメリカ英語で、強いブルックリン訛りがあった。わかる人ならさらに場所をしばって、「第十四区訛り」と呼ぶかもしれない。ある者には、それはひょうきんで浮き浮きするものに聞こえた。ブランシュは、とてもユニークだと思っていた。プリゴツィは苛だった。そのテンポの遅さが、無感動な相手とのセックスをの感覚を呼び覚ましたからだ。

「最近、いろいろ読んでまして」とスタンリーは口を開いた。何の前置きも置こうとはしなかった。かれ流の表現を借りるなら、外野でウロウロしてもしょうがない、というわけだ。だれもかれのきわめて個人的な断言に対し、ことさら反論を行なおうとはしなかった。かれは帽子をテーブルに置いて続けた。……この人物がなぜそんな印象を生み出すのか、正確に説明するのはなぜか難しいのだが、かれはスペインの大公の雰囲気を持っていた。活気づくコントラストではある。無愛想な軍隊風の姿勢、一同のほうに（まるで敬意を表するように）身を乗り出しながら、左手で膝をしっかりとつかんだポーズ、そして唇の輪郭から漏れる例の奇妙なブルックリン訛り。斜め横顔は、アルヴァ男爵の見事な複製だった。七世代にもわたる残虐と不毛の知性が黄ばんだ顔面を作りだし、その唯一の色彩は、鼻の横の細い黒い筋なのだ。

スタンリーは自分の熱意に影響されていた。軽蔑の念が湧かないかぎり、かれがまと

まった分量を話すのは珍しかった。軽蔑の念が湧くと、かれは自分のことばの鋭い刺を金のマレットで叩きだすのだった。しかし、話を続けるにつれて、プリゴッツィの存在だけで、かれにとっては十分な励みなのだ、ということが明らかになってきた。ほとんどプリゴッツィのほうは見なかったが、たまに見たときには、その顔が凍り付いたようなせせら笑いになるのだった。ロシアでのユダヤ人迫害で、金でこの扱いに慣れたかれの先祖たちが、この性格を醸し出したのであった。

「あんた、是非ともこのスウィフトってえ作家を読まなきゃいかんよ」とかれは、その真似のできない引き延ばした声で言った。「皮肉とか、焼けるような毒舌がお求めなら」かれは間をおいてマンヤン博士の真似をして人差し指を掲げて見せた。……「こいつは黒んぼを黒んぼよばわりする方法を知ってるよ。そしてジョナサン・スウィフトが人類を料理すれば、後にはフケしか残らないんですぜ」

「フケ、だって？」とプリゴッツィが吠えた。腹をかかえて笑ったので、フォークをミルクのピッチャーに落としてしまったほどだ。

「そう、フケ」とスタンリーは答えた。

プリゴッツィはその好戦的な口調を無視して笑い続けた。場の緊張を和らげられて、ほっとしていたのだ。

「おい、この野郎はどうかしちまったんですかね」とスタンリーは、プリゴッツィの上機嫌が薄れるどころか度を増したのを見て尋ねた。「おれのことを笑ってんじゃないのは確かですか？ さもないと、こいつの顔面をへこませてやる」

これを聞いて、プリゴッツィは正気にかえった。

上の廊下で電話が鳴った。モロクは飛び上がった。そして、ブランシュが電話に出る寸前に声をかけた。「おれ宛ての電話だったら、忘れないでくれよ、おれは病気なんだからな。面会謝絶……向こうがどんな緊急事態だって言ってもだぞ」

ブランシュはすぐに戻ってきた。

「あなたに。大事なことですって」

「バカ野郎！ いま言ったばかりだろうが……」

「だって仕方ないじゃない。どなたかわからなかったけれど、あなた以外にはだれも伝えられないっておっしゃったし。すごく個人的なことだって」

かれは脱兎のように駆け出した。本当に重要なことなのかもしれない。なにか女がらみの用件かもしれない。受話器をとったかれは、すっかり女の声が聞こえて来るものと確信しきっていた。

「どうした？」と、戻ってきたモロクの顔に浮かんだ重々しい表情を見て、プリゴッツィが尋ねた。

この質問の効果によって、他のみんなは席に慌てて戻った。三人は期待に満ちてかれを見上げた。重くもなく、感動もないため息がかれの口からこぼれた。

「まるで親友を失ったみたいな様子だな」これはプリゴツツイ。

「何か嘘を考えてるのよ」ブランシュは辛辣に述べた。

この最後の発言は、反応を引き出した。

「友人のハリ・ダスがたった今昇天したんだ」

感嘆、驚き、苛立ったような興奮。

「そっ！　それがニュース。アトランティック市から電報だ。当地に親戚や同胞の人間が見つからないので、遺骸をこっちに送るとのこと。差出人はなんとか神父」

「あなた、どうするの？」

「おれ？　何も」

「あの人のお友達と連絡とれないの？　インド人のお友達とか？」

「そんな友達なんて、いたかどうかも知らないや」とモロク。

「あんまり気にかけてもないようね」とブランシュが見立てた。

「気にかける？　どういうこと？　だって、もう死んでるんだぜ」

「ええ、それで遺体の面倒を見てあげるんじゃないの？」

「まさか。死とともに、おれのハリ・ダスに対する興味は消滅したんだ」

「聞きました？」とほかのみんなに向かってブランシュは言った。「いまの、本気なんですよ。これでこの人にとっての友情ってのが何のかわかったでしょう。ついこの間は、友人ハリ・ダスのためならあたしを蹴りだすのも厭わなかったのに」

「確かにいささか冷たいんじゃないか、ディオソ？」とプリゴツツイ。

スタンリーも、一言二言発するよう求められているような気がした。

「いかにもこいつらしいですよ。考えるのは自分のことだけ」

モロクにしてみれば、事態はおもしろくなりつつあった。なぜみんな、死体に対していきなり急に興味を？

「みんな、言いたいことは言ったか？　全部ぶちまけてくれよ。でも、疲れ果てる前に、おれにもきついことを言わせてくれ。……あいつが活着いている時に面倒を見てやったのは誰だ？　飯を食わして屋根を与えてやったのは誰だ？　今になってめそめそしてるお前たちじゃないな。その頃は、お前たちに何の役にもたたなかったやつだものな。……プリゴツツイ、お前もだ……昔は、インド人のクソ野郎どもは、自分で自分の面倒を見てりゃいいんだ、とか言ってたな。我が心優しき女房どのは、あいつをクズ屋みたいに扱ったな……あいつがドブめがけて手鼻をかんでるのを、ご近所に見られやしないかと心配してたんだ。あいつは田舎者だった……笑いも騒々しかった。それに、こちらの女王様の

お気に召すほどしょっちゅうは風呂に入れなかったしな」かれは嘲笑するように見回した。……「さて、あいつは急に死体になった。突然、涙と哀悼と頌徳。もうあいつには何もしてやれないだろう……死体なんかに。聞け、聞抜けどもめ……死体なんかくれてやる。せいぜい楽しんでくれよ。おれは死んだからだなんか好きじゃない……臭せえだろうが。花輪だって買ってやる気はないね、驚いたか。それとついでに」 とかれは視線をブランシュに向け 「葬式の金なんて、どこでおれが調達できると思ったんだよ」

ブランシュは混乱していた。「それは……だって、知らないわよ」彼女は口ごもった。「どっかから借りるとか……」

「そんな必要はない」プリゴツィが割り込んだ。「寄付をつのろう。あいつが共同墓地に葬られるのは嫌だろう」

「なんで？」モロクは叫んだ。「どこに埋められたって、何のちがいがあがる？ いまのあいつは、以前にも増して邪魔だろう。でも、社会は死体を処理するときのほうが、手際がいいからな」かれはブランシュのほうに再び向き直った。「金があまってるなら、ちょっと借りてスーツを何着か質から出すのに使いたいんだ。あいつ、おれの最高のスーツを質草にしてるから……というか、入れてたから。たぶん、まだあいつが持ったままだろう。このままだと、スーツはムシに食われるだけだ」

ハリ・ダスの急逝は、スタンリーにそもそもの訪問目的を思いださせた。かれはスーツを借りに来たのだ。

「こいつを二、三日質草にしたいんですがね」とかれは、モロクの上着に手を触れた。「家主にえらく払いをためてたもんで、追い出すとかぬかしやがるんですよ。何ドルか用だててもらえたら、一週間かそこらやっこさんをおさえおけるんですがねえ」

モロクとしては当然、スタンリーがまた職にあぶれているのだと判断した。スタンリーは職を転々とする傾向にあった。

「いやいや、そういうこっちゃないです」とスタンリーは屈託なく保証をよこした。「最近ちょっと休んでたもんで、手持ちがなくなっちゃったんですよ。それだけ」そして、付け加えるように 「物を書く気になったもんでしてね。おわかりでしょう」この情報は、あらゆる矛盾を言い逃れられるべく計算されて賜われたものだった。

モロクは、その苦行に従事するスタンリーの姿を脳裏に思い描くことができた。かれのロマンス小説 スタンリーは自分の試みをそう呼んでいた は台所で行なわれるのが常だった。流しがかれの机だ。かれが自分の創造的な本能を、こうした環境下で養う必要があるというのは、それ以外の所帯が騒々しすぎるという、非常に現実的な理由があった。かれは五人の子持ちで、みんな靴を投げ付けない限り手のつけようがなく、しかも投げ付ければ、細君といさかいが起きるのは必定だったのだ。したがったかれは、苦い体験

を通じて、既述の聖域に引きこもるのが得策であると学んだのだった。

ミラヴスキー邸の鼻汁色の壁をながめつつ、モロクはよく思ったものだ。こんなところで「ロマンス小説」とは、スタンリーはじつに強靱な詩的才能を持ち合わせているにちがいない、と。

似たような感慨は、明らかに他のみんなも抱いていた。

プリゴツィは、かれなりの無骨なやりかたで、数瞬前に自分が生み出した貧しい印象を、消し去ろうと努めていた。「何を書いてるんだい？」とかれは、同情的に、しかし臆することなく尋ねた。

「あんたが興味を持つようなもんじゃねえよ」

「なぜわかる？」

「そうだな……手短かに言おう。あんた、ドライサーとかいうやつが好きなんだろう？」スタンリーは、異端審問官トルケマダの、礼儀正しい尋問用のしかめ面をしていた。

プリゴツィは肯定せざるを得なかった。しかし、そのまま即座に、自分の肯定を確固たるものにすべく言葉を継いだ。「ドライサーの代物の一部はただのジャーナリズムだと思うけれど、でも『ジェニー・ゲルハルド』とかをござらんよ。あれは最高だ」

「最高！ ああいうのは安っぽってんだ。さて、こちとらあの本は十五ページばかり読んだだけだがね。あたしがあんたのシオドア・ドライサーをどう思うか聞きたいか？ あたしゃあの最高の文学と称するしるものを、下水に押し込んでやったよ……そうとも！

それについて何か言いたいことはあるかよ」

プリゴツィの答えは下品な笑いだった。

スタンリーは続けた。「最高の作家と言えばだな、おい……ピエール・ロティって知ってるか？」スタンリーがこの名前を強調した口調を聞いたとき、プリゴツィとしてはそれを、相手が崇拜すべき神を持ちだした警告と考えるべきだったのだ。スタンリーは、誰それ（たとえばプリニウス、ユヴェナリス、ペトルルカ）を知ってるか、と尋ねたいときに、誰それを知ってるか、と口にするという悪い癖を持っていた。

プリゴツィはロティを知らないわけではなかった。そこでかれは、自分の読書範囲について述べ始めた。「そうだなあ、かれの『アイスランドの漁師』はとても美しい物語で……」

「あんたがどう思ったかなんてどうでもいい。おれはおれの思うところを述べさせてもらおう」

「自分の気に入ったものとなると、スタンリーは自分こそが権威だと思ってるんだからな」モロクは社交辞令的に口をはさんだ。そしてプリゴツィにウィンクして見せた。

だが、スタンリーは執念深かった。

「あんたは黙っててくれ」とかれは命じた。「この頭でっかちに、文学ってもんを教えるやるんだ。ジャーナリズムなんかどうでもいい　わかったか？」とかれは苛烈にプリゴツィをにらみ据えた。「それと、おれが何か言うときには、日和ったりはしねえぞ。誰それにはいい作品もある、なんていわねえんだ。おれにとって、作家のしごとは全部いいか、全部悪いかどっちかなんだ。それで決まり。もしそいつがダメなら、おれは落とす。もしよければ、とことんいいんだ。おれは中途半端ってのは信じてないからな。……さて、ここで述べたこのロティだが、こいつはおれの崇拜してる野郎でね。きれいな細部なんかには深入りしない。カメラを脇の下に抱えたりもしない。ゾラ二号になろうなんてしてないんだ。それとあんなかわら版屋のシオドア・ドライサーなんかとは比べ物にもならない……それとか、あの『街頭の男』を書いた小ズルい阿呆、なんて言ったっけ……ルイス、そうだった、シンクレア・ルイス。あんなやつクズなんて、そもそも誰が読みたいもんかね。あんな長ったらしいおまじないみたいな代物、いつになったら終わるのかと思っちまう。トルストイかなんかのつもりかね。あの野郎は、生真面目すぎるんだよ。それに、そもそもアメリカなんて小説のネタになる場所じゃないし。ここにはロマンスってもんがない。どうしろってんだ　すわって、八時間労働について書けってか？　ところがこのロティって旦那はだ　こいつは毎年ベストセラーを送りだして背中を痛めるような真似はしない。こいつはじっくり自分の時間をかけてる。フランス海軍を気楽につとめあげて、世界を見てまわり、あっちこっちで恋をして……。つまり、こいつは普通の人間だったんだ。昨今だと、文学ってえとすぐに浮浪者かおかまでないって感じだからなロティは世界をめぐる人間で、しかも紳士だ！　本を書くのに、図書館にでかけて調べ物をする必要なんかありやしなかった。たとえばかれの『エルサレム』。シオドア・ドライサーだのシンクレア・ルイスだのに、あんな作品が書けるもんか。連中なんかにや無理さね。連中は、汚ねえ下着だの、脚腰たたない工員どもについて書けなきゃおしまいなんだ」

ここでスタンリーが間を取ると同時に、ほかのみんなは顔を見合わせた。その視線には、例えば時々陪審員の間に関わられるような暗黙の了解がこめられていた。別にそれは、スタンリーを軽んじるものではなかったが。

「でも、おれが言いたかったのはだね、かれの『魔法から醒めて』という本がある。あんたらがこれを何て言うかは知らないけれど、おれはこいつを素晴らしいロマンスだって言うね」だれもスタンリーに、ロマンスという言葉は後半にアクセントをもってきたほうが耳触りがいい、ということ説得できなかった。

「おれもそう思うね」一同の驚きをよそに、プリゴツィがことばを発した。「あれはなかなかよかった」

「なかなかよかった、だと？」スタンリーの腺が生産できる硫酸の総量が、この「なかなか」の一語に注ぎ込まれた。「なあ、あれ以上のものは、生涯二度とお目にかかれなげ！」

なかなかいい、だと！　なんて鼻持ちならねえ偏屈だ。この調子だと、次はかれを、例の馬ヅラのフランスのユダ公と比べ始めるぜ……あいつ、なんてったっけな、ディオーン」

「たぶん、アナトール・フランスと言いたいんだろ」

「そうそう、そのフランス。フランスってのはペンネームだったっけ。あんたならあいつを優れた作家と称するだろうよ、え？　まったく見事な学者だよ、一日中象牙の塔にこもって、羽をつくらってる……社会主義者になったと思込もうとして。いやあ、笑わせてくれるぜ。汗水たらして働いたことなんか、一日たりともないんだから。どっかの女に食わせてもらってたんだろ　おれはそう聞いている。ああいう、単なる暇つぶしで文学に手をそめてるようなやつは多いからな」

プリゴツィは、この批評的痛罵の放たれる間、何度かフォークのスパゲッティを飲み込もうと、試みては失敗を繰り返していた。しばらくはかれも最高の作法を示していたものの、会話が次第に熱を帯びて来るにつれて、テーブルマナーもおろそかになっていった。スタンリーの話に割り込もうとして失敗するたびに、プリゴツィは割れた爪で頭を掻くという動作をとるのが見て取れた。ついにかれは興奮の極致に達し、猛然とのどをつまらせては咳込むという発作に襲われた。極度の苛立ちと、まっすぐに喧嘩に突入したいという熱狂的な欲望によるものだ。特に深い理由もなく、かれはハンカチをもてあそんでいた（そして几帳面にそれで鼻をほじくっていた）が、その下端が皿に入りかけているのも気に留めていなかった。それをスタンリーが見つめているのに気がついて、初めて自分のうっかりさ加減に思い当たったのだった。そのハンカチをズボンのポケットに突っ込みつつ、かれはそれがいかに汚れてクシャクシャかに気づいて驚いた。

スタンリーは嫌悪を隠そうともしなかった。もうピエール・ロティや『魔法から醒めて』の話の続けさせるのは不可能だった。かれはモロクを招いた。「ちょっと一瞬、外に出ないか。個人的に話したいことがあるんだ」

外でスタンリーはかれの耳にささやいた。「なあ、あのユダ公を自分の家に追い返しちまわない？　おれ、あんなやつがいるところで、話なんかできねえよ。あいつを追い払って、チェスでもやろう。……それとスーツも忘れないでくれよ……どうしても要るんだ！」

モロクはスタンリーの率直な要求に同意するつもりなど、さらさらなかった。プリゴツィの顔に浮かんだ、悲しみにくれた悲痛な表情を見たからには、なおさらだった。しかし一方で、スタンリーに自己弁護の機会を与えるつもりもまったくなかった。ちょっとでも挑発すれば、スタンリーはすぐに口を開いただろうが。そこでモロクは自分のしゃべり

に逃避するのだった……。

許容可能な等式の偽装を回復すべくモロクが放った言葉の洪水は、夕食のテーブルにおけるまったく不相応な環境を気にする主人の滑らかな談話というよりは、むしろヤク漬けになったハムレットの独白に似ていた。かれは議事進行を妨害するために長々と演説する不名誉な議員が、その我慢大会の最初の三時間できるように、アイデアの関連の法則を死ぬほどつきつめるところから始めた。ブランシュはたまにかれが見事な一節を口にすると、顔をあげてうなずいて見せた。二人がきちんとした会話をじみたものを交わすことは非常にまれだったので、ブランシュは、自分の夫がその気になればどんなに見事に話せるものか忘れていた。プリゴッツィを見据えつつ、モロクはこの人物の熱狂的な脳に取り憑いているに違いない疑念という悪魔を追い払うべく、こまやかな努力を見せた。同時にかれは、プリゴッツィとスタンリーが持つ、まともな人間なら考慮にいれて忘れないと思われる共通点についてたっぴりとほめかし、食卓におけるユダヤ人虐殺をうまく圧殺しようとした。

それはまるで、パラソルがないことさえ除けば綱渡り芸のようなものだった。確実な足取りで器用に突進し、均衡点を求めてあれこれ思案するよりは、むしろのりくらりとはぐらかす　それが最も安全な方法だと思えたのだ。そして、突進しつつ……かれは執筆の苦しみについての砲撃を開始した（「グリスウォルド、用意はいいか？」とマニラ湾でデューイ提督は言った）。朝の精神状態の記憶がまだ暖かく、強力だったのだ。それ以降、かれは教会の尖塔の記憶に喚起された、男根崇拜の謎について、聖書解釈学的な熱意をもって語り始めた。その無数の尖塔は、その時にはまだ確定もしていなかった目的に向かって戸口から足を踏み出した時、モロクの想像力をかきたてたのだ。プリゴッツィの顔に浮かんだ、至極もったもな困惑の表情に気がつきながらも、プリゴッツィが（多幸症に関する派手な解説によって）主導権を握ろうと試みるのではないかと心配して、かれは自分の話の脱線を修正して鐘楼のツバメに話を戻した。ツバメの話にしばらくとどまってから、かれは遺伝の最新理論に触れ、エンドウ豆（……エンドウ豆だったと思ったが、それともナデシコだったっけ？）を検体として遺伝法則の理論を確立した僧侶（名前は忘れてしまった）の仕事について、軽く言及した。プリゴッツィがこの機会に、この僧侶の実験に関して意見を述べたいのを知っていたモロクは、自分からかれを名指しし、そして急いで次の話題に移り、自分がこの腕白坊主の銃を封じた手腕の鮮やかさに悦に入るのだった。ツバメが鐘楼でとぐるを巻くに任されてから先、話の持っていくかたは数通り考えられた。そのまま続けて、昔のブルックリンで生きられていた人生の多様な側面について、しつこいくらい耽溺してもいい。特に、街場の生活（たとえば古いブルックリンの肝臓とも言うべきマイアトル街）　それとも、小説の舞台としてブルックリンを用いるのは商

業的にも美的にも失敗である理由を二十一個並べ立てることもできた。しかしこの時点（第二の選択肢関するに向かう道を半分くらいまでたどりつつ、僧侶についての話のしっぽをまだいじくっている）でかれは、戦闘中の両陣営のどちらかが、聞いたこともないような本の題名を投げてよこして自分を困惑させるのではないか、という不安にまだ捕われていた。つまり、この時点までにかれは、完全に安全だと感じるまで話を自分一人で掌握しておくつもりだったのだ。そしてその間は、己れの高貴な額には月桂冠のみを戴くつもりなのだった。しかし、最後の瞬間になって、エンドウ豆や僧院との関連で知っている雑事を一かけらも余さずに蕩尽しきってから、かれはまったく別の針路に進むことにした。……自分が聴衆を退屈させている可能性もあった。小話を……冷たい水を少し！ 自分の話をそらすことに決めたとはいえ、話題のあてはまったくなかったが、しかしテーブルクロス（プリゴツィの前の繕い）に目を落とすと、ロシアの物語からのエピソードが空白を満たした。

もちろん、だれも退屈などしていなかった。三人はあっけにとられていた。かれが黄泉の国の案内人と化して、冥界ツアーへとかれらを導いたとしても、これほどは楽しめなかったにちがいない。この不思議な雄弁さを導いたものは何なのだろう？ 各人はそれぞれまったく個人的で、しかももっともらしい理由を考案して見せた。たとえばスタンリーは、これが廊下で自分のささやいた示唆の結果であると確信していた。これは、プリゴツィを追い出すための、モロクなりの効果の薄い手法なのだ、と。しゃべりまくってかれを追い払うつもりなのだ、と、思っていたのだ。……が、ここは小話に戻ろう。それはまさに、まるで関連性のない、まったく脱線しきった話で、ロシアの伝統に則り、法外にケチな農奴（農奴の基準からしても、まだケチなのだ）についてのものだった。「農奴の基準からしても、まだケチなのだ」という修正条項を含めることにしたのは、「ケチな農奴」という表現を使ってからで、それはみんなを笑わせようとあせるあまり、農奴におけるケチさ加減は特に誉められるべき性質のものではないということを忘れていたからだ。が、だれもそれに気がつかなかったようだ……

「百姓の家でテーブルクロスを使うなんて、馬鹿げてると思うだろう。でも話ではそうなってるんだし、おれとしては作者がそこらへんのことは承知していたと仮定する。手短に言うと、この百姓は、自分に影響しそうな経済的可能性をすべて考えたうえで……」このように話は進み、最後には無理矢理オチに導かれたのだった。そのオチとは何かって？

ああ……つまり、そのテーブルクロスは一枚で二役を果たしていたというわけ。「考えても見ろよ。汚ないテーブルクロスの上で寝るなんて、一晩中渴いたパン屑の上で寝返りをうつなんて！」とかれは結んだ。

この時点で、聴衆は一挙に噴火した。

スタンリー、無愛想に曰く「そんな話はまるで信じられないね」

モロクはこうしたいいくつかの譴責を上機嫌で受け止め、そして昔の海賊船のように、さらに深い海を目指して再び船出した。自分の祖父の形而上学に関する関心について、予想もつかないばかげた話をするつもりだったのだ。なかでも宇宙の起源に関する話題にしぼりこんだ。かれの祖父は、宇宙の創生に関して奇妙な説を持っていたのだ。

しかしスタンリーはもはや自分を抑さえられなかった。「こんな駄弁りはもう充分だろうが」

ブランシュは決然と椅子を横に押しやり、一同に、自分はもう寝ると告げた。「わたしがいなくなっても困ったりはしないでしょう」と彼女の冷たい声が響いた。「わたし、宇宙……創生、でしたっけ、そんなお話には何も貢献できませんし」彼女が「宇宙創成」ということばを口にするときの口調は、まるで「冗長語」などのまったく意味不明のことばを口にしているような様子だった。

一同は彼女が去るのを、引き止めようともせずに見送った。そしてスタンリーが再び場を制した。

「哲学と言えば」　かれは二人を拳銃の銃身をのぞきこむかのように見つめた　「こないだ新聞で取りあげられてたやつがいて、そいつが大したやつなんだ！　しかも、そいつなりの方法で哲学者。おれの読んだ限りでは、そいつの誇りってのが、完全に必要不可欠でないかぎり、だれも殺したことがない、ということなんだと。『わたしはみんなに機会を与えてやった』とこいつは死刑囚の独房を出るときに、報道陣に語ったんだって。でもどうやらそいつの言う機会とやらを有効活用した人間は、ほとんどいかなかったらしい。こいつは十二、三人を無慈悲に殺したんだ……。最後の最後になって、連中はこいつに信仰心を起こさせようとした。まず、神父を呼んできた。それからメソジスト派の牧師でも、こいつは気転ってものを持ち合わせてたんだ。それでみんなに地獄に落ちると言い返した。『これまで神さまなんて必要としたことは一度もない……これから行く先でも、特に必要だとは思わないぜ』だと。あの世での鬼だ悪魔だって話に脅えるタマじゃなかったんだな。『おれのために何かしてくれたいんなら、葉巻と新聞の最終版を買ってくれ』ばかげた頼みに聞こえたけど、でも死刑囚の最後の願いはかなえられるのが普通だろ。それで要求通りのものが与えられた。……こいつは介添えなしに電気椅子に向かって、静かにすわり、葉巻に火をつけて、夕刊の最終ページを開いた。そこにはかれの死刑の様子を描いたイラストが載っていた。それからこいつは、この低能どもでも言うようにみんなを見回し、こう言った。『さっさと済ませろ……やることをやってくれ！』……こういうやつこそ、本当に肝のすわったやつだよな。刑に見合うだけの度胸があったんだ」ここでかれは、死に際になって悔悟して、手に十字架を握って死ぬ文学畑の物笑いの種どもについ

て、痛烈な意見をすこし述べた。

プリゴツィはスチーム暖房のように活気づいた。ヴォルテール、インガーソル 十もの名前が唇にのぼりかけていた。

「あの手合いみんなだ」とスタンリー。

「まったく冷酷で、良心のかけらもないといえ、おまえもなかなかのもんだよ」とモロクが割り込んだ。

スタンリーはこの悪口に、まるで気を悪くしていない様子だった。この宣言を、誉め言葉として受け取ったのだ。

「あんたの言い分にも一理ある」とかれは、派手な笑みを抑さえきれずに答えた。「おれが海軍のヤードで働いてた時の話はしたっけ？ おれ、ダニエル書記官に請願をしに、ワシントンに送られたんだ。してなかった？ そうか。それなら是非聞いてもらわなきゃ。度胸と言え、あの頃のおれは度胸の塊だったもんなあ」

少々励まして、スタンリーはとめどなくしゃべりだした。

「これはおれがエリス島をクビになってからのことなんだけど。あの頃はまだポーランド語がペラペラだった。この海軍ヤードでの仕事は楽勝だった。夜の作業。何一つやることなんかなくて、賢そうな顔してすわってるだけ。ほかの連中は、トランプしたり、わい談したりとかで暇を潰してたけど、おれはそんなのすぐに飽きて、余った時間は書きものをして過ごすようになってた。書いてたのは大した代物じゃなかったけど、でもすごく練習にはなったな。長い手紙を書くんだ。それも、自分で言うのもなんだけど、機知に富んだやつ。少なくとも、そのグズどもはそう思ってくれた。投函する前にそいつを回覧して、みんなに死ぬほど笑う機会を与えてやったんだ。うまく投函し忘れることもよくあった……というの、宛名は架空のことが多かったからな。すわって、何でもいいからその時に面白いと思ったテーマについて書いて、書き終えたらいい加減な名前をてっぺんにくっつける。『親愛なるフレデリック』とか『親愛なるホセ』とか。単なる気まぐれで、時々はへんてこな名前を編み出したりもしたよ。モスクワ・ファイフとかメルクワール・スヴェンガリとか。構いやしない……どうせ誰も気がつきやしないんだから。とにかく、この出鱈目はしばらく続いて……そうそう、言うの忘れてたけど、おれ、手紙の返事もうまいことでちあげてたんだ。そのほうがもっともらしいだろ。とにかくしばらくすると、おれはヤードではちょっとした有名人になったんだ。なかなか頭のいいやつで、ちょっと変わり者かもしれないけど、でも覇気があるってね。そこに一年ほど勤めてそれと、過去のことは話さないようにしてたんだぜ そしたらその連中がある日、代表としてワシントンに行ってくれないかって言うんだ。ダニエル書記官に、賃上げの請願をしたいんだって。おれは、考えとくって言って……」

かれは咳払いをして、ターキッシュ・トロフィーに火をつけた。

「おれとしては、申し出にいきなり飛びつくより、多少はためらいを見せたほうが外交上有利だと思ったわけ。でも一方で、もちろんご察しの通り、そのダニエルズ書記官とやらに聞かせる演説の準備も始めた。思惑通り、ある日連中が束になって、請願書の署名を手におれの穴蔵にやってきた。『スタンリー、お前しかいないよ』と言って、経費として百ドルくれた。おれは、感極まったみたいに赤面して口籠もってみせたけど、もちろんはなからこうなるのを予想してたんだ。とにかく、おれは百ドル札をポケットに押し込んだ。ピン札で、ウェハースみたいにすべすべで薄かったなあ。今でも、あの札がポケットにすべりこんだ感触は忘れられない……ホントにスルッと入ってきて、その一方でおれはこう言った。『わかったよ。朝イチの汽車で出かける』」

「その先は大方想像がつかないなあ」とモロクはずるそうに言った。

「黙って聞いてろって。あんたは何が起こったか知らないんだから。こいつはO・ヘンリーの小説とはわけがちがうんだ。おれが話してやる」かれは鼻をならし、プリゴツィのほうをもったいぶった様子で見やった……「その晩、事務所を後にしたおれは、軍楽隊長みたいな気分だったよ。ヤード中のみんなが事務所にやってきて、おれと握手しては幸運を祈ってくれたんだ。スタンリー、スタンリーの大合唱。まるでハミルカー・バルカにでもなった感じ。……もちろんおれは、えらく気分が高揚してた。その頃はまだほんの若造だったし、このワシントン旅行はえらく重大な事のように思えたからな（ゲティスバーグでのリンカーンの気分がわかるうってものだ！）少なくとも、いい返事をもらってこなければ、それ以降はずっとのけもの扱いだったのはわかってた。特に奇妙なのが（これに気がついたのは、旅費を受け取った後のことだったんだが）おれの任務がどれほど困難なものかってことだ。書記官のドアにたどりつくまではいい。でも、その後は？ おれの用意してた小綺麗な演説時たら……なんてこった！ その瞬間、それがモノにならないのがわかった。突然思い当たったんだよ。あんなの、学生が卒業式にするような演説だって。美辞麗句をつらね、プラトンだのアントニウスだのナポレオンだのへの言及だらけ　ナポレオンじゃなくて、ベレロフォン号に乗ったネルソン提督だったかもしれないけど、よく覚えてない。ポンティウス・ピラトまでが引き合いに出されてたっけ……なぜだかわからないけど、ただ、おれは昔からこいつをすごく尊敬してたんだよ……不当な扱いをお受けるように思えてならなかったからな。でも、それはこの際おいとこう……。演説の事を考えれば考えるほど、そして削除しなけりゃならない部分のことを考えるほど、おれはどんどん落ち込んでた。数間も歩くうちに、軍楽隊長じみた気分は一掃され、自負心もいくらか消え失せてた。ここだけの話、おれはパンクしたタイヤみたいな気分だった。こうつぶやいた。『こいつは実在しない相手宛てに仰々しい書簡文をものするのは訳がち

がうぞ』うんにゃ。ダニエルズ書記官は生身の人間で、しかも聞いたかぎりでは、生易しい相手じゃなさそうだった。こうした不安の真っ最中に、たまたま酒場の前を通りかかった。よくよく考えもせずに、おれは本能的に向きを変えて、スイング・ドアを押し開けた。超一級の酒場だった！ サーカスの鏡の館みたいでさ！ 一面が光の洪水！ ジュークボックスが大音響で流れてて……呑んだくれた酔っ払いが、一晩中コインを投げ込んでた。いい光景だったよ、人生の意欲が戻ってきた感じ。バーテンは　　そうそう、こいつのことは是非とも話しかないと　　高等教育を受けた人間だった。後で、ハーバード出なのがあった。それを鼻にかけたりはしなかったけどな。とにかく、おれはそいつがえらく気に入ったんだ。風采がよかった……」

スタンリーの機嫌を取るかのように、プリゴツィが口を開いた。ただの立ち回りのうまい間ぬけじゃなかったんだな？」

「そうそう、わかってるじゃないか。うん、こいつは慎みのある、偏見のない野郎で、他人ごとに口をはさまないでいられるやつだったんだ。それに、ドリンクの扱いも見事なもんだった！」

「ハーバード出、とか言ったな？」とモロク。

「うん……なあ、邪魔しないでくれよ。何を言ってたのか忘れちゃうから」

「ドリンクの扱いがどうのって言ってただろ」

「そうだった……で、こんな具合だった。最初、おれはほどほどにしとくつもりだった。もともとは、考えをまとめるのに二、三杯引っかけたいだけだったからな。ポケットには、自前の金だってあったんだ　おれ一人分のお代くらいは優にあった　だから、ビールを何杯か空けた。十セントもあれば、大層なグラスが買えたんだ……ほら、大ジョッキってやつ。それを言うなら、当時は十セントでビールのピッチャーだって買えたはずだよな。……ジョッキを何杯か空けてから　バーテンの勧めでジョッキに移ったんだ　頭が一向にすっきり働かないのに気がついた。バーテンは二、三分おきに、自分と一杯やろうっていう。おれはまだ、泥酔状態ってわけじゃなかった……ちょっと酔いがまわってきてたのは確かだけどな。でも、呑んでくれたわけじゃないのは自分でわかってた。で、このバーテン　こいつはホントに礼儀正しくて、いんぎんで、口のたつ野郎だったんで、おれとしてはとても断わりきれなかった。だから、もう何杯か　三、四杯だったかも　そいつと呑んだ……払いは向こう持ちでね。それと並行して、おれのとなりで別の議論が展開してた。スパツと、バター色の手袋をした野郎二人が、進化論についてしゃべってたんだ。一人は司祭になるべく勉強してるんだと……まったく、信じられるかよ。それも、ごくまっとうな野郎だったんだぜ。そいつが友達に、ダーウィンてのがいかにインチキ野郎で、進化論ってのがいかに机上の空論で、主要な論点で全然論拠が薄いとか

んとか、粗探しをしてるの。ふと見ると、バーテンが聞き耳をたてて、間もなくおれに合図を送ってよこす。その神学校の生徒のほうにうなずいてみせて、『こちらの牧師さんに、聞いてあげてくださいよ』って言うんだ。『エルンスト・ヘッケルのことを聞いたことがあるかって』こいつ、自分は巻き込まれなくなかったらいい……たぶんクビになるのが怖かったんだろう。だから、おれをうながし続ける『ほら、形態学的な証拠の話をしてやってくださいよ。発生学についてちょっとしゃべってやってくださいよ』そしてその間中ずっと、ずるそうにウィンクし続けるんだ。なんでおれが進化論者だと思われたのかはわからないけど、まあとにかくおれは誘いにのったよ。ヘッケルについてはあんまし言えなかった。だって、早い話がおれ、ヘッケルのことも、ヘッケルの形態学的な進化の証拠のことも、あんまし知らなかったからな……もちろん、当時はってことね。でもおれは、ハックスレーに関するすごい一節を投げてやったんだ（昔はハックスレーなんて朝飯前で読んでたからな）。どうだい！ おれが話終える前に、二人は席を立っちゃった。ま、おれはバーテンの方を見て、バーテンはおれを見て、それで二人して死ぬほど笑ったよ。『トマス・ハックスレーに乾杯』と向こうは上機嫌で言って、大ジョッキを二つ満たす。二人ともさっさとそれを空けて、それで今度はおれが言った。『こんどはエルンスト・ヘッケルに乾杯といこうか』てなわけで、続いて『発生学』と『形態学』に乾杯が続いて、その頃にはおれはかなりベロベロになってた……言っとくけど、それまでの二年間はずっとおとなしくしてたんだぜ……酒は一滴も口にしてなかったんだ。それでまさに、ここぞ頭をしっかりとさせなきゃって時に、ドッカーン！ 昔の酒癖に戻っちゃった。でも、戻りつつ、それを真剣に考えなかったんだな。正直言って、ワシントンへの旅行のことなんかまるで頭に浮かばなかった。しばらくすると、もちろんのこと、おれはチョコッキのポケットの小銭を全部使い果たしちゃった。じきにおれは、例の百ドル札を引っ張りだした。なかなか豪勢だったぜ！ まるでその手のことを、何年もやりつけてる人物みたいな感じで引っ張りだしたんだ。バーテンは仰天してた。おれがそいつをバーに叩きつけたら、なんて言ったと思う？ こうだ。『こいつは朝まで私が預かってた方がよくはありませんか？』なかなか的を射た人間だろうが？ 『いやあ、なに、そいつはこの午後、ポーカーで稼いだ、ただのあぶく銭でね。稼ぐのが速けりゃ使うのも速いってわけだ』とおれは、親しげに微笑んでみせた……それで向こうはお釣りをくれたんだけど、五ドル札と十ドル札と、それに一ドル札も死ぬほどあったな。おれにしてみれば信じられないほどの札束だった。世に、馬に食わせても余るほどの大金ってやつだ。向こうのおごりでまた一杯やって、それでおれはそこを出た。まったく、もうべろんべろんだった！」

スタンリーはもう一本タバコに火をつけた。メッカだ。ターキッシュ・トロフィーよりも高級なタバコだ、とスタンリーは宣言していた

「店を出ると、真っ先に目に入ったのが、古臭い馬車で、何とかのてっぺんにでっかい黒ん坊がちょこんとすわってる。手には客車でも真っぶたつにしそうな長い鞭を持って。『よお、兄ちゃん！ こっちだこっち！ この旦那さんをコニー・アイランドまで乗せてけや！』って言ったら、向こうは聞こえないふりしたけど、でもおれはそのクソ馬車の後を追いかけて飛び乗った。なんでそんなことができたのかは、自分でもわからん……そいつにおれがちゃんと金を稼がせてやる気なのを示すため、てっぺんの小さな箱からホヤ・デ・モンテズを何枚か渡してやって繰り返した。『黒ちゃん、コニー・アイランドだ……ドリームランドへ、出発進行！』おれたちはトロットで動き出した。数分でおれはぐっすり眠っちゃった。目を覚ましても、まだ夢うつつ。『コニー・アイランドでっせ、旦那』と黒ん坊は繰り返してて、まるでおれがそれに反対するとでも思ってたみたいだな……。確かにそこはコニー・アイランドだったけど、神さま！ おれたちはサーフ通りにいて、歩道には群集が山ほどたむろしてた。おれは馬車の運ちゃんに五ドルをくれてやって、釣りはとっとけて言ってやった。それからあたりを見回す。いやあ、まったく一面の乱痴機騒ぎ！ まだ酔いは残ってたけど、むしろ不機嫌のかたまりだった。仏頂面で……このすが目の世界が丸ごと吹っ飛ばしまえって気分だった……こうして到着してみると、いったい何をすればいいかわかんなかった。そうやって三十分も立ってたかな　それとも五分だったかもしんない（もう時間なんかどうでもよくなってたんだ）　すると、水平帽をかぶっためまいのしそうなブロンドが、おれの腕をつかんでこう言う。『兄さん、お一人？』とっさに浮かんだのは、一発なぐりつけてやろうかってことだったけど、でも向こうが静かに優しく話し掛け続けたもんで（ただの売女のくせにな）、何が何だかわからないうちに、おれたちは二人で腕を組んで、サーフ通りをそぞろ歩きって寸法。まるで新婚さんみたいにな。『どっかに入って、ちょっとこの件について話し合おうぜ』女がおれに実に巧妙にくっついてたもんで、その群集の中で彼女からうまく逃げ出そうとするのも、ちょっと恥ずかしかったんだ。この手の娼婦が何をたくらんでるか、知れたもんじゃないからな。おれに侮辱されたとか言って騒ぎだすつもりかもしれないだろ。おれとしては、危ない橋はわたらないことにしたんだ……だって、あんな状態じゃな。女が、すぐその静かで落ち着ける場所を知ってるって言うもんで、おれは向こうの言いなりについてった。

二分後、おれたちはイカしたカフェに入ってた。柔らかな光があふれ、ゴム底の靴をはいたウェ이터たちが、重い銀のお盆を持ってうろついている。どっちを向いてもクリスタルガラスだらけ。塩入れさえ、おれたちだけのために特別に磨き立てられたみたいに、キラキラ輝いてた。……だれかがおれたちの前にでっかいワインのびんを置いたのには、すぐに気がついた……黄色いワインで、シャンペンみたいな味がした。『こいつはどっから

湧いてきたんだ?』まだその程度の質問をするくらいの理性は残ってた。『まあ、あなたが注文したんじゃないの。いやあねえ、記憶力が弱いんだから』おれはビシッと怒鳴りつけてやった。『記憶力が弱いだと! おまえはとんでもないウソつきだぜ』。……『つまようじなんか注文した覚えはないぞ』すると女はにっこりしやがる。『落ち着いて、ね、落ち着いてったら。それとも担架で運び出されたいの?』その口調はえらく陰険なドスが効いてたもんで、おれはすぐにおとなしくなって、気のいい野郎みたいに振る舞うことにした。ただしそれも、自分のおかれた立場を悟るまでのことだったけど。とにかく、たかがワイン一本じゃないか。もう五ドル出せばいい。あの時はそういうお大尽気分だったんだ……で、まあ端折って言えば、そんな具合でもう九十五ドル出しちまったんだ。ワインをもう少し、シーフードの夕食、シャンペンとコニャック、ドアマンに高級葉巻を一箱、女の病気の親戚のためにはおもちゃを少々、そして女自身にも、朝まで餓えないように小銭を少々。いやあ、百ドルがああも急速に消えるとはねえ!

でも、そんなのはおれの問題の始まりに過ぎなかった。……朝になって自分の近所に帰りつくとき、恥ずかしすぎて家になんか帰れなかった。だから角の酒場に入って、自分をしゃんとさせようとしたんだ。とにかく何はともあれ、ワシントンに行ってダニエルズ書記官に会おうと決心はしていた。……でも、手詰まりだった。経費はおろか、汽車賃すらどう工面すればいいかも思いつかなかった。で、信じられないかもしれないけど、おれはその酒場で三日間もごろごろしてて、たまに出かけちゃあ、近所のあいつやこいつから、何ドルかずつ借りてたんだ。一方でその間中、女房はどう思ってるだろうと思案し続けた。不安がつのりすぎて、新聞を見るのも怖くなった。見だしに自分の名前が出てるんじゃないかってね。……三日目の午後、酒場に入ってきたのが、他ならぬ海軍ヤードの野郎だったんだ! いやあ、おれは死んじまいたくなかったよ! 『おやおやスタンリー、一体全体、こんなところでどうしちまったんだい?』と向こうは陽気にさえずる。はっきりいって、向こうもかなり冷静にふるまってくれたよ。おれのほうは、ビビリきってて、一言もしゃべれなかった。……突然そいつの声から、親しみが完全に消え失せた。『おい貴様、よく聞けよ。明日の朝まで時間をやる。それまでにワシントンに行って、請願書を提出してくるんだな』一度言われりゃじゅうぶんだった。向こうが脅しで言ってるんじゃないのはわかったもんな。もう即座に酔いがさめたぜ。十五分後、おれは叔母さんの家に行った。二十五分後、ジーンズのポケットに七十五ドルもって、おれは叔母さんの家を後にした。酒場を探したりもしなかったぜ、ホント。清潔なシャツを買って、下着姿で待つ間にスーツをプレスしてもらって、まっすぐ駅に向かった……。そして自分の席について、汽車が発車する前に眠っちまったんだ」

「それで演説はしたの?」とプリゴツィとモロクが声をあわせた。

「したかって？ あんたらにも見せてやりたかったよ。……まったくの即興だけど、派手に決まったぜ。ポンティウス・ピラトだのベレロフォン号だののことは全部忘れた。暗記してたものもすべて忘れた。……おれが部屋に入って、書記官に名前と用件を告げると、歓迎してくれたよ。まるで王子様みたいな扱いだった、と言うべきかな。儀式ばったところはなし……皆無。真っ先に、太い葉巻を手渡してくれた。それから、すわって楽にしてくれ、という。おれはまだビビって、なんて言うか、コチコチで、葉巻をくわえたら口から落ちるんじゃないかと思ったほどだった。……『ダニエルズさん』とおれは口を開いた　でも、向こうはそんなせっかちな切り出しなんか聞こうとしなかった。しばらくはすわって、おれに雑談させるんだ。もう九百もの話題について話をしたっけ……賃上げ以外なら何でも。それで、おれが落ち着いて、緊張がとけたのを見計らって、こう言う。『さてさてお若いの、いったい今日はどんなご用件でここまでお越しいただいたのかな？』そう言われて、おれは一切をぶちまけた　単刀直入に。美辞麗句も、哀願も怒号もなし、ダニエル・ウェブスター流の雄弁もなし。単純な金勘定。……おれが話終わると、向こうは立ち上がっておれの手を握る。(多少は親しみもこめてだと思ったな)『ミラヴァキくん』(名前を覚えててくれたんだぜ！)『まずはおめでとうと言わせてくれたまえ。きみは軍の誇りだ。まさに清潔で、知的で、冷静な若者だ。うん、わたしを当てにしてくれたまえ　この請願が聞き届けられるように、全力をつくそう』……おれは次の汽車で帰って、間もなくおれたちは要求通りのものを得たんだ……これにて一件落着！」

第 10 章

他のみんなが帰ってしまったある心地よい晩、デイブとモロクは予定の見直しを行っていた。時刻は六時半、デイブは腹が減ったとこぼし始めていた。かれの腹の虫が鳴くのは、単なる習慣のなせる技ではあったのだが。デイブは、以前にもほのめかしておいたように、何でも定時に行なわないと気が済まない類いの変人だったのだ。

「慌てるなって。時間はまだまだあるんだから」とモロク

「わかってる。けど、どうしても気になるんだよ」

「気になるって、何が？」

「飯」とデイブ。

モロクは相手に調子をあわせてやることにした。なんと言っても、これはデイブの希望なんだし。

「派手に楽しめると思うな」と間もなくデイブが言っていた。

「なあ、その女って、どんな連中なんだ？ まだ何も話してくれてないけど」

デイブはクスクス笑った。「第一級。おれが保証する。おれの目は確かなんだぜ」

「国籍は？」

デイブは腹をすくめた。「さあねえ。どうでもいいじゃんか。たっぷり楽しめるんだから」

「そりゃ結構なんだが、でも言葉は？ アメリカ語をしゃべるんだろうな？」

「モチ。おれ並」

モロクがこうした楽しい状況に思いを駆せる間に、デイブは裏にまわって酒瓶を洗ってきた。一瞬にして戻ってきたかれは、顔を満足で輝かせている。

「こいつを嗅いでみな！」とかれはモロクの鼻先にびんをつきつけた。

「この場でちょっと味見ってのはどうだい、デイブ？」

「御意だぜ、DM」

「その調子だ。いいか、デイブ、今夜はおれをさんづけで呼んだりするなよ。おれたちは車庫の昔からの同僚ってことにしようぜ。おまえが車掌でおれは運転手だ」

デイブはケタケタ笑った。「まったくあんたときたら、変なことを考えつくなあ」とか

れは笑いながら、グラスを満たした。

二人は一杯ずつ呑んで、上機嫌な様子だった。デイブは沈思黙考の様相を呈し始めていた。眉のしかめ具合ですぐにわかる。

「なに考えてる？」とモロク。

「いやあ、ちょっと考えてたんだけど……」

「それは見ればわかる」

「おい、茶化するのなしだぜ、DM。こういうことなんだ。もしあんたの運転手・車掌ギャグをやる気なら、あんたの難しいことばはなしにしなきゃダメだぜ。わかる？」

モロクは微笑んだ。「そんなのとっくに考えてあったよ。今のおれたちの話しっぷりはどうだい。これでじゅうぶんだろ？」

「モチ！ おれが保証するよ」というデイブは、いつにも増してビリキンに似ていた。「でも、続くか？」

「杯を満たし続けてくれれば……」

「おとととお……。それ見ろ」

「え？ 何のこった？」

「さっそくご大層なことばを使っただろ」

「ええ？ そうか？ ずいぶんしっかり見張ってくれてるな。その手のヘマをやらかしたら、また遠慮なくとっちめてくれよ」

「おれが隣の部屋でお熱いことになってたら？」

「そこまでは考えなかったよ、デイブ。お前って、ホントによく気がまわるなあ。しかも足が地についてる。頭の回転が速いんだな……。もう軽く一杯どう？」

「いやあ、抑さえとけて。おれは食べ物が欲しいんだ」

二人は立ち上がって明かりを消した。そして角を曲がったところのドイツ式ビヤホールに向かい、塩漬け豚とザワークラウトを注文した。

「ビールの大ジョッキを頼もうぜ。どういうわけか、このウイスキーって奴は湯きにはきかないんだよな」とモロクがうながした。

「一人で頼んでくれよ。おれは酒をチャンポンにはできないんだ。医者命令でね」

「そんなの無視しろって。おれのおごりだから。一杯くらいなら平気だよ。おまえ、ブタみたいにピンピンしてるじゃないか。なあ、そういうたわごとは、なしにしてくれよ」

「うん、そりゃそうだけど、でも……」と言いつつも、かれは呑んだ。二人は(習慣のおかげで)ガツガツと食べ、その間中笑い転げていた。ジョッキ数杯で、いい気分になってきた。デイブは壁にかかったヌード写真に矢鱈と興味をそそられたようだった。「あれって芸術かね？」と声をひそめてきいてくる。「うんにゃ」とモロクは答えたが、じ

きに理由の説明は諦めた。デイクの先入観を殺してしまうこともあるまいに。

「そろそろ河岸を替えるってのはどうだ、DM？」

「がってん。連中の住居(すまい)はどこだって言ったっけ？」

「グリーンポイント」

「まさか！　なんでそれを先に言わなかった？　まったく、よりによって、グリーンポイントとは！」

「どうかした？　遠すぎるとか？」

「いいいや。そんなこと考えちゃいない.....ちょっと橋を渡って新鮮な空気を味わおうぜ」

「どうしてもかぁ？」と言ったデイクは、いかにも嫌そうな顔つきだった。

「嫌か？　健康にいいぜ。おまえはもうチト運動しないと」とモロクはデイクの腕をつかみ、案じるようにかれのの上に身をかがめた。「そのお前の腹をもういっぺん見せてみな」。そしてその小さな丸い出腹を、派手にさすった。.....「気をつけるよ、デイク。さもないと、そのうちくたばっちゃうぞ。そろそろ一トンになりかかってんじゃないの？」

デイクは健康には非常に気をつけていた。下剤やミネラル塩剤もそのためだった。

「出すものは出すようにしてんだけどね」とかれは、申し訳なさそうに言う。

「ようにしてる、だと！　ハンドボールでもやったら？」

「何だよ、おれを殺す気か？」

「かまわんだらうに。そんな重荷を抱えて残り一生を送るよりは、さっさとケリをつけちまったほうがいい」

デイクは足を止めて、問いただすような視線をあげた。

「なあDM、それってマジで言ってんのか？　それとも単に、おれを死ぬほど脅かそうってだけか？」

「デイク、おれはこう思うね。おまえ、あんなクリスチャン・サイエンスのたわごとなんかやめちまうべきだよ」

デイクは驚嘆してモロクを見据えた。モロクは続けた。

「例のCC錠剤だかなんだか知らないけれど、あれはもう効いてないんだぜ、知らないのか？　おまえの肛門が働いてるのは　ありゃあ気力のせいなんだよ。あんな錠剤をのみ続けてると、六ヶ月で肛門も硬直するぜ」

デイクはまた足を止めた。「堪忍してくれよ、DM。その調子でまくしたてられたら、おれこの場で卒倒しちゃうぜ。.....話題を変えよう」

二人はユナイテッドたばこの売店の横を通りかかった。デイクはモロクを中に引きずりこみ、オプティモ葉巻をわしづかみにすると、それをモロクの手押し込んだ。

「おいおい、何の真似だよ。おれはこんなものを一晩中吸ってる気はないぜ」
「だれもそんなこと言ってやしない。ポケットに突っ込んどけて。いつ入り用になるか、わかったもんじゃないだろ」

モロクはこの鷹揚な態度に感激したようなふりをした。今回はデイクのおごりなのだ。

「ほら、おまえも一本どうだ」とかれは、一本をデイクの口に突っ込もうとした。

「ごめんこうむるね。おれはラッキー・ストライク……歯を見てくれよ」

かれは並びの悪いヤニだらけの歯を見せた。

「すげえ」とコメントしてモロクは目をそむけた。

二人は市役所前公園を歩いていた。ベンチは、不精と絶望の一日の後でケツを休める浮浪者だらけだった。中には、弱い背中を薄い新聞紙だけで守り、市役所の階段に快適に寝そべっている者もいた。海からは疾風が吹いてきた。それがハマグリと泥のにおいを運んでくる。

モロクは鼻孔を開いてオゾンを一杯に吸い込んだ。

「今日は浜辺で飯を食うのもいいな」とかれ。

「まったく、回虫でも飼ってるんじゃないの？」とデイク。

「いいや。ロマンチックな気分なんだよ。今の気分だと、一番向いてるのが、ビール片手に栈橋の突端まで行って、遠くで音楽が、頭上には小さな提灯がたくさん……」

「どうしたんだよ、ビールで酔っ払ったか。その可愛い光景には足りないもんがあるだろうに、え？」

「何だ？」

「女のことを忘れちゃったんじゃないか」

デイクは頭を搔いて、おどけたように帽子を片目の上に傾けると、クロスワード・パズルを解いている人物の表情を浮かべた。

ブルックリン橋で、デイクは路電に乗ろうと言ってきかなかった。つかまったのはオープン・カーだった。二人は機関手と並んで前の席にすわった。

デイクは脇に帽子を抱えていた。「風がいいよな」とかれは、橋の半ばにさしかかったところで言った。

モロクは橋の路面の鉄格子越しに、下の急流を眺めるのに没頭していた。巨大なインクの染みのように、渦や淀みが生じている。小さなタグボートが一連の引き船を引いて川をさかのぼっていた。

「ニューヨークは天下一品じゃないか、なあDM？」

デイクがこれを口にしたのは、バッテリー地区の方に目をやっている時のことだった。この感嘆すべきパノラマを見て、デイクがどんな印象を持ったのだろう、とモロクは不思議

議に思った。かれはデイズをじっと見据えた。デイズの太った短いゴム状の首は、まだダウンタウンの平和な峡谷にたれこめる煙と霞の間からそびえ立つ、ビルの先端に向けられていた。

「ブルックリン橋から飛び込みをやらかしたいと思ったこたあねえか？」とモロク。

「思うどころじゃねえよ！ あんたは？」

「ああ、時々はね」かれは見事なあくびをして、座席にふんぞりかえり、何の気なしにどた靴を運転席にまでのばし、それを機関手にどやされるのだった。

橋の反対側で、二人は飛び降り、ボロー・ホールまで歩いて市横断路電をつかまえた。

「何通りで降りるんだ？」

「女はインディア通りって言ってた」

「どこ、それ？」

「知らん。どっか終点近くとか言ってたな」

「大旅行だな」

「まったくだ。なあDM、これだけの金でニューヨーク並に遠出できるところって、ほかにやあねえだろ？」

「なんでわかる？ お前、他にはどこも行ったことないだろ？」とモロクはうなった。

「それもそうだ。でも、あんたなら知ってるだろ。あちこち出かけてるもん」

「デイズ、正直な話、ここは世界一ろくでもない場所だぜ。離れてみないと、これには気がつかないけどな」

この意見は重たい沈黙をもたらした。デイズはまるで、キネトスコープ越しに世界を把握しているかのような様子だった。突然モロクに向き直ると、内密めいた雰囲気は漂わせた。

「なあDM、是非聞かせてもらいてえんだが」とかれは真剣に言う。「何を讀んだらいいかってことなんだけど……その、頭をよくするにはさ」

モロクは茫然とした。聖なる七つの封印をよこせとでも言われたような気分だった。この素晴らしい夜を台なしにする気が、とデイズをからかう。

「いや、マジな話。つまりさ、おれ、自分の教育を改善してえんだ。十二の時から働いてるもんでね」

モロクは疑わしそうにかれを見やった。「ふーん。デイズ、まずこっちから先に聞かせてもらおう。……そもそも教育なんかで何する気だ？」

「おいおい、真面目な話なんだぜ、頼むよ」

「真面目だとも。なあ、教育なんか要らないんだぜ　もし世の中で先んじるつもりならさ。そういうことだろ？　世の中で先んじたいんだろ？」

「もちろん、他にどうしようもないだろ？」

「その通り。さて、御大ホートンや、あの十三階のクソ野郎を見てみな。連中に教育なんかあるか？」

「あいつらは何か別のもんを持ってんだよ」デイブは嫌々ながらに認めた。そして突然顔を輝かせた。「とにかくだな、DM、おれはこういう結論に達したんだよ。もし人生で成功したいなら、教育を受けるか、さもなきゃ立派な悪人にならなきゃだめだって……」かれは先を続けようとしたが、モロクがそれをさえぎって、かれの背中をどやしつけた。

「デイブ、やっとまともなことを言い始めたな。お前には話しよう。おれたちはこの世には、クソ正直過ぎんだよ。知ってたか？ こんな日曜学校並の生活をしてる限り、決して金持ちにゃなれないぜ。見てみるよ、モーガンでも、ロックフェラーでも、アスターでも、ヴァンダービルトでも……。連中がどうやって金持ちになったと思う？ 貯金でもしたか？」

デイブはこの一片の情報でもって、著しく元気を取り戻したようだった。

「あんたがそういう話し方をしてくれて、ホント嬉しいよ。おれが大口たたいてるだけと思われてんじゃないかって思ったもんでね」

間もなくデイブはまた口を開いた。今回は、ユダヤ人として生まれてどんなに苦労しているか、という話だった。

「何言ってるんだよ！ 何とかやってるじゃないか！」とモロク。

「うん、でも……」

「でもモクソもあるかよ。もっとまじなことを考えろやな。……これからお目にかかる女どもをどうやって嗅ぎ当てたのか、そこらへんの話聞いてねえぞ。どうやって見つけた？」

「言ってなかったっけ？ 変だな」かれはしばらく考え込んだ。……「別にたいしたことじゃなかったんだけどね。あんたもいりゃあよかったのに。先週、軽く食べにチャイルドの店に飛び込んだんだ。入った途端に、昔会ったことのある女に気がついた……。ずっと昔、ローズランドで会った女だ。ウェイトレスだった。おれはまっすぐ寄ってって、『よお』って言ってやった。『こんなとこで何してる？』『あらあら、あんたこそすっかりご無沙汰だったじゃない』って向こうが言うもんで、おれはこらで働いてんだって言ってやった。ものの数分で、デートの約束を取りつける。そこであんたのこと思いだしたんだ……。こう聞いた。『友達つれてこられっか？』『モチ』ってんで、これで話は全部だ」

「いい話じゃん」

「だろ？ ちゃんとやりゃあチョロイって」

「まったくだ」

路電はガタガタと、ワラバウト小川の上の橋を渡っていた。淀んだ流れは廃油の島を帯状に浮かべており、馬の死体六十九頭分さながらの悪臭が二人の鼻孔を満たした。デイブはその地域を抜けるまで、鼻を二本指でつまみ続けた。

「昔を思いだすなあ」とモロクは声に出して言った。

デイブは誇らしげに笑った。

「おれだって、ここいらで生まれたんだぜ」

「何だとお？ ホントか？」モロクはデイブの手を握り、心をこめて振った。そして命令した。「例の酒びんを出してくれ。こいつは乾杯しないとな、デイブ」

「なに、ここで？」

「もちろん。グリーンポイントまで待つ気じゃあるまいな」

「うん、でも……」

モロクはデイブの尻ポケットに手をのばし、酒びんを取り出した。「だれが止めるわけでもあるまい、え？」かれが酒びんを唇につけてぐっと空けると、柔らかいゴボゴボという音が漏れた。デイブはそれを魅入られたように見つめた。

「さあ、教えてくれよ。どこの出だ ノースサイド？」

「いいや、サウスサイド リー通りだ」

「そうかあ。おれはノースサイド育ちなんだ……パット・マカーレンを覚えてるか？」

「覚えてるかって？ 他のを聞いてくれよ」

「空き地でチームがやりあったときの喧嘩を覚えてるか？」

デイブは満面の笑みを浮かべた。「これを見な」とモロクの指をとって、右目の上の傷に触らせた。「ある日、缶で切ったんだ」

「すげえ！ すげえ！」とモロクはわめいた。「おまえもあの古い近所の出なんだ。そうかそうか」

二人はお互いの肩に腕をまわし、席に身を沈めた。二人とも、しばらく何も言わなかった。ただ満足してすわり、過ぎ去った日々の香りに浸っていた。路電はブロードウェイ・フェリーのところで急カーブを切った。

「あの頃はよかったよなあ」とモロクがため息をついた。「あの頃は、ニューヨークもまだ華やかで生き生きした街だったよな、デイブ」

デイブはかぶりをふった。「ハイマーケットは覚えてる？」

「どっちの？ ブルックリン側？ ニューヨーク側？ ちっ、そんなのどうでもいいよ。『青い服の女』は覚えてるか？」

「ミリー・ド・レオンのこと？ あのバムにいた？ いやあ、彼女に会うためなら、十ドル払っても惜しくない。水兵たちが通路を駆け上がって彼女のガーターをひつつかんだ

の、覚えてる？……え、どうだ？」

「笑わせないでくれよ。じゃあパット・マカーレンがラリー・キャロルのサロンからバムまで、葬儀屋みたいに行ったり来たりして、ジョッキをイエズス会教徒みたいに掲げてるのは……ところで、先週ハウストン通りに行ったか？」

ここで会話はいささか技巧的になってきた。ストリップのシーズンが始まったばかりで、両者の間では、ナショナル・ウィンター・ガーデンで盛んだったレパトリー劇団の是非について、長期に渡る議論が展開されていたのだ。

ついにデイブは意味ありげな沈黙へと退行した。モロクは満足げに葉巻をふかした。再びデイブの方を見ると、何やら陰気な様子だ。

デイブは「考えごと」をしているのだ、と説明。

「わかんねえんだよ、DM。そもそもなんであんたみたいな奴が、ストリップなんかに行くんだ？」

モロクは黙ってこれを受け止めた。

「別にあんたが神父かなんかみてえだってんじゃねえんだけど……あんたの読んでは本がさ。二つがじっくりこねえんだ。わかるかな？」

「よっくわかる。つまりおれが高尚すぎるって、そう言いたいんだ」

「何かそんなようなこと。……先週も、あんたの持ってた紙カバーの本を見せてもらったけど、おれなんか辞書なしじゃページだって読めなかったし、読んだはいいけど何言ってんのやら一言もわかんなかったんだよ。いやあ、まったく無味乾燥ってのかな。科学とか、何かそんなものの本」

「ああ、『ユリシーズ』のことか」

「それぞれ。名前が発音できなかった。だれにも理解できんような本なんて、そいつは何のために書いたんだ？ 学のある連中だけを相手にしてんのか？」

モロクは、これが大宇宙の謎の一つであることに同意した。「でも、やらしい部分もたくさんあんだぜ。たぶんそこらへんに出くわさなかったんだろう」

「そうなの？ だったら、なんだってあんな顎のはずれそうなことばばっか使うんだ？」

「子供が読まないように、だろうな……おい、そろそろインディア通りの近くだろう。ここらあたりがグリーンポイントじゃないか」

モロクはボッカチオとラプレーについて何か話し始めた。デイブは、かれらの作品もまた卑わいでわいせつな部分をたっぷり含んでいることを理解しただけだったが、そのとき「インディア通り」の標識が目に入った。かれはモロクの袖を引いた。二人は飛び降り、あたりを見回した。ポーランド人街の端のような感じだった。

「ありゃ何だ？」と叫んだデイブが指差したのは、通りの突端の川を通る船のマスト

だった。

「川だよ。すてきじゃないか、え？」

「まったくだ。窓からツラぁ突き出すだけで、朝飯にタグボートが通り過ぎんの見られんだかぁな。思ったよりましななゴミためかもしれんぜ。多少は新鮮な空気があるもんな」

デイブは住所録を取りだして、地番と見比べ始めた。「当たりだぜ」とかれは、モロクを引きずっていった。「忘れんなよ、帰りに例の本のこと、おせえてくれよ。おりゃあ読みてえんだ」

「いいぜ。そっちも聞くの忘れんなよ」

「忘れんなよ」がわりに繰り返された。デイブはいきなり、今回は自分の名前がデイブ・ブラウンであるべきことを思いだした。「忘れんなよ。デイブ・ブラウンだかんな」

「わかったよ、ブラウン。おれはモーガンだぞ……ダニー・モーガン」

デイブは再びくすくす笑いを開始した。

「どうした？ モーガンってな立派なアイリッシュ系の名前だろうが」

「うん、でもあんたぁアイリッシュじゃねえだろ」

「ちがったらどうだってんだ。だれが証明するわけなし」

「わかった、DM。でも、ダニー・モーガンってのはやめてくれ……」

「なんで？ ダニーのどこが悪い？」

「あんたらしくねえんだって。ちょっと待ってくれ」とデイブは懇願した。「笑い過ぎて死にそうだぜ。おい、なあDM、あんまりイカサマ臭くしたくねえだろ」

「まったく、たかが名前でごちゃごちゃ言ってやがる。おれがどんな名前を使おうと、別に関係ねえだろが。中に入ったら十五分でベロベロになってるだろうしよ」

「そいつぁ大変結構なんだがね、でも……」

「でも何だ？ おまえってヤツは、いつだって『でも』ばっか……」

デイブは身をかがめてささやいた。「逮捕されたくないだろ」

「逮捕お？」

「そうよ。偽名を使ったかどでね」

「な・ん・だ・とぉ？ たかがポーランド人相手に？ やれやれ。そうやって自分を追い詰めてるって。何びびってやがる」

デイブは声を落とした。「待って、DM。落ち着いてくれって。おれたちがどこにいるかわかってるんだろうな。ここはかなり荒んだ地区なんだぜ……」

「荒んでるほうがおれの好みだね。……宴会たけなわって頃で、おれが十字架にキスするのを見てるって」

デイクは慌てふためいた様子でモロクの腕をつかんだ。

「頼むよ、DM。そんな真似しないでくれよ。おれは五体満足で帰んなきゃならないんだから」

モロクは笑った。「冗談だよ。まったくそんな、鳩が豆鉄砲くらったみたいなツラして立ってんじゃねえや」

「ホントだな？」

「絶対」

「心配させやがって。あんたって、いつ本気なんだかさっぱりわかんねえ」

二人は目的の家の前についた。デイクが先頭に立って低い階段を上がり、玄関口でマッチを擦って表札の名前を読もうとした。

「おれがお前をおどかしたってか？」とモロクが言う間、デイクは次々に名前を検分していった。呼び鈴の中には、一つあたり名前が三つも四つもあったりするものもあった。

「デイク、呼び鈴を押す前にな　十年前に、ここで体験したことを話ときたいんだ。……面倒に巻き込まれたくないって言ってたよな。なら聞いてくれ。ある晩のこと、おれはここいらあたりに踊りにきてた……いまでもはっきり覚えてる。ひっどく酔いがまわっちゃったもんで、外に空気を吸いに出た。そこへ図体のでっけえアイルランド系のオマワリがやってきたんで、こっちは愛想よくして話しかけてやったんだ。何を話したか覚えてねえんだけど。何か宗教がらみのことだったのかな。……とにかく、こっちが弁解すればすれうほど、向こうはろくでもなくなってきてさ。あんな間ぬけはみたことねえよ。でお、ありゃあそういう連中だもんな。……とにかく、気がつくとう向こうはこっちの襟首をつかんで、締め上げはじめ。それから残った手を振り上げて、まともにツラをぶんぐりやがった。強烈。何とか生き延びたけどな。……ッホント陰悪。これぞ荒んでるってもんだ。だから、あの手のマッポがうろついてんの見かけたら、すぐにふける……いいな？」

デイクは呼び鈴を押して、気楽な調子で答えた。「いやあ、なかなか楽しい話を持ちだしてくれるじゃないの」

すぐにガチャリと鍵の開く音がして、二人は体重をかけてドアを開けた。デイクは最後の警告をモロクの耳にささやいた。女房の話題は出さないこと。

「約束する」とモロクは気軽に答えた。「ところで、奥さん元気？」

デイクは無用に足音高く、ボロい階段をのぼりながらこう答えた。

「妹なら、もうすっかり元気だよ……ただの軽い扁桃炎でね……おいモーガン、ちゃんとついてきてるか？」

「真後ろにつけてるぜ、ブラウン大将」とモロクはバカ笑いした。

コングレーブであれば、凶々しき売女二人とでも呼んだであろう女たちが、手摺から身を乗り出して快活な歓迎をさえずった。ブロンドのほうはそんなに悪くなかったが、もう一人の、黒い差点のドレスのほうは、ひどかった。奇妙なことに、デイブがデートの約束をとりつけたのは、そのひどいほうなのだった。デイブはその場で相手を交換しようとしたが、モロクのほうがずっとすばやかった。かれは一瞬で状況を把握し、デイブが小細工をほどこす間もなく、まるで昔ながらの知り合いだともいわんばかりに、ブロンドの肩に手をまわした。

「まあこの人ったら、すっかり火照っちゃって」とブロンドは、べちょべちょしたキスをモロクの唇に降らせた。酒のにおいをしっかり嗅ぎつけたようだ。「まあ！ どこで呑んできたの？」

かれはデイブの方を示した。デイブは露骨に不満そうだった。二人がコートをベッドにおくとき 二人とも、即座に楽にしてくれと言われたのだ かれは女に関して間違いがあったとでも言いたげな口調でこう告げた。「あんた、まちがった方の女を選んだな、DM」

「だれがまちがえたって？ 貧乏クジをひいたのはお前のほうだってことだろ。いまさらじたばたすんなって」モロクは知らず知らず声をあげていた。

「そんな大声出すなよ」とデイブは警告した。「あんた、しばらく彼女とやったら、後で交換しよう」

「おれが正気のうちはありえんね」

女二人がかれらの後からベッドルームに入ってきた。

「あら、お二人さん、何けんかしてんの？」

「こいつ、早めに家に連れて帰ってくれって、おれに頼んでたんだよ」モロクが打ち明けた。

「そうはいくもんですか」と黒サテンの雌が、デイブに派手にしがみついた。

「どうかしたの？」ともう一人より多少は洞察力のあったブロンドがたずねた。「奥さんが待ってたりすんの？」

デイブは哀願するように、相棒のほうを見た。

「こいつか？ こいつを待ってる奥さんなんて、六人はいるぜ。こいつは根っからの間男だからな、そうだろうが、ブラウン？」とモロク。

デイブはブロンドに酒を差し出した。彼女はグッとそれをあおってから、友達にびんをまわした。彼女はすでに、バナナの束のようにデイブのひざにすわっていた。

「あたしって、重い？」

デイブは彼女の背後で意地の悪いしかめっつらをしてみせた。「うんにゃ。羽根みてえ

に軽いつて」

だれかが、ヴィクトローラをかけようと言いだした。モロクはブロンドが機械のクランクをまわすのを手伝ってやった。そして彼女の上に思っきりのしかかり、ほとんど相手の背骨を折りそうになった。

「ちょっとあんた、ほどほどにしてよ！ あたしは馬じゃないんだから」

モロクは丁寧な詫びを述べたが、相手は煙にまかれたようだった。

「え？ いまの最後のことばって、何？」

「ああ、あれはフランス語で、すごくシックだっていう意味」かれは愛想よく微笑んだ。

「あんた、ポーランド語もしゃべれんの？」

「うんにゃ、フランス語だけ……それと、英語も少し」

「またまた、つままない冗談よしてよ」

かれは相手を荒っぽく引き寄せ、踊りはじめた。デイブは墓石に押し潰されたような面持ちで、そこにすわりこんでいた。かれは、モロクがブロンドをあちこち動きまわらせるのを見るだけで、満足していた。

「お連れさん、どうかしたの？」とブロンド。

「もう呑んでくれてんだろ」とモロク。

「あたしが目を覚まさせたげるわ」と彼女は、モロクの抱擁から身をふりほどいた。

レコードは「セントルイス・ブルース」をガリガリと奏でていた。一瞬のうちに、背の高いブロンド娘はデイブの前に立ち、足はほとんど動かさず、その分、からだの残りの部分の動きで補っていた。目を空のほうに向け、肩を奮わせ、ひざを軽く前に曲げ、彼女は眠たげな、露骨であらわなダンスを踊りだした。デイブの目は、皿のように見開かれた。彼女はデイブの鼻先で指を鳴らし、スカートをちょっと高く持ち上げ、そしてゆっくりと、緩やかにくねるような動きをしてみせて、デイブのみぞおちを直撃した。

「こいつは刺激が強すぎる！」とデイブは叫び、片手で目を覆いながらも、指の間からのぞき見ていた。

「彼女、どこであんな動きを覚えたんだ？」とモロクは、まるで彼女が曲芸アザラシでもあるかのように観察しながら尋ねた。デイブは、ナショナル・ウィンター・ガーデンの支配人に紹介してやろうと、敢えて申し出たほどだった。

「あんなゴミためみたいなところに？」と彼女はせせら笑った。

そして彼女はモロクの前に身を据えた。かれの方は、葉巻をポケットから取りだし、くつろいでパフォーマンスを鑑賞しようとしていた。

「もっと見たい？」

「もちろん。でも、こんどはもうチト派手なのにしてくれよ」と言ってモロクは、同意

を求めると、デイブの方を見た。

「こんなのでいかが？」と彼女は、へそでアラビア風の動作をしてみせた。

「頼む、やめてくれよ！」とデイブは懇願した。「頼むから！」

モロクは平然と葉巻に火をつけ、腹をくねらせてはよじる女の顔に、その煙を吐きかけた。

彼女が終えると、かれはこう述べた。「悪くないね。なかなか悪くない」

「なんであんな具合に平気ですわってられんだ？」とデイブ。かれが指差した相手は、六日間に及ぶ自転車競争で食事休憩が発表されたとでもいう雰囲気だった。

「人生の快い回顧のためには、葉巻にしくものはないね」とモロクは口にだし、灰をじゅうたんに散らしてまわった。

「この人、何者？ 記者かなんか？」とブロンドがたずねた。

「うんにゃ、ヤクの売人」とデイブ。

「そんなの御免よ！」と女性二人が同時に叫んだ。

この集会は、ローマ帝国最後の崩壊の日々に特有の、きわどい感じを漂わせていた。たかが間ぬけなポーランド人二人が、こんな楽しみを提供できるとは、なかなか信じ難いことだった。踊ったり、あるいは隅でいちゃついたり、あるいはマントルピースによりかかったりしていないときは、わい談をしていた。ここではデイブの生来の助兵衛根性が裏目に出た。時々、ブロンドでさえ親指を下に向けて、不快の念を表明したほどだ。だれも赤面しなかった。そんな暇はなかったからだ。なにもかも、起こるのが急すぎた。そして酒びんが空になると（ほとんど一瞬でそうだったが）、図々しき売女二人は屋根裏からキュメル酒を一ケース引きずってきて、自らのスポーツマンシップを表明したのであった。

モロクは、折子を見てはこう叫んだ。「おいブラウン、そろそろ車庫に戻ることを考えたほうがよかぁないか？」

女たちは、酔いがまわって涙もろくなってきた、下品さに飽きてきたらしく、ロマンチックさを求めた。ブロンドは、詩の暗唱を求めた……「何かちゃんとしたものを」

モロクはそれに応えて、足を壁によりかからせて逆立ちした。そしてそのきてれつな姿勢で、ふと思いついたのが、ウェルギリウスの「アイネーイス」の冒頭部分を詠唱することだった……「Arma virumque cano」云々、云々と、十行ばかり。そのあたりで脈絡を失って、全くの詩的な確信をもってあの魔法のような一節「Rari nantes in gurgite vasto」に飛んだ。この一節に憑かれて、かれは最後の二語を繰り返し続けた 「gurgite vasto」 「gurgite vasto」 が、とうとうブロンドが、起き上がって息を整えろと声をかけた

デイブは長椅子にねそべって、セント・バーナードのように舌をだらりと垂らし、ウェ

ルギリウスの「gurgite vasto」の朗々たる響きを真似ようとしていたが、どうもうまいかないらしかった。黒サテンの女が、かれのラテンかぶれに終止符をうつべく炭酸水を頭からかけてやった。デイブ以外の全員が笑った。デイブは、自分のぐしょ濡れぶりを見たら女房が何と言うだろうか、と思案していたのだった。

だれもかれの考えなどがい知るはずもなく、会話はまるで、炭酸水がぶちまけられるなどということがなかったかのように、流れ続けた。

黒サテンの女曰く、「さっきあんたあしゃべってたん、あれなに？ シュペイン語？ すれともイリシャ語？」

「いいや。あれはおれがフィリピンで覚えてきたタガログ語。気に入ったようだな

「ことばあわがったら、もっと気にいったと思う」

「いや、それはちがうな。詩はことばがわからない時のほうがいいんだ」

ブロンドは詩への興味をすっかり失っていた。彼女はなんとかモロクを口説いて、寝椅子に自分と横たわせようとしていた。「ねえ、もっとしっかり抱きしめてよ、からだが潰れるくらい」と彼女は懇願した。

「無理だよ、だって腹ぺこなんだもん。いやホント。サンドイッチかなんかつくれない？」

デイブは食い物の話が出たことで忍び笑い、話を回虫の方に持っていくことで、モロクの気転のきかなさを補おうとした。しかし、ブロンドは狼狽させるのが難しい相手だった。彼女はデイブの上司にかなり惚れこみ、自分と愛情の対象との仲を、多少の食物に邪魔させるつもりはなかった。

リトアニア系生まれ損ないが台所でサンドイッチをこしらえる間、モロクとデイブは、ブロンドの見事な筋肉の操作を明らかにする即興の演技を楽しんでいた。寝椅子にゴム人形のようにおさまったデイブは、その強欲な目の欲求を満たしていたが、モロクの態度によって耐え難いほどに激昂させられて、かれは衝動的に飛び上がり、ブロンドの白い太股をまるで七面鳥のようにつかみ、黄色い歯をそれに沈めた。娘は恐怖で絶叫した。デイブは情けない声を出して脚を放し、足下にひざまずいて許しをこうた。

モロクはバカ笑いして、デイブを脚で派手に小突くと、かれはひっくりかえって背中で転がることになった。デイブはひっくりかえされたカメのようだった。目は血走り、恐怖の色が浮かんでいた。これまで女に嘔みついたことなどなかったのだ。

「立てよ、このうす汚い乞食野郎が」とモロクは激怒したふりをして叫んだ。「こいつはビリー・サンダー・ショーじゃねえんだ」とかれは荒っぽくつけ加え、デイブを無理矢理立たせた。「さあ、お嬢さんに謝れ」

デイブは、謝るだけでことがすむのだろうか、と思案した。ブロンドはかれの実直さに

明らかに感じ入っていたが、平静を取り戻すにはキュメル酒をかなり飲まなくてはならなかった。しかし、この小事はついに忘れ去られ、一同は陽気なムードで台所に腰を落ちつけた。緑にかびた壁に取り囲まれ、キャビア・サンドイッチと酢漬けのニシンをほお張っていた。

三つ目のサンドイッチを食べ終えてから、ブロンドはため息をついて、食欲がなくなってしまったと述べた。この憂慮すべき事態の原因に関する礼儀正しい調査の結果、彼女がその晩、おそるべき光景を目撃したという事実が判明した。どうやら、明らかに尊敬すべき身分の、いい身なりをした男が、突然自殺しようと思いついたらしかった……しかも彼女の目の前で。地下鉄が駅に入ってきたところで、かれはプラットホームから飛び込み、車輪の下に収まったのだった。かれはぐしゃぐしゃになった。後で、かれの頭がその切り刻まれたからだから数メートル離れたところに転がっているのが発見された。彼女は切断された首を見慣れているわけではなかったのだ。

「ひどいと思わない？ その人、あたしの目の前でそんなことしたのよ。考えただけで、何もものを通らないわ。食欲なんかぜんぜんなくなっちゃう」

モロクは同情を差し伸べた。「その偉いさんだかなんだかは、もうチト考えるべきだったよな……つまり、おれのこの可愛い女が夕食を食べる前に、この世とおさらばしようなんて。胴と頭が生き別れになってくれて、ホントよかったよ。どのみち何の思慮もないよなやつだったんだから」

女たちはびっくりして顔を見合わせ、笑うべきか、それとも憤慨すべきか決めかねていた。しかしデイブがそこで、オリンピックからの気の利いたせりふをたずさえて場に参加した。サンタクロースに関する、ちょっとした陽気な冗談で、だれかがペンダントのかわりに新しい総入れ歯をもらった、とかいうものだった。

その時デイブは、脳裏に歌が浮かぶのを感じた。かれは一同に、ちょっとしたハーモニーをやってみようとうながした。みんな賛成のようだった。地下鉄の線路に置き去りにされた頭なしの胴体は忘れ去られた。結構なことだ。さもないと、四重奏が台無しになっただろう。

デイブは奇妙なファルセットをもっていた。女たちは、それがすごくきれいだと思った。「『優しきジュヌビエーブ』を歌おう」とモロクが提案した。みんながいい気分でさえあれば、何を歌おうと一向に構わなかったのだが。「まずキュメルでのどを潤したほうがよかあないか？」とかれはグラスを満たし、テーブルの下でブロンドを親しげにつねってやった。

「その歌、知らないわ」と彼女は立ち上がり、モロクの首に腕をまわした。「『夢の国で会いましょう』はどう？」

デイブが、おずおずと震える声で先鞭をきった。女たちはちょっと笑ったが、一瞬にすぎなかった。すぐにみんなは声をあわせ、陰惨なほどの実直さでヨーデルしていた。

「愛の甘き夢が実現するところお、おお、おお……」二節目にやってくると、全員が同じ音で終えられたので、みんな気をよくした。その次は、ブロンドが調子っぱずれの裏声で攻撃を開始したが、それは深い激情を伝えることになっていたのだった。彼女のアデノイドが、その深き激情に貢献していた。

この唱和がいつまで続いたかは神のみぞ知る。だが、五回目の試みの後、だれかがドアを叩き、不機嫌な声で、みんな川に飛び込みまえとわめいた。ブロンドはこのような野蛮さは無視しようと言ったが、デイブは絶えず、自分は五体満足で家に帰るつもりだと抗議し続けた。かれの愛人はついにヒステリックな笑いが頂点に達し、「ジニー母さんのジュビリー」などみんなすっかり忘れてしまった。

女たちが手洗い（これは廊下のはずれにあった）にいくと称して席をはずした短い休憩時間にデイブはモロクに、そろそろふけようと頼みこんだ。

女たちが戻って来るとデイブとモロクも席を辞して、これまた便所探しに出た。「明日は大事な日だからな」とデイブは、場を盛り上げようとして言った。この女二人から身をふりほどくには、えらく苦勞するのを承知していたのだ。

ブロンドはぴったりとモロクにはりついた。「あら、だめよ！ 行かせないわ。泊まってるっていいのよ。だれも追い出したりしないから」

「いかなきゃならないんだよ」とデイブが荘重に言った。

「そなんだよ。あと数時間で車庫に戻らなきゃならないんだ」とモロクは、ブロンドの情熱的な抱擁から逃れようとしつつ、にやりとした。

「あらあ、こんなに楽しかったのに」と相手はうめいた。

「こっちも気はすすまないんだが、いかなきゃならないんだよ」とデイブは繰り返した。

女たちは玄関までかれらを見送り、しばらくは暗いなか、門柱にもたれかかったままでいた。

「いやあ、連中のぼせあがってたな！」とデイブは、玄関を出しなに言った。「襟を見てくださいよ、DM。もう濡れ雑巾だぜ！」

「でも、楽しんだんだろ？」

デイブは鼻をならし、ネクタイと格闘して、自分の尊厳を少しでも取り戻そうとしているようだった。

「あのブロンドは、ただのスベタじゃねえな」とモロクは、路電に向かって歩きながら言った。

「筋から言って、彼女はおれのもんだぜ、DM」

「そうかよ。まあこれで、居場所は知れたわけだ。おれはもうあの娘はたくさんだ」

数分で、横断路電がやってきた。今回二人は、後部の座席にすわった。じきにデイブは、ふるえるファルセットで歌いだした。「夢の国で会いましょう、銀の月の下、今夜会いましょう……」

突然かれは歌いやめてモロクのひざを叩いた。

「なあ、今晚あの野郎がドアを叩いておれたちをびびらせたの、あれって面白かったよなあ」

「あの時はそんなに面白がってないようだったじゃないか」とモロクは言い返した。

「だって、ぶちのめされるんじゃないかと思ったんだもん」

デイブは、本の事を思いだすのをやめなかった。かれはまず、シェイクスピアについての調査から始めた。「あいつの芝居には下世話な部分がたくさんあるって聞いたんだがね。それってほんまもんのヤツ？」

「うん、シェイクスピアはいつもきわどい真似してすり抜けてたから。でも、お前の気に入るまいよ」

デイブは最後の一言を黙殺した。「変だな。『ジュリアス・シーザー』には特に荒っぽい部分ってなかったけどな」

モロクは、いつかかれを四十二丁目の図書館に連れて行って、かれが読み飛ばした部分を指摘してやろうと約束した。

「ほんとにちゃんとしたもんが読めるんなら、盲になったっていいくらいなんだ、DM」

モロクは、それはデイブにしては上出来だと考えた。「いずれ学者並にしてやるぜ、この欲張り野郎めが」

「それと聖書は？」

「聖書も教えてやろう」

「聖書を見せてくれなんて言ったら、図書館から蹴りだされないかな」

「なんだと！ どこからそんなこと思いついた？ 何か研究してるんだとでも言えればいいだろ」

デイブはこの提案でもまだ半信半疑のようだった。かれは、みんなが自分をユダヤ人と見破って、疑念をいただくのではないかという考えを表明した。

「それがどうしたよ。デイブ、お前にだって聖書を読む権利があるんだ。おまえも市民だろ？」

「カソリックかプロテスタントでないとだめかもしんないと思ったんだ」

こう口にしてから、デイブ自身笑いださずにはいられなかった。

デイブは宗教に魅了されているようだった。かれは世界にいくつ宗教があるのか知りた

がり、どれが一番いい宗教か、一番リベラルな宗教かを知りたがった。

「どいつもこいつも五十歩百歩ってとこだな」とモロクは述べた。突然かれはデイクに
向き直った。「おい、お前ってひょっとして、無神論者じゃねえか？ 自分の宗教につい
て何も知らんのか？」

「ラビの放すことだけだな。聞いてると眠くなっちゃうけど」

「まったくご立派なやつだ！ どうせシナゴークにも、年に一度くらいしいか行かない
んだろう」

「いいだろが。無味乾燥すぎんだもん。映画にでも行ったほうがましだ。年寄り連中が
うるさく言わなかったら、ヨム・キップルの時にだって行きたかねえや。おれは宗教なん
てその程度にしか思ってねえんだ」

モロクは、信仰の欠如についてさらにかれをからかい続け、やがてデイクは叫びだした。
「それがどうした！ おれたちがくたばってどうなるかなんて、だれが知ってるもんか！

あの老いぼれヤブどもだっておれと同じ程度しか知っちゃあいねえんだ。ちがうか？」

「老いぼれヤブってえと……だれ？」

「ラビどもだよ……ほれ、あのべとつく髭、過ぎ越し祭のパンの連中。あの連中は、あ
の世についての考えをどっから仕入れて来るんだよ？ おれに言わせりゃ全部出鱈目もい
いところだろうが」

「デイク、おまえって以外と頭いいんだなあ」

デイクはにやりとして葉巻に火をつけた。ラッキー・ストライクはもうなくなってし
まっていたのだ。二人はしばらく、黙ってすわっていた。モロクは帽子を脱いで、風を楽
しもうとした。

「おい、あんたって、毛が薄くなり始めてるぜ。知ってた？」とデイクが見立てた。

この陳述を確認すべく、モロクは頭をなでた。

「それって止められるんだぜ、DM。あんたは変に思うかもしれないけど、おれはすご
く信用してる方法があるんだけどな」

「どうせグローバーの疥癬療法だろう」

「うんにゃ。こいつあだれかから聞いた、古いノルウェーの治療法なんだ。そいつの家
族が昔から使ってる方法で、だからそいつの頭はふっさふさ」

「へえ。じゃあ教えてくれよ」

デイクの話では、それは灯油とか鳩脂とか、そのたぐいのもでは一切なかった。ただ
の煮た尿（ただしかれは尿とはいわなかった……それに対応する一般語『しょんべん』と
言ったのだが）なのだという。

「へえ、そいつあ目新しいな。それで能書は？」

「禿げについてそいつがなんて言ったのかは覚えてねえや。ただ、それにも効くって。その時にそいつが言ってたのは、リウマチのことだった。ほら、リウマチってのは尿酸が体内に溜まりすぎて起きるんだろ。で、尿ってのは尿酸が九割とか、何かそのあたりだろ。正確には覚えてねえや。とにかく、尿酸をからだの外側に塗ると、そいつが内側の尿酸に影響すんだ。マイナスかけマイナスみたいなもんでさ。お互いに打ち消しあうってわけ……ちょうど電気みたく」

「それはなかなか明快だな。次の質問はだな、尿酸ってどっから手に入れるんだ？ おまえひょっとして、処分に困ってる尿酸なんか持ってねえよな？」

デイクはへらへら笑って、二十日大根のように真っ赤になった。モロクは「優しきジュヌビエーブ」を口ずさんだ。やがてデイクの降りるあたりにさしかかった。

「明日は朝から事務所につめてっか？」とデイクは、降車口に立ったまま言った。

「うん、いつも通り」

「早めにこいよな、DM。御大が明日の朝に、電話をよこしそうだからな。先週は三回もかけてきたんだぜ」

「なんて返事したんだ？」

「あんたに言われた通りに言ったとも。便所に行ってるってな」

「毎回そう答えたのか？」

「うん。それと、言うの忘れてたけどな、最後に御大がかけてきて、おれが言われた通りに言ったら、向こうはこう言いやがった。『モロクくんには、デスクを便所に移すように言っておいてくれたまえ』……それで電話を切ったよ」

「わかった、デイク。じゃあ朝一に会おう」

デイクは飛び降りた。「もうほとんど夜明けだぜ」と、電車が出発すると同時にかれは言った。

第 11 章

カタレブシーのように姿勢を硬直させた妻の横におさまったモロクは、一瞬のうちに、無意識の広大な海に五尋も沈んでしまった。

かれの夢は、深い麻痺状態における身動きの取れない深淵でのみ体験できるたくいのものであった。始まりは、悪夢のような渦巻きで、それがかれを、めまいのするような断崖からカリブ海の暖かい水へと放りだした。水の中に入っても、窒息はしなかった。自分が旋回しつつ、下へ、下へと、始まりもなく、涯ては永遠にまで続く巨大な渦巻きを描いて降下するのが感じられた。

この絶え間ない降下の間、海底の生態の、当惑するような、魔法にかかったような光景が眼前に繰り広げられた。伝説級の威厳をたたえた巨大なツツノオトシゴが、緑の水をぬけて到達してくる粉のような陽光の中で、もがいては輝いていた。不気味な根を垂らした巨大なサボテンが漂っている。それに続いてスポンジ状の珊瑚が、あるものは牛の血のように毒々しく、あるものはまばゆいヴァーミリオン、あるいは優しいラベンダーのような色合をたたえて通りすぎた。この生き生きとした海洋生命の中から、ノームや妖精にも似た無数の動物まがいたちがたち現われ、彗星の尾に含まれた星クズの豪華な流れのように、泡状になって立ち上ぼるのだった。

次第にこうした光景の連続は、ドビュッシーの不共和音と垂直ハーモニーを思わせるような霧に包まれていった。響いていた轟音は、鳴り響く若々しいメロディに道を譲った。かれは大地の鼓動を感じ、幽霊のような蒸気に覆われて香り高いそよ風の愛撫に優雅に仕なる、ポプラや白樺に気がついた。

密やかに霧がひいて、モロクは叫び立てるサルや熱帯風の羽衣を備えた鳥たちで活気に満ちた、謎の森林をとぼとぼと歩いている自分を発見した。驚いたことに、腰には矢立てをつけ、肩には巨大な金の弓を背負っている。

森林にますます深く入り込むにつれ、音楽はますますこの世のものとも思われなくなり、光は黄金に輝き、足下の大地は柔らかな鮮血色の葉と燃えるような褐色の小枝のカーペットとなるのだった。あたりを取り巻く息詰まるような美しさに圧倒されて、かれは卒倒した。気がつくと、森林は消え失せ、酔いしれたかれの精神の告げるところによれば、

かれは蒼白なそびえたつカンバスの前に立っていた。そのカンバスには、古典的な威厳をたたえた単純な田園生活が描かれていた。ピュヴィ・ド・シャヴァンヌが、その深遠な天使めいた夢生活の空虚のなかから与えてくれたかのような壁画だ。カンバスの平穏で厳粛な亡霊は、われわれのこの世の動きをグロテスクに見せるほどの、計算づくの夢のような優雅さをもって動いた。自分で何をしているのかも気がつかないうちに、かれはカンバスに足を踏み込んで、はるか地平線にまで続く静かな小道に歩みを進めていた。ギリシャ式のローブをまとった腰つき豊かな人物が、頭上にファヤンス焼きの壺をのせて、穏やかな小山の頂上にかすかに見える城の尖塔のほうに、モロクの歩みを導いた。かれは、彼方の小山の向こうの谷間に消えるまで、その揺れる腰についていった。

その地点に到達したかれは、その女中がもはや見分けられないので失望した。しかしかれの目は、もっと謎めかすような光景をもって報われたのだった。まるで、この居住可能な惑星の最果てに到達したかのようで、この世のあらゆる謎と陰鬱と恐怖がびんに詰められ、大げさな冒険者の軽率な登場を待つ、あの古代世界の魔法の辺境に到達したかのようだった。

あたり一面には巨大な囲いがあり、その涯てはほんのかすかにしか見えなかった。眼前には素晴らしく古めかしい城があり、その壘壁には槍が密生している。見事なまでに悪魔めいた紋様をそなえた旗が、狭間つきの胸壁の上で不吉にはためいている。忌まわしく淫らがましい、火を吹く怪物が、戦闘の痕も生々しい城の正門からかれを見ていた。その恐ろしげな正門から伸びた渡り板を、べとつくキノコの密生が詰まらせていた。陰気なよろい戸の窓には、大ハゲワシの落としものが、きわめて吐き気を催させる臭気を漂わせていた。

しかし、かれが最も畏怖し、惹かれたものは城の陰惨な色づかいだった。赤だが、これまでに見たどんな赤ともちがう。それどころか、一番近くの壁は生血のような色合で、まるでナイフの刺し傷から生じる豊かな血球のような赤黒さだった。それでいながら、その色は若干ちがっていて、むしろ豊かなカロライナ粘土が混ぜあわされて、つやのある肉感的な光沢を与えたかのようだった。

この外壁の向こうには、さらに派手なパラペットや胸壁、尖塔や小塔が群れそびえ、その段階が深まるにつれて、この殺人じみた色彩濃度のなかへと退き、やがてかれの目には、この化け物じみた光景のすべてが肉屋の饗宴、カラカラ帝の妄想さながらに、血糊と排泄物で滴って見えてきた。

かれは、気絶するのではないかと思ってこの光景を一瞬避けた。再び震えるまぶたの目をあげると、前景はその不快な外見を多少は失っていた。毒キノコやハゲワシの汚ならしい糞便にかわって、かれは象牙色と肉桂色の豊かなモザイクが、深い紫の甲冑の影を受け

て、そこから桜の花の滝が垂れ下がり、暮盤の目状の中庭に波のような山をなしているのを目にしたのだった。かれが立っているところから数メートル向こうには、気高い敷き布や繊細な美しさの枕をしつらえた、輝く寝椅子があった。その上には、かれの妻がしどけなく横たわり、まりでかれの到来を待ち受けているかのようだった。……それは完全にかれの慣れ親しんだブランシュではなかったけれど、その小さな口ですぐに見分けがついた。かれは無意味なおしゃべりを待ち受けた。しかし彼女の柱状ののどからかわりに発せられたのは、コントラルトの洪水で、それを聞いたかれは、若さの狂気のため血が叩きつけるように頭にのぼってしまった。そのときになって初めて、彼女が裸であること、その下腹部と胸のおぼろな素晴らしさに気がついた。

かれは身をかがめて彼女を抱き上げようとしたが、そこで彼女の胸に灰褐色のクモがはい回っているのを見て、恐怖で飛び退いた。かれの恐怖は彼女を面白がらせ、そして彼女はかれを虜にするような、深い脈動する旋律を新たに発した。しかし醜いクモが彼女の輝く白いからだの上を自由にはい回っている光景は、かれを嫌悪で満たし、そしてかれは憑かれたように城壁めざして駆け出した……

かれがその拒絶するような毒々しい、常識外れのスカラベのついた門にたどりつくと、奇妙なことが起こった。その巨大な錆びたちょうつがいがかうめき、きしみ、そして何やら魔法じみた黙認をもって、そのそびえたつ門がゆっくりと開き、かれを受け入れた。

門をくぐると狭い通路がまっすぐに、燃えさかる尖塔を取り巻く螺旋状の階段へと続いていった。かれはがむしゃらに鉄階段を駆け上がり、狂ったように高く、高くのぼるにつれてますます恐怖は増し、息がきれてきたが、それでもいつまでたってもてっぺんにつかないかのように思えた。とうとう、心臓が酷使のあまり破裂しそうになったところで、気がつくとかれは頂上にいた。しかしあの謎めいた城の壘壁や胸壁、よろい戸つきの窓や尖塔は、もはや眼下にはなかった。黒い火山状の荒れ地が広がり、そこに底知れぬ無数の溝が刻まれていた。草も植物もまったく見られない。巨大な石化した大枝が、きらめく鉱石を埋め込まれてざくろのように輝き、この不毛の空虚をおおぎつつ広がっていた。さらに注視すると、この幽霊めいた荒れ地にも生命の輝きが存在するのがわかって、かれは驚嘆し、それからおびえた。それはぬるぬるとくねるヘビ状の生物で、石化した森林のなごりの中で、とぐろを巻いてはまたほくこと満足していた。

その時、突然かれは、自分がパニック状態で駆けのぼってきたそびえ立つ尖塔が、根元から崩れさりつつあるという虫のしらせを感じた。自分とこの巨大な尖端が、大変動する荒れ地の縁に、よるめくようにしてぶら下がっていて、いつ何時碎けては壊滅してしまいそうな感じがした。即座に、このすばらしい静寂はうち破られた。かすかに、声が聞こえてきた　人間の声だ。たぶん、そののどのさえずりでかれを誘惑せんとするブランシュ

だろう。かれは一瞬、陥没の切迫した危機を忘れ、かれの確実な転落を眠たげな目で待ち受ける、うろこの爬虫類のことも忘れた。自分の救済のすべてがそれにかかっているとでもいわんばかりに、かれは全神経を、そのかすかな人間の声の調子を捕らえ直そうとして集中した。突然、その声が、不気味な苦悶の調子をもって再び響き、そしてすぐに、まるでぬらつく空虚の硫黄じみた深淵の奥深くで窒息させられたかのように、消えた。かれを支える土台は激しく揺れており、巨大な振幅の弧を描きつつ、避け難い崩壊が逃れ難く思われる寸前でその弧はとぎれるのだった。声はさらに明瞭に聞こえてきた。人間の声ではあったが、その人間らしさはハイエナ並だった。気違いじみたかんだかい金切り声、血も凍るような呪詛と侮辱……刺すような、恐怖を満載した、狂気の哄笑。

その時、よりかかっていた手摺が壊れた。かれは宙に放りだされ、流星のような速度で絶叫する精神病院へと投げ落とされた。癩病じみた指や、緑青まみれの鉤爪が、かれの皮膚から柔らかな肉をむしり取ったが、かれは気絶しそうな逃走を続けた。下へ、下へと投げ出され、かれの美しくももろいからだは、忌まわしい滴る細切りにされた死肉となって落ちて行った。骨は、一角獣にめった斬りにされたかのように感じられた。

そしていまや、かれは果てしない虚空をおそるべきスピードで舞い落ちているのではなく、ほどきがたい格子に組み合わされた、人間の肉体製の巨大な柱に支えられた、パラフィン製の傾斜をすべり落ちているのだった。このすべり台は、見たところ、激しい歓喜で歯を噛み合わせている、首を切断された人食い鬼の洞窟のようなあごのなかへと続いているのだった。あとわずか数百メートルで、その残酷な大口の開口部も見納めとなるだろう。もう一瞬で、かれはその恐ろしげな牙状の歯牙に切り刻まれてしまうだろう……化け物じみた顎が、かれの磨かれた骨を微塵に噛み砕いてしまうだろう……。

しかしまさに、かれの奈落の瞬間に、その化け物がくしゃみをした。その爆発が宇宙を消滅させた。

第12章

十二時間の睡眠は、昨晚の、グリーンポイントでダイブと過ごした一夜の損傷を回復させた。モロクは、机の一番上の引き出しにメモが入っているのを見つけた。新任の秘書ヴァレスカからのものだった。

事務所は面接を待つ若者たちで混み合っていた。またもや素晴らしい一日になりそうだった。かれは苛だたしげにメモを読み、放心したようにそれを置き、かれに詰め寄ってくる顔の海を見た。その顔は、ペしゃんこの鼻面を水族館のガラス水槽にこすりつけて、観光客に娯楽と啓発を与える、見慣れぬ海洋生物を思わせた。かれの思考は、与えざるを得ない返事と、黒板上に現われた求人数を満たすという数学問題とに二分された。受付開始が非常に遅れてしまったため、手摺の向こうの群集は苛立っていた。かれは再びメモに目を通した。

「今夜はどうしても約束を守ってもらいますからね。どこかへ連れてって どこでもいいけど、でも今夜よ！」

「後にしてくれ、ヴァレスカ……後にな」とかれは懇願した。

ヴァレスカはじれていた。

「でも、行くわよね？」彼女はせかすようにせがんだ。どうしても、という表情だ。

「さあな」とかれはつぶやいた。その顔には困惑の表情が浮かんでいた。

その困惑には、じゅうぶんな理由があった。まさにその朝、かれはブランシュに、中絶の費用をどこかで捻出してくると約束したばかりだったのだ。約束をした時点では、どこでそんな金を工面したものやら見当もつかなかった。頭に浮かぶだけ一人として、当てにできる人物はいなかった。大小取り混ぜた負債が、どちらを向いてもかれに直面していた。見過ごした相手は一人もいなかった。住所録を取りだして、端から目を通した。それぞれの名前の向かいには、借金の額が書いてある。下は二ドルから、上は三百ドルまで。この後の方の、三桁に及ぶ金額は、もはやモロクは負債だとは思っていなかった。負債というのは、いつか返済するつもりでいる義務のことなのだから。

午後の半ば頃、ヴァレスカは大胆にもメモの話を持ちだしてきた。

彼女は不思議な決意をもって語った。「いいこと、ディオ。今夜はもうとにかく、言

い逃れようたってダメですからね。どんな計画があるか知らないけれど、でも今夜はあたしとつきあうのよ！」

「でもなあ、ヴァレスカ」とかれは、思いつき身を乗り出してつぶやいた。「明日にしてくれないかなあ。今夜はすごく大事な用があって、どうしても顔を出さなきゃならないんだ」

ヴァレスカは考え直すのを拒んだ。

「どんな用なのか話してよ。うまく抜けだす方法を思いつけるかもしれないでしょ」と彼女はささやいた。

「話してもしょうがないよ」とモロクは、一層困惑の色を強めた。かれは困りきって彼女を見る。この娘が何の助けになるというのだろう。助けになるとすれば、その方法は一つしかないし、それはかれも十分にわかりすぎていた。

彼女は勇気づけるような目を向けた。「ディオ、あたしになら何も隠さなくていいのよ。あたしに何かできる？ 何を困ってるの？」

かれは全部ぶちまけた　ボツボツと、間をおくごとに謝り、たまに学生のように顔を赤らめながら。彼女は、驚きもしなければ激昂する様子もなかった。

「すぐに要るの？」

モロクは彼女の差し伸べたわらにすがりついた。「いますぐ！」と返答した。

かれはあまりに率直に彼女を見据えたので、彼女は一瞬たりとも疑念を抱かなかった。「ふーん、それで……いくら？」

かれはさらのごまかそうとしたが、今回はさっきほどうまくいかなかった　少なくとも、自分ではそう思った。

「まさかきみが……その、用立ててくれるってんじゃあ……」

「いくら？」と彼女は繰り返した。声が多少きつくなっている。

「少なくとも百……くらいかな」かれは、いくら必要なのが正確には知らなかった。ブランシュに、金を工面するとしおらしく約束した時点では、そんな約束を守るあてはまったくなかったのだ。百ドルというのは、なかなかそれらしく思えた。切りのいい数字だし、それにその数字が舌から転がり落ちてみると、まともな仕事の代価としてはもっともらしく聞こえた。まちがいなくもっと安くはあげられるだろうが、この分野での鑑定家になるつもりはまったくなかった。前回は、ブランシュがすべてを自分で仕切った。いくらかかったのかは、聞かずに終わった。覚えているのは、それが何か血みどろの行為だったことだけ。かれは断固としてその先を考えぬよう心を閉ざした。口に苦い味が残った。ヘンリー街のうす汚い屠殺屋どものことを考えただけで、かれの血は煮えくり返るのだった……。

ヴァレスカがかれの黙想に終止符をうった。

「六時に会いましょう。お金は渡すから。すぐに戻ってきて。あたしはそのまま待つてる。百しか無理よ……それ以上は一銭も用意できないわ。でも、返すのは急がなくていいわ。要るときになったら、こっちから請求するから」

かれは気前よく彼女に感謝をぶちまけようとしたが、相手の投げかけた視線を見て即座に気を変えた。

「あたしがよきサマリア人の役を演じてるとは思わないでちょうだいよ。ここはお互い正直にいきましょう」と彼女はせせら笑った。

彼女が立ち去ると、モロクは仕事に身を入れようとした。疑問が湧いてきた。いったい彼女は どうやって金を工面する気だろう「今夜、今夜よ！」いったいあれは何の騒ぎなんだ？

「まったく、御大がこれを嗅ぎつけないでくれるといいんだがな」とかれはつぶやいた。それに、今夜の軽い探索行の資金は誰が負担するんだ？ 「なーに、それは心配するまでもないか。あの子がそんなに簡単に百ドル工面できるなら、ある数ドル追加で工面するのもちろいだろうよ」とかれは思った。

ブランシュから逃れるのは、何の造作もないのはわかっていた。金さえ渡せば、あとは好きなようにさせてくれるだろう。でも、ヴァレスカのほうは何を求めてやがる？ それが一番気になる場所だった……

ハーレムのダンス場 1 では、「ペルシアグルミ材ワルツ」を演奏中だった。皇帝緑の福をまとった黒壇色の巨人たちが、レースと真珠色のスモークに覆われた、白く細い代物にしがみついていた。廊下は青みかがった黒目の浮かぶジン・フィズのような、真ん丸のバンジョーじみた目が並ぶ巨大な鏡さながらだった。

モロクとヴァレスカは、小さなテーブルにほかの大勢といっしょに寿司詰めにされた。素晴らしくも荒々しいジャズが耳をつんざいた。あまりに接近させられたため、ヴァレスカのひざは、モロクの筋肉質の脚の間でしか動けなかった。雨に濡れたようなメロディの洪水が、演壇上のけいれんするような力強い人々から発していた。フロアの鈍重な酔いしれたようなカップルたちからは、独特の香がたちのぼっていた。まるで樟脳とペチヨリが結婚したかのような臭いだ。深い傷のような音色が、龍の血の噴水となってふたりに降り注いだ。

ヴァレスカはバンドのリーダーを指差した。催眠術にかかったような、トパーズの道化師だ。彼女の胸は波打ち、肩はトラップからこだまする、凍り付いたように反応してひきつれたように動いている。

「もう一杯いく？」モロク自身もエクスタシーに捕われていた。

「ジンをお願い。あなたの飲んでる安酒は飲めないわ」と懇願し、彼女はテーブルの下でかれに札を手渡した。

ふたりはしびれたようにそこにすわり、壇上の揺れるグループを指揮する不気味な人物から目を離すことができなかった。このリーダーは、手下の強力な推進役というわけではなかった。お高いバトンを振り回す、気取ったコンサートホールの大將でもなかった。むしろ、滑らかですべすべの発電機が、震えるようなエクスタシーの紫の光線で直感的なエーテルを満たすようだった。かれの目は、殻付きのカキ二つのような、濁った輝きを発していた。強い葉巻のような、薄汚れた肌をしている。ドレス・スーツに身を包んだ、得体の知れない神様。叙情的な微笑を浮かべている。

「復讐心に満ちた苦々しい音楽だな」とモロクは笑った。

「すごい、すごいわ！」ヴァレスカが、高まる情熱をこめて叫んだ。

黒んぼが、軽く踊りながらジンを運んできた。ドリンクを注ぎながらも、足は音楽とともに動き続け、シャッフルし続けている。

ヴァレスカは、はっきりと崇拜するようにモロクを見上げた。唇は軽く開かれ、セイロンの先端のように暖かく肉感的だ。ある大悲劇女優について、その目が眠たい炎のようだと評した人がいた。ヴァレスカの目もそうだった。彼女の着ている淡い黄色のガウンはほとんど透明だった。それが彼女の肌のかすかな青銅色にマッチしていた。見事なまでに彼女をひきたてていたし、彼女自身、それを自覚していた。

「今晚は、あたしの好きなようにさせてもらうわ」と彼女は膝におかれた手を握り締めた。その手は、彼女を烙印のように燃え立たせていたのだ。「今日、帰ったときにどうなったか離してくれてないわね」と彼女は、かれの軽率さに立腹したとでもいうように、ちょっと口をとがらせてみせた。

「きみに気をとられてたもんでね！ いやあ、今日のきみは素晴らしいよ」

「もう一回言って！」彼女は再びかれの手を握り締めた。脚の間で彼女の脚が震えているのが感じられた。「さあ話して」と彼女は、何事も起こらなかつたかのように続けた。「ブランドシュは、お金の出所を知りたがらなかつたの？」

かれは愛想よくほほえんだ。「もちろん！」

「で、彼女はなんて言ったの？ 話さないと承知しないわよ」

「ああ、例によって手持ちの小話から適当なのをでっちあげてやったんだ」と言い終えて、かれはジンをあおり、おかげで顔がゆがみ、陰気なしかめっ面になってしまった。

ヴァレスカの陽気さは、この瞬間に消滅寸前になったようだった。「いつか、あたしもその小話を聞かされることになるんでしょうね」と、哀愁に満ちた雰囲気漂わせる。

かれはこの場の雰囲気を楽しみ過ぎていて、彼女の哀愁につきあっている余裕はなかった。女ってやつは、いつも別れ話を持ちだしたがる。そんなのは、後で発展させる暇がある主題だろう。今はかれは優しく女を見つめ、グラスを口許に運び、女の頭上に一瞥をくれ、グロテスクな抱擁をしつつ固まっているフロアの群集を見やった。一同は、汗でギラつく人間のどろりとした群れによって、あちこちに押しやられていた。そのなまめかしい人波は、ダンスフロアのまわりで境界線を形成していた脆いテーブルに打ち寄せた。匂いたつ香水と、激しく叩きつける音は、ほとんど二人をお互いの腕の中に押し込むかのようだった。

「さあ、踊ろう」とかれは、しゃがれ声でささやいた。

彼女は目を閉じ、かれが自分を台風の前のもよ風のように押し潰すに任せた。かれは何かを彼女の耳元で、繰り返し繰り返しつぶやいた。そのことばは、彼女の耳に液体の炎の奔流のように降り注いだ。二人の間に存在した障壁は、もみがらのようにうち落とされてしまった。……二人が旋回しているのは、揺れ動く群集のさなかで、みんな文明的なうわべはすべて入り口で預けてしまってきたようだった。しわがれたような喧噪の上を、トロンボーンの染みと官能的なサックスのうめきが吹き荒れた。「抱きしめて」とヴァレスカはささやいた。「強く、思いっきり抱いて……」彼女の懇願は、頭に血がのぼった雌犬のうなり声さながらだった。

そこここに、白人の顔がうかがえた。絹をまとった女が腕やうなじを輝かせ、男はディナーコートを着ている。目を見開いた、期待に満ちた黒人たちの岩屋に混じった、ほんのつまみほどの白い顔。黒い手足やからださがきらめいてはポーズをとり、エキセントリックな身振りの狂ったような儀式で再びきらめく。穏やかな、妖精じみた動作で、リーダーはめまいのするようなファンファーレを醸し出した。オルガンの旋律、オーケストリオンの音色、オカリナのソロ。酸っぱいような、ピロードのようなクラリネットの旋律は、朗々とした鼻声に埋もれてしまった。ジャズがその匿名の獣じみた声をもたげた。

ダンスは、最後にコードの外れた叫びと共に、激しく終わった。ヴァレスカとモロクは腰をおろし、ドリンクを飲んでお互いを中毒したかのように見つめあった。突然明かりが落とされ、サフラン色の長いタイツに身を包んだ、がっしりしたムラートが登場した。

「女殺人者の堂々とした洗練ぶりってとこね」とヴァレスカが叫んだ。モロクが不滅のフランス人のことばの引用に感動すると期待してのことだ。彼女の目は輝き、全身は無制限の想像のパワーによって活気づいていた。ふたりは深くすわりなおし、この「女殺人者」は金を求めて、それぞれの小さなテーブルのすき間でスタントを演じ、それから次に移った。

「あたしのとうちゃん、強烈な一揺すりであたしをゆらす

かれが出てくりゃ外れなし……」

この一節を、混み合ったテーブルごとに繰り返しながら、淫らな動作をちょっと加え、ひき肉機のように手を差し伸べた。ヴァレスカは彼女がやってきた時に備えて、ハンドバッグから札を取り出した。「女殺人者」がテーブルからテーブルへと渡り歩き、演技を繰り返し、たるんだ胸に緑の札を押し込むにつれて、まばゆいスポットライトがサフラン色のタイツを追った。一方で演台上の痙攣患者たちは、血の化学組成そのものに働きかけるような、トリップ・ハンマーじみたりズムの爆発的な混合物を注ぎ続けていた。神経質な、角のある脈動でもって、波紋付きの淡い絹ステンシルのような、カウンターポイントの華やかなフレットワークを揺すり出した。宝石のようなコードの塊が、次から次へとトムトムの絶え間ないビートのように、風や消え行く音の閉じたつむじのように、ふわふわした絹と花の雲、しゃれこうべ、運動選手のような、汗気と血潮に満ちた力強い手足のよう、相互に続くのだった。かれらの目には恐怖が浮かんでいた。その目は、クライマックスでは暗く熱い石炭のようで、洞窟のようなぱくぱくする口は熱い鼓動だった。

ムラートの演技は、オウム青のスポットライトの中でトンボを切って終わった。

「もっと前につれてきてくれればよかったのに」と吐息も荒くヴァレスカがつぶやいた。感情の暴動が、次々と急速に彼女を溺れさせた。安物のジンが彼女の腹を満たしていた。彼女はまるで火事の建物だった。

彼女の目は荒れ狂うグループの上をさまよった。その目は、隠れもない称賛で輝いていた。

「あれ、本物なんでしょ、ね？」と興奮して彼女は言った。「本物？」とモロクは繰り返した。「もちろんだとも！ 神経症もない、抑圧もない、だろ？」かれにしてみれば、自分自身いくつか抑圧を乗り越えた気分だった。

ヴァレスカは別の反応を期待していた。「あなた、あの人たちが魅力的だと思わないの？ あたしはそういうつもりで言ったのよ。あなた、あの人たちと愛を交わせる？ たとえばあそこの人みたいなのと？」彼女はストレートの黒髪とワシのような相貌をした、黄褐色の女を指差した。凶暴そうな黒人の若者の腕にしなだれかかっている。

「かれは、彼女が魅力的だと思ってるようだな」

明らかにモロクは、関わり合いになりたがっていなかったのだ。ヴァレスカの持ち出した提案は、かれにしてみればまるで目新しいものではなかった。街でみかける黒人女たちだっていたし、それも色の薄い女たちに限らず、思いつくどんな白人よりもそそる女たちだった。時にはそんな女たちの後をつけ、なんとか彼女たちと話に持ち込めるだけの勇気が出ないものか、と試みたこともあった。

ヴァレスカの熱意は、ただの気紛れな情熱の表現ではないとモロクは気がついた。彼女

は自分自身に流れる黒人の血を十分認識していた。ときどきはそのために落ち込んで、まるで癩病患者のように人目を避けたり、あるいはまるで予想もしないような時（たとえばバスに乗っていたり、公の場で踊ったりしているときに）自分がいっしょで恥ずかしくないかと尋ねたりするのだ。

この彼女の特異な情熱、この不思議な歓喜と野蛮なプライドと、これ見よがしの愛情のメドレーは、モロクをちょっとまごつかせた。彼女が、いつもの率直さを捨てていることについてかれを責め立てる間、モロクは彼女の目をまっすぐに見据えた。彼女の目は曇っていた。ことばより先走り、かれの感覚を焼きつくし、かれを欲望で苦しくさせるのだった。

彼女は何をするつもりだろう　愁嘆場でも始める気か？　安酒がしゃべっているのだろうか、それとも彼女は故意にかれをここに引っ張ってきて、自分の一番奥深くをさらけだそうとしているのだろうか。すでにかなり酔いがまわっているようだ。ここで酔い潰れたりしないでくれるといいのだが.....こんな肉欲のエルドラドでは堪忍して欲しい。

別の芸人がフロアに出た。「こいつは聞き逃がすんじゃないぞ、ヴァレスカ」そう言いつつ、かれは、さっきヴァレスカが指差した女の連れの、大きな黒人若者が、ヴァレスカに淫らな流し目をくれているのに気がついた。かれは、好色なカップルの方をあげて示し、ささやいた。「あそこにきみの崇拜者がいるぜ」

一方で、芸人がうめいていた。

「こんなところにはいないはず
こんな気分じゃないはず
こんなことはしてないはず
あなたさえいてくれたなら.....」

芸人が歌い終わると、モロクは大きな黒人のほうにまた会釈して言った。「かれを呼ぼうぜ。どうだ？」

「すてき！　それであなたがかれの女をモノにするのね」

音楽が、コールタールのようなきつさの爆音で始まった。かれは、旋回する人々のはざまを、コバルトブルーの柱となって動き回った。フロアの真ん中には、赤いセーターを着た巨大なエチオピア人が立っていた。かれは、場の指揮者さながらのように振る舞った。焼いた仔牛肉のような色のかれの鼻孔は、ふくらんで震えていた。かれの耳は、フランクフルトの表皮のような張り詰めた感じがした。四方八方からかれに接触する、緊張して華やかな湯気たつ人々のからだに向かい、かれは恐ろしげにうなってみせた。

モロクの目はヴァレスカに釘付けだった。たまに、まるで娼婦のような乳房にまわり

つくブラジャーの非情さだけを介してかれのからだに張り付いている、色の黒い生き物に穏やかな視線を向けた。彼女の頬の深いシナモン色に、ルージュの斑点が二つついている。彼女が虎のような優雅さと力強さをもって動くと、彼女が身につけた、安物の装身具の金属音が、彼女の身振りの荒々しさと響き合った。

「怖いのか？」と彼女がきいた。同時に彼女は、下腹部の震えるような動きを増した。

モロクはヴァレスカのことなど忘れてしまった。口に、渴いた、何とも表現し難い感覚をおぼえた。こめかみが狂ったように脈打った。腕を彼女の背中にしっかりまわし、より原始的な同席者たちの、無心な自由を真似ようと苦闘した。「手が熱いわよ」と彼女はつぶやき、頬をそっとかれの頬によせた。この簡単な動作でかれはすっかり緊張がとけてしまい、動く力をすっかりなくしてしまった。じっと立ったまま、押し潰すように彼女を抱きしめ、唇は彼女の匂い立つ首筋にあてがわれている。なにも軽蔑すべきことなどなかった。彼女の体臭はかれを燃え立たせた。血管を暖かい血がピリピリ走り、牡馬並の力が湧いたような幻想を与えた。

「もっと動かないとだめよ」と腕の中であえぐ生物の声が聞こえた。目の片隅で、彼女は赤いセーターの浮気者を探していた。

ふたりは舞台上のヴァドゥー演奏者たちに近寄った。金管の悲鳴が、まるで子供の恐怖のように、マァマァ……マァマァ！ と叩きつけた。コルネットのつんざくような厚かましさがかれの耳を潰し、背筋に寒気を走らせた。トロンボーンからは、息をのむようなグリセードが流れ、かれは腕の中で身震いする軽やかな肢体を締めつける鉄のような握りを強めるのだった。彼女はかれを見上げ、燃えるような唇で歌った。

「最初の晩じゃいやよ

いつまでたってもいやかもよ！」

湯気立つ、輝く人々のさなかをくるくると出入りしながら、非現実的な影に彩られ、かれは荒々しく自分の前に彼女を押しつけた。ストリングスの狂わせる急がすような波乱が、かれらが無情な肉欲の辺土へと追い立てた。時々、息詰まるような間合いで、ミュージシャンたちは舞台のふちから身を乗り出したが、その満月のような顔は、障害物競争じみた笑いでしわがより、谷が刻まれていた。回転する人々の頭上から、クレオソートの無愛想な噴射が降り注いだ。

「で、どうだった？」かれがテーブルに戻ると、震えて息も絶え絶えのヴァレスカが尋ねた。

「これまで体験した何物にも比し難いよ」とかれは、玉のような汗を額からぬぐった。

「もう一度いかが？」

「いやあ、まさか！」とかれは口ごもった。「そんなことしたら、ヘルニアになっちゃう
2」そしてかれは、ここを出ようと提案した。

と言いつつ、ふたりは残った。最後のホーンが断末魔を吹き鳴らすまで残った。明かり
が消されたとき、あたりはまるっきり伏魔殿さながらのありさまだった。

「いったい何時なんだろう」とモロクは、ヴァレスカをクロークの方に案内しつつもら
した。ふと、妻があと数時間で、医者と非常に深刻な作業を行なわなければならないこと
に思い当たった。妻は、自分についていてほしいと思うだろうか。

ヴァレスカは鼻歌を歌っていて、そこらじゅうをふらふらうろつき、自分の心地よい感
覚以外は何一つとして意に介さぬようだった。モロクは、いささか乱暴に彼女の腕をつか
み、腕時計を見た。ちょうどその時、サフラン色のタイツを着ていた芸人がやってきた。
彼女はジンと歌ですっかり出来上がっていた。そしてハミングを始めた。

「時計を見ると六時の鐘が鳴り

あたしは言ったよ、さあパパ、ほかに能はないのって」

かれは酔いしれたように耳を傾け、ヴァレスカの肩に腕を投げかけると、彼女を抱えあ
げて階段を昇った。ヴァレスカは、モロクが燃え盛る炎から彼女を救わんとする消防士で
もあるかのように、かれにしがみついた。「抱いて、ディオソ、愛して」とつぶやきなが
ら、彼女は熱情をこめてかれにキスした。とうていモロクの対抗できそうな熱情ではな
かった。黒人の若者数名が、ニヤニヤしながら階段ですれちがい、暗黙の祝辞を投げか
け、こちらが幸せであることに幸せを感じているようだった。

路肩には、タクシーが列をなしていた。ハーレムでは恒例の夜明けだ。生気を欠き、む
さ苦しく、借家のコーニスがあちこちに見られる。おがくず人形3の群れが、あるものは
白、あるものは茶色、あるものは黙視録の高貴な娼婦のごとくに真っ黒だったが、ベッド
ラムのチョコまみれの道路にころがり出た。それらはドブに向かってよろめき進み、新
しい試合を待つトランプのように積み重なるのだった。モロクは考えた。「おれはあのラ
ミネート仕上げのダイヤのクイーン、青いアーク灯の下のざくろ石みたいに輝いてる……
それとも、人相が見事に吹き出物で紋織りにされた、スペードのエースのボタン穴に差さ
れた、あの背の高い性の花がいい！」

ふたりがタクシーの窓から最後に一瞥をくれると、出てきたのは「我こそは偉大なり」
氏、堅苦しい階級意識をむきだしに、千鳥足で通りを下って行進してゆく。「得体の知れ
ない閣下」(それもドレス・スーツとセルロイドのカラーをしっかりと着こみ)、「パルダ
ル・ウーズ・ブルース」に合わせて歩いてご帰還。右腕の下には、黒い葬儀用のケースを抱え
ている。その中にはエジプトの疫病からの吐息をたたえて。

第13章

七つの鉢を持てる七人の御使の一人きたり、我に語りて言ふ『来れ、われ多くの水の上に坐する大淫婦の審判を汝に示さん。地の王たちは之と淫をおこなひ、地に住む者らは其の淫行の葡萄酒に酔ひたり』かくてわれ御霊に感じ、御使に携えられて荒野にゆけり。

二番街のカフェ・ロイヤルは、大娼婦の膝元にあつてはつまらぬ人造宝石に過ぎない。男も女も、警官のようにそこに集う。これがキリスト教徒の施設であれば、給仕たちは汚れたエプロンを自慢に思ったりはしなかつただろう。たまには休みをとって、髭を剃り、風呂に入るだろう。しかし、もし会衆がこれほど蛆虫の子孫には見えなかつたり、給仕たちがもうちょっとでも欠点が少なかつたりすれば、ここはカフェ・ロイヤルではなくなってしまう。それだから、アメリカの作家たちは大ジョッキとともにこの場の臭気を吸い込み、その種をこの豊かな肥え溜めに植え付けるのだ。

エイブラハム・リンカーンは、ゲティスバーグでこう言った。「われわれ生ける者がこれを行なうというのは、ふさわしくもあり、適当でもあることなのです……」。エイブラハム・リンカーンがゲティスバーグで何を言ったかなど意に介すこともなく、プリゴツィとモロクは環状線のすぐ南の、このおがくずを敷いた集合場所で、約束にしたがって顔をあわせたのだった。会ったときには両者とも、しっかり酔っぱらっていた。これまた、ふさわしくもあり、適当でもあると言うべきだろう。なぜならかれらは、死者にその悲しみの一部を捧げるべくここに集ったのだったから。

プリゴツィは陰鬱だった。その目は、納骨堂の中で燃える二本のたいまつだった。かれの喋る声は、地の奥底から響くような割れた声だった。笑うと（それも、息が詰まりそうな陰気さを払いのけるため、かれがしょっちゅう行なうことではあった）その反響はのどを掻き切られる雌ブタの、間欠的な金切り声のように聞こえるのだった。

「おまえ、発狂しそうだな」とモロク。

プリゴツィは眼鏡の向こうから、気弱そうに笑った。

「なあシド、おまえもっと酒いれて元気出さないよ。おい、聞いてんのか。酒入れ

ろって！」

かすかな笑いが、死体めいた表情を彩った。この人物は、吐きたいのに吐けないような様子だった。かれの脳は発電機のように作動していた。どんなに飲んでも、それは滑らかに回転し、思考を積み上げ、その思考がかれを明日も、明後日も、そのまた次の日もかれを悩ませるのだった。

その日の午後四時、かれの妻が出産で死んだのだ。何時間というもの、かれは手術室外にたちつくし、医者たちが彼女に割り当てている罰を自ら吸収していた。絶え間ない刺すような叫びが、どんなことばよりも雄弁に、中で行なわれているのが殺人であることを告げていた。

かれは知っていた。分厚いドアの向こうでは、冷酷な筋肉質の男たちが白衣をまとい、彼女のからだを切り刻んでいるのだ。かれらは無言で、迅速に、彼女の震える白いからだに吸い込まれる、輝く道具でもって作業しているのだ。

背の高い眼鏡の若者が、サラ・プリゴツィの身動きせぬ肢体の上に屈みこんで、彼女の腰の狭いゆりかごに捕われた、よじれた肉の塊を摘出すべく、おそろべき細心さでもってその血まみれの手を動かしていた。横たわったからだは、何の抵抗も示さなかった。絶叫は、引き延ばされたうめき声にとってかわり、それが気違いじみた単調さで上がったり下がったりしている。

突然、うめき声がとまった。これでおしまいだ、とプリゴツィは自分に言い聞かせた。

その通りだった。戦いは終わった。形のない、ぐちゃぐちゃのプルプ状の肉が転がり落ちた。静かに看護婦たちが道具をまとめた。どれも鮮やかな赤い輝きを浴びている。

プリゴツィは愛する者たちのからだを病院に残し、それらが洗われ、木毛をつめて梱包され、永い眠りのために並べられるに任せた。

病院を後にしつつ、かれは奇妙な平静さでもってこうつぶやいた。わずか数時間前に、健康な、うら若い生体を運び込んだら、それを連中は死体二つと交換してよこした。でかいの一つ、小さいの一つ。小さいほうは、死体の形すらしていなかった……。産婦人科の医療水準なんて、その程度のもんだ。

プリゴツィはモロクにこう説明した。「おれは何とか正気を保った。でも、それも家に帰りついて、空っぽのアパートを見るまでのことだった。そこで切れちまった。まったく、派手にあばれまわったよ！ 病院に戻って、医者どもをぶち殺してやりたかった。でも、やったのはせいぜいが、通りに駆け出して腹の底から泣きさげぶことだけだった」

かれは絶望的にあたりを見回したが、その目は自分を閉じ込めた監獄の四方の壁以外は何も見えず、あと六時間と二十五分で椅子に縛り付けられて強い酒を飲まされるという考えに完全にうちのめされた人間の目だった。

モロクはまたグラスを満たしはじめたが、途中で気を変えて、相手の袖に優しく手をかけた。

プリゴツィはわめいた。「おい頼むよ、普通にしてくれよ！ どうしようもないんだから。ここにいて、話をしよう。何なら、ユダヤのクソ爺どもを呼んできて、ひげでも引っ張ってみるか」かれは機械的にテーブルをげんこつで叩いた。声がかんだかく、やがて吠えるようになる。

「とにかく何かしなきゃ、単にそれだけのことだよ！」かれはテーブルを叩き続けた。げんこつが赤むけてきている。

かれの暴れ方は、遠くのテーブルにすわっていた山羊ひげの老紳士の注意をひいた。紳士は自分の加わっていた集団を辞し、こちらにやってきた。

かれはじろじろとプリゴツィをながめまわした。「おやおや。いったいどうしたのかね？」とかれは驚きの声をあげた。

「エルフェンバイン先生を紹介しよう」とプリゴツィは、生気のない一本調子の声で言った。

モロクは立ち上がって、乱入者をねめつけた。「お呼びでないよ……放っといてくれ！」とかれは叫んだ。

「大丈夫だって。おれの友達だから。医者じゃなくて、歯医者だし」とプリゴツィ。

かれは顔もあげずにこのことばを発した。じゃがいものふくろのように背を丸めてすわり、まだげんこつで叩き続けている。

エルフェンバイン先生は二人をちらりと見るなり、退却にでた。お笑い劇団の役者たちが隣のテーブルでがついていた。かれらにとっては、リハーサルも本番も同じことのようにだった。

プリゴツィは、こんどは落ちつかなげに立ち上がった。そしてエルフェンバイン医師の肩に腕をまわし、やさしくすわらせた。

「大丈夫ですよ、みんなあなたに残って、この葬式パーティーを楽しんで欲しいんです」とうめき声をあげた。

「葬式パーティーですと？」エルフェンバイン医師は立ち上がりかけた。

「すわれ！」とモロクは叫んだ。「こいつはあんたにいて欲しいって言ってるんだ」

「ホトケ二体の話をしてやれよ、ディオ。この先生は、生涯で死体ってもんにお目にかかったことがねえんだ。……道具の話もしてやってくれ」

「任せろ！ それでおまえの気が済むんなら」とモロクは言った。

エルフェンバイン医師は、あっさり驚きと警戒の表情を浮かべた。モロクは派手に顔をしかめた。再び歯医者はプリゴツィに目を落とした。かれがのぞき込んだのは、一對の

溺れる目だった。ふけの巨大なかけらが、かれのコートのえり首を縁取っていた。髪には泥がこびりついている。

プリゴツィのガラスのような視線は、エルフェンバイン医師を突き抜けて、カフェの外壁に焦点をあわせていた。かれの目には、炎の文字で彫られた墓碑銘が見えるのだった。

モロクはウェイターを呼んで、ごちそうを盛大に注文した。エルフェンバイン医師は抗議して、食欲がないと言った。が、モロクはこだわった。

「これはシドのパーティーなんだから、あんたにもご相伴していただかないと。葬式の後には食事と相場が決まってる」

もちろん葬式などまだ行なわれていなかったが、それでも二人は、それを過去の出来事として言及するのに固執した。

エルフェンバイン医師は、モロクがルーテル派の墓地と関係のある下劣な嘲笑をプリゴツィに浴びせかけるのを、気遣いをこめて微笑しつつ眺めた。

プリゴツィが石碑なみの熱心さで耳を傾けているのに気がついたモロクは、医師に親しげに呼びかけた。「つまりだね、先生、おれの親戚はいつもルーテル派の墓地をひいきにして、それってのも……まあ、まず第一にそれがうちの一族の習慣だったし、それにもう一つ、あんまり高くなかったからだ。近くのビール場で、素晴らしい飯と酒を出したなあ。それだけははっきり覚えてる」

かれはべとつくヴィシーを飲んでのどを洗った。

「この親戚どもってのは、『すべての労働は食うためにある』ってことばを实によく理解してたんだ。だから、涙が涸れるまで泣くと、派手に飲み食いしたもんだ。その頃、おれはまだ餓鬼だったけど、グラスに残ったビールを飲み干すのがおれの仕事だった。平板な、金属っぽい味がしたけど、でも鑑定家になるような歳じゃなかったからな。きれいに飲み干したよ……」

エルフェンバイン医師は辛抱強く耳を傾けた。表情から読み取れるのは、かれが自分の相手をきちがいだと思っているということだった。

「何杯か飲むと、話は決まって死体のほうに戻る。思えばみんな、死人の悪口は言わなかったな。『あわれな魂だわ。でも、今のわたしたちはましでしょうよ』すると、その一言を証明するためとでもいわんばかりに、そこでみんな一斉にくっとジョッキをあおる。で、それが続いてくんだ。ガブ飲みしてはジョッキを空け、いずれだれかが歌いだす。例のあの、陰気で感傷的な短い歌。ドイツ人が合唱したがるようなヤツ」

かれは「ドイツ五番2を口ずさみだした……「われら行進するときは、静止しない……」そして身を乗り出し、あの墓地の隣での、あたたかく快適な葬式パーティーの思い出の歓びで輝かんばかりだった。医師の山羊ひげは、かれの口に入りそうだった。医師のほう

も、モロクが自分の山羊ヒゲを食べるのではないかという誤解をおぼろげながら感じたほどだ。このモロクというおしゃべりな非ユダヤ教徒は、発狂した悪魔にちがいない。

それでもエルフェンバイン博士は、何とか平静を保ち続けた。

「つまり葬式が好きだったと、そういうわけですか」とかれは、何と答えていいかわからずに言った。

「もちろんだよ、センセ！　なんでみんな、葬式に行くのをあんなに嫌がるのか、おれにはわからんね。葬式で気が滅入ったことは一度もないよ。おれ自身の葬式となるとこりゃまた別の話。ふんふん。『神は与え、そして奪いたもう』まあ、妥当な線だろうな。え、そうだが」

この切れ目に、お盆に皿を満載して、ウェイターが戻ってきた。

「だれがこんなに食うんだ？」とプリゴツィが叫んだ。かれは宴席の規模の大きさに、惚けてしまったようだった。

「おれがいま葬式ってやつのエチケットを説明してたところだろうが。詰め込めば気分もよくなるぜ。信徒も屠殺場も持ち合わせてないユダヤ司祭みたいな、貧相なツラしてすわってんじゃねえや」

エルフェンバイン医師はいきりたった。かれはこういうほのめかしが嫌いだったのだ。ここで屠殺場が出て来る必然性など、まったくないはずだ。かれはモロクの精神が、豚肉のように汚れていると思った。同時にかれは、自分が向こうのテーブルで食事を済ませたことを忘れ、食べ始めた　幕屋の司祭のように。

モロクは切れ目なく話し続けた。話題は一つ残らず気の滅入るものばかりだった。にもかかわらず、かれはおかしな台詞を埋め込もうと手管を尽くした。プリゴツィは、その状況を楽しんでいるかのように振る舞った。楽しむ以外にこの世にはやることが残されていないので楽しむような、そんな楽しみ方ではあったが。

しばらくすると、会話のほとんどが向けられていたエルフェンバイン医師は、抗議を唱えずにはいられないと感じた。決定的に不愉快に思ったのだ。モロクはちょうど一連の侮辱的な形容詞群を吐き終えたところで、こんどはユダヤ人を罵倒し始めていた。エルフェンバイン医師は騒ぎを起こすつもりはまったくなかった。

「ハッハッハッ、いやあ、しかしね、その言い種はちょっとキツすぎやしませんかな？」

「ハッハッハッ、いやあ、しかしね」と茶化したような返答がかえってきた。「ある編集者も、おれの原稿を読んで同じことを言いやがったよ。だからおれは言ってやったね。

『ハッハッハッ、いやあ、その台詞は侮辱だ。ちょっとキツすぎるだと？　ハッハッハッ、カラシの話じゃねえんだ！』

モロクはこの線で話を続けた。プリゴツィは耳をそばだてた。医師が耳の痛い思いを

しているのが痛快だったのだ。かれは、この手のひげを育ててで威厳を高めようとするセコいユダヤ人どもが大嫌いだった。こいつらが育てるべきなのは、むしろ知性なのだ。

その時、モロクのせりふが聞こえた。

「ほう先生、もしアメリカ中で、この畜生どもについておれと同じように感じている人間が二人しかいなくても、暴動が起きるぜ。なんのかの言っても、おれたちゃ我慢の限界なんだ！ あんな連中と暮らしてて、辛抱してられるわけがないだろう！ おれたちゃ剃刀で仕事にかかるべきなんだ……この汁気たっぷりの真面目さを多少そぎ落とすべきだ。いますぐはどうだい、先生。いますぐってのは？」

エルフェンバイン医師は頭をゆすり、肯定と否定を同時に示そうとしていた。

「あなたの大言壮語癖がなんとなくわかりかけてきましたよ。どうやらあなたは、非常な文人のようすな」

「文人！ そいつは人に貼るレッテルにしちゃあ、チトロくでもないんじゃないかねえの？」

エルフェンバイン医師は、自分にも感情があったこと、そしてその感情が侮辱されたことを認識した 激怒するほどに。

かれは柔らかな口調で言った。「席に招いた客に対し、もう少し配慮を示してはいかがですか？」

モロクはこれを、傷ついた感情の極めて貧血じみた表現であると考えた。かれは、顎に一発くらうのを心待ちにしていたのだ。とはいえ、総じてかれは、自分の愚弄の標的が哀れに思えてきた。もう少し気骨のあるやつを相手に選べばよかった。かれが求めていたのは、テーブルの下での何でもありのくんずほぐれつ、口いっぱいにおがくずを詰め込まれ、骨も何本か折られることだった……。かれは、プリゴツィにまともなけんかができるだろうかと考えた。それがかれのためになると思えば、モロクとしては喜んで一撃をくらわせてやるつもりだった。

この状況は、非常に魅力的な娘の劇的な入場によって救済された。だれもが彼女にあいさつし、あるいはあいさつされるのを待望しているようだった。立ち上がって彼女を迎えに駆け寄る者もいた。またある者は、手を振って彼女の名を呼んだ。

モロクはその名前を捕らえた。ナオミか。美しい名前だ、とかれは思った。そして実物も美しい。

崇拜者たちを、配達人のごとくに振り払うと、彼女はまっすぐにこちらのテーブルにやってきて、プリゴツィの肩に腕をまわした。

「かわいそうな人」と彼女はつぶやいた ちょっと聞こえよがしの口調だ、とモロクは思った。「何て申し上げたらいいのかしら」彼女の慰めのことばは、ガチャガチャ言う皿の音と、テーブルの役者たちの大騒ぎにかき消されてしまった。

切れ切れに聞こえる彼女の声は、モロクには天の声にも聞こえた。かれは彼女を頭のてっぺんから爪先まで眺めまわした。プリゴツィは即座に、娘を紹介しようとした。

「焼けぼっくいってやつでね」と言うかれの表情は激しく紅潮し、かれの醜さを際立たせた。かれは椅子を引き寄せ、隣にすわるよう彼女に懇願した。ふたりは気楽な会話を始めたが、しゃべっているのはほとんどがナオミのほうだった。残りのふたりはそれを眺め、聞き手の地位に満足し、彼女の暗い声と生き生きした身振りに完全に魅了されていた。

こうした状況で求められていると思われる、因習的な考えをすべて述べ終わると、彼女はいきなり話すのを止めた。だれも、何と書いていいものやらわからなかった。気まずい沈黙が流れた。

「お邪魔だったかしら」と彼女。

「まさか！」と残り全員が声をあわせた。

「あなたたち二人ったら、ほんとひどい有り様ね！」と彼女は、完璧な遊び女のような調子で言った。

こんなきわめて単純でありきたりなせりふでも、モロクは即座に舞い上がってしまった。こんな配慮の中に含めてもらえるなんて、称賛に等しい。プリゴツィがどう思っているのかは、さっぱりわからなかった。……「焼けぼっくい」だと？ 八！ 聞いて呆れる！

このナオミがユダヤ女なのは疑問の余地がなかった。が、これまでモロクがほとんどお目にかかったことのないタイプだった。これほど非のうちどころのない美しさともなれば、決して会ったことはないし、こんなユニークな魅力をもった女ともなればなおさらだ。彼女はユダヤというより東洋的で、セム系というよりはエジプト的だった。さっそく彼女を理想化にかかったモロクは、心の中で彼女を、古代アレクサンドリア世界、アフロディテ教団の叡知を吸収した黒髪の放浪者たちの末裔に仕立てあげた。それが異国のことばで育てあげられ、謎と情熱にあふれんばかりとなっている。

彼女の魅力がプリゴツィに与えた影響は、かれの話し方を変えることだった。いまのかれは、口にビー玉を詰め込んだような話し方をしていた。自分の発声がよくなると考えたのだ。そう考えているのはかれ一人だった。

プリゴツィに声が語りかけていた。それは聖書（会話のかなりの部分はこれが占めていた）やきちがいキリスト教徒、あるいはスタンリーのような、聖職者について果てしなく駄弁り続けられるような詩人については、何一つ語っていなかった。かれの内なる声は情熱の声だった。「身を焦がすよりは結婚したほうがいまだぞ」とその声はうめいた。

かれはチラチラとナオミを盗み見た。唇はサクランボウのように熟れ、目はコール墨のように黒い。しなやかな手足は活力に満ちている。自分の隣に横たわり、慰め、自分のた

めに泣いてくれるナオミを想像しただけで、背筋がゾクゾクした。……かれはそこまで空想の翼を広げており、だから自分が情けなかった。

ナオミはエルフェンバイン医師とあたりさわりのない会話をかわしながら、残りの二人を観察していた。医師の存在は、もはやほとんどだれも気にとめなかった。まるで、みんな庭に生えているのを知っているのに、根が熟して引っっこ抜かれるまで無視される野菜のようなものだ。

男たちが入れ換わり立ち替わり訪れ、彼女の微笑か、あるいは曖昧な約束を引き出すまで割り込んでいった。ナオミは落とし穴に落ちた雌鹿のようなもので、シンバルが鳴って犬どもが吠えだすのを、胸を高鳴らせて待ち詫びていた。彼女の受ける視線は、彼女の心に向けられた槍のようなものだ。自分の餓えた崇拝者たちをどうやってなだめようか、彼女は途方に暮れていた。

やがてプリゴッツィは席を立ち、足早にテーブルから遠ざかった。モロクは後を追った。ふたりは階段を降りて便所に向かった。モロクは、ナオミが自分を見つめているのを感じたと思った。その目は、はやく戻ってきてくれと懇願していた　かれにはそう思えた。

便所でプリゴッツィは振り返り、悲しい沈んだ目で相棒を見た。

かれは即座に用件に入った。

「あの娘が欲しいんだろう、え？」

モロクは虚をつかれた思いだった。

「やれよ、モノにしろよ、でも……おれの前であの娘に、好きだの気に入ったの言わないでほしいんだ」かれの声は落ち着かなげだった。「わかったか？」かれはさらに近寄って繰り返した。「おれの前ではやめてくれ。……そんなの耐えられん」

モロクは興味のないふりをしようとした。ナオミの魅力について、ビー玉について論評しているかのような調子で語った。

プリゴッツィは辛辣で、意見を曲げなかった。

「ディオ、おれにそんなごまかしはきかないぜ。おれは欲しくないんだ。わかったか。おまえにもチャンスがあるってわけだ……おれの気が変わる前に、彼女をモノにしろって」

「気が変わる？」

「いいか！　おまえにもチャンスがあるって言っただろう。確かにあるけど、でもごくわずかなチャンスでしかないぜ。忘れんなよ。彼女の目には、おまえは単なる非ユダヤ教徒だ。鉄は熱いうちに撃ったほうがいい」

「こいつは一体全体、何をほのめかそうとしてやがる？」とモロクは考えた。選ばれた

る民の一員と話すとき、非ユダヤ教徒はいつも五海里遅れをとっている。そんなことは知っていた。

「馬鹿野郎！」とかれはわめいた。「決めたぞ、今からあそこに戻って、おまえの鼻先で彼女をかつさらってやる　おれにできるってことを、おまえに証明するためにだ！」

「まさにそうして欲しいんだ。ナオミよりいい娘なんて見つからないぜ」プリゴツィは深いため息をついた。

「おいシド、こいつは一体どういうことなんだ？　何をたくらんでやがる？　なんか臭いぜ」

「へえ、おまえはどう思うんだ？」プリゴツィは、待ってましたとばかりに答えた。「おれがああな娘を欲しがってると思うか？」

「それを聞くのは二度目だぞ。何を心配してんだって！　畜生！　つつ立っておれをにらむのはやめてくれ！」

プリゴツィはためらった。この非ユダヤ教徒に、物事を明らかにしてやる価値はあるだろうか？　ある点で、モロクはほかの非ユダヤ教徒どもとまるで同じだった。

「おまえが連れまわってる、あの黒ンボを始末して欲しいんだよ。これで納得がいったか？」とプリゴツィは宣言した。

「あの黒ンボ、だと？　こいつの考えてんのはそれだけか？」とモロクは考えた。そして温和に笑った。プリゴツィの気にしているのがそれだけなら、なんだってナオミのことで、ああもしつこかったんだ？　なんであんな言い種を？

プリゴツィはかれの考えが手に取るようにわかった。それどころか、その遙か先を読んでいた。「心配させとけ」とかれは思った。それから口に出してこう言った。

「あんな混血黒人とつるんで、まともに扱ってもらえないだろうに。おれがどう思ってるか教えてやろうか？　おまえ、ヴァレスカと結婚しかねないくらいイカしてるだろ。なあ、今だっておまえは女悪魔とひつつかされてるんだろ　それでももうたくさんだろうに。黒チャンなんかを家に入れて、どうしようってんだ？　総スカンをくらうぜ、わかってんだろ。友だちなんか一人もいなくなるぜ、わかってんだろ。一人も……一人もだぞ」

この演説は、モロクにとって極めて面白かったため、かれは腹の皮がよじれるほどのバカ笑いを発した。

「シド、おまえ、つまらないことで気をもみすぎてるよ。おれがヴァレスカと駆け落ちするなんて、だれが言ったんだ？」

プリゴツィは断固として納得のいかない様子だった。

モロクは先走った。「なあ、聞けよ。ついこないだも、ヴァレスカがおれにこう言ったん

だぜ。だれかを連れ込む場所に困ったら、いつでも自分のアパートを使っていいって……聞こえたか？ これでもおれが駆け落ちすると思うか？」

こんどはプリゴツィは節操なく笑う番だった。

「いつか試して見るよ……とにかく試してみろって！ ハッハッハッ！ やってみなよ！ その女、生きてヴァレスカのアパートから出てこれないぜ。おまえも、おれがここに立ってるのと同じくらい確実に、のどを掻き切られるぜ。まったくおまえってやつは、女の言うことを全部鵜呑みにするなんて単細胞もいいとこだ。だれがそんな話を聞いたことあるかっての」

かれはもっと心から笑った。目には涙を浮かべていた。

「えーい、アホ臭い！」とモロク。「上に戻って、ナオミをこっから連れだそうぜ。ここは南京虫だらけだ」

およそ五十年ほど前、フランスの考古学者がエルサレムで、最初の教会の遺物を発見した。クレルモント・ガノーが発見したこの遺物は、第二聖院を取り囲む欄干の柱に刻まれた文字だった。そこにはこうあった。

「非ユダヤ教徒は死の苦痛にあってもこの門をくぐることはない」

このソロモンが築かせた壮大なる構築物は、伝説によればフリーメーソンたちにとってもずっと多大な意義をもつものであり続けたが、実際の寿命は四百年ほどだった。バビロニアのネブカドネザル王がそれを完璧に破壊し、ユダヤ人たち4を虜囚として連れ去った。この歴史的な事象に鑑み、H・G・ウェルズはこう付け加える 「それはかれらを洗練された文明人と考えてのことだった」と。

バビロン虜囚の子孫もどきどもに囲まれて、ナオミはもろい鼓膜に紫のヒッポグリフのようにのしかかる、黄金の沈黙に包まれていた。その姿は、ヘスター通りやフォーサイス通りの薄汚れた戸口から、不意に姿を表わす、絹や毛皮をまとった美しいビザンチウムの蛾どもとも、そこはかとなく似ていた。

外では、九人家族を乗せた小型車が路肩に止まったところだった。乳児に乳をやっている母親は、変色した乳首を急いで肩に投げあげた。母乳に満ちた、途方もない乳房だった。小麦粉の袋みたいな、巨大な乳房だった。

その家族全員が屋内に行進してきた。マデイラとクリュニーレースが、プレッツェルやソーセージのかけらにこすれた。アラスカ産アザラシが大仰な身振りで、ツバやサラミの皮でべとつくおがくずを巻き上げた。開幌バルーシュ馬車のようにカットされたサテンのドレスが、テーブルや椅子にこすれて、ささやくよう音をたてた。あわれっぽい老人、靴ヒモ売りや鉛筆売りが、わめきたてる鵜の群れの中を麻痺患者のように動いていた。金曜

日の晩に見られる、労苦と苦悶でボロボロになり、中風で震えながら、シナゴークに集う会衆に加わる、カニじみた足取りと同じだ。週のこの日には、イスラエルの民たちは悲嘆に身を捧げ、ひげ姿で未だ発見されぬかの契約の箱船を夢見、そしてイーストサイドのすべてが、うずく傷のようにぱっくりと開き、腐敗の蛆虫で生々しく息づく。

モロクは、このシュバリス市民の肥え溜めで目を肥やしつつ、こう思った。「確かに、ドイツ人がヨーロッパの中華民族なら、このろくでなしどもは人類のダニかシラミとでも言うべきものだな」

ナオミと、彼女のまわりをふくれあがったカリフラワーのようにさまようグズどもとの間に、一体どんな共通点があるのだろう、とモロクは自問した。彼女と、地下鉄からゲップしてくるようなひどい臭いの集団、この労苦の敗戦場から流れて帰ってきたような集団との間に、いかなる親和性が存在するというのだろう。

モロクの腕に、幻影のように触れているナオミの繊細な指は、かれをしてこの集団に新たに加わった一人を認識させるに到った。

この人物は、秘儀伝授者の悲しいユダヤ顔をしていた。中途半端に有名な物書きで、新聞にイディッシュ語でお伽噺を書いていた。カフェ・ロイヤルの常連のグズどもは、炭酸水とパストラミ・ソーセージをつまみに、かれの駄洒落を楽しんでいるふりをするのだった。

この男は、動作の宝庫だった。その手は絶えず、鼻と額から汗をぬぐうので忙しかった。いつも汗をかいている。その精神も、絶え間ない噴火状態にあった。モロクはその指に気づかずにはいられなかった。それは（たとえばエルフェンバイン医師の示したような）白いラードを不愉快にも連想させる、仕立て屋まがいの柔らかい節のついた器官ではなかった。その反対に、かれの指はしっかりとしたへら状の突起で、人生の首根っ子を引っ掴んで、しっかり揺さぶりをかけられる形をしていた。

この駄洒落野郎の書くお伽噺は、その指先のように焦点を欠き、そのニタつく頭蓋骨並に欺瞞的なものだったが、ご当人もお化け屋敷にぶら下がる頭蓋骨並の陽気さを誇っていた。笑う理由がまるでない時に笑い、小話や、あるいは無数の手持ちのお伽噺を披露するときには、エジプトの憂鬱がその眉にしっかりとすわりこむのだった。

この腹わたのよじれるような死体閣下は、每晚古典作品（「ドンキホーテ」か「ハックルベリー・フィンの冒険」）の一つとともにベッドに入るのだが、かれは胸をえぐるような情熱の苦悶にさらされていたのだった。夜の五時から七時まで、かれは愛の歌を書くのである。これは新聞や、あるいは出版社のために書かれるのではなく、自分の情熱の狂気をなだめるべく書かれるのであった。毎晩のように、かれはナオミが部屋に引きこもるのを待った。ナオミの部屋は、ロイヤルから目と鼻の先にあるのだ。それからかれは、彼女

の踊り場に爪先だって忍び寄り、詩を彼女の戸の下にすべりこませるのだった。時には花を残したが、それは夜の間にしおれ、香りも霧散してしまうのであった。これらの贈り物について、ことばが交わされることはなかった。ナオミはそれを悩みながら読み、そのヘブライ魂の賛美歌に打たれつつも、かれの醜さの謎を理解することができなかったのだ。

このゴルゴンの愛は、メームノンのコロッサスの日の出におけるため息のようなものだったが、モロクの折衷趣味に訴えるものがあった。そのおそるべき拳をタルムードの臍に沈め、あるいはマホメットの聖なる裾に改宗者のようにしがみついているというのに、かれがそれによって、愛する者の顔をその硬直した翼の尖端で愛撫しようとしているなど、だれに予想できただろうか。

モロクの興味は瀑布のうなりにも似ていた。かれは同じ熱意を持って、アルハンブラの建築について、怠惰の特性について、古代テーベの地形について、あるいはインカにおける共産主義についてしゃべりたてることができただろう。モーゼス・マイモニデスの名前が拳がただけで、かれは十二世紀の成果に関する熱狂的な語り突入するのだった。かれは、偉大な賢人の原点の題名を並べ立てた。「有害なる動物の噛み跡について」「喘息論」「自然史論」「痔について」等々。

かれの想像力は、フンコロガシの糞内運動にも似て、日夜だれにも邪魔されずに暴食しながら同時に己れの切れ目ない排泄物のテープを、糞の神殿内における臍物的驚異の名残として紡ぎだすのだ。そのラビ風の隠喩は真珠のごとき曇りをもって投資された。かれが認識論の現実に触れると、すべてが震えて輝いた。聞き手には辛辣で忌まわしくとも、かれの魂は幻影の中で迷子になった、引き延ばされた精霊のようにはばたくのだった。

一方でプリゴッツィは、だれかが隣の椅子に起き忘れた新聞に、急に興味を示した。十五ページのどぎついイラストの下の記事はこう読めた。

「この世の初めから、死者に敬意を表するのは人間の明らかな義務でした。その時代の習慣に従った、かれらにふさわしい安息の場所を与えることで、人は死者への心からの愛情と忠誠をしかるべく表現するのです。

先立った者たちの最後の住まいを、かれらの思い出に敬意を表しに訪れる生者たちの目に、美しく心地よいものとするため、できる限りのことをしたというのは、慰めの効く範囲で非常に心休まるものです。

ちょうど各国がその著名な死者を、その名がいつの時代にも寿がれるべく恒久的な記念碑で祭るように、いまやあなた自身の愛する者のために、できる限りのことをしてやるのが可能となりました。しかもこれは時代の最先端をいく方法です。他の手法はもはや過去のものとなりました。

この人道的な運動の指揮者たちは、この広告のクーポンを切り取って下の住所に送るよ

う人間としてお願いするものであります。そうすれば、この豪壮にして印象的な殿堂を説明した完全図解の本を受け取り、この壮大さのすべてを理解していただくことができるでしょう。

火葬と霊廟を混同してはなりません。あなたの愛する者のからだは炎の熱によって消散したのではなく、最高の墓地や個人廟でとまったく同様に、純白の個室に封じ込められるのです。しかもお値段は通常の埋葬と同じ。霊廟への奉納は時代の進歩と歩調をあわせたものです。衛生面では火葬と同じ、感情面では教会墓地と同じです。霊廟は、死者に美しい安息の地と永遠の思い出を提供し、お得で現実的な埋葬方法となっております。

ご家族やご友人が肩を寄せ合って、純白の個室に横たわり、地面からは高く乾燥したところに遠ざけられ、水や湿気やカビの入れないように封印されるのです。霊廟は墓地の恐ろしさを排除し、究極の安息場所を、慰めと美に満ちたものにしてくれます。

この殿堂は、人々の記憶においてあまりに聖なるものとなるため、放置された墓地がしばしば被るような凌辱を受けることは決してありません。本霊廟は宗派を問わず、あらゆる教義や宗教に開かれております。火葬をお好みの方のために、素晴らしい骨壺用のスペースも用意してございます。

霊廟は建築的に美しく豊かなものとなり、花崗岩と大理石とブロンズにて建設されます。これによって本霊廟は、エジプトのピラミッドのように堅牢で耐久性のあるものとなるでしょう。

死がわれわれすべてに最終的には打ち勝つことは認めなくてはなりません。ご家族を、箱や小函の保護なしに地中に埋葬なさったりするでしょうか。しかし、箱や小函など、なんら保護を加えないのと大差ありません。

愛する者の姿を霊廟に収めれば、常に乾いた場所に安置されることになるのです。

あなたには二つの選択肢があります。一つは総じて、暗闇の中の死です。地の奥底の死。いつも地底を、下を見下ろし、湿った墓穴をのぞき込んでいる死です。もう一方は、光の中の死です。日光と明かるさの中の死。復活の希望に満ちた死です」

プリゴツィはこの新聞をたたんで上着のポケットに突っ込んだ。唇からは、気味の悪い笑い声が響いた。

ナオミとモロクは意味ありげな視線を交わした。詩人は席を辞し、散歩に立った。

プリゴツィを説得して帰らせるのは簡単だった。道すがら、かれらは照明の暗い無数のウィンドウの前で立ち止まっては時間をつぶした。ドラッグストアのウィンドウの「薬、脱腸帯、松葉杖の本拠地」という看板がプリゴツィの目にとまった。かれはそれに魅了された。

「こいつの摸写が欲しいもんだ」と叫び、かれは玩具を求めて騒ぎ立てる子供のように、

ウィンドウの前で踊り、手をうち鳴らした。

自宅の戸口にたどりついたプリゴツィは、モロクに向き直った。

「ナオミを家まで送ってってやってくれよ、でも、言っとくけどな、地下鉄には連れこむなよ。あそこは石灰塩が降ってくっからな。シーッ！」(かれは唇に指を当てた)「これで変人どもや厄介者が寄ってこなくなるんだ。シーッ！」

モロクは黙って二番街沿いにナオミをエスコートした。プリゴツィのアパートから彼女のところまでは、歩いてものの数分だった。かれは即座にプリゴツィのところに戻るつもりだった。

ふたりは再び、ウィンドウにドストイーフスキーの肖像を飾った、ロシア語の書店の前を通りかかった。ロスケの身体に生まれ変わった、まったくのキリストだ。かれの眼窩から涙が怠惰にこぼれ落ちた。モロクは帽子を傾けた。手早くさりげない動作ではあったが、ナオミはそれを見逃さなかった。

ナオミが家と称する家具つきの部屋は、古い煉瓦造の家の三階、「ヨーロッパ風」レストランの上階にあった。厨房からの臭いが廊下に充満していた。

かれは戸口でおやすみを言い、彼女の手を暖かく握った。彼女は、手を取られるままにしていた。二人がそこに立っていると、ジョン・ドス・パソス言うところのゴングのような月が、ウィーホーケンの上空にのぼってきた。

ナオミは、じきに連絡するという約束をモロクから取り付けていた。

「来たら、そっとノックしてね」と彼女。

モロクはさっき来た道を、大股で取って返していた。「そっとノックしてね」とかれは自分に言い聞かせたが、かれの影は意に反して彼女の敷居に向かっていった。この間にプリゴツィがのどを掻き切ったりしていないといいんだが、とモロクは思った。こう考えつつも、朝にカラーを買って少しは見られる状態にならなきゃ、と心に留め置くのだった。やがてかれは電話ボックスに入った。うまい言い訳があるときは、いつもブランシュに電話するようにしていた。

ブランシュは眠たそうで、機嫌が悪かった。

「あいつのそばにいてやらなきゃ」とかれは繰り返した。「邪魔して悪かった」

「電話することないわよ」とブランシュの声が帰ってきた。「あなたがいなくても、やってけるから」そして彼女は電話を切った。

「そらみたことか」とかれは、自分こそが二本脚で歩く動物中で、最も公明正大な人物であるといわんばかりにつぶやいてみせた。「またお決まりの手持ちの小話か！ あんなやつ、悪魔に食われちまえ！ 好きなように思わせときゃいい」

角に近づくと、メームノンのコロツサスとすれちがった。かれの顎はシャツの前部に

のっかっていた。かれの棍棒のような両手コートポケットに隠されていた。一方の手は聖牛を締め上げ、もう片方の手はオシリスの神に呪いを投げ付けている。かれのヒゲは、コロで湿っていた。

モロクは意を決してきびすを返した。かれの視線はこの謎の人物の後を追った。かれは待っては観察した。その人物は、確固たる足取りで目的地に向かって行った。その姿は、「ヨーロッパ風」レストランの上階の戸口に吸い込まれて行った。モロクは細心の注意を払ってかれの足跡をたどり直した。そして階段から一メートルほど離れた、深い影になった張り込み場所に身を潜めた。

「この夜遊び屋さんに、姿を現わすまであと数分くれてやろう。現わさなければ、踏み込み操作だ」

カフェでナオミに話す寸前だった、ばかげた話が脳裏に蘇ってきた。いったいおれは、正気ってものを完全に失っちゃってたんだらうか？ 謝って済むことってのはあるけどもこの話ときたら……5！ かれは安堵のため息をついた。

かの聖霊閣下ときたら、上でこんなに長いこと何やってやがる？ 二人で違い引きでもしてやがんのか？

だがちがった……詩人は戸口から出てくるところだった。慎重にかれは抜き足差し足、ゆっくりと歩を進め、本当にゆっくりと、石段を降りてきた。かれは手摺を、その湿った手の平の汗でもってつかんだ。暗闇の中で、かれの姿はコンクリートのドタ靴を履いた、ぐにやりとした塊の様相を呈していた。もし霧の深い夜にロダンの「バルザック」の巨体に出くわしたなら、この二つの姿の間に奇妙な共通性を見出させるかもしれない。上述の状況で「バルザック」を見たことのない人々の発言によれば、かれは丸めたイディッシュ語の新聞に似ているという。(なぜ「イディッシュ」語なのだろう?) まちがいなく同じ理由から、人々は「さわやかな日曜の朝」などというのだ。ここでの含意は、おそらくは、週の七日目の朝は、事実さわやかであるならば、週のその他の日より一層さわやかであるはずだということなのだろう6。

モロクは、もう一人が退却する間、まったく気づかれずに、巨大な階段のピロードの影に隠されて立っていた。かれは相手がその場を離れて姿を消すのを見送った。まるで、生霊が暗くなった舞台上に登場して、しかしすぐに舞台袖に飲み込まれてしまうように。かれの精神は、この奇妙な出来事に当てはまる説明を求めて喘いでいた。しかし、高いのっぺらぼうの壁にぶち当たるだけだった。

すると、奇妙なことが起こった。メームノンのコロッサスのことが、脳裏からさっぱり消えてしまい、そしてその数分の一秒ほど、かれはまわりの世界から切り離されていたのだ。夢のような状態で、かれは再び、でかい育ち過ぎた、キャンデーをしゃぶる少年とし

ての自分の姿をながめたのだ。肌は白く、美しい亜麻色のカールのかかった髪をしている。腕には小奇麗なヴェラム革装の天金つき聖書を抱えている。古い長老派教会の檣楼にすわって、詩編二十三節を自動人形のように繰り返し唱えている。

でも、眼下に見える群集は、何だってブツブツと、こっちに重苦しいげんこつなんか振り上げてやがるんだろう。かれはすごく脅えた。キャンデーが口からすべり落ちて、眼下の歩道へと落下し、落下音を反響させて、時計の水晶のように粉々に砕けた。群集が間近に詰め寄り、かれを檣楼ともども引きずり倒すと脅かすにつれて、かれはパニックに襲われた。

突然、空に天使が現われ、鷹のようにかれの上に滑空してきた。激しく翼をはばたかせて、天使はかれを宙に抱えあげ、碧空の涯てへと連れ去った。気を充分に取り直して天使の顔をのぞき込むと、それがキリスト教の天使でないのに気がついた。天使はえらくプリゴツツイに似ていて、ただし瘤や眼鏡やにきびはなかった。……醜い天使など考えることはできない、と言ったのはだれだったろう。してみると、だれにせよそいつは嘘をついたわけだ！

ディオンのモロクは本丸を急襲すべく決意を固めた。かれはナオミのドアの外に立って、そっとノックした。返事はなかった。再び、そっと、そっとノックした。足下に、何か滑らかですべすべしたものが感じられた。だれかが鍵と格闘していた。ドアが、実に軽やかに、ごくわずかのすき間だけ開いて、彼女のささやく声が聞こえた。「そこにいるの、だれ？」

暗闇から響く彼女のひそめた声は、かれの腹を奮わせた。かれはドアに全身の体重をかけて、部屋に押し込んだ。彼女の脅えた姿が、小さい部屋の真ん中におぼろげに見てとれた。「おれだよ、ディオンのモロクだ」とかれは荒々しく囁き、彼女につかみかかると、自分の口を彼女の口に押しつけた。彼女は何の抵抗も示さなかった。頭をそり返らせ、からだからは力が抜けきっている。ふたりはそのまましばらく立っていた。モロクは彼女を離してドアを閉めた。慎重に鍵をかけ、鍵を抜くとそれをたんすの上に置いた。

彼女はまだ部屋の真ん中に立っていた。薄い夜着に身を包み、腕を腹のところで組んで、火あぶりにかけられんとする殉教者のようだった。かれは再び彼女をつかみ、同じ動作を繰り返した。彼女は一言も発せず、まるで夢の中にいるように、完全に身をまかせてきた。

「おれがくるのを待ってたのか？」かれは最後に喘いで言った。

かれは、深い眠りから彼女を起こしたのだった。話によると、彼女は夢を見ていたのだと言う。白いローブをまとった女が、井戸に水汲みに行く夢だ。井戸は怖いくらい深く、その深みを見下ろす女は、そこに映った月を見た。オパール色に輝く、細い三日月だ。「ド

アを開けた時も、まだ夢を見てたの」と彼女は話を終えた。

「じゃあ今は？」とモロクはたずねた。「まだ夢を見てるか？」

彼女は狭い寝台に身を横たえた。そのすばらしい姿が、黄色いカーテン越しに弱々しく部屋に侵入してきた通りの光に照らされてあらわとなった。その横たわった姿にローブをかぶせ、かれはベッドの横にひざまずいて彼女を抱きしめた。自分の温かいからだに、かれの手がそっと忍び寄っては触れる感触に、彼女は震えてモロクにしがみついた。かれは隣に横たわり、肌と肌をあわせ、エクスタシーの痙攣に震えた。……「ナオミ、ナオミ」とかれは闇の中でつぶやく……。

二人が飲み込まれた、めまいのするような全き静寂は、荒々しいノックの音で粉々に砕かれた。ふたりは呼びかける声を聴いた。「ナオミ」

即座に彼女はかれの口を手で覆い、あわてふためいたような囁き声で、音をたてるなどかれに告げた。「動かないで！」と懇願する。彼女の吐息のかぐわしさがかれの鼻孔に侵入し、かれの血と混ざり合っただけでかれを完全に虜にした。ふたりは相手にしっかりとしがみつき、息をひそめた。

声は呼びかけた。「ナオミ、ナオミ！ お願いだからここを開けてくれ。おれだよ。頼む、頼むから……何もしないって」

声の主がだれだか、疑問の余地はなかった。モロクは息をのんだ。恐怖と哀れみがかれを襲った。ナオミはまだこちらの口を手で押さえている。彼女の心臓が高鳴るのが聞こえた。

一方で、声は懇願を続けた……完全な嘆願の垂れ流しで、低い、情けない調子で行なわれ、いつ何時泣き出さないとも限らない、あるいは笑いださないとも限らない雰囲気だった。

「ナオミ、何とか言ってくれ。死んだみたいに寝っ転がってないでくれよ。何とか言えって……何でもいい。気が変になりそうだ！」

声はもがもがした声の連なりと化していった。突然ドアが震えた。まるで何か重い物体が投げつけられたかのような音だった。続いてうめき声が聞こえた。悲嘆にくれた、胸の悪くなるようなうめき声で、ふたりはおぞけを震った。

ブリゴツィが、ドアの外でくずおれて横たわっている光景が、モロクの頭を占拠した。かれはもがいて逃れようとした。ナオミはかれを狂おしく押さえつけた。

「行かないで」と彼女はささやいた。その声は恐れのために潜められていた。

「でもあいつ、怪我をしたかも……」

ブリゴツィが己れを抹殺すべく、よりによってこの場所にやってきたかもしれないと考え、モロクは跳ね起きたくなった。夜明けに、冷たくなった死体につまづく自分の

姿が頭に浮かんだ……まるでそれが、殺された犯罪者であるかのように黙殺する……それに、ブランシュが何と言うことか！ あいつのろくでもない邪推の数々……。

ナオミはかれをなだめようとした。情熱的にキスして、髪を撫で、愛撫しては耳に焼け付くような愛のことばをささやいた。しかし、かれには効かなかった。プリゴツィはいま、ふたりとベッドに横になっていていいはずだ。二人にはさまれて、その悲しげな顔を仰向けに、月を仰いでいていいはずだ。

「いや、おれたたちのことは絶対に知られないようにするから。あいつをあそこに放っておくわけにはいかないだろう。そんなのひどいじゃないか。行かせてくれよ、ナオミ……」かれは説き伏せようとしたが、無駄だった。彼女は身動きさせてくれなかった。

「ダメ、ダメ、ダメってば！ ここにいてちょうだい。あの人は死にやしないって。見てなさいよ。そのうち行っちゃうから……。まさかそこまでは……やんないわよ」そうささやいて、彼女は男の胸に顔をうずめ、死体の忌まわしい影を避けようとした。

モロクは考えに考えた。「あいつがどうなったのかだけでもわかれば！ 仮病を使ってるのかもしれない。あいつなら、そのくらいのことはやりかねない」かれはこの考えをさらに押し進め、そこにある安心のかけらすべてを使い果たした。……まず始めに、あいつがおれを尾けてなかったって、どうしてわかる？ 一方で、あいつが本当に落ち込んで、本当におれを探そうって了見をおこしたとしたら、まずここに来るのが自然じゃないか？ かれは二人の便所での会話と、それ以降のプリゴツィの奇妙な振舞いを思い起こした。かれを家まで送る、あの通りでの気違いじみたナンセンス　　そうか、簡単なことじゃないか！ あいつはこっちに無理強いするくらいに勧めてかえってこっちの食い気をなくさせようとしてたんだ。プリゴツィとしては、「なあディオ、おれはナオミについての考えを変えたよ。あの娘には手を出さないでくれ」なんて言うわけにはいかなかったわけだ……それよりは策を練って、おれを罠にかけて追い払うほうが簡単だったんだ。

「そういうことか！ わかったぞ！」とかれはつぶやいて、ガバッと身を起こした。ナオミも身を起こし、気味悪そうにかれを見た。

「あんなやつのことなんか、知るか！」とかれは叫んだ。「寝っころがらせとけ！」かれは歓喜の表情でドアの方を指差した。まるでそのドアが、悪鬼やゴブリンたちに対する効果的なバリケードとなっている、とでもいう様子だった。ちょうどその時、ドアのすき間のところで、かすかな光が白い四角に照り映えた。かれはナオミに腕をまわすと、その物体の方を。その白い一枚には暗い不規則な斑点が散らばり、まるで血塊がそこに凝固したかのようだった。ナオミは脅えた。それから困惑し、ついにはつの好奇心を抑えきれず、そっとベッドから抜けだして、忍び足でドアに向かった。身を屈めて物体を検分する。モロクの目はその場に釘付けになっていた。

戻ってきた彼女は、便箋を目の前に差し出してよこした。暗い斑点は、もはやそこにはなかった。彼女がつまんでいるのは薔薇の花びらだった。

ふたりはべたりと腹這いになって、窓のカーテンの下から漏れてくる、柔らかな光に紙をかざした。その歪んだ文字を見るなり、モロクはショックを受けた。その字に見覚えがあったからではない。こんな殴り書きを認識するのは不可能だっただろう。こんな書体は前にも見たことがある。精薄や偏執狂の手になる字だ。かれの思考は、プリゴツツイの重たいからだがドアにこすれる音で中断させられた。ふたりは飛び上がった。そして疑わしげな表情で顔を見合わせた。間もなく、重たい、しっかりした足音が聞こえてきた。そのしっかりした執念深い足取りの下で、木製の階段がきしみ、うめくのが聞こえた……。

ナオミはホッとしてため息をついた。「あの人だったのね！」と叫ぶ。

「あたりまえだろ！」モロクはそれ以上は言わなかった。「なんてこった。この女、だれか別のヤツだとでも思ってたんだろうか」

かれはいぶかしげに彼女を見つめた。ナオミは、まだあからさまな安堵の表情で、こっちを見返している。

「ね、言ったでしょ、心配しないでって」と彼女は述べた。なぜモロクはこんなにあたしを見据えてるのかしら、と不思議に思った。

モロクは再び紙を手にして注意深く調べた。そして彼女に読ませようと手渡した。ナオミはちらりと目をくれただけだった。

「書いたの、あの人かしら」

「暗い中で書いたんだろうよ。字がガタガタだろう　跳んだりはねたり。もちろんあいつが書いたんだ。あのナンセンスでおれたちを脅かしながら、これを書いたんだ。チェ、あの小ズルイ悪魔め、策士めが！」

「でも、意味がわかんないわ」と再び紙に目を落としたナオミが叫んだ。

「このカマトトめ！　聖書の一節じゃないか」

「じゃあ読んでよ」

「メネ、メネ、テケル、ウパルシン！」かれは眉をつり上げてみせた。

「意味、わかんないの？　わかるって言ったくせに」

「わかるよ！　こいつはベルシャザル王の宴会で、ダニエルが壁に見た手書き文字だ」

「でも、どういう意味？」

「ああ……カマトトが料理された、とか何とか、そういう意味」

「まあ、何それ？　あの人、ちょっとおかしいんじゃないの？」

「よく言った！」

ふたりは横になり、数時間でも眠ろうとした。

ふたりが身を寄せあってから、モロクは静かに言った。「なあ、おまえさあ、聖書を読まなきゃ。いやホント！ すっごい本だぜ。もう何でもあり。愛、憎しみ、恐怖、ねたみ、悪意、情欲、強欲、殺人……世界を造ってるもの全部」

「変なこと考えてるのね」ナオミは考えを口に出した。

かれは続けた。「何はともあれ、傳道之書を読んでみな」

沈黙。

「ナオミ、どうした？ 聞いてないのか？」

ナオミは底なしの眠りに沈んでいた。

第14章

占星術士に大合として知られる現象が起きるたびに、このあばただらけの惑星は、奇妙で非凡な活動の舞台となるのだった。たとえば大アメリカ電信会社は、この兆に対してボーナスの支給という形で応じるのが普通だった。

そういうわけで、ディオンのモロクはある晩、ポケットに数百ドルもってクーパー広場にいたのである。替えのシャツか、新しいネクタイを買ってもよかったし、あるいは電信社の妻帯者のほとんどがそうしたように、薔薇の花束を抱えて妻のもとに駆け戻り手に手をとって、夜中まで起きて郊外住宅の広告を検討してもよかった。

しかし、こういったことは何一つしなかった。金は手付かずのまま、ズボンの右ポケットにたくしこまれていた。別の計画があったのだ。ノース川のほうに顔を向けると、やってきたのは他ならぬ、よき友人のランドルフ・スコットだった。

「よお、こん畜生めがあ！」とランディーは、愛情をこめた笑顔を浮かべて怒鳴った。

ふたりは、何となしに音信普通になってしまい、それをいささか恥じている旧友同士が交わす、ごくありきたりなあいさつを交わした。

「ほんの数時間前に、おまえもいたらよかったのに。いやあ、背筋が凍るような代物を見ちまったんだ」とランディー。

モロクは興味を覚えた。ランディーは、いろいろな出来事が気になってしまう人間だったのだ。ある時は、古い建物が取り壊されるのを見て茫然となってしまった。あるいは夜遅く、乞食に声をかけられると、かれは泣きながら家に帰るのだった。かれの直近の嫌悪は、精肉された牛肉に向けられたものだった。

「精肉された豚肉って見たことあるか？」

かれは身震いして顔をしかめた。

「ゲーッ！ ついさっき、ウィンドウにぶらさがってるのを見ちまったんだ。いやあ、お前もいればよかったよ。全部スエットばっか！ あーあ、おれたちもあんな具合にスエットになっちゃうのかな」

モロクは爆笑した。

「そんなことを気にしてたわけ？ スエット？」かれはさらに笑った。

ランディーは気を悪くしたようだった。「何がそんなにおかしいのか、さっぱりわからんよ。おまえもいつか、肉屋の店先に立ってみるといい。死んだブタを十五分ばかり見てみるといい。まったく、こいつときたら全身ひたすら脂肪で、肛門はナイフで切り取られた、ただのでかい穴なんだぜ」

「そこでおまえは、自分が死んだときにどう見えるかが気になってしかたない、と。そういうことか？ おれに言わせればだな、おまえならその半分も立派には見えないだろうよ。それだけは断言できる」

ランディーは数時間ためらった。なにか考えを弄んでいるらしい。

「いいいや」とかれは引き延ばした。「死んだときにどうされようと、そんなことはどうでもいいんだ。ただ、おれたちがいつも抱えてまわってるもののことを考えちゃってね。脂肪や軟骨のかたまり、青や紫っぽい血管、胃腸、胆汁、腸の連なり……それにあの醜い骸骨だ。わおう」かれは音をたてて自分の顔を叩いた。それはエレミヤ書を読んだときに行なわれることの、中世的な仕草だった。

モロクは好意をこめてかれをどやした。ランディーは、恥ずかしがって咳こんだ 犯人を、自分から流出した哀れみの念でいっぱいにする、あの弱々しい劇場での咳だった。

「そんなことを言うってのは、歳のせいじゃないな」とモロクは親身になって言った。「ちょっとした神経衰弱だよ、この哀れな野暮天め。おまえにもう少し詩の心得があったら、その神経質な感受性でもって、素晴らしい代物を生み出せるんだがなあ。ドイツ人ならひれ伏しておまえを崇拜するだろうに」とモロクは、ランディーのあばらをつよくつついた。

『『ガン病棟を通り抜ける男女』！ すげえ題名だと思わないか？』

「おまえ、どうかしちゃったんじゃないのか？」とランディー。とはいえ、かれは目に見えて陽気さを取り戻していた。かれにとって、ガンは狂気と同じくらい気色悪いものなのだった。

陰気な探求には絶好の晩だった。セピア色の雲が空を切れ切れに覆っている。六番街のL路電が、人間貨物の荷重できしんだ。厚い新聞がそれぞれの人間を隔てていたから、人間貨物というのは非常に似つかわしい表現だ。

しばらくするとランディーは、交通の喧噪を圧する声をあげ、ドルイド教徒の情熱をもって、連れの耳元で怒鳴った。

「いまこの瞬間にも、何千人単位の人が神の許しを請いつつ他界しつつあるんだ。地はうめき声と詠嘆に満ちている。生みの苦しみのため、母親は子供から引き離され、何万もの人間が安全に心地よく家でぬくぬくとラジオのコンサートを聞いている間、海では船が続々と沈んでいるのだ。世界は破壊と悲惨に満ちている おれに見えるのはそれだ

けだ」

モロクは手を耳にかざした。

「それと愛人や情婦、夫と他人の女房がベッドに潜り込み、毛布の下で睦みあっているのが見える……ホノルル、コペンハーゲン、ザンジバル、スタンブール、長崎、モスクワ、デュビューク、ホーボーケンで。おれたちのまわり一帯でだぜ、ランディー……いたるところで！ この瞬間に壁を破壊できたら……おや、どうした？」

ランディーは驚きの声を発した。お前の勝ちだ。いずれそういうネタに落ちてくるのは見えてたよ」

かれは友人の方に腕をまわし、血走った目で相手をながめまわした。一瞬前までは血の池に浮かぶ屠殺場だったこの世界が、いまや再びチャプスイ屋と化していた（ランドルフ・スコットにとっては！）

ランドルフ・スコットは、金融新聞の記事で、光は人間の精神に出会うまで高速で移動すると読んだことがあった。緯度と経度のあらゆる交差点でベッドによじのぼっているという愛人たちの話で、かれの精神はものすごい速度で移動したため、光の秒速を計算したときに科学者たちは間違えたのではないか、とかれは思ったほどだ。まったく荒唐無稽なのは事実だが、女王たちや貴族未亡人たちや下女や、フォーリー・ベルジュールのコリュフェイたちを順に犯し終えたかれの精神は、オレンジのへそのように渴ききっていた。

「こいつは秘密なんだけど、最近いろいろいい場所を見つけたんだ。車、持ってるだろ？」

「え？」と相方。幾世紀もの霧の中で消えゆく、サマルカンド王の娘ロクサンドのことを考えていたのだ。

「おまえ、ノートはつけてんのか？」モロクは敢えてたずねた。

「ノート？ なんだっておれがノートなんかを？」

「電話番号は？」

「電話番号だと？ あのすべたどもがあんだけふらふら出歩いてるってのに？ ここでしばらく待ってる。手頃な……」

「ランディー、待った！ 今はだめだ」

「なんで？ 何する気だ？」

「ついてこいって。これからドンチャン騒ぎをするんだ……ワイン、スパゲッティ、シガリロ……おまえのお望み次第だ」

「いきなりどうしちまったんだ……金が余ってんのか？」

「まさか！ 単に昔のツケを精算してるんだよ」

「馬鹿なことを言うなって。ツケは半分だけ払え……残りは銀行に入れとくんだな。こいよ、いいところがあるんだ……」

「何を言ってやがる。おまえはおれと来るんだよ。今夜は宴会だ。ほれ、ちょうどこの通りを下ったところ。こないのか？」

ランディーはほとんど承諾しそうになって、それからためらい、そして立ちつくした。

「宴会には女もくるのか？」

「いいや」

「女ぬき？」

「抜き。そう言ったろう」

「じゃあ、またな！」

「またな！」

双方とも、振り返らなかった。

八時十五分、二十世紀社なみの正確さで、ディオンのモロクとその債権者たち十三人は、タクシー三台に分乗して南東に向かっていった。A2、A4等々と記された劇場の切符が十四枚、かれのチョッキのポケットに詰め込まれていた。それはまるで、デューイ提督がマニラ湾に帆走して入った時代、若者たちが集めたスイート・カポラル・タバコのダンサーたちのように束になっていた。

パウリーのセント・マークスで小艦隊はユダヤ通りに曲がった。セント・マークスは、その催眠性において、果物菓子のような様相を呈しはじめている。いたるところ、音符のようなヘブライ文字。いたるところ、黒い雪、みっともないかつら、手入れされないひげ。

新品同様バーゲンなら、このウィンドウに注目！

大幅値下げ

出血サービス

閉店セール

買え、買え、買え！ 貧困が毛皮のコートを着てうろつきまわっている。銀行の貸し金庫に大きな宝石をしまいこんだマッチ売り。ボロボロのズボンに隠された小切手帳。トルコ風呂、ロシア風呂、腰湯、公衆浴場、風呂、風呂、風呂　でも清潔さのかけらもない。

看板、プラカード、ポスター、ネオン、趣味よくファッショナブルにされ、好色で悪臭漂う世界。きたないリネン、アデノイド、白内障。急増する吹き出もの、にきび、いぼや瘤。

裏返された惑星、つまらないことのために引っ掻き回された惑星。このユダヤ通りは、大都会の太った腹に着せられたベトベトのチョッキだ。

さらに進むと映画館や診療所、ダンスホールや礼拝堂だ。ジェイコブ・ゴードインの幽霊が血の染みこんだシベリアのツンドラをとぼとぼと歩いている。ナターシャ・ランボー

ヴァがローラ・ジーン・リビー的時代錯誤で。……クララ・ボウ主演「パリの恋」。

さらに進むと……「ブリッジ治療、格安にて承ります」。ルーマニア焼肉屋がレオ・トルストイの冷凍保管尻肉を、シンパロンの幽かな響きとともにくすぐっている。下宿屋が改装して清潔な白いファサードを輝かせている。それが術学的な差異を際立たせつつ、不定形な毛皮業者が、愚痴と水腫だらけの配偶者でふくれ上がっている。

ハンチ、パンチ、ジョウル諸氏がバーサ・カリチ夫人に引き合わされて、二番街チェス・クラブと貴賤間結婚。フランク・メリル出演『スピード王』……『黄金の繭』……『首ったけ』……全世界教会の戸にロシア文字。

火の柱で、毎晩七時にマンハッタン・ビジネス・スクールを炎上させんと脅すのは：
国立ウィンターガーデン

冗談から国立機関へ！ 九つの爆発でもって爆笑をさそう笑劇。笑劇：あの古きよき日々と同じ。

止まれ！！

ウォルター・ペーターの『ルネッサンス』参照。ポッティチェリに関する章だ。

「これらの巨匠の他に、独自の持ち味を持ったアーティストがそれなりにいて、他では得られない独特の種類喜びを与えてくれる……」

この狂人の集合体、ポン引きや放蕩や冒涇者の包絡、贅沢と鯨飲馬食のごたまぜについては、もうこれ以上は記すまい。にきびや鼻水、湿疹についても、一言たりとも弄すまい。ユダヤの徴をうち倒せ！ こういう代物は礼儀正しいアメリカ市民にとっての呪いだそれに、われわれはいまや聖アウグスチヌス教会の前において、二番街からパウリーへと伸びてはまた折り返してくる、切符の長い行列に割って入ろうとしているのだ。

照明付きの十字架には巨大な標識が貼りつけられていた。「駐車禁止」。でも、ハウストン通りの病人どもは、標識など信用しなくなって久しかった。

監督派教会の司祭が聖アウグスチヌス教会の階段に立って、ユダヤ人に救済が与えられるだろうかと考えこむのだった。教会は、無一文の市会議員並の人気を誇っていた。

行列は、びんの口に押し込まれるコルク抜きのように動く。看板を読む時間がたっぴり。口口王女の解剖学的な変調を観察する時間もたっぴり。国立ウィンターガーデンでは、いつもいい演し物をやっている。いつも気ままに並べられた写真がある。数珠を持った東洋ダンサーが三人。酔っ払った踊り子たち。ハル・ラスバンとその薔薇のつぼみの集団。ディオ・モロクとその酔いどれ小艦隊。みんな幸せ。「パパなら知ってる、きいてごらん！」

蒸気オルガンを大音量で鳴らしつつ、選挙宣伝車が通り過ぎる。前の座席にすわらされているのは、囚人服をまとった実物大の人形。流行歌の歌詞が漂い出てくる。

「DURCH SCHIECHTE SCILAVERIM ZUM ELECTRIC CHAIR」

アングロサクソンならそれを「罪の代償」と呼ぶだろう。

行列が割れて、ウサギ百二十四匹分の毛皮に包まれたふくよかなプリマドンナに道をあけた。彼女はとりすました赤いヒールのパンプスを履いて、ちょこまかとやってくる。

「ご婦人を通してあげな！」

ロビーでは、自動ドアつき貨物用エレベータ二台が、群集を講堂へと運び込む。ドアは磨りガラス上でナツメグをかきよせるような滑らかさでもって横滑りに開く。期待のあまり死にそうな東欧系のでくの棒どもが、乱雑に吐き出される。制服姿の会場係が、そいつらに一斉につかみかかる……。かれらの遠慮深いこととよきたら、タマニー・ホールの政治家どもなみだ。

モロクは判事と間違えられ、したがって案内人にチップをやらざるを得なくなる。かれは、エルバ島から戻ったナポレオンの雰囲気をもって、己れの取り巻きどもをまとめあげる。かのコルシカ人のように、野心を失い、運命の力に任せて流されるのだ。観衆は鼻水の寄せ集めのように席に押し込まれる。

煙のたちこめる中で赤い光に照らされている、沸き立つ地獄がオーケストラ・ピットだ。座席の列番号ゼブラのZよりさらに三列、立ち見の客が連なっている。ミンスキー兄弟は、来シーズンには座席を追加しようか、と切符売り場で夢見ている。かれらはこの同じ夢を、年のうち十ヵ月、毎晩見続けるのだ。

ニュース映画が単調に流れる。サン・モリッツでのウィンター・スポーツ。ニュースボーイに扮するアル・スミス、オーベルアンマーガウでは役者たちが受難劇の準備を開始、大統領の細君が新しい猿の毛皮を着ている、この世の災厄たる赤軍がクレムリンを行進、社交界の花たちが、オイディプス王を慈善公演、一等賞のチャウチャウが暖房を入れ過ぎたマンションで遠吠え、水着の美女たちが、アトランティック・シティこそは聖地とうなずく……

一方、カルシミンを塗りたくられたコロラトゥーラ歌手が、楽屋の陰気な窓を開けて周囲に果てしなく広がる屋根や尖塔を見渡す。頭がくらくらする。「パリアッチ」からの鳥の歌を歌うべきか、それとも次の電車でペンシルバニア州アレントウンに帰ってしまうべきか思案している。ニューヨークはうす汚い穴蔵だ。雪までうす汚い。それにシニョール・ガッティ・カサツァは、薔薇の香の奥の院に隠れたミノタウロスだ。

ストリップ笑劇のプリマドンナの涙はわずかなものだし、どうせさほど高価なものでもない。涙は、高価なものも安物も、通常はアスベストの幕に隠れている。そしてそのアスベストの幕に、黄金の糸で刺繍されているのが、次のことばだ。

「ショーこそすべて」 シェイクスピア

悲しい目の太りしまドンナたちよ、後部座席にいくがいい！ どうしても泣くなら、ミンスキー兄弟に見えないところで泣け。シェイクスピアは、結局のところ正しかった「ショーこそすべて！」その後は……ま、それはまた別の話だ。お望みなら、のどでも掻き切るがいい。

これは煉獄か、それともわれわれが夢を見ているのか？ ドシン、ドカン、バタン、ガッシャーン！ 幕が上がって、だみ声と労務者のわめき声のコーラスに迎えられる。（既述の薔薇のつぼみ！）肥え溜めの、しおれた、ウドンコ病の薔薇。欠けた白目製器物とひびの入ったジョッキが樽にいっぱい。ブリキのゴミバケツのような形。すべてが己れの命かわいさにもがいている。一日四ドルの安定した仕事（経営層の要求なんだがね、親愛なる薔薇のつぼみのお嬢さんがた、腹部の心窩部、臍帯、下腹部と呼ばれるあたりにはしわができないよう、どうか御尽力願えますかね）

一八八八年生まれの、過酸化水素水で髪を脱色したブロンドが、脂肪組織に苦しみながら、小憎いヒップをゆする。正面から、横から、後ろから。後ろからの眺めは 巨大だ！ 汁気たっぷりの脂肪のひだが、フェリー上での大波のようにうちよせる……九回目のアンコール。彼女はぺたりと床にはりつき、ヨガ行者の抑制をもって、ゆっくりと、意図的に、無慈悲に、人間の解剖学上で言わないほうが賢明な部分を動かし始める。オーケストラの指揮者は、差し出された肉塊をこれで六六九回拒絶した。かぶりつきで判事や銀行員や、質屋や土方 みんな忙しく生唾を飲み込んでいる……。

トラップから二―四拍子でドラムがさらに鳴り、いびきにも似たプロントザウルスの断末魔の声がくぐもったような、ベースの音が響いた。轟きわたる喝采が、オーケストラの金管の舌になめあげられる。

そして、さあダンスが始まる！ その喜びはまさに限りなく、無制限で、予測不可能だ。さらにベリーダンス。二十五の歌と踊りの涯てに、きれいなかわいいグランド通りの娼婦を脱がせることができる。カード当てクイズ。辛辣な警句のメドレー。騒々しい陽気さにあおられての幽霊歩き。ループ・ゴールドバーグ式ジキルとハイド（ベン・アミが歓楽街テンダーロインで英語で上演されているとは、みんな夢にも思うまい）

突然、しんちゅうのジャーンという音がシンバルから響く。完全な暗闇の毛布、そして冷たい青のスポットライトが、木管からの不気味でエキゾチックな旋律に伴なわれて出現。

クレオだ！ 神の愛し子！

いよっ、待ってました！

ギャラリーの神イジーは、若さの産毛に覆われ、思春期が壊疽になって、湿った手で冷

たい鉄の手摺を握り締める。イジーは、クレオのガードルからぶら下がる、血のように赤い薔薇に手を延ばさずにはいられない。いつか彼女はあの薔薇を失うだろう！ いつかそれが起きるとき、イジーはその場に居合わせることだろう。

クレオがいま、舞台袖からやってくる。まずは腕から、蛇のようにしなやかにくねらせつつ、続いてパルテノンからの脚、そしてカブ並に表現力豊かな頭。イジーの視線は、彼女のピロードの胴体に釘付けた。その胴体は、緑の海の大波のように、盛り上がってはうねる。イジーの額は、玉のような汗が浮かぶシャンペンのびんだ。

はだかで性をひけらかしつつ、クレオは紫の光の中で生霊のように動く。彼女はどんな夢より百倍も躍動し、生気に満ちている。彼女の脇香が空気を満たす。イジーは叫びだしそうだ。かれの青い体内の、どろりとした体液が、かれの息をつまらせそうだ。かれはガリガリの腕二本を差し伸べる。彼女を抱きしめる。彼女を抱き寄せて、ボアのように彼女を押し潰す。かれの筋肉は、ぼろ雑巾のようにしぼり切られている。かれは陶酔してうめく。口はあぐり開かれ舌は上顎にはりついている。すべての毛穴、産毛だらけで壊疽だらけのからだのあらゆる細胞は、かぐわしい花粉にまみれるべく開かれている。音楽、肉体、香料。たゆたう情熱の万華鏡がかれの眼前を走りぬけた。こいつが続けば、イジーは頭がイカレちまう。この腐敗はまったくもって……

そしてその間ずっと、クレオの顔は筋肉一つ動かない。

と、突然、オーケストラ・ピットから、猛烈な放屁のごとく、狂ったようなクレッシェンドが鳴り響く。クレオのすべてが、その豊満な胸から輝くももまで、痙攣じみた力強さで前に飛び出す。客の中の軟体動物どもですら見事な大騒ぎには身震いして息をのむ。胴を発作的な激しさでつかみ、隅から隅までゆすりたて、火山のような振動とともに鎮まるのだ。

照明の明滅とともに、クレオは舞台を去り、鉄のやすり 2 を袖に引っ込める。薔薇のつぼみたちは、この演し物にいささかもひるむことなく、最前列で派手に身をくねらせる。

モロクとその部隊は、休憩時間を非常用階段で過ごし、額やの窓からのぞきこんでいる。カーテンは開けられ、窓も半分開いている。だれかが叫ぶ。「あっ、クレオだ！」でも、クレオではなかった。「なんだ、別のヤツか」

非常階段での会話と便所での会話は、ブローカーのオフィスや床屋、政治クラブなどでの議論と非常に似た性格のものだ。一同のなかの重要な（！）女性メンバーは、慎重に厳選されて採点され、そしてあれやこれやに応じてランク分けされる……主に、アレに応じて。

休憩の後、スクリーンでは絵つきの歌が上演される。みんな唱和する。「人生の十二月、愛の残り火」。闇に乗じて、案内人たちは水鉄砲にとりかかる。いまや建物全体が便所

臭い。

幕が上がると、舞台には男が一人。真面目そうな人物で、シェパードチェックのスーツを着こんでいる。荘重にして平静。かれは支配人からのメッセージを告げる。彼方の子宮めがけてプロローグを送りこまんとする詩人のごとく、かれは柔軟な宝石つきの指で、横隔膜に麦わら帽子を当てる。……「来週は、われらが無比のコメディアン、ハル・ラスバンの協力を得まして、素晴らしい幕間劇を上演いたします。題して『プッシー・カフェ』」

モロクは、一九〇五年以来、しばしば幕間でこのジョークを耳にしてきた。かれは自分の考えに没頭するあまり、ショーの残りはまったく頭に入らなかった。

かれは空のポケットを探る。札束は消えている。日曜日ごとに説教壇に立って、来世の話をするどた靴牧師どもなら、これでモロクは心安らかになったはずだ、と言うだろう。借金から解放されたのだから。しかし、心安らかなどではない。苦々しい気分だった。負債の精算は、罪を投げ捨てるのとはわけがちがう……。かれは劇場を出て、一行をあっさり見捨てることにする。構うもんか。もう何の借りもないんだ……。

イーストサイドの臭気に即座に飛び込んだかれは、便所の白髪の女性監視員の考えに身をまかせるのだった。高齢が彼女の子宮を殺してしまった。殺虫剤やウールワースの香水の臭気の中にすわって、彼女はいったい何を考えているのだろうか、とモロクは思った。コーラスの女はみんな病気なのだろうか？ かれはランディーと、かれのスエット恐怖症のことを考えた。すてきな質問だ……「おれたちもあんな具合にスエットになっちゃうのかな」ハル・ラスバンの薔薇のつぼみ集団は　そう文字通り　スエットの塊と化していた。余分な脂肪を全部集めて、玉に丸めれば、通常の主婦が一年掛かりで使う揚げ物用の脂肪が取れるだろう。人間の脂肪はどんなもんだろう。考えてもごらん。バット一杯のグリース。人間のグリース。いつも結婚式や宴会、海浜パーティー等々用に準備万端。……ハル・ラスバンの気の効いた小話が、脳の正面ポーチにぶら下がっていた。「ドブねずみとわたし」この表現には、何等大風呂敷はなかった。サウスカロライナの州知事が、友人のノースカロライナ州知事と議論を交わしている最中に「ドブねずみとわたし」と口走る様子を想像してみるがいい。……もしこんな考えを弄び続けたら、脳は馬鹿騒ぎを始めて、気がつくとき病棟にいる羽目になるかもしれない。

デランシー通り橋にてくくと向かうのは、悪性遺伝で有名なジューク家やカリカク家の人間と暴れ回るようなものだった。洗濯物の干し綱や非常階段が交響楽を奏するのは、詩人や超モダンの画家の心の中だけだ。何と陳腐なメロドラマ！ 悪漢レジナルド・ピアポイント・ロックフェラーVSアメリカ合州国塵民。ひ弱で低級で勘当された、勇者の故郷の故郷なしども。医者の中には、この光景は微生物の桔抗する軍団同士が、人間のからだを戦場に、伝染性を爆薬として闘っている場面に映ただろう。かれにとって、救済方

法は一つ死かない。ライソールだ。

ディオソ・モロクは感情過多を経験していた。中でも最も顕著なのは、乾いたパン粉の上にはだかで横たわったときに感じるような、チクチクした感覚だった。

ゴードン・クレイグは、かつてイブセンの「人形の家」に霊的な側面を加えた。ディオソ・モロクは、国立ウィンター・ガーデンに己れの魂を預け、これから納骨堂に骨を納めに行こうとしているかのようなようだった。かれはクレオの勃起必至の技を脳裏に蘇らせようとした。まるでダメ。通りはウジムシだらけ、空気は八エまみれ。こっちでは鼻がもげ、あっちでは目玉が膿瘍のように飛び出している。水腫だらけで汚物にまみれ、ちんばで奇形の身体障害どもがせっせとうろつく。かれは白痴に道を譲った。この育ち過ぎた胎児の顔は、膠着したオートミールさながらだった。モロクは身震いした。「斧だ！」とかれは叫んだ。「斧だ！」

ウィリアムスバーグ橋にたどりついた。

潮風の一撃がかれの頬を襲った。かれは大きなため息と共に、オゾンを吸い込んだ。橋の歩道には誰もいなかった。灰色で清潔に見える。なんとなく気分合っていた。かれは考えを口に出した。「朝になったら、臭い人間の波が押し寄せてこの橋を覆い尽くすだろう。美しい鉄の橋げたは、死肉でうめいてはきしみ、この構造物一面に八エのような人間どもがたかり、ニンニクで覆われ、商売でうなりをあげるだろう」

古き第十四区が、橋の向こう側でかれを迎えるべく待っていた。この古い地区にはすでに夜と星が帳を下ろし、憂鬱に覆われていた。若いころは、この家の所在地は荒廃して喘息必至の空気を持ってはいたが、憂鬱がたちこめることなど決してなかった。かれの心は回想の渦となっていた。ウィリー・メインがおれのためにデルヴィシュを踊ってくれたっけ。「気違いウィリー・メイン」だ。オタマジャクシ並の脳しか持ち合わせていない、図体だけはでかいグズのでくの棒。日曜の朝、一家が教会にでかけてしまうと、小屋の上に這い込んできて、下着姿を披露するのだ。極めて獣じみた演し物で、近所中が震えあがったものだ。「ビョーク、ビョーク！」というのが、気違いウィリー・メインの発することができる唯一のことばだった。かれはそうやって、ペンキ屋の上に覆い被さった小屋におさまり、両親が教会から戻ってくるまで、卑わいな気晴らしに没頭するのだった。通りの浮浪児たちが、ヒステリックな喜びの声をあげる。こそこそと、かれらはこの山猿に腐ったバナナを食わせる。気違いウィリー・メインは、それがトリュフでもあるかのように、貪り食うのだった。後でかれは昔ながらの腹痛を起こし、声を限りに絶叫するのだ。「ビョーク、ビョーク！」

日曜の朝、古き第十四区は、通常はペインの花火の植木鉢のように開くのだった。九時には、ドリッグス通りと北一番街の角で、何か事件が生じたすのだった。ウィリー・メイ

ンだけが見世物のすべてではなかった。仕立て屋のシルバースタインは、しょっちゅうそのケチな掘ったて小屋を、シャツ姿で這い出し、サスペンダーを股間でひらひらさせ、腕にはプレスしたてのズボンを抱え、漁師のダリーに配達しようとしている。ひょっとしてジョニー・ポールが、フォルモア・ブレースの角の酒場に忍び込み、新聞の日曜版の下に大ジョッキを隠しているかもしれない。酒場から姿を現わしたジョニーは、唇から泡をぬぐい去る　箱に宝石を入れるかのような慎重さで。じきにオトゥール神父が、土曜の夜の宴会の名残で目をしょぼつかせながら、ちょちょことやってくる。「ゴーマン夫人、おはようございます」と、かれは垢じみた帽子を取る。「神父様、おはようございます」とゴーマン夫人が敬意をこめて言う。彼女の夫のズボン下は、裏庭の物干しにかかっている。「ズボン下なしでミサに行くのは罪だ！」と折り畳み式のベッドから、尻に敷かれたゴーマン氏が怒鳴る。「ええそうですとも、でも日曜の朝にベッドでごろごろしてるほうが、もっと大罪よ」とゴーマン夫人は怒鳴り返し、ベッド・スリッパでパタパタ駆け回っては、田舎ものじみた意味不明のおしゃべりで、近所を悩ませる。

十時頃には、地区の下司どもが完全盛装でお出ましになって、ウィリアム・ジェニングス・ブライアンが次期大統領になるのは確実だ。マイク・ピロツツは屋根に上がり、長い振り竿の先に旗をくっつけた代物で鳩を追い払っている。こうやって鳩の相手でもしないと、果物の屋台に日夜はりついてたら、気が狂っちゃう。……昔はみんな、鳩だけで十分に気晴らしができたのだ。映画にでかけたり、小さな馬車に乗り込んで、どこへ到達するわけでもないのに首をへし折ったりはしなかったのだ。ちくしょう、日曜に馬車を少し走らせたっていいじゃないか。気分がよくなるし。公共心ある市民のような、民主党に一票を投じられる気分にしてくれるのだ。

モロクは散歩コースにサウス・サイドを含めたことはなかった。かれはドリッグス通りに沿って最短コースを歩いていた。思考は先走り、まるでゴムタイヤの行列を先導する警察のオートバイ部隊のようだった。傷と大仰な文句だらけのノヴェルティ劇場が正面に立ちはだかった。かれは、トプシー&デンマン・トンプソンの名において、敬礼した。コース・ペイトンがかれの人生に登場したのはもっと後のことであり、ノヴェルティとは別の場所でのことだった。十一・二十一・三十の神は、いまや幽かなイメージに過ぎなかった。かれを最後に見かけたのは、ウォルコット・ホテルのバーでのことだった。五番街近く、三十一番通りにあるこのホテル（このマチネーのアイドルにしてはいささか場違いではある）で、かれは肝細胞を刺激すべくホットウィスキーをすすっていた。コース・ペイトンは、揺るがしがたい信念を一つ抱いていて、それはシェイクスピアが史上最高の天才である、というものだった。それを証明するため、かれは昼夜の何時を問わず、レアティーズへのポロニウスの助言を暗唱して見せるのだった。

コース・ペイトン、ラリー・キャロル、パット・マカーレン。ウィリアムスバーグのフロック・コートで身に付けられた、アイリッシュ系最高の若僧どもだ。この三位一体のどの一人でも往来をぶらつけば、そこには生気が満ちたものだ。ノース・サイドやサウス・サイドが虫喰い状態になったのは、何年も後のことだ。でもあの頃は、老マーティンみたいな連中が幅をきかせていたものだ。お望みなら、かのマーティン教授と呼ぼうか！ 昆虫学教授。ニューヨーク最高のホテルのために、ネズミとゴキブリの駆除をしていた。イタチ二匹と自らの考案になる粉薬の詰め合わせを携えて、一人で働いていた。教授がコインを巻き散らしながら、赤い鼻を夕日のように輝かせつつドリッグス通りを千鳥足でやってくるのを見たら、アジア的災害への解答を神が見出したのがわかるだろう。マーティン教授はネズミのひしめく世界における大物だった。非常に高い報酬を要求した。自慢屋の気はあったけれど、気前はすごくよかった。バーに毎回来て一財産注ぎ込んだものだ。葉巻の話ですれば、こんな調子だ。「昨日は三千五百本のハバナ葉巻を買ったよ。二十万ドルばかりでね」土曜の夜にはかれは、トラック何台分の葉巻がどうしたとかいう話をしては、一台分を大盤振舞いしてまわる。これは財布の最後の一ドルにいたるまで賭けてもいいことだが、十四区にはケチはいなかった……ただしオランダ人数人を除いては。だれもがにっこりして認める通り、ドイツ人がアイルランド人の先を歩くのは、楽隊がパレードを先導するセント・パトリック記念日だけだった。

モロクはこっちの角からあっちの角へと足早に移動した。北一番通りは、まるでだめになった役者のようだ。生気のかけらもない。ソーヤーが自分の不動産に掲げたような「近所迷惑な行為は慎みましょう」の看板すらない。かれは昔ながらのソーヤーの店の半地下室をのぞき込んだ。懐かしい革のにおいが蘇ってくる・・眠るアンゴラ兔のように、カウンター上に丸めて積み上げられた、大きな革の塊だ。

オメリ口嬢の家の前の歩道に腰を下ろし、向かいの赤煉瓦の家の、あらゆるディテールを吸収し尽くした。最上階には、モロクが金曜日毎に、学校が終わるとすぐに洗った窓がある。なんて仕事だ！ 子供たちみんな、かれを通りから見ることができてしまう……かわいいペットちゃんがママの窓を洗ってるぜ、と言って。昔々、最上階の窓からはオメリ口嬢の低い方の屋根を見下ろすことができた。そこでは彼女が野良猫軍団にエサをやっている。ウィリアムスバーグ中のネコは一匹残らず、エサの時間になるとあの屋根に集まっていた。彼女の頭にそんな考えを植え付けたのは何だったんだろう。男を見つけられなかった女は、そうになってしまうのだろうか。

そしてこのネコのサナトリウムの下には、獣医があった。キニー医師の診療所では、いつも何かが起こっていた。時には通り中がヨードチンキの臭いで満たされる。低いアーチをちょっと入ったところで、地面に釘付けにされている馬の姿が鮮明に思い出された。そ

いつの肩に人間がすわって、馬の鼻面に大きなボロ切れを当てている。大きくなって大学に入ってから、キニー先生の施設で目撃したあの手術は去勢のためのものだったのだ、と気がついた。スピノザに関する講義を聞いている最中に、ふと思いあたったのだ……かれはこう思った。「さて馬は、諦めるべき哲学を持ち合わせていない。馬は去勢されてしまえば、喜びも苦しみもそれっきりだ。後はそいつの関心事といたらカラスムギだけだ……山のようなカラスムギだけ」

ほほう、それでかれの目下の関心事とは何なのだろう。ベッドに行くことか、あるいは死に備えることか？ かれはしかめっつらをして、立ち上がり、伸びをするとオメリ口嬢の屋根のほうを見上げた。ネコの幽霊すら目に入らない。ウィリアムスバーグ橋が開通してから、民族大移動が開始され、ネコどもでさえ昔のご近所に残るのを恥じて引っ越したのだ。

かれはむっつりと、たっぶり時間をかけながら歩き続けた。眠ることなんかまるで気にならなかった。かれの幻想は、比喩的に言うなら、「われもの注意」と書かれた包み紙にくるまった、きれいな荷物のようなものだった。沖合にはブランシュについての思いが漂っている。それは、しかるべき距離をおいて、孤立していた　ちょうど、愛する者の遺骸が墓穴に　深く深く、じめじめした穴の中へ、永遠の暗闇とミミズに喰われる腐敗へ　おろされようとするのを見るとききの莫大な悲しみを、弔問客がやっと認識するような感じた。

別に、人生を台なしにしたと感じていたわけではない。逆に、人生に台なしにされた、と感じていたのだ。……「信じ、洗礼を受けたる者は救われるであろう」……そら、聖書だ！　洗礼なんか、何の関わりがあるのだろう。同じくらいの理屈で、こう言ってもいいじゃないか。「肉食主義者のみ入場可」それなら蛆虫はどうなんだ？　連中はどうやって救われる？　それとも蛆虫には魂がないのだろうか。天国の黄金の門で気違いウィリー・メインが示す魂とはどんなものなのだろう。ひょっとして、天国にも大陸横断鉄道のように個室があるのかもしれない……一等、二等、三等。「ニンニクを食べる方はプラットホームでお願いします！」

かれは古い長老派教会の横を通り過ぎた。子供の頃、詩編二十三節を覚えたとき（あの詩編はちょっと古ぼけてるじゃないか！）、白髪の牧師に向かって暗唱しなければならなかった。牧師は、自分が逆さまに暗唱できるくらい熟知していることばを聞き取るため、耳に筒をくくりつけた……「主は者をあゆませ、聾者をきかせたもう」（そして吞んだくれと娼婦はしっかりと洗いたもう）。あのふざけた道化が愚者の拡声帽でふざけまわっている様子は、セニョール・モロクを荒っぽい気分させた。「その拡声の筒を被りやがれ」とモロクは、死の谷を越えて伝われとばかりに声を張り上げた。「そして道が黄金で舗装

されてるかを教えてくれ」

ばかげたことだ、こんなふうに夜中にしゃべってるなんて。ウィリアムスバーグはこんなにも静かで、パット・マカーレンは死んで埋葬され埋葬され、ラリー・キャロルの酒場は死体置き場のようだということに。でもかれは、筒状の補聴器をつけたあの干上がった百歳の爺さんに、あの馬どもはどうなったのか尋ねてみたいという気違いじみた考えを抱いていたのだ。ふくれあがって、自分の汚物にまみれ馬車がやってきて運び去るまで通りの真ん中に転がっていたあの死んだ馬どもは、いったいどうなったんだろう……馬というやつは、ふくれあがると臭くなった（死んだ国会議員よりひどい！）それがかつて競争馬だったか、それともビール工場の荷車を引いていたかはまるで関係ない。最後にはみんな臭くなるんだ……

葬儀監督のテーベスがいたっけ。ついさっき、かれの家の横を通り過ぎたばかりだ。支那人洗濯屋の隣にある、こじんまりした静かな場所だ。トランプでピナクルをやろうと言えば、いつだってやってきた。いつも新しい死体を待っていた……新しい注文を、とすべきか。時々、ピナクルの場にいい手がきたときに、注文が舞い込んでくる。こちらとしては、かれにその場にすわったまま、キリストみたいに「死にたる者にその死にたる者を葬らせよ」と言えとは言えない。だれかがいつも控えていて、かれらを埋めてやらねばならない。さもないと、ひっでえ臭いがたちこめちまう。

ブリッジ・プラザで、かれは新聞配達少年から五セント玉を借りた。少年はかれの名前や住所をきかなかつたし、かれも五セントを一セント切手で郵送すると約束したりしなかった。

かれは「サイプレス・ヒル行」と書かれたブロードウェイの路電に乗り、追憶のかすを噛むために腰を落ち着けた。乗り換え二回の長い道中だった。乗り換えで、特に変わったことはなかった。二回目に乗り換えた電車は無人で、かれは好きな古新聞を選べた。かれが選んだのは、「モーニング・ワールド」紙だった。

毎朝、広告欄にざっと目を通すのがかれの日課だった。ときどき新聞が、大アメリカ電信会社の求人広告を掲載し忘れることがあるからだ。もちろん、こうした見過ごしについて、会社はいつも払い戻しを受けたが、「配達人募集、十六歳から二十五歳まで、歩合、高報酬、最高週給二十五ドル」云々といった広告への応募者がなければ、払い戻しが何になるだろう。

かれはいつもの斜め読みをした。広告は確かにあった。つまり、朝には立派な獲物が引っ掛かるということだ。かれは塩の山を検分するように、そいつらを流していくことだろう……こりゃなんだ？

諸君！

数千ドル余分に
入り用ではありませんか？

年の瀬が近づくにつれて、すべてが過ぎ去るまでどこかに隠れていたいと思う方もいるでしょう。それというのも、銀行預金の残高が心細いからです。クリスマスに贈り物ができるのは素晴らしいこと……もしあなたが、今年たまたま数千ドルご入用でしたら、あなたが

技師
現場監督
発送係
退職者
労働組合指導者
総監督、その他

あるいは他の何であろうと、もし来る数ヶ月のうちにまとまった額の金を手にしたいのであれば、手紙かはがきを書いて面接においでください。

X Y Z、世界、ダウントウン

「親愛なるX Y Z殿」とモロクは眠りの中で口述した。「本日（昨日）の『ワールド』紙に掲載されましたる貴殿の迎合的な勧告は、小生をしてサンタクロースが実在するとほとんど信じこませるに足るものでした。クリスマス時に銀行預金残高の心細さで苦しまなかった者がおりましょうか。朝刊における貴殿の心地よい御機嫌とりを読むまで、小生は貴殿が婉曲に『隠れてしまう』と表現なされた冬眠状態を誘起すべく、いかなる睡眠薬に依存すべきであろうかという問題で、ひどく思い悩んでおりました。いまや、たかがはがき一枚で、この周期的な恥辱を避けるための秘密を明かしていただけると知って、わたしは幸せです。

貴殿は適切にも（しかもゴチックで）こう尋ねておられます。数千ドル余分に入り用ではありませんか、と。小生としては、余分にどころか常時必要なのです。それどころか、正直な話 お互い、隠し事をする必要などありますまい 少なく見積もっても毎年数千ドル定期的に入手できれば、貴殿に手紙を書いて、なにやら頭のいかれた小細工が何かの情報を得るといふ苦行からも解放されるでしょう。

小生は残念ながら、退職者だったことも労働組合の指導者だったことも発送係であったことすらありません。小生の過去の職業経験は、かのすべてを包含する「その他」によっ

てしかるべく呼称されております。もちろん疑問の余地なくこれだけの情報に基づいて、小生が余暇を利用して数千シェケルを濡れ手に泡で掻き込むことができるかどうか判断できるだけの目端を持ち合わせておいでのことと存じます。

もしできるとお考えなら、いつ小生が面接の荣誉に浴することができるかをご連絡ください。クリスマスまですでに九十日を切っておりますし、小生としては最後の瞬間（クリスマス・イヴ）になって、七、八百ドルなどというケチくさい金額しか財布にないかもしれないという考えを避けたいもので。

この世か、あるいは来世における富裕の名において

ディオンのモロク閣下

または

ディオンのモロクさま

または

ただの肩書きなしのディオンのモロク」

第 15 章

最近になってモロクが示すに到った落ち着きは、その配偶者にとって謎と苛立ちの種と化していた。この分別、この人生への取組を、ブランシュは憐れにも、かれの不倫の天空における星の一つの出現としか解釈できないのであった。

かれが感じている変化をどのように表現したらいいだろう。道徳的な改善でないのは確実だった。もっとも簡単に表現するなら、かれの魂が自己主張を始めたと言うべきかもしれない。かれはもはや、魂が肉体に宿る（そして死とともにそこを離れる）無形の存在であるとは考えなかったこのかれの、突然使徒的な側面を持ち始めた。まるで植物のように、世話がが必要な存在となったのだ。

かれが書くと自分に約束した本は完成した。原稿は現在、トウィリガーのロールトップ・デスクの引き出しに委託されていた。かの人物が余暇をりようして目を通す時点まで、そこにとどまることになっていた。この一見単純な文書が、あと幾日もしないうちに、旧採用担当係長ディオ・モロクの免職のための口実となるとは、トウィリガーもモロクも未だ預かり知らぬことである。しかしながら、この物語はそこまで深追いはしない。われわれとしては、ミラヴスキ邸の一時的な間借り人兼職探し中のディオ・モロクには、何等関心はないのである。

モロクの態度の変容で顕著なのは、異性に対するまったくの沈黙だった。ブランシュには、その動機をうかがい知るなど不可能である。もし彼女がこの件についてかれに相談したなら、さほどの謎とは映らなかったかもしれない。ヴァレスカは、彼女が純粋な白人でないことを社長が薄々気づくと、即座にハバナの重要な地位に異動となった。社長がいかにしてかような微妙な情報を入手したかは、また別の物語である。トウィリガー氏の主任仕立て屋が、点数稼ぎの才能を示し続けていたと匂わせるだけで、ここは充分だろう。マルセルといえば　モロクは、彼女が今も昔も墮落した処女以上の何物でもなかったのだということに気がつき始めた。彼女の処女性はゾシマ神父の死体並に鼻についた。マルセルママの処女性について、ブランシュは当然ながら、まったく知らぬ顔の半兵衛を決め込んだ。おそらく彼女は、この娘の処女性について純粋に分析的に考えたことなどないのだろう。「墮落した処女性」という表現に関して言えば、ブランシュがこれをあいまいな文

学的ほめかし以上のものとして受け止めるとは考えにくかった。

この女性のすねたような辛辣さ、陰気な反抗的態度、沈黙の内に鬱積した怒りは、これに先立ってのことであれば、そこにこめられた悪意の潜在的威力によって、かれは責め苛まれて自暴自棄となっていただろう。だがこのすべてを、かれはいまや平静に鷹揚さで受け止めていた。最近になってかれは、自分の霊的な様相または状態について、影を帯びたやりかたで言及するのが習慣となっていた。ブランシュはこの不可解なナンセンスを宗教的な悪ふざけとして受け取った。そしてかれに、辛辣極まる皮肉を浴びせかけるのだった。モロクが示したのは、殉教者として世界に向かってポーズをつくってみせる夫たちのような、ストイシズムの見本市のようなものではなかった。それどころかかれの態度には、苦しみも、意識的に選びとられた忍従も皆無だった。かれはひたすらすばらしい豊饒さに取り憑かれていたのである。

この舞い上がった状態である晩に帰宅したモロクは、自分の夕食が火にかかっているのを発見した。ブランシュはそこにはいなかった。上の空でかれは、自分のために用意された食物を味見した。しばらくするとドアにノックがして、上階に住む女性がドアから顔をのぞかせた。彼女は、ブランシュが劇場にでかけたと伝えにやってきたのだ。

かれは優しく女に微笑んで見せた。ほう、それはそれは。かれはその報せに小躍りせんばかりだった。ブランシュは、「アンドロクレスとライオン」を観にいったんですか？ ちがう？ かれは別の芝居の題名をあげた。これも違いますか。女は、ブランシュがどこに出かけたのか皆目見当もつかないと繰り返した。まあ、それはとりあえず置いときましょうか。あとで花束でも買ってきてやりましょう。ところでご婦人、ちょっとポートワインでもごいっしょにいかがですか？ こういう機会のために、家にポートワインが常備してあるのはいいもんです。ポートワインよりましなものがないことについて、モロクは謝った。……素晴らしい天気ですねえ。今夜の月をご覧になりましたか？ なぜみんな、月の話をするときには「緑のチーズみたいな」と言うんでしょうねえ。わたしに言わせれば、むしろ藤色の偃月刀のようではありませんか。あなたは月のことを考えたことがありますか？ つまり、強弱弱六歩格の詩的な意味で？

女は、石壁に壊れたよろい戸が叩きつけるのを聞いているかのように、かれの話を聞いていた。彼女が期待していたのは、まったく別の反応だったのだ。もし弁明が必要だったなら、彼女としても罪のないその一つや二つ、用意してあったのだが。

「家庭はその人の宮殿である、そうでしょうが。うーん、夕食がいい匂いをさせてますねえ。むしろ『イギリス人にとっては宮殿である』と言うべきだったかな。さあ、お入りください。そんなふうに、すき間から頭をつっこんでないで。わたしがこわいってわけじゃないでしょう？ ワインでもいかがですか？ それともマーマレードでも？」

その性悪婆さんは、そのお高いぼさぼさの頭を横に振った。

「そうですか。まあご随意に」とかれはつぶやき、食事に戻った。

かれは急いで食事を終えた。見つけだしてきた酒びんは、手付かずのままテーブルに乗っていた。「詩神の泉は深く飲み干せ、さもなくば手をつけるな」と詩人は言った。かれは、ピロードの柔らかな足音とともに居間に足を踏み入れた。かれを迎えた無秩序は、哲学的な無秩序だった。かれは「創造的進化」の章を思い出した。かれはこの部屋を、酩酊した客たちがたばこの吸い殻やシュトロイゼルケーキのクズを投げ捨てるための鳥かごとして考えるのが習慣になっていた。でも、いまはこう思った。「雑然さに苛立つのはドイツ人だけだ」と。かれはピアノ椅子にすわって脚を組んだ。左足を右側のペダルに乗せて、かれはストジョフスキーの「愛の歌」の冒頭部分を弾いた。かれの演奏技術は拙かった。組んだ脚をほどいて、チェルニーの速度練習曲に取り組んだ。が、鬱々としてこうつぶやいた。「ちえっ、人生は練習なんかで浪費するには豊かすぎる」どのみち、音楽家になるには時間が遅すぎた。だれかがもっと粗野な楽器を教えてくれればよかったのに、とかれは思った。どこかで、ラテン地区の寒い屋根裏に帰ってきた芸術家たちが、アコーディオンを弾いて餓えをまぎらわせた、という話を読んだことがある。……たぶん、画家たちだったのだろう！

立ち上がって、低いアームのないクッション付きの椅子にすわった。ブランシュは、この椅子と結びついた連想のことを考えたりするのだろうか。正直言って、かれ自身、もう三年もこの椅子のことは考えたことがなかった。これは別の時期からのものだった。求愛という名の次代に属するものだ。酔が真珠を溶かすように、結婚は求愛を溶かし去ってしまう（クレオパトラは、かつて富を飲み込もうとして真珠を酔に溶かしたっけ）。ラウブシャーのピヤホールからの感傷的な歌が唇にのぼった。「おまえはあんなにも美しかったのに」……砂漠の砂が冷えるとき、こいつをピアノで試してみるといい。

かれの指は、額に入れていない絵の、擦り切れた縁を弄んでいた。ペーストボードにクレヨンで描かれた絵だった。縁はふくれて薄汚れていた。まるで使いこんだトランプのようだ。その絵はその場所にもあまりにも長いことかかっていたので、ほとんどその意味を失っていた。でも、いまや素晴らしいデッサンに見えた。芸術家の歓びを雄弁に表現しているではないか。部屋にたれこめる平穩が絵を躍動させている。部屋の様子は、いつもながら、陰気だった。変わったところがあるとすれば、いつもよりわずかばかり陰気さを増し、汚なさを増していたことだ。でも、かれの心の平穩が総てを一変させていた。

このスケッチを描いた若い女性は死んでいた。人生の酔いどれぶりに完全にうんざりしきって、ある日突然自殺した。ひたすら楽しみのために、突然自殺したのだ。最近ではこんな話はあざけるのが流行りだ。「人はそんなことしないよ……楽しみのためになん

か！」と言うだろう。それとも、スタンリー称するところの「お利口さん」がドストイエフスキーに言及するだろう……まるでこんな……こんな……言わば英雄的行為とでも言おうか、それに出くわすのはロシア文学の中、てんかん持ちの天才たちの間だけだとも言わんばかりに。でもミルカはまさにそのように行動したのだ。モロクはスケッチを裏返した。裏に彼女は鉛筆でこう走り書きした。「Forsam et haec olim meminisse iuvabit^{*1}」と。これが万物に関する彼女の考えだった。どこへ行っても、彼女はこのアウグストス・カエサルの鳴り物入り筆頭芸術家からの引用を、署名がわりに書きつけるのだった。こんなことを述べるのは不謹慎かもしれないが、しかし事実だ。彼女はある日、この署名を便所にすら書きつけた。排水管を流れ落ちる、くぐもった水音。それすら、彼女は自分の承認のハンコを押さずにはいられなかったのだ……「Forsam et haec olim meminisse iuvabit」ミルカ、最高の女だった！

かれは絵を注意深く調べた。そこにはあふれんばかりの活力の余剰が見られた。かれは、細心の注意を払って絵を検分した。まるで、初めてその絵を見ているかのように……

それは裸婦を描いたものだった。薄緑の髪をしてうずくまっている。腕や脚の付け根にできたすき間は黒い三角形で描かれ、あるものは二等辺三角形、あるものは不等辺三角形だ。何気ない観察者が真っ先に気がつくのは大胆な不等辺三角形だろう。その中に、彼女は自分のイニシャルを書きこんだ。この裸像の大部分を形づくっているのは、ほとんどが手つかずのペーストボードだった。クレヨン彼女の起伏の明かるい部分や輝く影を描くのにじつに気ままに使用されていた。作者は「名付けることは破壊することであり、示唆することは創造することである」と述べたマラルメの信奉者だったのだ。こうした無邪気な明部をもっと注意して観察すると、すばらしい形態が姿を現わす。右の上腕部には恐ろしげなコブラの姿、左足の脛骨にそって、幽かにペンギンが描かれ、見えているほうの乳房、大理石から削り出したような、アマゾネスじみた巨大な乳房には弱点（ミルカはそれが「Achilles」だと言ってきかなかった）。乳首はまばゆい血の一滴だった。構想すべての、唇だけは例外かもしれないが、一番明かるい部分だった。しゃがんだからだの線が線路のようにくねっているにもかかわらず、対象は人体が誇れる以上の直線部を持っていた。そのような直線の一本が右手の上にも見られ、トランプ用のお盆を乗せるのに好都合だったかもしれないが、ミルカはその上に、野生のガチョウが飛び抜けている積雲を乗せたのだった。ミルカはそれがガチョウだと主張したが、あまりに様式化されすぎていて、あまりに線が硬く、みんなそれが七面鳥の丸焼きに似ていると言った。しかしながら、芸術家がそこにガチョウを見たのなら、それはガチョウであったにちがいない。……読者諸賢はこの段階で、ミルケママが学問的な拘束に捕われていないことにお気づきのはず

^{*1} いつの日か、こんなものですら思いおこすのが喜びとなるかもしれない

だ。……ミルカがこの裸像の右ひざに対して発揮した気ままさも、同じくしばしば苛立ちの対象とされた。ひざは大腿部のすさまじい長さをペーストボードの狭い囲いの中におさめるべく、想像力の犠牲となっていた。この蛮行を執行せざるをえない状況に追い込まれると、ミルカは彼女なりの風変わりなやり方で、この処女のひざをうまく描けるのは天才だけであることを見て取ったわけだ。だが、このヌードには確かにひざが二つあったか？

もちろん！（ミルカは対象を、コニーアイランドのゲテモノ芸人から見つけてきたわけではないのだ）。でも、もう片方のひざは、つまりは隠されていたのだ。しかも非常に巧妙に、今にも人間の血糊の洪水となりそうな、巨大にぶら下がった乳房の影になっていたのだ。……前景に、言及に価する物体がもう一つあった。芸術家の意志を除けば、それがそこにあるべき理由はまるでなかった。それが何なのかは推測するしかなかった。ミルカに言わせればそれは、植木鉢のないゼラニウムだった。決して、ゼラニウムだ、ということとはなかった。いつだって必ず、植木鉢のないゼラニウムなのだ。まるで、見えない物体に名前を与えることが、神秘的な性質をもたらすとも言うように。それはまるで「帽子なしのベートーベン」といった表現のようだった。

たとえばあなたが、事務所のある隅に杖を置くのが習慣となっていて、そしてある日、まるで校正者のように上の空で事務所にやってきて、杖をたん壺の中に入れてしまったとしよう。さて、同じ不適切さがこのアマゾンの乳房にも当てはまった。まるでみつくちのように目障りだった……モロクが自分の注意力を集中させると、かれの心は別のアマゾンへと駆け戻った……ふくよかな、乳房の二つあるアマゾンで、名をコーラと言う。コーラを所有することが、モロクの魂の救済を意味した時もあった。

でも、コーラはすでに舞台から去っていた……

「人は思考をこらすことによって、その身の丈にいささかなりとも加えることができるだろうか？」モロクはそのことばが、鼻先に十五センチの太ゴチックで突きつけられているかのように、そう熟考した。

「全世界を手中におさめても、己れの魂を失ったなら、何の益になろうか」左様、かれはこれも熟考した。

深い感慨にふけると、男は聖書に頭を支配されがちである。そして、妻がかれに捧げる愛が、実は憎悪の大鍋で、彼女はそれを喜々として毎日かれの頭に浴びせかけるのだ、ということも忘れがちである。だって、彼女の二人の愛なんて、いったいどれほどのものだと言うのだ。薔薇の花壇よりはむしろ、評判の高いダーウィン流競争に似た状態に到った、卑しい敵対状態でしかないではないか。もし妻がかれを抱きしめたら、それは単にこう尋ねるためだ。「いまはどの女のこと考えてるの？」もし夫らしく親しげに妻に触れれば、彼女は鳥肌をたててこう言う。「あなたって、セックスのことしか考えられ

ないの？」

昇華した精神状態にあったので、かれの魂からは辛辣さはほとんど抜け落ちていた。人が片目の視力を失えば、その欠落をもう片方の目が補う……補償、というやつだ。この二つの場合もしかり。かれの失った憎悪の力は、ブランシュが補った。もはやかれは、朝起きて、古臭い夜着に身を包んだまま、彼女のまわりを道化師のようにねまわったりしなかった。なんともぞっとすることだが、かれが昔はげんなりするような下卑た態度をとっていたのは事実だった。そしてまた、かれが彼女を苛立たせるためだけにそうしていたのも事実だった。妻のあの氷河のような破壊的な視線をやめさせるためなら、かれは昔はどんな放縦ないたずらでもしてみせることができた。冷たい刺すような敵意に耐えるよりは、彼女が怒るのを見るほうがましだった。ときどき説明しがたい悪意にかられ、かれは中身の無いしかめっ面をしながら下劣な表現を投げつけて、彼女をひるませ蒼白にさせる。なぜか？ 彼女を追い詰めて人間として振る舞わせるためだ。必要なら彼女を罵倒して、プリゴツィがいつも言っている「反応」というやつを引き出すためだ。つまりかれは、自分の相手にしているのが一種の病理的な異常なのだという信念を抱いていたのだ。決して具体的な病名を定義はしなかった。単に彼女を「病んだ精神」と呼ぶだけで満足していた。ブランシュも一方で、彼女なりの診断を下だしていた。彼女の用語は「セックス超過」だった。何についての議論であろうと、口論がどっちに向かおうと、ブランシュはいつも「セックス超過」に落ち着くのだ。彼女はこの言葉が赤熱した焼け火箸であるかのように投げてよこす。後に暇ができてそれを振り返り、彼女の行ないの分析に意識を集中させるときには、かれは「性悪の売女」「根深いピューリタニズム」などといった表現に逃げ場を見出だすのだった。そして、人類が先祖代々引き継いでいる苦悩のなかでも、ピューリタニズムこそは最悪の物だとかれは確信していた。魂のあの状態には、なにやら癩病じみたものがある。その破壊力には、なにか鼻孔に臭気をもたらすものがある……

でも今晚、そのような行動のすべて、気まぐれで性悪な思考のすべて（これまではほんのわずかな挑発で呼び起こせたのだが）は消滅した。ブランシュが現われるのが待ちきれなかった。もう彼女は二度とかれの悪魔じみた行ないに苦しむことはないだろう……彼女のほうがかれをからかい、なじったとしても。かれはこれまでの自分の残酷で浅はかな行動を、嫌悪をもって振り返った。「神様！ こんな気違い沙汰はもうやめなければ！」

かれは万華鏡を見るように、二人の結婚稼業の波風だらけの航跡を振り返った。自分こそが悪者であり、自分が一方的に悪かったのだ、という有罪宣告が忍び寄ってきた。一つ一つ口論を思い返してみると、そのすべての根源を指差して示すことができた。自分だ。

ああ、もしブランシュがたった今、この瞬間に部屋に入ってきたなら、おれは彼女の憎悪や根深い嫌悪を一掃し、彼女の足下に身を投げ出すものを！「ブランシュ」とかれは口

に出してつぶやいた。「ブランシュ、かわいそうなヤツ、みんなおれが悪いんだ……このおれが」

その瞬間、かれは自分がもう一人のラスコリニコフになったと想像していた4。ソニヤのことばを待つ、いま一人の暗殺者。「市場へ赴いて、群集の前にひざまずきなさい。行って己れの罪を告白するのです。公の広場で神にお話しするのです。ひざまずいて祈りなさい、みんなに聞こえるように……」かれはひざまずいた。全能の神に申し開きをした。どんな鼻のかい露スケも、これほど熱心には祈らなかつたろう。かれの祈りは妻の髪の毛に編みこまれ、彼女の名前に織り込まれた。

そして、かれがそうしている間にも、ドアがそっと開いた。ブランシュがそこに立って聞いていたのだ。

彼女はまず、笑いだしたい衝動に駆られた。こんなグロテスクな物体は、これまでに見たことがない。この忌まわしいベッドの相手が、改悛の態度を示してひざまずいているなんて。彼女は真っ向から笑ってやりたいという激しい欲望に襲われた。侮蔑に満ちた、あざけりの笑いで、かれの骨の芯まで凍り付かせるような笑いだ。でも、かれのも恐れぬ唇から漏れる祈りに満ちたたわごとが、心からの奔流が、彼女を黙らせた。それはあまりにも彼女の知っている愚弄とは違いすぎていた。これまで聞いたこともないような調子で発せられる自分の名を耳にした。その瞬間、彼女は感動した。この献身的な熔鉱炉の前にあって、彼女の憎悪は融け去る寸前だった。でも、この真心の表現に圧倒されてかれの足元に身を投げ、これまで内に激しく押し込められていた愛情をぶちまけようとしたその瞬間に、病的で暗い疑念がさしこんだ。目もくらむ輝きをもって、その考えは彼女の心を照らした……そう、この人は嫉妬しているんじゃないかしら。

夫が自分を愛していると知って、彼女の感じる苦々しさは増した。かすかに回復した感謝の念も、沸き起こった憤怒の洪水に奪い取られ、彼女は衝動的に、かれから最後の隷属の最後一滴までもぎとってやろうと考えた。……これまでのかれの嫉妬は、復讐心に満ちた、陰鬱できまぐれな炎であった。短期間しか持続せず、不和の炎に注がれる油以外の何物でもなかった。かように深い悔恨の態度を、彼女は目撃したことがなかった……彼女の登場は予測されていなかったから、真実味も充分ある。でも、真実なのだろうか。彼女は束の間の当惑に浸った。まるで過去の実績から、この惨めな降伏の原因を診断しようとするかのように。

妻が部屋にいるのに気がついたとき、思わずかれは身震いしてしまった。この瞬間がやってきたら、かれは彼女の足元に身を投げようと心に決めていたのだ……そして、思いのたけをぶちまけよう。ドアが開いて、憑き物の落ちた奇跡がかれを突き動かし、かれの恥ずべき行ないによる山積みとなった苦悶が、泡立ちあふれて、彼女を豪華なことばの

洪水で埋め尽くすだろう、と。さて、こうして二人面と向かい合い、両方ともお互いをへだてるヴェールを突き破ろうとしている。彼女は無言で、とりつく島もなく、近寄り難かった。それなのに彼女の血潮には激情が流れ、彼女の心をつかみ取り、固く引き絞られた彼女の唇に、氾濫のごとき揺動をもって跳ね上がってきた。思いこがれたような表情が彼女の眉間に浮かんだ。まるでアーク灯二つの間に押し寄せ、低くたれこめた霧のようだ。彼女はもはや、圧制的な婚儀の床で、自分の魂が粉々に打ち砕かれてしまったことも忘れてしまった。ただ、頑強な指で彼女をつかみ、うめき声とともに彼女を空虚にする苦痛が高まるのを感じるだけだった。

モロクがその朝妻に残した印象は、絶望的にだらしのない女というものだった。彼女の小さなキューピッドの口に、かれはおざなりにキスしたが、それはまるでまるで目に見えないワイヤや滑車で駆動され、機械的な韻律でもって開いては閉じる落とし戸のように思えた。かれはかつてそれに魅了されたが、いまは嫌悪していた。そのちょうつがい動き、戸が開くと、ゼラニウムの色をした舌の張り切った糸状体が見えた。それは、彼女の舌は、プードル犬のしっぽのようにひらひらと動いていた。決して動きやめなかった。落とし戸が開くと舌はこぼれ落ちて下唇の全域をなめるか、真珠のモールのような臼歯の堤防に沿って爬虫類のように動く。その朝も、かれは彼女にとびかかって、そのろくでもない舌を彼女の口から喰いちぎってやりたいという気違いじみた衝動を自制したばかりだった。

いまのかれは、彼女の引き絞られた唇の、震えおののく端部を途方にくれて見つめていた。かれは、それが開いて神秘的なことばを発してくれるものと期待していた。それは確かに開いた。易しく開いて、こんなことばを発した。「ジム・デイリーが街に来てたの。さっき別れたばかり。今夜はかれといたのよ」

「じゃあ、劇場へは行かなかったのか？」かれはあんぐりと口を開けたまま、一言も発することができなかった。

彼女は、この報せがかれにかくも不可解な影響を与えたことについて、驚きの念を表明した。もしながきにわたって予告されていた救世主が、大昔に約束した地球への復帰を果たしたとしても、こんなショックをかれに与えることはなかっただろう。

「あなた……傷ついたの？」

かれはゆっくりと悲しげにかぶりを振った。感情がたかぶって、一言たりとも発することができなかった。

彼女は軽い、ゴシップ調の口調で続けた。……「ここに連れてくるつもりだったんだけど、かれが夜行で帰らなきゃならなかったから。ほんのちょっと立ち寄りただけだったの……あたしたちがうまくやってるかどうか見たいから、だって」彼女は間をおいた。「ねえ、あの人が、あたしが未だにあなたと結婚してるのが信じられない、という感じ

で振る舞うのよ。まだあたしを待ってるのかしらね……」彼女はまた間をおき、自分のことばの効果を確認めた。これで充分だろうか？

「かわいそうなジム」突然モロクが口を開いた。「あいつはどうしても嫌いになれん。いやつだよ……ブランシュ、おまえ、あいつのほうを選ぶべきだったんだ」

彼女の小さなキューピッドの口から、歡びを欠いた低い笑いが漏れ出た。

「残念だわ、もっと昔にそれを思いついていただけないで。今になってあたしの間違いを指摘するなんて、ありがたい話ですこと」

かれは再び口を開いた。彼女は驚嘆してかれを見つめていた。

「クラリッジホテルに泊まった時のことを覚えてるか……ちょうど結婚の一週間前だけ。翌朝おまえ、ホテルからおばさんに電話しただろう。あの時おばさんは、ジム・デイリーがおまえに会いにニューヨークに向かってると言っただろう……おまえ宛てに電報が来たって。覚えてるか？」

彼女はかれを困惑したように見た。「ええ、覚えてるわ。全部……何もかも、はっきりと覚えてる。あの日は一日中ホテルにいて、ジムともそこで会ったわ」

「あいつは非常に重要な使命を帯びてやってきただろう、え？」

ブランシュはためらった。「え、ええ」と口ごもる。

モロクはさらに追及した。その会談に引き続いて起こったこと、カフェ・ボスケットでの小宴会、かれらの行なった議論、ジムとかれがすぐに意気投合したこと、二人がこんなに気が合うなんて、実に不可解だったことなどを思いださせた。

ブランシュは苛立っていた。「それはみんな知ってるわ。それがどうしたのよ」

「うん、あの日、おまえを家まで送って、おまえがジムの求婚を退けたと話してくれてから、おれはクラリッジに戻ってジムといっしょに寝たんだ」

彼女は驚愕した。「なんですって？ 一度もそんな話はしなかったじゃない！」

かれはこの発言をまったく無視した。

「うん、おまえの恋人のところに戻って何もかも話したんだ。すごく感動してたもので、身を退いてあいつにおまえを譲ろうとさえ申し出たんだぜ」

「何もかも話した、ですって？」と彼女は、話の後半を聞かずに叫んだ。「あなたってホントくずみたいな人ね。何の権利があってそんなことするのよ！ ゴロツキじゃないの！」

あの人をそんなふうにいたぶるなんて……」

モロクはにっこりした。「別にあいつ、いたぶられたとは思わなかったんじゃないかな。気に入ってたよ　つまり、その状況の劇的な性格がね。おれのことすごく気に入ってくれたよ。ホント、おれたち親友になったんだぜ　たぶん、おれの行動だけのために。もちろん、よくある『アルフォンスとギャストン』のマンガみたいな光景ではあるけどね。

「一晩中、まんじりとしなかったよ」

「それが面白いとでも思ってるの」彼女の声は、再びこわばって辛辣になった。

かれは即座に答えた。「いや、そうは思わない。もちろん、今にして思えば、ちょっと道化芝居じみてはいたな。でも、その時は何もかも、すごくりアルで悲劇的に思えたんだ。おれたち二人ともそう思ったんだ。忘れてもらっちゃ困るんだが、おれたち二人とも、お前に心底惚れてたんだからな……あの頃は」(『あの頃は』の一言を付け加えたことを、かれは後悔した)「おまえをあきらめるなんて、おれとしても半端な決意じゃなかったんだ。この一回だけでも、おれは自分自身や、自分の身勝手な欲望を忘れることができたんだ。おれ自身、おまえが欲しくてたまらなかったから、あいつの苦悶が理解できたし、それを共有することもできたんだらうな。あいつもおれの動機を理解してくれたはずだ。ただの芝居じゃないことはわかってくれたよ。……おまえのことを語り合って涙を流したんだぜ、信じられるか？ 女学生みたいにベッドに横になって、おまえのことを絶賛して、おまえの美しさをたたえ、おまえの人的魅力を賞賛し、おまえが失われた王女かなにかであるかのように涙を流し……」

「じゃああたしのからだつきは……あたしの美しい胸は……ジムはそれについてはなんて言ってたの？」

「おまえのからだつき？ 胸？」かれは困惑して彼女を見つめた。同時に、彼女のからだつきが変わったことに気がついた……しかも悪いほうに。

「ええ。あたしのからだよ……だってあなたたち、何もかも語りあったんでしょ」

かれは虚を突かれた思いだった。聞き返すべきかどうかもわからなかった。

「つまりおまえ」とかれは、おそろおそろ、おずおずと口を開いた。「つまり、おれがあつこともあいつに話したと思って……」

「ええ、もちろん。だって今しがた、何もかも話したって言ったじゃない」

「ブランシュ」こう言うかれの声は、数段下がっていた。「つまりおまえ、おれがそんなことを言ったと？ あの頃のおれにそんな真似ができたと……？」だが、どうしてもそれを口に出せなかった。

「ああもう！ あなたを信じられるわけがないでほう？ いつも嘘ばかり。……ホントなの、ディオ？ 絶対に？」

かれは首を垂れた。彼女を恥じ、自分自身を恥じ、愛というろくでもない行為のすべてを恥じ、そしてそれが二人にもたらしたもののすべてを恥じた。

ブランシュ葉衝動的にかれに歩み寄った。かれの膝に身を投げ、許しを請うた。自分が間違っていたことを悟ったのだ……かれは何も言わなかった。彼女のしゃべるままにさせた。ブランシュは固くしがみついていた。かれの耳に、奇妙な優しいことばの洪水を注

ぎ込んでいた。それは彼女にとって、新種の喜びだった。彼女は髪をといて、モロクの唇を、彼女の顔を隠す柔らかな絹のようなかたまりに埋めた。

ついにかれは口を開いた。その声は柔らかく、説きつけるようだった。

「なあ、おまえ、今夜……ジムにはなんて言ったんだ？」

彼女は懇願した。「お願い、いまはやめて。いまは何もきかないで。何も変わってないわ」

「でもどう思ってるんだ？……つまり、ジムのことは？」

彼女はモロクの腕の中で身を縮め、目を閉じた。頬をつたい落ちる涙を、かれに見られまいとしたのだ。「わからない……どう思えばいいか、わからない」と彼女はつぶやいた。

かれはそれ以上妻に強要しなかった。彼女の唇は、激しく震えていた。あたかも恐怖にかられたバッファローの暴走で、大地が震えるように……。

そっとかれは、絡まった髪の毛をブランシュの眉からはらいのけ、やさしい唇を彼女のまぶたに寄せた。彼女の強い口臭は白檀の香を放ち、かれを身震いするようなめまいに引きこんだ。部屋は音と空間のポンペイめいたフレスコだった。動悸の激しい肉体の毛穴や間隙すべてから、彼女の血潮の霊薬が忍びこんでかれを酔わせた。外の夜の中では、きらめく針穴の渦が、荒廃した宇宙の高価な天蓋を飾っていた。間欠泉のように噴出するかれの、震えながら夜へと向かった。「愛するんだ。愛するんだ」とかれは、海のように上下する彼女の腹部のふくらみに魅了されつつ、繰り返し自分に言い聞かせた。

「じゃあディオ、あたしを愛してるの？」彼女の声は、千切れたヴェールのようだった。

かれは目を落として答えた。彼女の太股のミルクのような霞に目を奪われていたのだ。

北アフリカのどこかでは、きびしい夜風にバオバブがそよいでいた。トルコ騎兵が砂漠の熱風に捕われるように、かれは欲情の波に飲み込まれた。

イスラム女性のヴェールが、恋人の視線を受け入れるべく持ち上げられるように、彼女が世間に対してかぶっていた仮面が落ちた。彼女の肉体は、かつてそうであったような美しい聖なる器となった。なだらかな隆起が、ビロードのさざ波とともに上下する。その肌は、触れるとひんやりとして清らかだった。それは宝石のかけらで包まれ、珍しい象牙の取っ手で刻まれた、クレタ島の骨壺を思わせた。

かれの過去のすべての嘘、すべての口実、すべてのあさましさが、彼女の愛によって献身の聖歌に変えられていた。ひからびた不貞は、二人が苦闘しては餓えた不毛の大地と同じく、この再興した情熱の小川によって芽ぶき、花開くべく約束された。地の底深く、愛の豊かな土壌に希望が根を下ろした。

上階の部屋に、淡い光が一筋侵入した。二人は緊張しきった沈黙の中で服を脱いだ。この部屋を包んでいるように思われる、重い陰気さに圧倒されたのだ。二人が再発見したこ

の暗い婚姻の土壌のなかで、二人の欲望は拡大して結実した。焼けるような涙がかれの白い肌を流れ落ち、愛撫した。それはブランシュの涙だった。それはかれの肉体器官の体液と組織に焼きつき、やがて忘れられた愛の不倫の亡霊と同一化するのだった……。

ベッドカバーの下でかれが知った女のなかには、その黒目が改悛のナイアガラであった者もいた。ある者は淀んだ美しさを持ち、感覚を鈍らせる瘴気を発していた。ある者は、台座から転落する大理石の女神のように、かれの腕に落ち込んできた。彼女たちは、その転落の震えで興奮するのだ。ある女は、自分の外衣が陥落せんとすると尼のように身をすくめ、かれの手による冒涇に卒倒しつつ屈するのだった。ある女は情熱をたぎらせ、硫黄のような輝きを残す、燃え立たせるようなことばをささやく……一人残らずちがっていた。

かれは、妻の抱擁が強まるのを感じ、やがて二人が熔接されたかのように感じた。彼女の恐れの手で、希望と願望の手で、途方もない情熱の拷問となって溶け去った。二人の生活の砕けるような不協和音の中から打ち出された、中年期のユニゾンが、二人の心の混迷を融けあわせたのだった。

第 16 章

二人の人間を地底に吸い込んだ、この秘めたる情熱の大渦巻きは、翌朝その二人のからだを難破船のようにベッドの上に放り出した。モロクは横たわる妻の姿態を邪魔することなく、仕事へと駆け出した。彼女は身を投げ出したまま、その楕円の顔をもつれた髪の毛のしげみに隠し、唇はなにか期待するように、かすかに開かれていた。

何が達成されたのだろうか、とかれは自問した。これは新しい生活の始まりとなるのだろうか？ その答えは、肉体の曖昧な、散乱した沈黙の中に失われてしまった。まるで鼓笛隊にとり囲まれて魂の奥底まで歌い尽くされ、いまや自分の皮膚という外套の下で、傷ついて干からびて丸まっている者のような気分だった。

ブランシュは、おれが思ってたような丸太じゃなかったんだ、とかれは考えた。彼女を丸太と同一視するという考えは、かれを面白がらせた。ジム・デイリーは昨夜、彼女を丸太めいていると思っただろうか。卑しい考えだったので、かれはそれを押さえこもうとしたが、しかしどう考えても、彼女の突然に火がついたような熱情には、怪しいとは言わないまでも、何か常ならぬものがあったという考えが頭を離れなかった。二人の再融和に先立つ一連の会話を想起してみたが、かれのことばに関する記憶はアメリカトネリコ以上のものではなく、粉っぽく、不透明で、触れてもよそよそしかった。

二人の確立した親善回復は、かれが心に描いていた精神的な結末にまでは到っていない、とかれ自身は見ている。背の低いソファの前にひざまずき、ブランシュが帰宅してかれの衝動的な宣言を解き放つ瞬間を祈っていた。かれが予想していたのは冷静な沈黙、ひるむような視線、半信半疑の表情、ひょっとして狼狽の表情だった。でも、自分を襲った美しい光景は、まったく予想もしていなかった。その光景が、幻じみた魅惑のすべてとともに、再び眼前によみがえった。それは翼をかれのまわりに広げ、かれを地に押し潰した。二人が転げ回った豊かな土壌は、まだかれにこびりついていた。モロクは恍惚として身震いし、まるで飽き飽きする泥染みから解放されようとでもするかのように、思わずからだを動かした。……一人残らずちがっていた……ある者は、台座から転落する大理石の女神のように落ち込んできた。

その晩かれは、いつもより四十五分はやく、一種混乱した精神状態で帰宅した。ブラン

シュは、骨も砕けるような華々しさを部屋を地獄へと変えるという興奮に没頭していた。かれはソファにすわり、「愛の夢」の虐殺に耳を傾けた。

このような楽曲に対して配偶者が常に隠し持っている沈黙の呪詛を感じ取り、ブランシュはそれまでの努力を止め、ストジョウスキーの「愛の歌」を弾き始めた。かつて、ブランシュはこの神聖冒瀆を行なうことを法律で禁じられるべきだ、と言ったのはスタンリーだった。スタンリーのポーランド人としての耳は、狭い範囲の楽曲しか受け付けなかったが、しかしそのはんちゅうでなら、かれの判断は正確で容赦なかった。それが彼女がスラブ的な叙情に対する感覚がないためなのか、それとも彼女の生来の不毛さに由来するものなのかはともかく、感情や優しさ、情熱の領域では、彼女がどうしようもなかったのは事実だ。彼女がその楽器を駆使する、殻笈じみた機械仕掛けのようなストロークは、かれの全身の神経を苦痛で奮わせた。彼女はある一節を繰り返して弾き、それを構成要素に分解し、すべてのコード、すべてのアルペジオを切断する。彼女の棍棒のようなストロークは、メトロノームの機械的で無感覚なビートでもって響いた。一音一音が新たな傷となった。モロクは、ぞっとする響きを消そうとして枕に頭を埋めた。

そうやって目を閉じ、耳をなかばふさいで横たわりながら、かれはふたたび彼女の肉体の狡猾な誘いに捕まってしまうのだった。かれは、今朝家を後にしたときの彼女の状態を思い出した。無言で疲れきって、唇半開きで横たわっていた。事務所では、つまらぬ決まりきった仕事に没頭させられて、この新鮮なイメージは忘れ去られていた。これのため、唐突に帰宅してみると、妻が年季の入った遊び女のように着飾っているのを見て、かれは非常に喜んだ。彼女の外見と関わるさまざま細部のすべてについて、たとえば衣装の選び方から爪のマニキュア、髪のかき方などの点で、彼女は突然（ほとんど奇跡的に）配慮を示すようになっていたのだ。この過度の細心さは、これまで芸術的な乱雑さの勝ち誇っていた居間にまで差し伸べられていた。部屋はいまや、処女の安息所のごとき、平穏で秩序だった魅力を示していた。この完全なる変化によって引き起こされた快い感覚は、彼女の洗濯板のような演奏がまずい具合にブレンドされたために泥にまみれてしまった。リストの名を挙げただけで、かれの心にメリーゴーラウンドやカリオーブの低能じみた爆発、フランクフルトや蟻たちのとの「dejeuner sur l'herbe」などの遊びを示唆するに充分だった。

この愛の歌二曲のメロディは、まるで連続した夢の中で衝突する急行列車二台のように引き延ばされた。別ちがたく編みあわせられ、かれの痛めつけられた受容器官にがさつな刺青を打ち出す、巨大な対位法的パターンを形成した。

二人が夕食の席に伴ってきた顔は、燃え尽きた噴火口のようなだった。断続的に二人は勇気を震い起こし、野菜のボウルをまわすよう頼んだり、紅茶の風味や天候について気の

抜けた意見を述べたりした。モロクは妻の目に、昨夜の降伏は単なる休戦に過ぎないという宣言を読みとったような気がした。

彼女が食卓に持ち出してきた現実はまだ水面下に存在している、より大きな非現実をかれに意識させることとなった。この隠れた不快感は、未知の寒流に導かれる、水面下に没した氷山のように、部屋の中を漂っていた。

かれはちょっとした会話の洪水をつくりだすべく、幾つもの試みを行なった。ブランシュは籠絡されるのを拒んだ。かれのことばは、沈黙の大海に注ぎ込む小さな小川のようなものだった。とうとうかれは、彼女の母親について、ていねいで、あたりさわりのない質問を発してみた。こうした話題の領域にかれが敢えて足を踏み入れることはほとんどなかった。どういうわけかブランシュは、母親に関する話題を「禁忌」としていた。しかしながら、かの人物はここ数日中に訪問してくる予定となっていた。

「母親」ということばは、これから幕を開こうとしている火花散る騒乱への、またとない稲妻役を果たしたようだった。

「おやまあ、この話題にはずいぶんご興味をお示しになること」爆撃の砲火を開いたのはブランシュだった。

「ご興味……ご興味だと？ ブランシュ、そりゃどういう意味だ。さっぱりわからんぞ」自分が薄氷の上を滑っているのは承知していた。こいつ、一体どういうつもりだろう？ 「そりゃお前のお母さんとは昔からウマがあったけどな」とかれは口に出した。まるでこの人畜無害なことばで、自分が単に他意のない発言を行なったに過ぎないことを、彼女に納得させようとするかのようなようだった。

「どれほどウマがあったか、よく知ってますとも。ええ、間もなくやってくるわ……どう、嬉しいでしょう」

「ブランシュ、そりゃいったいどういう意味だ？」その声とは裏腹に、かれは苛立ちをつのらせていた。なるほど結構！ こうしてすぐに元通りってわけか……金槌と火箸。

彼女が何も言わなかったので、かれは続けた。どの方向から攻撃がやってこようと、身を守らなければならなかった。相手に白目をむかせるまで、というわけだ。

「じゃあ、あたしが何の話をしてるのか、まるでわからないとでも言うの？ まるであたしが無邪気なお伽噺でもするのを期待してらっしゃるご様子だけど」彼女は間をおいた。そしてアジタートで。「きょうはどうしてこんなに早く帰ってきたのよ。あの女が来るとでも思ったんでしょ。着くのが待ちきれなかったってわけ」

かれは最後の一節を、繰り返しのようにつづき口ずさんだ。そして彼女を猛々しくにらみつけた。「はっきり言ったらどうだ！ いつまでもつまらんほのめかしをしてるんじゃない！

おまえってやつは、いつだってこんなあてこすりばっかだ」

「あーらそう！ あてこすり、ですって？ そりゃ結構。うんざりしてるんでしょう、え？ あたしが何か勝手な想像してると思って？」

「おまえならどんなことでも想像できるだろうよ」かれは自分が何と言っているのか、もはや気にもしなかった。もはや完全に我を忘れていたのだ。

彼女はモロクをいなし続けた。軽いジャブでチクチクとつつき、昆虫のようにうるさく悩ませた。彼女のことはかなり辛辣だった。ことばそのものがではない。一言一句の裏に隠された含意が、かれをむきだして行き場のない気分させたのだ。

「毎晩あたしを一人きりで残してふらふら出歩いて、自分だけ満腹して良心の呵責を感じたら家に戻ってくる、それで済むと思ってるの？ そしたらあたしが冷たくされた愛人みたいに、微笑や優しいことばを求めてひざにすわってあげるとでも？」

この台詞を一息で言った彼女は息をきらした。

「それがおまえの母親と何の関係がある？」とかれは、気を取り直してたずねた。（「母親」の主題を復活させるのはまちがいだった。口から出た瞬間、かれはそれに気がついた）

「それもわかるわよ」と彼女は威嚇するような声で言った。「いい加減あなたも知っておくべきことがいくつもあるわ……」

「おいこら、そりゃいったいどういう意味だ？」かれは思わず口走った。

彼女が激怒しつつも、古傷をさらけ出すのをためらっているのを、かれは見てとった。自分の感情をコントロールし、自分の思考をそこそこの一貫性に近いものをもって表現できるようになると、彼女は先に進んだ。最初、かれは半信半疑で聞いていた。目標を隠すための巧妙な回り道のため、何も心配することはない、彼女は目標をはずした、とかれはほとんど思い込みかけたほどだった。だが、ちょうどすっかり安心しきったところで、完璧な不安がかれを圧倒し、来たるべき災厄の予感にかれは完全に捕われてしまった。「こいつ、おれの鼻面をつかんで引きずりまわしてやがる」とかれは心中でつぶやいた。……「おれを断崖絶壁へと引きずってやがる」そしてまさにその通りだった。かれは自分たちのたどっている道を、一步残らず知り尽くしていた。「しかし、一体全体こいつはどうしてかくも長いこと黙ってられたんだ？ 本当にずっと知ってていながら、恐ろしいことに知らぬふりを通してきたんだらうか？」一瞬かれは、妻が知っているふりをしてカマをかけているだけじゃないかという疑念を抱いた。この拷問は、かれを縮こまらせ、悪あがきさせて、かれが自分から真相を告白するよう仕向けるための謀りごとではないのか、と。……しかしかれは、この推量においては間違っていた。彼女がすべてを知っているのは明らかだった。構図はあまりに完璧すぎた。

彼女がかれに映し出して見せたタブローは、あまりに化け物じみた性質のものだったので、しかし、一度かれが彼女のことなど気にもかけていないという真相が知れてしま

えば、かれの床相手としてはこの一個の墮落を隠すべき理由を限定するのは困難であった。……「このあたしの実の母親とまで 考えるだけでも汚らわしい！」この一言はかれの脳に、暗殺者のナイフのように宿るのだった。かれの、妻がたったいま述べた不幸な出来事と関連した細部を、前へ後ろへと駆け巡るのだった。なんとか正当化できる理由のかけらでもないかと探し回ったが、無駄だった。自分の心をくまなく探し、良心を漁ってみた。しがみつけるものは何もなかった。何一つとして。

しかしながら、言いたいやつには好きなことを言わせておくにしても、ほんのわずかなかけらがあった。このブランシュの母親なる女性 彼女は母親らしい振舞いを見せたことはあったか？ 彼女を忌まわしい目つきで見えるようになるほどかれが追い詰められたのは、そのせいではなかったか？

モロクの脳内で何が起こっていたかを理解するためには、この夕食のテーブル夫婦の光景を一時忘れ離れることが必要である。この混乱の根源にまで遡ろうではないか……

そもそも、モロクがブランシュと結婚した時点では、この添え物たる母親に関する言及はほとんどなかった。ブランシュは未婚の叔母の保護下で生活していたのだ。一年が過ぎ、ある日二人は遅ればせながら新婚旅行にでかけることにした。ブランシュは自分の両親を、どこかデラウェアの片田舎にある小さな町で、ありきたりの生活を営む、陽気な中年夫婦だと想像していた。子供のとき以来、ほんの五、六回ほど訪ねただけだったのだ。二人は、彼女をこの世にもたらしたこれら見知らぬ人々と、静かでゆったりした時を過ごすのを楽しみにしていた。

両親の屋根の下で四十八時間も過ぎさぬうちに、モロクが抱いていた母親のイメージは粉々に粉碎された。娘をかくも愛情こめて迎えたこの中年女性が地域の噂の的であることに気づくのに、村のゴシップの力を借りる必要はまるでなかった。どこへ行っても、人々が振り返っては彼女を見つめるのだ。……父親の方も奇妙な生活を送っていた。食事時になると姿を現わし、自分の仕事か最新の政治ゴシップの話をして、姿を消す。モロクは自分なりに精一杯状況を把握し、この親愛なる義父母は、お互いに相手の好きなようにさせて、何もきかない、という無期限契約に到達したのだらう、という結論に達した。両者の間には、潜在的な対立すらなかった。なんにせよ、事態は遙か昔に解決済みで、現在行なわれている妥協案は、スムーズに運用されているようだった。……このみぎれいで小粋な小男は、年齢不詳で、どう考えても悪い人物ではなかった。到着してすぐに、義理の息子を大いに気に入ってくれて、即座に自分の友人たちに紹介してくれたものだ。ときにブランシュがいっしょに来て、この小粋な親は、自分の娘とその立派な婿といっしょのところを見てもらえるのが誇らしく、あたりをキョロキョロしていた。

ブランシュは母親の行動をまったく理解できないでいた。昼食が終わった途端、この母

親は席を立てて化粧にとりかかる。入念で手間のかかるプロセスだ。やがてモロクは、このプロセスの間、本に没頭しているふりをしながら、後ろで見物するようになった。ブランシュが公衆の視線に対面すべく行なう準備は、かれの関心にのぼったことがなかった。明らかに、ブランシュはこの技芸を儀式に仕立てあげて習わなかったし、その仕事が完了したときに母親が示す喜びと満足の、十分の一も得たことがないようだった。髪結いの精妙さ、香水師の芸の細かさ、風呂の神秘を、これほどまでに意識させられたことはなかった。じょじょにかれは、この豊かな聖務を心待ちにするようになり、あの「希望の時間」が間近になると、月に憑かれた牛のように家のまわりをうろつくのだった。ブランシュはもちろん、すぐにこの官能的な食事に気がついた。しかしながら、かれのこの新しい習慣を破棄させるすべもなく、彼女はこの儀式の間自室に退きこもり、不快の念を隠すのだった。

「あの子、いつもこんな具合なの？」とある日、ブランシュがさっさと部屋にこもったのを見て母親は尋ねた。

「たいがいはこんなもんです」とかれはため息をついた。

「あなたは出歩いて楽しんでほしいわよ。人生、一度しかないんですからね」

彼女はそそるネグリジェ姿で目の前に立っていた。そのがっしりしたからだをなめる、貪るような視線にはまるで無頓着だった。彼女が自分を男として見たことは一度もないのだ、とかれは思いあたった。何だって言うんだ　このおれは、彼女の目にはただの若僧にしか見えないのか？　それともおれが退屈すぎるんだろうか。（憂鬱な時には、ブランシュが自分を時代遅れの人間に仕立てあげたと確信できるモロクだった。）

したがって、これは重要な問題となった　この女は、本当におれをまるで魅力がないと考えているんだろうか？　かれは意を決し、その答えを確かめることにした……

ある日、あの女（ブランシュはしばしば、自分の母親を「あの女」と表現した）にはなにか不可解なところがある、と述べたのはブランシュだった。「おれはそうは思わないけどなあ」とモロクは答え、彼女のかわりに、あの女の人格を構成するさまざまな要素を足しあわせてみた。

かれの目に映ったものは、単純で自明のことにように思えた。この女は、まだいかなるホメロスも歌にしたことのないキルケーなのだ。この地にはキルケーがたくさんいるのだが、その悪名が三十センチの見出しとなってわめきたてられるまで、だれも気がつかないだけのこと。彼女は、ギリシャ伝説か、ダヌンツィオの著書のなか、あるいはワグナーの大作で見られる種類のキルケーだった。あるいは十八世紀の売春宿でも見つけられるかもしれない。彼女は家を持たない。単に出会いだけ。彼女の年齢は神話だ。若々しくもなければ、老いぼれてもいない。その肉体は、時に触れられて柔和で穏やかになった、古代遣

跡の華やかさと魅力を持っていた。鼻筋が通り、刺激的なアラベスクを刻んでいて、鼻孔は広がると、幽かに歓びの洞窟を思わせる。頭はずかしく傾げられ閨房の好色な後光に縁取られ、すばらしいキアロスクーロを構成している。二重顎の兆候が、ほんの幽かにうかがえる。中央に消し難く収まっているのは、まるで欲望に燃えるツィターのような、開いた赤い口だった。彼女のなかのアーティストは、それを驚異的な真紅の塗料で修正する。その締めりのない官能的な唇は、完全に閉じられるということがなかった。それは男の渴きを満たすためのみに存在し、それ自身は乾いて焼けたままにとどまる。たそがれの女奴隷にして大地の隆起のごときトルソを持ち合わせている。ミケランジェロのゆがんだノクターンのような丸み……歌麿の有害で邪悪な曲線では決してない。なにかプラクテレスによって開始されたが未完に終わり、現代作家によって完成されたような代物だ。

キルケーが不可解だろうか。

とにかく、モロクの冒した誤りは、妖女の声に耳を傾けたことだった。それは洗面所から漂い出て、強烈にかれを刺激し、かれの下腹部に隠された力を、単なる視覚や抽象的な事物では鎮められないほどにかきたてた。この儀式は毎日同じ時間に執行された。水滴で切れ切れになった彼女の旋律を聴くだけで　それだけでかれは我を忘れた。

かれが過ごした中でも一番奇妙な新婚旅行だった。新妻を伴っていったら、サキュバスを見出だしたのだから。そして沈黙の年月がこれだけ続いてから、かれは妻がすべてを知っていたことを知ったのである。

どうしてわかったのだろうか？　これは結局尋ねなかった。でも、この「妻」というラベルを貼られ、この結婚生活の年月を通じ、毎夜毎夜隣に横たわることのできた生物、出産にあたっては死の淵にまで赴いた生物が、いまだに唇を固く結んで激怒している様を見ると、かれの心は反発を覚えた。二人が共にした不和の年月を通じて彼女が蓄積した悪意と疑惑のすべてを、かれは有毒爬虫類の毒程度としか思わなかった。いったい何のために彼女は、過去のこんな忌まわしい秘密を後生大事にとっておいたのだろうか？

かれは重々しく立ち上がり、きつい口調で彼女が他に何を隠し持っているか問いただした。「他に何を知ってるんだ？　さあ吐け！」とかれは叫んだ。

「これ以上何を知れというの？」と彼女は憂い顔で答えた。

かれは一瞬動揺した。それからしっかりと言った。「おまえの忍耐力次第だな」

この台詞の残酷さは、彼女の一線を越えた。ブランシュはテーブルに突っ伏して、涙をそこに埋めた。

もはや我慢できなくなると、かれは彼女に歩み寄って、なぐさめるように腕をまわした。テーブルは彼女の悲嘆に震えていた。前に一度、神経が切れる寸前（出産をを恐れていたときだった）の彼女が、このような泣き方をするのを見たことがあった。そこには何

か動物めいたものがあった……屠殺場で、鮮血の匂いを初めて嗅いだときの仔牛の悲鳴を思わせる。

かれは、近所がこれを聞いてどう思うかと、恥ずかしくてならなかった。「やめなさい、おねがいだから」とかれは繰り返し、彼女の髪を撫で、とうとう彼女の傍らにひざまずいた。かれの声の優しさは、彼女の涙腺を刺激するばかりのようだった。新しい感情の貯水池が放水を開始した。彼女は全身を震わせ、沈み、その苦痛でかれの腕はしびれてしまったほどだ。かれは立ち上がり、これに続くはずの疲労を辛抱強く待った。そして状況について哲学的に回想を始めた。

一方、しゃくりあげたりうめいたりしながらも、彼女は一言二言はさもうと試みた。発することは反復ばかりだった。主に、遙か彼方の無情な神に向けられた尋問だった。

「ああ神様！ あたしが一体何をしておっしゃるんですか、こんな目にあうなんて、あたしが何をしたんですか！」

モロクは、自制するようにと懇願した。「ブランシュ、ヒステリーが過ぎるぞ」

「ああ、なぜこんな侮辱ばかり……いつも、いつもよ！　ずっと立派な母親だったでしょうに、いつもあなたに尽くしてきたのに、そうでしょう？」

「そうだと、ブランシュ……そうだと。さあ、さあ……」かれはなだめるようにささやいた。

彼女は再びいきりたった。「また口先ばかり。わかっているのよ。あたしを黙らせるためなら何でも言う人よ、あなたって」彼女はまた派手に泣き出した。かれは凍り付いたように立ち尽くし、待った。彼女の涙が干上がるのを待った。

己れの妻の縮こまった姿の横に立ちながら、かれは黙想にふけた。かれがちょっとでも触れると、ブランシュは身震いし、改めてため息をつく、くずおれる。奇妙な考えがかれの頭を駆け巡っていた。たとえばあのジム・デイリーという男は、ブランシュへの愛に身を焦がしているそうだが　かれなら事をどのように運んだらうか。かれも手に負えない事態に立ち到っただらうか。こんな女が女房なら、かような状況が起こるのは避け難いのではないか？　ジム・デイリーは、このブランシュという女をモノにできないので、心を痛めているにちがいない。ノース・ダコタにいる別の男も、おそらくは似たようにご執心のはずだ。この二人は、空想上の存在を失って苦悶しているわけだ。そう　空想上？　かれらが熱望する女は実在するのだらうか？　その女はどこにいる？　強姦された処女のようにテーブルにしがみついている、この惨めで悲嘆に暮れた、涙みれの生物ではないはずだ。

モロクの知るかぎり、彼女のほうも二人を熱望していた。どちらがブランシュの好みかはわからなかった。たぶん、両方とも欲しいのだらう。正直言ってモロクは、ブランシュ

が、誰が欲しいのかも、何が欲しいのかもわかってないんじゃないか、という疑念を抱いているのだった。彼女もまた、想像上の生物を思い描いているのだ、現実がちょっとでも触れればかき消え、神話上の怪物と化す恋人たちを。この立場を、ほんのしばらくでもいいからあの二人に替わってもらえたら、とかれは神に祈った。こんなのはまるでナンセンスだ、何一つ知らずに女を天にまで高めろなんて……。

かれは、妻が死んだときにプリゴツィが送ってよこした手紙の事を考えた。その言葉は、かれの記憶に彫りこまれていた。……「初めて会ったときから、きみのことは友人だと思ってきた。ぼくにとって、それが意味するところはたった一つ。きみの頼みは何であっても大きすぎることはないこと、そしてきみが好きな時に、いや、好きでない時ですら、ぼくに与えられるものであれば何でも黙って持って行って構わない、ということだ……きみに対してはいかなる隠し事もせず、いかなる秘密も持たない」そしてモロクがかくも強い好意を抱くようになったこの素晴らしい人物のあらゆる行動は、この断言が絵空言ではないのを告げていた。ここにいるのは、かれが結婚したわけでもない、時には陰険に喰いものにしたり、あざけったり軽んじたりしたこともある相手だった。それなのに「友情」という言葉が、かれをして高貴で寛大に振る舞うよう教えこんだのだ。しかしブランシュにとっては、かれが友人と呼ぶこの人物は、ただの醜悪なチビのユダヤ人で、他人に鼻を突っ込むのが好きなだけ、となってしまう。

モロクはこういったすべてを考えるのをあきらめた。ブランシュとは議論するだけ無駄だ。彼女は彼女なりのものの見方があって、かれにはかれの見方があった。かれは人生を冒険として見ていた。みすばらしくはあったけれど、それでも冒険にはちがいがなかった。一方の彼女はと言えば、彼女は腹で人生を這いずり進んでいるのだった。どうりでおびえてうんざりしているわけだ。彼女にとって、人生は這いずるような、鬱陶しい行為以外のものには決してなり得ないのだった。

第17章

「.....ブルガリアのソフィアで、わたしは色街巡りを開始したのである。しかしながら、わたしがこれを面白半分で行なっていたとか、わたしが心底歪みきっているなどと考えていただいては困る。バルカン半島においては、こうした事柄に対する人々の見方は完全に異なっている。悪名高くも羨望の的である『大娼婦』を困ったり、あるいはギャンブルの席について自分の儲けを無感動にかき集めたり、あるいはかき集めてもらいつつそれを無感動に眺めたりすれば、世評は即座に嫌でも高まるのだ。特にソフィアでは、わたしは正しい悪癖に耽溺した。それというのも、ここでわたしが数週間連れ歩いた女は、かの地で最も悪名高い女、かの地で『la seule grande cocotte de Sofia』と称される女だったからだ。華やかな海水浴リゾート等々へと赴いた。それから彼女を袖にして王立オペラ座のプリマドンナに乗り換えた。このような生活を三ヶ月も続けた頃には、わたしは世評で好意的に扱われるだけの粹人として、しかるべき噂をたてられるようになった。すでに書いたように、これはアメリカ合州国における世評とはまったく異なった性質のものである。いまは再び隠遁して落ち着いた暮らしを再開できそうな気分だ。

こうした些事を書き連ねるのも、本の数年前まで片手に電報の束を持ち、馬車馬のような格好をしてフラティロン・ビルの周辺の番地や部屋番をキョロキョロしていたこのわたしが、オペラ座のプリマドンナを歓待できることを示すためだ.....土曜の夜、わたしの望みはただ一つ、きみが隣にすわっていればよかったということだけだった.....

ボスは十五日にルーマニアに戻れと言う。ルーマニア王と王妃の戴冠式に招かれたものでね。わたしもそれに参加するつもりだ。そして王と三度目の親交を深める。ここでわたしは魅力的なルーマニア娘と出会い、余暇はもっぱらそれに忙殺されている.....

わが故国に関する印象は、きみならおわかりだろうが、あまり確定的なものではなかった。今書き送れるのは、アメリカでわたしは大きな村にいるような印象を感じていた、ということだ。あの慌ただしく、騒々しいニューヨークを離れてからというもの、ハーグやスヘフェニンゲンといった町の平穏さは麻醉薬のように効く.....」

モロクは手紙を丸めてもとのポケットに突っ込んだ。これを読もうと努力を始めたのは、もう三度目だった。二十六ページの手紙で、四大陸と女九人、王家三つ、大使や君主

山ほど、途轍もない量のシャンペン、コカインの幻覚、ラクダ旅行、そして性病二つにまたがっている。だがモロクは、どうしても集中することができなかった。旧友ジャック・ダンの冒険はかれの興味をそそらなかつた。証券取引所が爆破されても、興味をそそられはしなかつたろう。かれは昏睡状態でうろついていた。

ブランシュはその朝早くから起きだし、かれの朝食を用意し（異例なことだ！）、かれが出かける間に、落ち着いた声で、間もなくこの家を出るつもりだ、と告げたのだった。いつまで、と期限を切るのは拒んだ。「はっきり予定があるわけじゃないわ。ただもう、何もかも疲れちゃったのよ……どこかに行って、よく考え直してみたいの」と彼女は宣言した。

その午後、彼女は子供を連れて去った。書き置きには、家具を倉庫に預けてくれ、という頼みが記されていた。いつになったら戻ってくるか、見当がつかない、とも。二度と帰らないかもしれない。行き先の住所も残されていなかったが、そこへ行くつもりかは充分に承知しているらしかった。

彼女の暇乞いの最も奇妙な点は、それがかれにことさらつらい想いを課さなかつたことだ。夫として、おそらくなんらかの遺憾の意を表明する権利はあつただろう。が、そんなものはなかつた。その晩帰宅すると、かれは機械的に家の中を動きまわり、そして彼女の書き置きを数回読み返した後で、彼女にも人間として、自分なりの実験（それが実験であればだが）を試みる権利がある、という結論に到達した。子供を失ったのが一番つらかつたその時になって、いつにも増して、自分がどれほど心底娘を気に入っていたか気がついたのであつた。娘に再び会える日がくるだろうか？

かれは一、二日ほど手をこまねいて、ブランシュの気が変わるのを待った。郵便配達を心待ちにした。呼び鈴がなればドアにすっ飛んでいって、二人が腕を広げてそこに立っているのを期待した。……三日が過ぎた。そして四日、五日……ブランシュからは何の連絡もない。

一体全体、あいつはどこへ行っちゃったんだろう、それに子供は大丈夫なんだろうか。ちくしょう、大人の男をこんな目にあわせるなんて！ もし誰か他の相手を見つけて、一からやりなおしたいと言うんなら、一言報せてくれたっていいものを！ かれは喜んで身を退いたろう。でもこの鬱陶しい緊張感！ あのバカ、子供といっしょに橋から飛び降り自殺なんてこともやりかねんぞ……二人はこの瞬間、どっかの川底にころがってるかもしれない！

かれは髪の毛を引きむしらんばかりだった。

彼女の提案を受け入れて、家具を倉庫に預けた。何とか気をとりのおそうとした。あいつ、単におれにも自分と同じ想いを味あわせようとしてるのかもしれない。……日中は仕

事に忙殺されて、二人の事を頭から追いやるのは簡単だったが、完全に自由で他の女と羽根をのばしてもいい夜になると、かれは沈みこんで憂鬱な回想に溺れるのだった。

かれは二人の事を矢鱈と考えていた……。

十日目に手紙が届いた。マサチューセッツ州の小さな町から書いてよこしたもので、二人とも元気で、かれの方の具合を知りたがっていた。末尾近くに、彼女が手元不如意になりつつあると示す憐れな一節があった……正面切って援助を求めたくはないようだったが、もし少し用立ててくれるなら、大変ありがたいと書かれていた。かれは即座に電信局に駆け込み、相当な額を送金してやった。それからすわって彼女宛てに十ページの手紙を書いた。そして速達で発送した。

三日後、かれは次の手紙を受け取った。かれの多大な気遣いに感謝するとともに、また手紙をくれとうながしている。先のことについては何ら言及がなかった。予定については一言もない。彼女の手紙を貫いているのは、穏やかな満足といったものだった。重病の後に快方に向かっている人物のような書きっぷりだった。

かれは思った。「まあいいか。続けさせてやろう。あいつも自分を取り戻さないとな……心を癒さない」と

かれ自身の手紙は注意深くことばを選び、不必要な影響を与えないようにしてあった。物事を慎重に取り扱って、圧力をかけているという誤解は一切避けるようにした。この期に及んで、彼女にああしろこうしろと示唆するのはまるで愚かしいことだ、とかかれは理由づけた。そしてこう書いた。「健康にはくれぐれも気をつけて。せいぜい楽しんでくれ。……おれが大バカだったのかもしれない」

愛の扱いにはきわめて慎重なかれだったが、それでも彼女にいささかでも理性があれば、かれが今では彼女をそれなりに思慕していることを、行間から読み取れただろう。事の真相を言うなら、かれは妻のこの休暇中、人間的に一変していたのだ。他の女には目もくれなかった。昼食時には店のウィンドウをのぞきこみ、連中に何を送ってやったら特に喜ばれるだろうかと思案した。何度か電信で花を送った。本も送ったし、キャンデーや、彼女が興味を示すかもしれないニューヨークの新聞からの切り抜きを送ってやったりもした。……このようにして二人は、彼女が家にいて隣同士で横たわりつつも思考は千里の彼方にあった時より、ずっと接近しつつあった。

この種のことが二ヵ月ほど続いたが、ブランシュはまだ帰宅について何も言わなかった。だれか別の男がいるわけではない。それについては確信があった。この頃には、二人の間で交わされる手紙はもっと開けっぴろげになっていた。ブランシュはもはや愛情を隠そうとはしなかった。その手紙は愛に満ち溢れていたが、しかしいつも一抹の悲しみをたたえていた。モロクは絶頂感の中で、それを彼女の孤独のせいだと考えていたのだが。た

まに憂鬱に圧倒されると、腰を据えて嫌味な手紙を書いたが、でも次の手紙ではその感情に流された発言の埋め合わせとして、一般的な話題に限ってみたり、彼女の状況について案じるように尋ねたりするのだった。

するとある日、かれは大きなふくれあがった封筒を受け取った。(なぜ人は、恋に落ちると手紙の厚さを格も重視するようになるのだろうか?)かれは物欲しげに封筒を破って開いた。小さな写真の束がこぼれ落ちて、机中に散らばった。かれは震える手でそれをつかんだ。もはや自分を抑さえることができなかった。かれは意を決した。……土曜の朝十時頃だった。下宿屋に取って返し、大慌てで荷造りをした。それから駅までタクシーを拾い、切符を買った。最初の駅で、かれはこれからそっちに向かうという電報を打った……。

「われわれはこの世を受け入れるべく生まれてくるのだ。単にそれを知るために生まれてくるのではない。知識によってわれわれは力を得るが、共感によって完成にいたるのだ」かの詩人のことば　かれは常にタゴールの散文を、それ自体美しいものと感じていた　は、今やかれの高められた感覚に、深遠さと荘重さによって脆さを隠しきった、謎めいた入力となって伝わってきた。「われわれはこの世を受け入れるべく生まれてくるのだ」！　何と澄みきった高貴な見方だろう！　生の邪悪や醜さは、遙か彼方に遠ざかったように思えた。人はこの思考の意義をつかみとり、舵輪のようにそれにしがみつき、人生の荒波の中を正気を保って通り抜けられるだろうか。かれは散文の本を閉じ、虚ろな目で飛び過ぎるパノラマを眺めた。小川、木々、冴えない製粉都市、ニューイングランドの風景の、草にまみれた乾ききった地表は、その絶頂感を失った世界の気の滅入るような事物だった。かれのまぶたは、己れを取り巻く世界の悲しく響く現実に対し、本能的閉ざされた。これは生ける世界であり、苦闘と悲しみの世界であり、哲学者の透徹な論理や、詩人の尊厳や情熱、傍観者の心の安寧と超然ぶりをことごとく裏切る、歪んだ世界なのだ。

列車は、清教徒たちが染みをつけてまわった惨めな土地を、速度をあげて通り抜けた。かれの目には見えぬ手が、屋気楼や時の流れを単調になで回す。胸の垂れた女たちが汚ないあばら屋で、汽笛一声とともに自分たちの人生を再開できないものとひたすら待ち続けている。やせこけた顔貌の、かたい拳のヤンキーたちが、石のようなジャガイモ畑で辛苦している。その魂は、かれらを養ってきた不毛の土と同じくよじれ、歪んでいる。血も涙もないオールドミスが、ゴシップでべとつき、憎しみとねたみで毒々しく、その無駄話ばかりの唇から泡をなめ取る。その教会並の偏狭さを持つ村の教区牧師が、罪深き人々の邪悪に対し、ガリガリの偽善的な手を振り上げる。

この文化的荒廃のどこかで、母と子がかれを待っているのだった。恋人が腕をさしのべ、待望に胸をふくらませている。雪花石膏製の聖母像に装飾に見られるように、心臓がむきだしになって血をにじませているのが見える。……彼女はこう書いてよこした。「最

愛の坊やへ。あなたは本当に思慮深くて、あたしによくしてくれますね……あなたがどれほどわたしにとって大切か、決してわかりません。あなたを本当に幸せにしてあげたい。わたしがあなたに対して抱いている気持ちの深さを本当に証明したい　でも、無理です！　あなたをずっとわたしだけのものにしておきたいけれど、でももしあなたを所有できないなら　それならわたしの幸せは、あなたが幸せになるのを見ることです。愛しの坊や　愛しています！」

午後が列車の窓から注ぎ込んで、かれの震えるまぶたを黄金の杖で触れた。主の貴い密使がかれの魂に呼びかけていた。それはかれの目を開かせ、大地の祝宴をまのあたりにさせた。その瞬間、かれは自分が、何の線路も敷かれていない空間の中を駆け抜ける、宇宙の中の微小な素粒子以外の何物でもないと感じたのだった。かれはひざに乗った本を手を取った。一節で充分だった。読み続けるのは不可能だった……。

「星の韻律は教室で図解することができるが、星の詩学は魂と魂の沈黙の出会いの中、光と闇の合流点、無限が有限の額にキスを残すところ、『偉大なる我』の音楽が創造の大オルガンの無数の弁から無限のハーモニーとともに剥がれ落ちるところにあるのだ」

機関車の深い、瀝青の響きは、町とそこでまどろむ居住者たちを湯足す、雷のごとき天の音楽のこだまだった。怪物の滴る鉄の側面が、小さなマサチューセッツの町の縁を食む、かれは恍惚としてクッション付きの椅子にすわりこんでいた。客車からたちのぼる話声は、かれの耳には平和な忘却からたちのぼる、幽かににじみ出る音のように聞こえた。くぐもったかれの肉体は、気違いじみた喇叭の召喚を薄れさせた。かれの魂は、断崖の上で踊る切れ切れの影だった……。

三日三晩にわたり、かれらは肉体の婚姻を祝った。四日目、かれはこれ以上帰還を引き延ばせなかった。かれの精神は歓喜し、魂は解放されて自由に舞っていた。小さなエッダは小さな裸足でもじもじして、ひるんだような声でささやいた。「パパ、さよなら」　かれのいない間に、ブランシュはいろいろかわいらしい台詞を娘に仕込んでいた。かれが到着した夜、二人は娘のゆりかごを見下ろして立ち、彼女が疲れた小さなのどをゴロゴロ言わせる貴重な音に耳を傾けた。この小さな肉の塊を、かれはどれほど誇らしく思ったことか。思わず目を霞が覆った。これに匹敵するものが、かれの人生で他にあるだろうか？

「失礼」とかれはブランシュに告げ、涙を隠すため洗面所に急いだ。

いまやかれはブランシュにさよならを告げていた。二人の心は平和と愛で結ばれていた。彼女はモロクにしがみつぎ、いま一度の愛の封印をかわすべく戸口に引き戻した。彼女は何かをかれの耳にささやいた。かれは赤面した。そしてまるで静まり返ってすすり泣く観客を前に閉じる幕のように、ドアがかれの背後でそっと閉まった。……かれの指先は、彼女の震える肉体の記憶でうずいた。

列車に乗ってしばらくしてから、かれはちょっとした探しもののためにかばんを開き、驚いたことにブランシュからの贈り物を発見した。それは『ヴィクトリア』と題されたハムスンの著書だった。見返しに、ブランシュはこんなメッセージを書き込んでいた。

「わたしは晩冬に嵐の嘔吐した、震い櫛の落ち葉に書かれたグロテスクである」

かれはこの残酷なまでに美しい物語を一息で呑み込んだ。ストリンドベリの精神とドストイエフスキーの親密さを持ち合わせたこの北国の狂戦士は、かれの優しい心を引き裂いた。かれは本の最後のページを再び読み返してみた。このヴィクトリアの最後の手紙は、苦悶する愛の見事な記念碑ではないか！

彼女はこう書いている。「親愛なるヨハannes、あなたがこの手紙を読む頃、わたしはすでにこの世を去っているでしょう。……ああヨハannes、わたしがあなたをどれほど愛しているかわかってもらえたら！

わたしはそれをあなたに示すことができませんでした。いろいろな事が邪魔をついたし、何よりもわたしの性格がそれを許しませんでした。……ヨハannes、わたしが再び元気になったなら、二度とあなたに冷たくしたりしないでしょう。何度泣いてそう思ったことか！ ああ、外に出て、通りのあらゆる石を撫で、立ち止まっては階段の一段ごとに感謝の念を捧げ、万人によくするでしょう……わたしはちっとも人生を生きていない、だれにも何もしてあげられていない、そしてこの失敗した人生は今や終わりに近づいています。……そして今日、わたしはこう考えていました　わたしがきれいに着飾っていたころに、町中でわたしがあなたにまっすぐ歩み寄り、これまでのようにあなたを傷つけるようなことは何も言わず、そのためだけに買った薔薇を差し出したとしたら、あなたは思うだろうか、と……ああヨハannes、あなたを愛していました、一生であなただけを愛していました。これを書いているのはヴィクトリア、肩越しに神がご覧になっておいでです……」

かれは、この世界中で演じられている、胸を引き裂くようなドラマについて考え、考え、考えぬいた。男と女がいっしょになり、全能の神の前でお互いを押し潰しては立ち上がらせ、狂喜させる、憐れな涙ながらのことばをささやくところすべてで演じられることばだ。かれは涙で何も見えないまま、窓際の席の隅に縮こまって、絶望してすわっていた。己れ自身のため、ブランシュのため、ヨハannesのため、全世界のために泣いた……愛という狂気にこれまで触れられた、あるいはこれから触れられる者すべてのために。ブランシュに何かを言わねばという想いが、彼女に呼びかけ、ひざまずいて愛を叫びたいという想いがかれの喉元を捕らえて離さなかった。

一方ブランシュは、むさくるしいマサチューセッツの町の小さな部屋にすわっていた。かれは涙に濡れた白紙の便箋を前に、催眠術にかけられたようだった。ペンは手に握られ

たまま、涙が乾くのを待っている。彼女には、かれの愛の叫びは聞こえなかった。……かれはあまりに遠く離れ、血は苦悶と悲嘆に満ち過ぎている。

その夜、ディオーン・モロクが陰気な下宿屋にたどりついた時、かれの脳は燃えたつようだった。かれはこの放蕩の日々に終止符をうつ決意を固めていた。己れの選んだ愚かな役割を後にして、より深い未知の水域に飛び込む決意だった。かれは声に出して言った。「おれの人生は何だったというんだ？ 何のために生きてるんだ？」かれは拳を握り締めて、自分につぶやき続けた。「何とかするんだ　どんな気違いじみていてもいい、どんなに無茶苦茶でもいい！ 世界に対して何か言うんだ。人生に人生で答えるんだ。飛び出せ……ぬくぬくした存在のくびきから自由になるんだ……」

自分の考えを誰かに報せずにはいられなかった。熱にうかされたようなエネルギーで、かれはすわるとその気違いじみた考えを紙に書き記した。それを妻に宛てた。

「親愛なるヴィクトリア、お前はわたしに何をしたんだ？ わたしは松林で裸で凍えている。心は復活祭の朝のようだ。わたしの内面では、何という恐ろしく美しいことが起こっていることか！ おまえの愛がほんの数時間前に腐食した傷からは、黒い苦痛の濁流が流れ込んでいる。この世界はわたしの踏みしめる世界なのだ。わたしは自由に駆け出さなくてはならない。狂ったように、苦痛と絶頂感にわめきながら、角を低く構えて突進し、わたしを囲いこんでは首を締めるバリケードを突破しなくてはならない。わたしには拡大する余裕が必要だ……突進できる広大で静かな空間が。そうすればわたしの声はもっとも遠くの涯てまで届き、この冷酷な宇宙の見えざる壁を揺さぶれるように。わたしは何かせずにはいられない、愛するブランシュ、愛するヴィクトリア……もはや車をまわるねずみのようなことは続けられない。助けてくれ、とお前に懇願させてくれ。この日々の退行からわたしを救ってくれ。

たった今になって、わたしには人生が何を湛えているか、明らかになってきた。自分の中のあらゆる生命が高まるのが感じられる。それが叫んでいる、ハレルヤ、と！

これを書いているのはわたし、お前の夫だ。ヨハンネスではない。そう、見返しのお前の書き込みは読んだ……『晩冬に嵐の嘔吐したもの』。しかしながら、わたしとしてはむしろ、三十九ページのほうが好みだ。そこにはこう書かれている。

『ああ、愛は人の心をキノコの庭園に変えてしまう。それは豪華ながら恥知らずな庭園で、数多くの謎めいたふらちなベニテングタケが頭をもたげるのだ』

第18章

黒と紫の大枝を備えた、やせ衰えたむき出しの檜の木が、隣の壁に黒々とグロテスクな影を落としていた。モロクは博物館で見たチェスの駒を思い出した。いかついヤクート族の像で、あの気違いじみた影のような馬に乗っていた。

かれは妻宛ての手紙を投函して戻り、いまやぼんやりと窓の外を眺めながら、就寝前の短い時間の退屈を、どうやってまぎらわそうかと思案にくれた。深遠な静寂がかれにのしかかり、思考を奇妙な領域へと導いた。たとえばかれが考えたのは、ヒマラヤの仏教のラマ寺院で僧侶たちが示す、禁欲的な身代わりの儀式のことだ。そこでは数世紀にわたり、世捨て人たちが真夜中に起きだして、眠れる者たちすべてのために祈るのだ。そうすれば世界中の男も女も、翌朝目覚めたときには清められ、清浄で親切で勇敢な思考とともに一日を開始できるように。かれはまた、あの悲運の天才ゴーギャンのことも考えた。かれはその画家としての経歴半ばにして、パリ北駅の壁の広告貼りに身をやつさなければならなかったのだ。ゴーギャンはかつてこう語った。「芸術家の任務は生命の尊厳を肯定することだ」と。そしてかれは、確かにその生命の尊厳を肯定すべく、首の骨を折るまで働く覚悟ができていたわけだ。

生命の尊厳！ このことばの荘厳さは、ことばという道具では永遠に表現を拒絶された示唆の意識を誘起するのだった。そのことばは、明白なものを明白ならざるものと隔てる一線のようなものだ。それは感覚的な世界のイメージを創りだした。あらゆる表現や分析を超えた世界で、完全に知性に属するわけでもなく、完全に感覚に属するわけでもない世界だ。

かれは水辺に赴きたいという、説明し難い、だが圧倒的な感覚に襲われた。冷たい川面かに向かってぶらさがったり突き出したりする、砕けて荒廃した荷揚げ施設の下で、ひざまずきたいと感じたのだ。かれはその瞬間にもその地点に転送され、畏怖の念にうたれつつ、ブルックリン橋のくすんだ線細工を見上げたいと感じた。ヴィシーの海のうずくような低音の響きや、くぐもったようなかすれ音をたてながら、様式化したはしげが下を行き交う、あの壮大なタイタンのスパンが見たかったのだ。橋の明かりが冷たい光輝とともに輝き、遙か下で高まる潮に、素晴らしいナフサのきらめきを投げかけているのが見たかっ

たのだ。

幾度となく、深夜の気分になると、かれは水辺にこっそりとやってきては、この影に満ちたノクターンの荒々しい素晴らしさに、神経や血脈を解放したものだ。いま、心眼で見ると、過渡的でほんの短い一瞬（その間に世界が生まれて再び死ねるくらいの一瞬）、それは目の前にそびえたった。巨大で黒々と、不気味な幻影めいた形態で漂う、のこぎり状の段ボールの巨大構築物として。鉄とレンガ造の塔が頭をもたげた。月明かりと泡にぎらつく海の生き物が、その突端や尖塔から藻類や玉髄、紅縞珊瑚海産物を払い落としつつ顔を出す。不活発な多彩な形の夢魔が、海の泡と星の輝きの中でもがき血と泥のよじれた凝結物を、頭上の青黒い天蓋に吹き上げる。

そしてこの発作の真っ最中に、かれの精神はいきなり駆け戻ってきて、はしけの横手に転がるハリ・ダスの姿を見せるのだった。その美しい茶色のからだは冷たく硬直し、香料を一杯に詰め込まれている。その冷たい動かぬ唇は、かつてこう豪語したものだ。「わたしが最も誇りとするのは、しっかり地に足をつけていないことにある。わが哲学の原理は、この宇宙の究極原理でもある。すなわち、無原理ということだ。……わたしは自分の体系が流動的でもろく、蒸発してしまえるのだと自慢する」

ああ、ハリというやつは、昔は見事に笑えたっけ。なにがかれをして、あんなに心から笑わせたのだろうか。昔ハリに聞かせた話を思い出した。死体についての冗談だ。葬儀屋が、死体をはだかにしたものの、靴下を脱がせるのを忘れてしまった、というものだ。汚ない靴下をはいたままの死体を葬るなんて！ ひょっとして連中、ハリの胸ポケットにきれいな絹ハンカチを入れずに埋めてしまったかも（しょせん黒んぼだから）……

深夜。フルトンフェリー向け『桜の園』最終幕。ボロボロの廃船が、ピロードの造船台でまどろむ。海とおさらばして、腐敗を待ちうけている。フェリー乗り場は、影の中で崩れゆき、はらわたをえぐられたシーザーの死体よりも陰鬱で不気味だ。

さらに埠頭をさかのぼると、トゥルバドール号がだらりと揺れている。クラサオから到着したばかりで、船倉にはコーヒー豆一万袋。船底は真紅に塗られ、震える白い横腹には空色の帯が走っている。大索やケーブルが彼女の輝く船首を、棧橋や埠頭に点々と配置された銅張りの支柱に固定している。つむじのような荷役人の星座が、匂いの強い船荷を、石を投げれば届きそうなどころにある倉庫のゲップする大顎に運び込んでいる。その嘔吐口のすぐ上に不気味に陣取って、出納係が商業的な計算に忙しく従事している。短縮したモータートラックの待ち行列が、すべりやすい割れた厚板を照らす青いカルシウム灯の中を四散して抜ける。埠頭は活気づいている。クレーンや手動ウィンチ、樞、転びそうになる青いデニム姿、腹のふくれた樽、デリック、マスト、桁端。渦巻き泡立つ本格的な波頭

が、埠頭の藻類まみれの横腹に、キャベツ緑の水をはねかけてきらめかせる。タールと海草の活気づく臭気が、肺をヨード処理する。トゥルバドール号は、さかりのついたイノシシのように、ドックの材木に横腹をこすりつけつつ、悲鳴をあげたりうなったりする。まったく無感動で超然と、深夜のわめくような静寂を侮辱するように、ユニオンジャックがはためく。埠頭ネズミの権力と貪欲の象徴だ。

モロクの思考のトルコ玉ジグは、蒸気機関車のシュッシュッポッポに刺し止められてしまう。遙か彼方からは謎めいた歌声が沸き起こり、対岸の石の譫妄状態と張り合っている。かれのうつろう妄想は、大英帝国の幻の水平線と、自分自身の存在の状態（いまやいつになく、夢と夢を結ぶ震える土手道のように思える）との間を行き来する。かれの独白は、マストとブームの原始的な角度の間から押し出され、しかし即座に偽の顔を貼り付けた、鉄とコンクリートの化け物じみた骨格にぶつかってひしゃげてしまう。トゥルバドール号が揺れては上下するのを眺めつつ、心地よい感覚が腹の底に侵入する。水は豊かで汁気に満ちた音をたてる

巨大キャンデーよりずっといい。あふれる流れがしぶきと泡をたて、押し合っては隆起して、海めがけて急ぎ去る。……人はここへ休息にやってくる、そうだ、ちょうどバビロンの川辺にくるように。ここには黄金の大船隊が停泊する

ウルワース百貨店のバーゲン品並に安っぽい、巨大でのろまな船　その内臓は悪臭放つ密輸品で湯気をたてている。朝になれば向かうはヴァルパライソ、シンガポール、スマトラ、ラングーン、モザンビーク……そして向こうには、夜のさ中にじっと明かるくそびえ立つ、金の亡者どもの、無数の裂け目の入った細い宮殿。夜の子宮を刺し貫く、巨大なめまいの塔。

彼方の世界の華やかで逃れ難い真実以上のものといえ、筆舌に尽くし難い睡眠の魅力。水辺にしゃがむ、低い年代物の建築物は、厚い触れるほどのおりものに包まれている。その堂々たる廃絶、その簡潔な哲学的休眠　この霊案室的素晴らしさがかれを捕らえ、魅了した。物欲しげな棺桶に運ばれて、紫黒のきわめて詩的な死へと運ばれてゆくような気がした。カエルの鳴き声やサイレンが、川の巨大な黒いのももどで響く。

「すべてを後にできさえすれば！」

かれは空想上の明日の恐怖に苛まれている。深夜は時の荒々しい先端巨大症を隠すシュルトウ外套をまとう……。

ドックを後に、モロクは高い壁にはさまれた、コロンビア・ハイツのテラスの下を峡谷のように走る通りをぶらついた。ここの静寂はもっと不吉であり、もっと濃密だった。通り魔に会うには絶好の場所だ。かれはきわめて用心深く道の真ん中を歩き、倉庫群の煉瓦の墓のような壁についた、奇妙な鉄の星に魅了されていた。倉庫の向かいには、荒れ果てた掘ったて小屋と、板張り酒場が列をなしていた。

ドアが軽やかに開き、鋏打ブーツが黄色い花粉のようなおがくずを踏みしめた時代。あの頃はよかった。縁から泡のあふれる大ジョッキが、なめらかなマホガニー塗装のバー・カウンターに輪じみを残す。紅海で茄子のような色合に焼けた、毛むくじゃらの胸をしたゴリラのような男たちが、冷たい石鹸のような泡に、剛毛状の口ひげを浸したものだ。かれらの筋肉は蛇のように易々としなり、空気はかれらの口汚ない密通的な悪罵で燃えるようだった。

ああ無念、かの日々は封じ込められ、脱臭されてしまった。乾杯のあまずっぱい臭気は、汗のように蒸発してしまった。意気投合すべき、昔ながらのよき呑んだくれもいない。ウォーターフロントは犬の歯のように清潔で、墓地のように陰気になってしまった。いまのここは、薬局の薬並に安全になってしまった。

陰鬱に、ディオーン・モロクは、かつては酒場や気違いじみた肉体労働者だらけだった、この無人の通りに背を向けた。頭上には金持ちの陰鬱な豪邸。その中にいるのは、生の熱気と嵐から守られたもろい骨ども。いまだ己れの本来の居場所たる墓場へと向かうには自尊心の強すぎる連中。

魔法のような階段のてっぺんから、このブルックリンのとらえどころのない裏庭を見下ろし、ディオーン・モロクは再び、眼前に堆積する瓦礫の山に目を投げかけた。

このテラスからの見事な眺望、これは一体何だ？ それは何を明かしてくれるかって？

屑の山だ。点在するのは、さびた缶切り、壊れたゆりかご、打ち捨てられたブリキの風呂桶、べとつく窓のブラインド、古めかしいトランク、荷車、下水管、銅のボイラー、ナツメグおろし、そして かじりかけの動物クラッカー。

おしまい

モロクについて

山形浩生

ヘンリー・ミラーは20世紀アメリカ最大の作家の一人とされ、また「性の作家」の異名を持つ。その作品の多くは、当時としては一般の許容範囲を越える露骨なセックス描写で知られ、そのために発禁裁判も何度か起こされている。一方で、構築的というよりは垂れ流すような書き方、口語やスラングなどを多用した文体は、特に60年代の作家たちにおおきな影響を与えている。現在のアメリカ最大の作家とされるトマス・ピンチョンも、「ミラーの作品などは『こんな書き方をしているのか！』という開放感をもたらしてくれた」と述べている。その意味で、かれの影響は非常に大きいと言えるだろう。

一応、本書はミラーが書き上げた幻の処女長編である。が、ミラー自身は本書を公に出版したことはなかった。それがミラー自身の意図に基づくものか、それとも単に原稿をなくしてしまっただけだったのかは、今となっては知りようもない。ミラー自身のためには、前者であってほしいように思う。この本は小説として、時に習作の域にすら達しないほど未熟であり、その分対象化の不十分な、さもしい自己弁護がむきだしになっているからだ。語彙をひけらかしたいが故の形容詞過多。無意味な引用や、ためにする言及。必然性のない難しい表現。言い回しに凝り過ぎて、結局意図がつかわらない部分も多い。

かれの死後、『クレージー・コック』とともに本書を掘り出したのは、ミラーの伝記作家メアリー・ディアボーンであった。発見の過程は不祥。きけばわかるだろうが、わかってもしかたないことなので、わからない。それ以前にも、本書の存在は知られていた。ミラーの諸作はだいたい自伝的なものだし、女遍歴の多かったミラーの人生は、文学屋さんたちや伝記屋さんたちに漁られやすいのだ。が、その内容については、「ニューヨークでウェスタン・ユニオン電信会社に勤務しつつ、最初の結婚が破局に向かいつつある時期を描いたもの」としか知られていなかった。

時に1927年。当時のヘンリー・ミラーは職もなく、収入のあてもなく、二番目の妻ジューンにたかってニューヨークで暮らしていた。ジューンはレズビアンを同居させていて、これが後の『クレージー・コック』のネタになるのだが、それはまだ先の話。

ミラーはそれまでに、『切られた翼』という電信配達人の様々な暮らしを描いた小品集

を書いていた。それを読んだある記者に「才能がないからあきらめろ」と言われてくさっていたという。この作品は断片的にしか残っていないものの、その多くの部分は本書の中にそのまま活かされているらしい。もしそうなら、その記者は非常にまっとうな鑑識眼の持ち主だったにちがいない。そのため、ミラーはジューンの強い勧めにも関わらず物書き業にあまり熱意を傾けず、しばらくは市の公園係に勤めたりしていた。

ジューンはやがてその愛人とパリに駆け落ちするが、二ヵ月で復帰し、グリニッジ・ビレッジに酒場を開く。そこで見つけたパトロンが、1988年まではこの『モロク』の唯一の読者となる。ジューンがミラーをときつけて仕事をやめさせ、ミラーは本書の執筆を開始するのだが、ジューンはそのパトロンを説得し、自分の書いている小説だと称して『モロク』をパトロンに見せるかわりに、週決めでお小遣いをもらえるように取り計らったのだ。そのためだけのお小遣いでなかったのは、想像に難くない。しかしながら、執筆によって間接的とはいえ定期収入が入るようになった（と同時に、週決めの執筆ノルマが課された）ことで、ミラー自身も多少ははじめのある生活を送れるようになる。もっともジューンの代理人として執筆していることで、執筆態度もそれなりに変化せざるを得なかったそうではあるが。

そしてそのパトロンはよほど目のない人物だったらしく、完成した本書を激賞し、ジューンにパリ旅行（旅費と九ヵ月分の生活費つき！）をポンとくれてやるのである。

この金で、ミラーはジューンとともにパリに渡る。これが1928年。一度はニューヨークに戻るが、後にまた単身ヨーロッパに渡る。そして『北回帰線』『南回帰線』『暗い春』……あとは歴史の知る通り。本書は作家としてのミラーの出発点でもあり、そして経済的な踏切台となった小説でもある。

内容は、ほぼ忠実な自伝である。ピアニスト志望の最初の妻との結婚、その破局。昔の女たち。ウェスタン・ユニオン電信会社での勤務。ただし、本書ではえらく人望の篤い人間として描かれているものの、実際のかれは、だらしない（特に女方面）仕事をしないスケベおやじだったらしい。

また、当時のアメリカは、第一次世界大戦終了直後で、新たな世界の強国として地位を揺るぎないものにする過程にあった。このためニューヨークも、急速に変化しつつあった。大量の移民の流入と、それに並行する街の変化。この二つに直接の因果関係はない。二つとも、アメリカの経済成長の一側面である。しかし、モロク（ミラー）はきわめて短絡的に、移民（特にドイツ系ユダヤ人移民）が街の変化を引き起こしていると結論づける。最後の章などでモロク（つまりはミラー）が嘆いているのはこの変化だし、しつこく登場する「ユダヤ人はきたない」とかいうのは、その変化が気に喰わないミラーによる責任転嫁である。後に『暗い春』の一編「ブルックリン第十四地区」で、かれはもっと冷静で美

しい描き方を試みている。

後年のミラーを思わせるものと言えば、しつこい、時として大仰な描写、特に街の描写、そしてウダウダと、独白めいたせりふを数ページにまたがってしゃべりまくる人物の数々である。そしてもちろん、半自伝というその後の小説の一貫した特徴は、すでにこの段階ではっきりしている。しかし、本書には後の作品を特徴づける一人称の語りが無い。自伝を三人称で書くことで、本書には野放図でさもない部分が色濃く出てしまった。後の作品は、本書よりは抑さへの効いた、読むに耐える書き方がなされている。すでに述べたが、本書の七年後に書かれた『暗い春』の一編「ブルックリン第十四地区」と本書を読み比べてみればよい。同じテーマ、同じ出来事を扱いつつも、その出来には格段の差がある。逆に言えば、それだけこの時期のミラーが急速な成長をとげたということでもある。すると小説としてのできはさておき、一人の作家の変遷をたどるという意味で、本書にもそれなりの価値はあるのかもしれない。

本書は Henry Miller "Moloch: or this Gentile World" (1992, Grove Press, New York) の全訳である。訳稿作成環境は Macintosh PowerBook 170+Katana4+ クラリスワークス 1.0。辞書は「リーダーズ新英和辞典」(松田徳一郎監修、研究社、1984)、「新英和大辞典 第五版」(小稲義男他編、研究社、1980)、また聖書の引用は「旧新約聖書」文語訳(日本聖書教会)による。

本書の編集は、城山隆氏が担当された。

平成六年元旦
ボストンにて